VIRINA REKONSTRUO

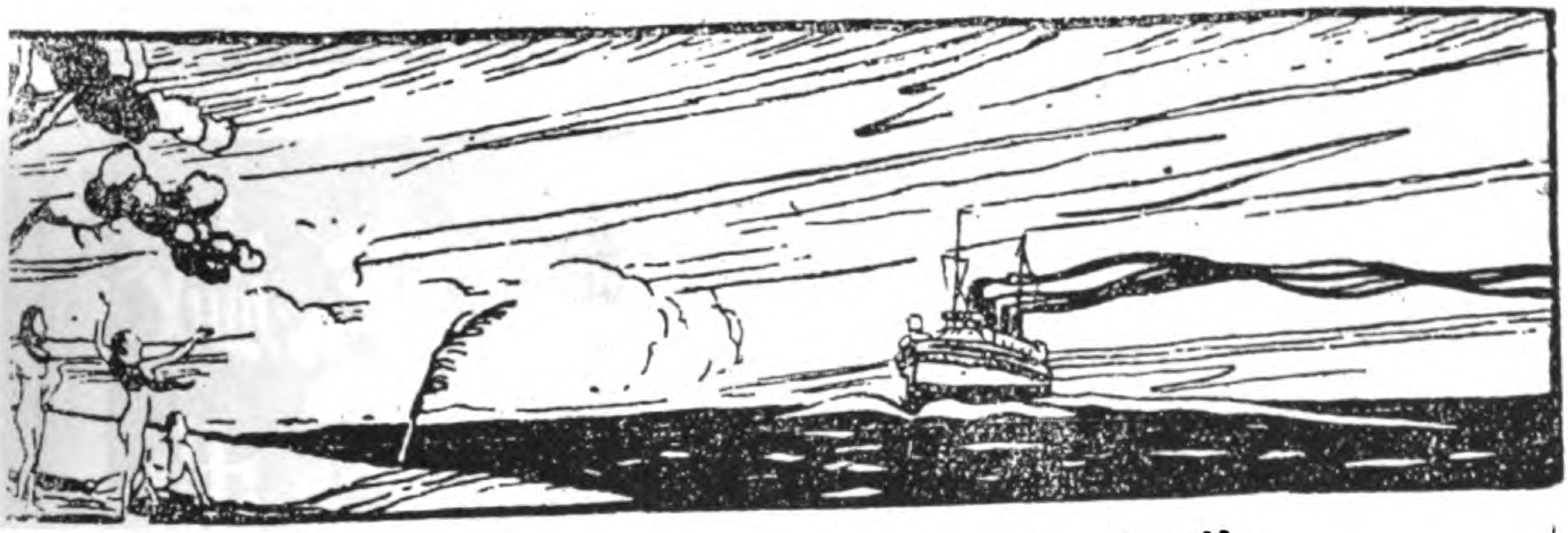
大正十一年九月十三日第三種郵便物認可
大正十二年二月一日發行大正十二年一月十七日印刷納本

女性改造

第二卷第二號

二月號

1923



女性改造 二月號目次

ビクトリヤ月經帶

純良ゴム製罐容器附



一號品
純良ゴム製
（丸罐入）



二號品
保溫ネル腰衣附
（角罐入）

御婦人方が冬期月經時の最も困難なる時も之さへ唯一個御使用なされば少しの御心配なく輕快安全に御仕事を遊ばすことが出來ます。

内地送料十二錢
清韓送料四十五錢

口特色口

ビクトリヤは伸縮自在の、柔軟なる**ゴム**製品にして、御運動には頗る自由◎月經中も、コレさへお用ひになれば全く御安心◎センタクは只ザツト水をかけるばかりにてキレイになり◎久しき御使用に堪へ◎美麗にして携帯保存に便利な罐容器附なり。

◎定價
一號品 金五拾錢
二號品 金七拾錢

外に徳用二個入三號品金九拾錢ものあり。

到る所の**藥店**小間物店にあり！

文明的
保潔
衛生的

イージーおしめ

ゴム製おしめカバー

▼お使ひ遊ばした方は必ず具合の宜しいのに感心遊ばします

特色

大小便は決して洩れず、お子さんの衣服は常に清潔です◎伸縮自在の**ゴム**にして少しも窮屈の思ひなく、御運動は自由◎センタクは只サラ〳〵と水をかけるばかりにてキレイになり◎體裁頗る宜しく上品です◎着脱に手數がかゝらず◎カサ張らずして旅行携帯に便利。



到る所の藥店小間物店にあり

定價	小形（一二歳用）	大形（二三歳用）
純ゴム製	七十錢	八十錢
純ゴム特製	一圓	一圓十錢
別製	六十錢	七十錢

直接發賣元へ御注文の節は送料十二錢添へ前金にお願ひいたします圍代金引換は二十四錢切手御前送下さい

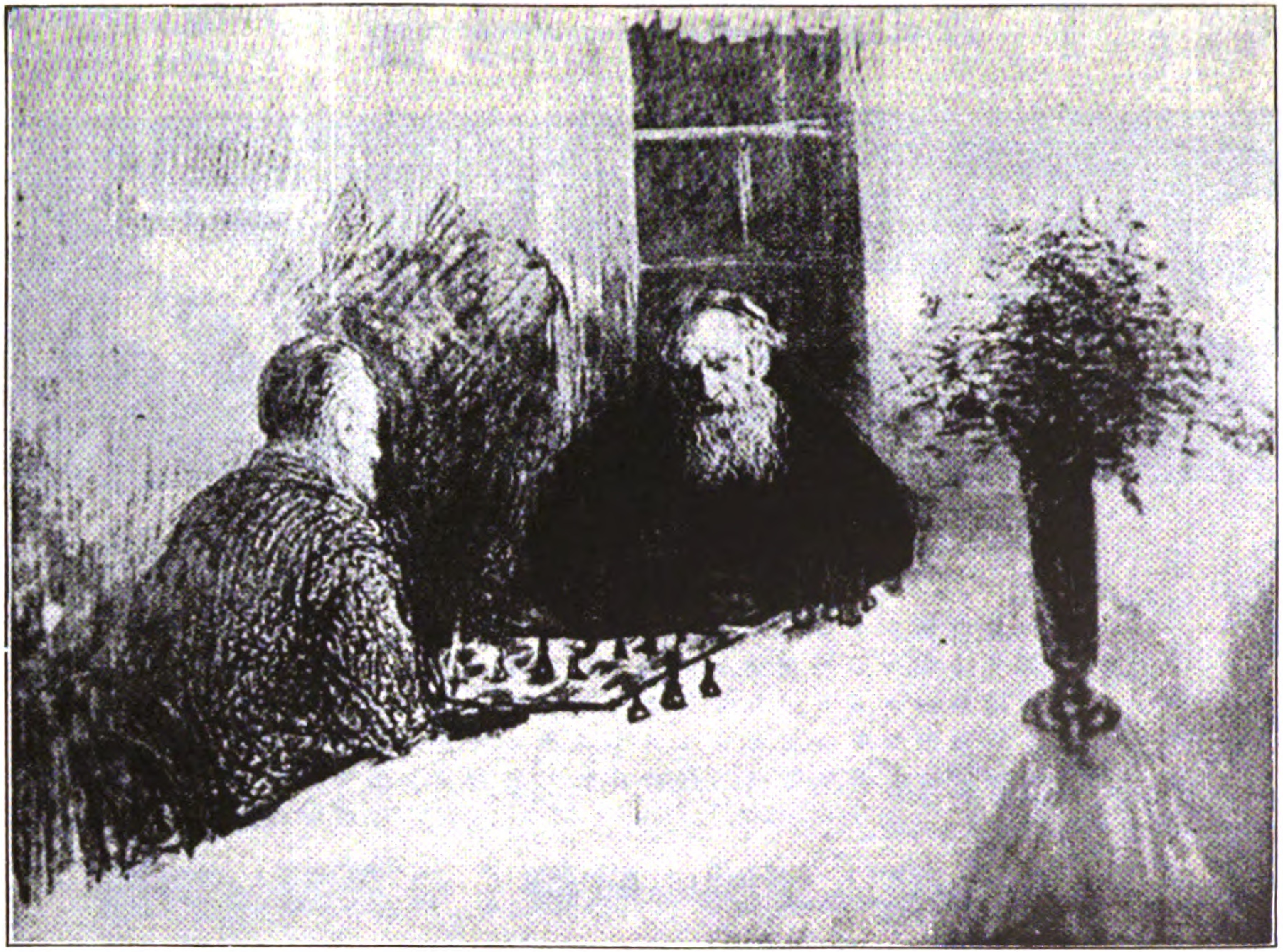
發賣元

東京市本所區番場町

大和ゴム製作所

電話墨田局一〇三三・一〇三四番
振替東京一三〇〇二番

將棋をさすトルストイ



一九一〇年三月メシュコフ氏の筆になつたもので、畫はトルストイが食後、ヤスナ・ポリヤーナの家に於て地主のチェルトコフと將棋を戰はしてる所です。あのトルストイにもかうした餘技があつたのです。

吉田絃二郎作

小説 ダビデと子たち

定價貳圓廿錢

送料十七錢
四六判布製

第八版

時代の要求する宗教的名著を見よ

神の如き人格者と稱せらるる吉田氏の傑作として自らも認め、他よりもしかく推稱せられつつある本書は、氏が宗教的感激より得たる獨特のもので、王者として自己の精神的空虚を感じたダビデが、三角戀愛より端なくも自己の息子と或女を競爭したため、老臣からは愛憎をつかされ、又自身も腫物の膿血に惱む人生の愛慾と苦惱を氏一流の感激を以つて綴られたものだ。

識者に淸冽の一感激を投げた逸作

東京芝區愛宕下町

改造社

振替東京八四〇二番

武林無想庵作

長編小說 結婚禮讚

定價二圓卅錢
四六版上製
造料十七錢

滿都の士女よ！讀め！

本書を手にして卷を掩ふことが出來るか

第拾五版

出版當日怒濤のやうに註文が殺到した「無想庵無語」は其筋より風俗壞亂の故を以つて發賣禁止を命ぜられた本書は實に「無想庵無語」の改訂版です、奔放無盡天下を自在に濶歩すること武林氏の如きは古今其の例なし、全く獨自の境地を天地に求め神佛自れの膝下に蹂躙する無敵、虛無の一大偉觀だ。本書は人間本能の色慾を赤裸に告白した一人間の記錄であり、人妻への大膽なる愛着を赤裸に告白した深刻無比の戀の記錄であり、戀の爲には天地の何物でも犧牲に供した虛無主義の地上への犧へである。本書の誕生は巨獅一咆哮の慨を示す、戀愛を取扱ふ萬卷の書悉く本書の前に慴伏して顏色なし。

東京芝區愛宕下町 改造社 振替東京八四〇二

革命前後

八版發賣

島田清次郎著

定價壹圓六拾錢

◇送料十七錢◇

◇四六版布裝◇

「革命」の後ろには女がある、「大化維新」の背後には遠智姫がある、若い遠智姫を圍む鎌足と中大兄皇子とがある遠智姫の殉情のいぢらしさ、鎌足の『革命』への悲しき戀の犠牲、それは情熱の若き天才思想家島田氏の筆を以つて悲壯に、深刻に、大膽に描かれた、敢えて若き人々に本書の一讀をお薦めする。

◆革命に殉ぜし彼女の犠牲的苦惱を見よ◆

東京芝區愛宕下町 改造社 振替東京八四〇二

VIRINA REKONSTRUO



FEBRUARO 1923

藝術と女性

眞理の研究が人生の目的中の重要なるものであることは私の說くまでもなきことであります、そしてその研究ほど高尚で、重大の意義あるものは殆んど他に類がありません、しかしながら、人間の知識がどれほど發達したればとてその知識の進步と並行して人類の幸福が齎らさるゝであらうことは豫想が出來ません。

殊に私どもの心憂としますのは、科學の發達につれて古典的藝術が片つ端から崩壞されて行くあの淺ましい姿です、我國の繪のやうな山河、クラシカルな女性の纖細な線は年とともに歐化され、物質化されて藝術的氣品はだん／＼と失はれて行くありさまが著しく感ぜられてきました。

私どもはもとより唯美論者ではありません、しかし藝術美の道德乃至女性に影響する結果の偉大であることは玆に認識せねばなりません、そしてそこに一つの重大問題が存在します、それは日本の女性が、現在の狀態で、科學の研究と藝術の研究とを何れを先きにせねばならぬか、これは人類としても考へねばならぬ重大問題ですが、殊に藝術の國に成長する我が女性として尤も深甚の注意を拂ふべきだと思ひます。

日本が生みし、日本の女性はまづ第一步を藝術的に麗はしく洗禮され、そして科學へと進むのがいかにもふさわしい氣がします、然らば我が女性が第一步をいかにして藝術境に投ずるかは更にまた說く所がなければなりません。



卑しむべきものに就いて

倉田百三

我々は『憎むべきもの』と『卑しむべきもの』とを感じ別ける事が出來る。もとより此の二つとも道德的に罪惡であつて、我々の良心はこれを非難する。此の二つとも我々の靈魂を死なしめるだけの價があつて、其の報いは地獄である。併し乍ら吾々の良心は此の憎む可きものと卑しむ可きものとに對して、別樣の調子を以つて非難する。前者に對して我々の起す非難の感情は憎惡であり、後者に對して起す非難の感情は侮蔑である。前者の甚だしきものに對しては我々は之れを眞二つに斬り裂かん程に欲するに對し、後者の著しきものに對しては、之れを斬る事さへも刀の恥として屑しとせず、吾々は顔を反け唾を吐いて去るのである。此の際我々の良心は前者よりも後者をより深く非難して居る。然も其の罪惡が齎すところの禍ひの結果から云へば、前者は多くの場合後者よりも甚だしいのである。殺人は詐欺よりもその及ぼす結果は大であ

り刑法上にも重く量定せられて居る。併し我々は或ろ殺人よりも或る詐欺に對して之れを道徳的により深く非難するのである。我々は後者の場合に於いては、その罪惡の齎した結果の大小の意識から離れて、純粹にその罪惡を生んだ人格そのものを咎責の對象とする。然もその人格の中に於いて、特にその尊嚴を構成する本質的部分、卽ち人格の人格たる特異の部分を選むで對象とする。此の意味に於いて「卑しむべきもの」は「憎むべきもの」よりもその罪惡の質に於いて重いものといはなければならない。阿部氏も言つて居る樣に、ダンテの神曲の地獄に於いて罪を犯したる死者の靈魂はその罪の量さの度に從つて次第に下層に定められて居るにも關らず、ダンテが是等の靈魂に對して非難する感情は必ずしもその度に從はず、時として上層に定められたる靈魂に對して下層に定められたる靈魂に對するよりも一層烈しき感情を以つて非難して居るのである。例へばその最も著しい例は地獄前界に定められたる卑怯者の靈魂に對して示されたる侮蔑の感情である。卑怯者の靈魂が地獄前界に置かれたのは、その罪惡が地獄の第一獄の刑罰にさへも相當しないからでなければならない。然も地獄の下層に置かれたる靈魂さへも尚是を屑しとせざる矜りを持つて居るのである。

> 天は其美をそこなはざらん爲に、彼等をおひ出し、深き地獄亦これを收めず、何となれば、惡人も亦彼等よりは、やゝほまれありと信ずればなり。——神曲、地獄、第三曲、四〇——四二

卽ち彼等は天使からも地獄の囚人からも共につまはぢきされて居るのである。自分が是れ迄「わるさにも色々ある。質の惡いわるさ天國に遠いわるさは赦し難い」と度び〳〵云つたのは、此の卑しむ可きものを指したのである。實際我々は或る殺人者に對してよりも或る虛言者に對して遙かに赦し難い場合があるのである。それはその罪惡の性質が直接人格の本質に關つて居るからである。我々が「人格」を「物」に對して區別するのは、卽ち人格が人格である所以を成す特異の

ものは「敬」の意識である。此の意識を自ら損ふものに對しては、我々は是れを人格と認めて憎惡の感情を起す事に困難を感ずる故に、卽ち我々の憎惡にも相當せざるものとして侮蔑するのである。故に我々が侮蔑の感情を持ち得る事は我々が尙多少とも矜りを失はずして持つて居る證據であり、他人から侮蔑された時に是れに反抗し得る事も亦同樣の證據である。我々は他人から憎惡せられるよりも侮蔑せらるゝ時、それをより深き苦痛と感じるのである。「卑しむべきもの」は本來斯くの如き罪惡であるが故に、我々は之れを憎む可きものと對照する時一層その特質を强調し、明瞭ならしむる事が出來るのである。其の最も著るしき例は被侮辱者が侮辱者と決闘して之れを殺した場合である。此處に生じたる殺人と云ふ罪惡は、自分の人格を尊重する心が、その矜りを誤れる手段によつて支持しやうとする所より生じたものである。刑法は單に言葉を持つて相手を侮辱した者よりも、相手を殺した者に對して重く罰する。併し我々の良心は殺人者よりも侮辱者をより深く非難し得る事もあり得る。鹽谷判官と高師直との例の如きこれである。我々がかゝる種類の殺人に對して特に同情を寄せるのは、その動機が我々の人格そのものゝ本質と直接に結合して居るからである。併し乍ら自分は此處に卑しむ可きものと憎む可きものとの特質を一般的に比較してその關係を明かにするのが目的ではない。此處には主として我々が卑しむ可きものとして考へる個々の行爲の實例を列擧して、之れを憎む可きものと對照しながら、考へて見たいと思ふのである。それに依つて我々が實際生活に於いて、特別に自から恥じなければならない所のもの、從つて最も避けなければならない所のものを、特に拔き出して、今一度新しく我々の目の前に据ゑ著け、我々の反省を刺戟したいのである。自分は特に日常生活的なるもの、然も我々の反省から逃れ易いものを、成る可く輕きものより、數へて行きたいと思ふのである。

嘘言に就いて

總ての嘘言は卑しい。それは何等かの惡しき目的の爲に吐かるゝ場合のみならず、嘘言それ自身に於て卑しむべきである。從つて善き目的の爲に吐かるゝ場合と雖も猶それはそれ自身に於ては卑しきものであつて、我々の良心はその場合に於ても曇りと汚れを感じないわけには行かない。善き目的が嘘言をジャスチィファイすると考へるのは良心の鈍さより來る。その最も極端な例を擧げれば肺病を診斷せられたる者に、その人が病氣の眞相を知つて落膽する事が病氣を憎惡せしむるを虞れて、病氣を僞つて告げたとする。此の場合此の嘘言の目的は友達の健康の保持であり、その動機は愛である。此の場合に於て嘘言を吐くことは何等良心を汚さゞる正しき行爲として是認せらるべきであらうか。自分はそれが止むを得ざるものであつても、猶依然としてその嘘言は是認する事が出來ないものである。即ちその人は愛の動機から、善なる目的から惡なる嘘言を敢へて吐かざるを得ざる不幸な窮境に置かれたのである。我々は實際にその友人から自分の顏を直視されて『本當の事を云つて呉れ給へ。嘘ではあるまいね。』と問ひ返へされた時、良心の痛みなくして『安心したまへ。君は肺病ではない。』と答へる事は出來ない。否むしろその嘘言なる事を、氣取られないやうに、相手の顏を見て、かく敢へて云ふ事は極めて困難である。從つて後に到つて假りにそれにも拘らずその病氣が憎惡した時に、その友人が『僕はむしろ自分の運命の眞相を知つてそれに堪へた方がよかつた。何故本當を云つて呉れなかつた。』と責められる時に我々は依然として謝罪するほかはない。かゝる不調和は人生の限界の一つである。我々は此の嘘言をそれ自身に於て是認せずして、惡しきものたる事を認め、その惡の原因を我々の存在の限約として忍受する道を選ばなければならない。かゝる不調和は淨土にはあるまじき限約である。我々がその限約がふさはしくない程の存在の形式に入り得る事を我々の彼岸の思慕としなければならない。そこに『人間』の『被造物』の信順がある。止むを得ない事と願はしい事とを區別する事は我々の道徳意識が宗教意識に通ずる門である。我々が嘘言をそれ自身に於てかく卑しむのは、それが眞理に對する直接の裏切りだからである。眞を求むる我々の人格の本質的要求に對する對蹠的な乖反だからである。他の多くの惡徳はそれ等が惡たる所以は

其れ等が結局嘘僞に還元さるべきところにあるのであるが、嘘言はそれ自ら直接に嘘僞である。嘘言とは中を非中と主張する原本的な誤謬の主張である。我々はその時眞理そのものの尊威が直接に、露骨に冒瀆せらるゝ事を感ずる。それは我我の人格の根本要求に矛盾するのである。總て嘘言をそれ自身に於て卑しむ神經の鈍きことは人格的に卑しきもの、第一の表徴である。何等の惡しき目的なくして、その場をとりつくらふ爲に、或ひは話の興を添へる爲に、恐らくは不和と氣まづさを好まず、諧謔をよろこぶ人間らしき心から、吐かるゝ嘘言も亦卑しまれなければならない。出來得る限り嘘言を吐くまいとする神經は人格の尊威を保つ第一の資格である。此の神經にぶきものは他に如何なる美點あるも、それは遂に高貴（エーデル）である事は出來ない。故に思想家や藝術家に於て此の神經鈍き事は致命的の缺陷である。嘘言は微妙な狡猾な形をとつて思想家の言說や、態度や、藝術家の作品の中に竄入して居る。所謂「本物」と「贋物」とはこの點に於て別れる。「ほんもの」は尊ばれ「にせもの」は卑しまれなければならない。それは決して見かけの謙遜や、同情や、外面生活の謹嚴さや又作品の文章の美しさや等に依つて見分けられるものではない。その人物そのものゝ質、自ら匂ふ空氣の純粹さ、その作品の文章の裏を流れて居る誠等に依つて、鋭敏な神經が、即ち自ら嘘僞を厭ふ神經が、その趣味と感覺とを以て感じ分けるのである。作品や文章に於ては眞實は生き、嘘僞は死ぬる事が實に露骨である。嘘言はかくの如くそれ自身に於て卑しきものであるが、それが更らに惡しき目的と動機とを持つ時には特に卑しむべきものとなる。人を陷れんが爲めの中傷や、他人の友情を離間せしめんが爲の讒言や、自己の利益の爲にする阿諛や、自家廣告の爲にする法螺や、此等が卑しむべきものたる事は云ふまでもない。只特に此處に舉げて置き度いのは、相手の感情を弄んで、此れを享樂せん爲の遊戲的なる嘘言である。此の種の嘘言は相手の人格を弄び物とする點に於て、此れを物として取り扱ふ點に於て直接に人格そのものに對する冒瀆であるが故に、その動機が利害問題を離れて居るにも關はらず、その質の惡しきものである。それは文明的なる慘酷である。殊にそれが戀愛關係に於て行はれる時には、その動機が遊戲的なるところより發し乍ら、それと最も反對

なる人性の最も深き、眞面目なるものを蹂躙し死滅せしむる結果に導くことがある。我々は此の種の遊戯的嘘言に依つて傷つけられたる時、その侮辱の念が最も深刻であるのは當然である。我々は特に此の種の嘘言を愼しまなければならない。素より我々は絶體的に嚴密なる意味に於て、嘘言を吐かない事は至難であり、むしろ不可能である。嘘言の中には又美くしき人情より生ずるものがあり、又その『嘘から出た誠』もある。義弟の不身持ちをその母の前にかばう嫂の嘘言はやさしき味ひを持ち、小春と治兵衛との愛の眞實は嘘から出た誠である。しかし乍ら出來得る限りは嘘言をつくまいとする努力と、嘘言をそれ自身に於て卑しむ神經とは、高貴を願ふ人格の缺いではならない第一の用意である。

告げ口に就いて

告げ口とは私的の會合に於て或る人が第三者に就て語りたる惡口をその會合に列なつた一人が本人に向つて告げることである。これは或る人が實際に語らざりし事を僞つて告げる場合のみを指すのではない。かゝる行爲が卑しむ可きであるのは勿論であるが、たとひ事實を語りたる事を本人に向つて告げる場合も亦卑しむ可きものである。吾々は惡口そのものが善いか惡いかの問題より獨立して、告げ口を卑しまねばならない。他人の惡口を言ふ事は、それが、本人に眞に中つて居ると考へて居る場合には、それはたとひ憎む可きものであり得ても、卑しむ可きものではない。併し告げ口は卑しむ可きものである。多くの場合我々は惡口を云ひ易きものである。もとより惡口を云ふ者は、それが本人に若し告げられても構はないだけの覺悟を持つて云ふべきである。併し多くの場合に於いて、その私的の會合に於いて、その惡口が本人に告げられる事を希望せず、又告げられざることを期待する事は自然である。告げ口する者は默々の間に惡口をする者の此の希望と期待とを承認して置き乍ら、之れを裏切るのである。然も多くの場合無意識的に惡口を言ひ易き空氣を自から作れる責任を別たなければならないものである。恐らくは自分もその惡口に相槌を打ち、少くともそれを氣持よく聞いた

のである。多くの場合我々は他人の悪口を聞く時に或る毀傷の喜びを感ずる傾向を持つて居るものである。然も本人に對して「誰某は貴君の事を斯く〳〵悪口を言つて居た。」と告げるのである。何か爲めにする所あつて、或は媚びる爲めに爲すのがいけないのは勿論であるが、親切から爲す場合に於いても、告げ口と云ふ形は避けねばならない。最も卑しむ可きは自から意識的に悪口を云はせる空氣を作り、若し悪口を言はなければ、その人が卑怯者であるが如く見えるやうに仕向け、悪口を云はせて置き乍ら、その人と本人との友情を離間せん爲めに、特にその悪口を誇張して本人に告げる場合である。斯くの如き告げ口は悪口よりも遙かに非難に價する。悪口は勿論いゝものではない。殊に他人を傷つけんが爲めに、本人に中らない悪口を捏造する場合に於いて尙更らである。又たとひ當つて居ても、自分の缺點を棚の上にあげて、置いて、他人の悪口をつく者は淺ましい。併しそれは告げ口よりは未だましである。悪口者には時として正直な腹の綺麗な者もあり得る。併し告げ口する者には如何なる場合　に於いても、よき心情の持ち主は存在しないと云つていゝ。好んで屢屢告げ口をなす人格は卑しむ可き人格である。それは特に悪口者からとの事を秘密にするやうに頼まれた場合は尙更である。此の場合の告げ口者は又特に義氣に乏しき者として卑しむ可きである。我々が若し此の告げ口を惡しき手段に利用するならば、人と人との關係は常に警戒を要するものとなり、その交りの幸福は失はれ、友情は常に脅かされるであらう。從つて又その告げ口者を卑しみ得ずして、その告げ口を取り上げる者も亦その人格の高貴の德に於いて缺けたるものと云はなければならない。

或る種の謙遜に就いて

謙遜は美德である。自から反省する心强き者が、自己の現實を直視するに堪へる勇氣と公明とを持ち、且つその頭腦鋭く、然もその抱いて居る理想が高い時には我々は自から謙遜とならざるを得ない。かくて我々は自己を鞭うち精進の念を

失はず、次第に高まつて行く事が出來るのである。此の種の謙遜は自己が神に對する謙遜であつて如何なる場合でも美しい。併し謙遜には又人に對する種類のものがあり、自己を自己以外の他人と對立せしめて比較する事に依つて生ずる謙遜がある。此の場合に於いても、謙遜も亦美德であり得る。蓋し我々は自己に對するが如き嚴酷さを以つて、他人を裁く事が出來ない。それは第一に自己の眞相を自己が知るが如くに、他人の眞相を知る事が出來ないからである。次に自己を愛するが如く他人を愛して居ないからである。次に裁く權利が我々にないからである。故に神に對して謙遜なる者、從つて自己の現實の醜さを知る者が他人に對する時、其處に特別の事情がない限り、他人を自己より美しき者と考へるのが自然である。我々が其本性上出來得るならば、醜よりも美が存在して居る事を願ふ者である限り、現實の相の不明なる他人に對しては、其の美點を見出さうとする筈である。然も充分に愛せざる者を責むる事は心苦しく、且つ自分が裁く權利を持つて居ないと感ずる時に、我々は自から他人に對して謙遜となる筈である。かゝる謙遜は自然であつて美しい。併し乍ら他人に對する謙遜の場合には又卑しむ可き種類のものもある事を忘れてはならない。第一に自己が醜き故に他人も亦醜きものでなければならないと推測して、其の承認を、從つて自己と同じ謙遜を、他人に强ひる謙遜は卑しい。此の場合に於いては、自己の謙遜が止むを得ざる承認であつて、出來得るならば自分が美しき者であることを願ひ從つて他人も亦美しき者であらん事を願ひ乍ら、然も自から醜くして自然に謙遜にならざるを得ないといふその自然さと矛盾して居る。かゝる自然なる謙遜に於いては、自己の醜きを知る事は依然として他人の美を願ふことと矛盾しない筈である。我々は自他共に美しき者である事を願ふのであるが、只自己の醜さを認めざるを得ないと云ふに過ぎない。自己が醜きが故に他人が美しくある事を願ふ事が出來ないのは卑しい。然も此の謙遜の强制が自己の醜さと他人の醜さとを互に承認して相殺せしめんとする意識を持つ時には特に卑しい。もとより他人が其の醜さを露出し、我々が之れを認めざるを得ないにも拘らず、高慢に處する時に、我々が片腹痛く思ふのは自然である。併し其の爲めに自分が遜謙でなければならぬ理由は少しも減ぜ

ない。我々が謙遜でなければならないのは他人よりも醜いからではなく、神よりも醜いからである。謙遜の眞の根據は飽迄も神に對する謙遜になければならない。他人に對する謙遜の場合は他人が自分より美しい時に、一層自分の醜さを感ずる積極的の場合に於いては、自然であつて美しいが、他人が自分より醜き時に自分が美しき者かの如くに感じて他人に謙遜を強ひる消極的の場合は卑しい。何故なれば、それは我々の謙遜を生みたる心、卽ち我々が眞に美しき者たらんと願ふ心と矛盾するからである。他人に對して眞に謙遜なる者の、其の謙遜を美しからしめるものは、若し他人が自から特な所あつて誇つて居るならば、それを祝福する心でなければならない。もとより其の誇りが其の人に相當して居ない事を認識せざるを得ない場合がある事も止むを得ない。それは恰も黑き鳥が如何に虛心に眺めても、或は白からん事を欲して眺めても依然として黑く見ゆるが如くであつて、止むを得ないが自己が黑き故に他人の黑きを強ひて穿鑿してこれを承認せしめんとするが如きは、本來謙遜の德の動機と一致せざるものであつて、卑吝である。殊に他人の持つて居る人間的な矜りに對して、特にそれを高慢として目立たしめんが爲めに、故意に自己を謙遜なる立場に置く事は卑しむ可きである。蓋し正しき謙遜と正しき矜持とは共に我々が高貴たらんと願ふ心より生れるものであつて、それは一つの楯の兩面の如く別つべからざるものである。我々が謙遜であり乍らも亦、誇りを持たざるを得ないのは實に自然である。若し我々が何等の誇りをも持ち得ない者であるならば、謙遜とは畢竟自棄若しくは卑屈に過ぎない。懶惰に過ぎない。故に他人が或る矜持を示して居る時に、それが人間的に同情すべき場合である事も亦あり得る。必ずしもその人が不謙遜でもなく、寧ろ謙遜であり乍ら、否寧ろ眞の謙遜なる心の宿る程高貴なる理想を抱いて居る爲めに、或る事情の下に、其の同じ心が矜持となつて現れて居る場合もあり得る。然もかゝる矜持は云ふ迄もなく、その人の理想に照らす時、もとより云ふに足りないものであるが故に、一擊の下に押し崩される筈のものである。その人の理想が高く、元來の謙遜な人であるならば、尙更その弱點は無防禦である。此の弱點を知り乍ら、より謙遜な地位に自分を置いて、その矜持を高慢として目立たしめ、その人を

して赤面して立場を失はしめるが如き事は最も卑しむ可きである。斯くの如きは又僞善であり、心なき業である。我々は斯かる場合に於いては、寧ろその謙遜よりもはるかに矜恃を愛するものである。衆目の前にかゝる謙遜がかゝる矜恃よりも美酒として迎へられるのは歎ず可きである。此處に甲はよく自から誇るにも關らず、それはすつきりとして厭味なく、乙は常に自から遜るにも關らず、きざであり厭味であると云ふが如きは我々の往々目擊する所である。かゝる場合甲の誇りは乙の謙遜よりも心情的に純であることが多い。我々の謙遜は特に是等の厭味を伴ひ勝ちな德である事を忘れてはならない。不純な謙遜程臭氣ある、高貴德に反するものは少ない。無邪氣に誇る者には其處に人間的な美と天眞とが現れるけれども、不純に謙遜なる者には一種特別な卑しさが現れる。故に更らに一般的に云へば矜恃に伴はれざる謙遜は卑しむ可きである。他人から非難された時に、自から省みてその非難が當つて居る事を認められない時、心から是れに服する事が出來ないにも關らず、たゞ「自己の不德である。」と云つて、只管謙遜するが如きは是れである。もとより心から斯く感じられる場合は別であるのは云ふ迄もないが、自己の衷なる矜りは是れに服して居ないにも關らず、たゞ總べてを自己の非としてひたすら謙遜し、謝罪するのは陋である。それは自己に不忠實であり、眞理に不信であり、人格の尊威を傷つける。然もその謙遜に或る不純なる意識が伴つて居る場合は尙更陋である。例へば我々が他人から非難されて、ひたすら謙遜なる場合は衆目にその非難者よりも自己を有德であるかの如く印象せしめるであらう。殊にその非難が當つて居る點が多く、之れを辯護することは自己の不利益となる時に、事實を明瞭にする事を避けるが爲めに卽ちその非難の當然な部分と不當な部分とを曖昧にして、ひたすら謙遜する事に依つて、その當然の部分をも、非難者の過失であつたかの如くに印象せしめんとする事も亦あり得るであらう。かゝる謙遜は最も卑しむ可きである。自分は寧ろ自己の服し難きは飽く迄も辯護し、事實を明らかにし、自己の人格の尊威を護る道を尊しとする。もとより自己の不德は不德として飽く迄も正直

に認めなければならない。併し吾々の過失や不德にも亦その依つて來たる動機、及びその既に犯されたる不德や過失に對する淨めと償ひとの態度に於いて、その人の人格の價値は一層はつきりと現れる事もあり得る。況してそれ等の過失や、不德に對する非難が初めより當つて居ない場合に、尙且つたゞ自己の不德として謙遜し、謝罪するが如きは卑しむ可きである。最も卑しむ可きは最早や自己に對して何等の誇りをも持たない謙遜――といふよりも自棄である。幇間や、奴隷や、或る種の藝人や等は是れである。自分は眞宗の或る種の人々の如く自己を徹頭徹尾惡人としてその靈魂の中に聖靈或ひは爺に對する何等の傾向を有せざるものとなす者をも此の類に數へたい。斯くの如きは高貴の德と最も矛盾せるものである。併し是等は謙遜と云ふよりも自棄若しくは自瀆と云ふ可きであつて、謙遜の概念から寧ろ除外して、後に讓るを適當とするであらう。

裏切りに就いて

總べての裏切りは卑しむ可きものである。裏切りとは他人の信に對して自己が責任があり自ら止むを得ざる事情なくしてその信に反する行爲を成す事である。此處に止むを得ざる事情と云ふのは、不可抗力及びより深き道德的理由を指すのである。例へば總べての破約は自己に責任がある相手の信に反する行爲であるが、それが自然の不可抗力や或は約束の內容が不合理であつたために、止むを得ず實行不可能となつた場合は別としなければならないからである。其他の場合に於いては、總べての破約は裏切りの一種である。裏切りが卑しむ可きものとなる理由はそれが特に他人の自己の人格に對する尊重を自から傷つけるものであると上に更に、又一般に人格そのもの、尊威を傷つけるものとして、畢竟自己の人格の尊威を傷つけるからである。卽ち此の世界に於いて、人格は信用される可きものであるとの觀念を損ふからである。既に

信用と云ふ對人關係の成立し得て居る事は人格の尊嚴を豫想するものであつて、それ自身に祝福さる可き一つの事象である。我々は裏切りに依つて、他人を傷つけ、自己を瀆すのみならず又此の有難き事象を滅すのである。此處に二人の盜人があつて、共に竊盜し一人が捕へられたとする。その時若しその盜人が仲間を賣るならばそれは、仲間の信を裏切つた者であつて、その竊盜それ自身よりも遙かに卑しむ可き行爲である。更らに卑しむ可きはその仲間を賣る事に依つてその者の刑罪を免ずる事を餌として犯罪者を揚げんとするが如き行爲である。裏切りは其の相手の自己に對する信用を、始めより裏切らんとする意志を以つて贏ち得たる時に於いて一層卑しむ可きである。例へば男子が初めより、弄びたる後棄てる事を意識し乍ら、結婚を約束して女子を誘惑するが如きである。又探偵や、間諜や、所謂犬の如きも亦是れに屬する。是等はたとひ其の目的が善なる場合に於いても、そして相手が惡人である場合に於ても、相手をして信用せしめ、初めより裏切る事を意識して爲す裏切りであるが故に甚だ卑しむ可きである。自ら此等の者となる事も、又此等の者を使用することも共に卑しむべきである。從つて此等の者を使用する總ての陰謀的政治や、戰術や、警察は卑しむべきである。賣國奴の如きも此の種のものに屬する者であるが、裏切りはその相手と及びその目的とが「公」なものである場合よりも、「私」である場合に於て、特にその個人的なる關係が人倫の最も密にして、且つ本來信の上に立脚するものである場合に於て、特に卑しむべきものとなる。その師を裏切つた不信の弟子ユダが特に輕蔑されるのは、その爲である。その君を裏切つた不忠の臣九太夫が特に卑しまるゝのも其爲である。師弟、君臣と云ふ人倫の關係は、總ての人倫の關係のその本來の性質上最も信を要求するものであるからである。我々は死屍に對して特別な寬大の念を有する東洋の傳統の中に育ち乍らも、あの忠臣藏の七段目に於て、由良之助が九太夫の死屍をのゝしり乍ら打擲する時に心ゆく思ひをするのである。それは打つ者が特に由良之助の如き君に對して最も信なる人格であるからであらう。しかし乍ら我々は如何なる時、如何なる場合

に於ても、相手と目的との如何を問はず、裏切りをそれ自身に卑しまなければならない。相手が惡人であると云ふ事を又裏切りの目的が善であると云ふ事は裏切りそのものを是認する根據とはならない。裏切りを意圖して居るものを我々が發見した時、我々がその裏をかいて、裏切り返へしてやる時に、特に復讐の痛快を感ずる。然し乍ら此れは相手が裏切られるに相當したものであると云ふ故を以て、自分の裏切りを是認せんとするものであるが、しからば相手も亦自分を裏切つてもよかつた者であると考へた時に、我々は如何にして此れを否定し得るであらうか。此の際相手は恐らく苦笑し、且つ恥ぢるであらう。然しその恥ぢはしくじつた事へまであつた事に對する恥ぢであつて、道徳的の羞恥ではない。その苦笑は相手も亦『なかなか喰へない。』と云ふ苦笑である。換言すれば互にその裏切りを是認し合ふて、只相手にしてやられた事に對する皮肉と滑稽とを意味する苦笑である。相手は確に復讐をされた。然しそれは相手に裏切つても差し支へないと云ふ是認と、一層巧みに裏切らんとする警戒とを與へる點に於て更らに一層罪惡である。

卑怯に就いて

卑怯とは道徳的にかくなすべきであると知り乍ら、自己の利害の爲に、若しくは勇氣なき爲に、敢へてなさざる事である。前に述べた如く、天の使からも地獄の囚人からも共に輕蔑さるゝに相當したものである。國家や、長上や、權力者に對し、自己と利害關係ある者に對し、その不正なる意志に服從し、若しくは敢へて逆はらざる立場に自己の安全を守る者は卑しむべきである。自分は特に群衆に對して、時代の潮流に對して、反抗し得ざる怯懦を卑しむ。自ら群衆と潮流とに逆ふべしと信じて逆ひ得ざる怯懦のみならず、自己の思想を知らず識らず此等と順應せしめて、自己の本質を固持し得ざる罰さ、若しくは輕さをも亦卑しむ。總ての戰ひに於て公明正大に戰ふ事能はずして陰謀や、中傷や、總べて裏面より相手

を陥し入れんとするものは卑怯である。又自分が何れかの一方に加擔すべき立場にあり乍ら、自己の安全の爲めに中立を守り、或は形勢を觀望して何れか優勢なる方に味方するが如き、例へば關ヶ原の役に於ける小早川秀秋の如きは卑怯である。是れを初めより勝敗の數既に定れる弱者若しくは少數者に、正義の爲めに味方する者と比べる時、その人格の尊卑は思ひ半ばに過ぎるであらう。自分は又自分が稱讃すべきと信ずる者、若しくは非難すべきと信ずるものを他人の思はくをはゞかつて、敢へて稱讃若くは非難し得ざる者、例へば文壇の或る種の批評家の如きをも此の種の卑怯者の中に數へたい。總べて負ふべきものを負はざる者は卑怯である。自己の過失や、罪惡の責任を廻避するものは卑怯である。殊に自己の罪惡が自己にも他人にも既に明白なるにも關はらず、たゞ證據なきが故にのみ、之れを非認する者は最も卑しむべきである。我々はその者が罪惡を犯せる事が火を睹るより瞭らかなるにも關らず、たゞ證據なきが故にその人を責める事が出來ない。若し責めればその人は自己の良心の聲を無視して、他人に汚名を負はしむるものとして、逆捩ぢを喰はしめるのである。かゝる卑怯者は卑しき者の中にても最も卑しきものゝ一である。又反對に他人がその罪惡を懺悔した時に、それを利用する者も亦最も卑しむべきものゝ一である。又相手の不正を嚴しく憎み得ず、その現在の苦しみを憐れむ餘り、或ひはやがて起るべき相手の苦痛をいたはるあまり、此れに正しさを負はしむるに堪へない「同情」をも亦卑しむ。此の種の同情は一種の卑怯であつて、彼のツアラツストラの最も卑しんだものゝ一つである。此等は總て鬪ふべき時に鬪はざる卑怯である。ダンテはその地獄の旅を初める首途に於て、その旅程の艱難に對する覺悟と共にその目擊すべき囚人の不幸に對する同情に對して又決心をした。卑怯とは總て性格の弱さである。自己の利害の爲のみならず、相手に對する憐憫や、同情や好々爺的人情や、等との鬪ひに於て、弱きことも亦卑怯である。此の種の卑怯は特に慈愛深き者に於て誘惑となる。涙脆く、情實に捉はれ易く、自己の正善と信ずる事を決行し得ずして、相手をして不正なる、若しくは低卑なる立場より離れ

て、正しきに就き、高きに登らしむる勇氣なき事は畢竟人格の尊威なき處に起因する。相手をして負ふべきものを負はしむるに堪へざる總ての人間的なる同情は、人格の尊威よりも目前の感傷を重んざるものであるが故に卑しむべきである。從つて拒絶すべき事を拒絶し得ざる事も、要求すべき事を要求し得ざる事も共に卑怯である。我々は惡魔を拒絶し得ざる場合のみならず、善魔を拒絶し得ざる場合も亦卑怯である。而して後者は前者よりも我々にとつて一層深き鬪ひを要する。我々は權力を以て脅す者を拒絶し得ても、涙を以て哀願する者を拒絶する事は難い。しかも我々が道の上に立つて厳粛なる時、我々は後の者をも拒絶しなければならない。故に惡魔がすぐれたる求道者を誘惑せんとする時は常に善魔の形をとる。傳説と云ふ、日蓮が身延山その聖地を選ばんとする時、惡魔は老いたる親の形を現じてその恩愛と窮狀とを訴へて、孝心深き日蓮を哀願を以て退轉せしめんとした如き此れである。威を以て嚇し、利を以て誘ふ事能はざる者に對して、涙を以て訴へる事は最も有利なる手段である。其の最も巧猾なるは、相手の義氣を見込むで哀願する事である。抑々義氣とは卑怯の反對である。故に義氣あるものは哀願されたる事を拒絶する事を屑しとしない。殊にそれが自己の利害を犧牲にする事を要求する場合に於て、猶更らである。故に假令依頼されたる内容が惡なる場合と雖も、自己の利害を恐るゝ卑怯者たらんことを避けんが爲に、敢へて此れを引き受ける。かくの如き心理を利用する者は最も卑しむべきであるが、此れを拒絶する動機が自己の利害を恐るゝ爲でなくして、その内容が善でない爲であるにも關はらず、卑怯者と思はるゝことを恐れて、敢へて拒絶し得ざる事は又卑怯である。反對にその動機が利害を恐るゝ爲であり乍ら、その拒絶の理由を内容の惡口に藉るものも亦卑怯である。併し乍らかの俠客が弱きを助けて強きを挫き、俠氣を以つて惡しき權力に對して自己の利害を犧牲にして危險を賭して戰ひたるが如きは、勇氣ある者と云はなければならない。その反對に自己の權力を恃み、弱者に對して暴威を逞しくする事は卑怯である。最も卑しむ可きは虎の威を借る狐の如く、自己が無力なるにも關はらず、

他人の權力を傘に着て始めより殆ど抵抗力なき弱者に對して慘酷に振舞ふ事である。總べて上に媚びて、下に傲なる或る種の官吏の如きも之れに屬する。

又自己の生命の慾望を主張する事に勇氣なき者亦卑怯である、他人に嫉まれる事を恐れ、他人に負ふべき苦しみを負はしめるに堪へ得ず、自己の光輝と幸福とを餘りに眩ぶしがつて、自我の成長と發展とを躊躇する者も亦卑怯である。此の種の卑怯には人間らしき、美しさを伴ふて居る事は事實であるが、其の爲めに我々は此の種の卑怯を見逃してはならない。況してそれを美德と考へてはならない。此の種の性格の弱さは人格の尊嚴の爲めに、自我の生長の爲めに必ず克服せられざるべからざるものである。自我の生長は我々が神と自己とに負ふて居る義務である。自我の慾望はそれが正しきものである限り、飽く迄も積極的に解放追求されなければならない。他人が病氣が病氣なるが故に踊らず、他人が醜き故に自己の美を磨かず、他人が才能なきが故に自己の才能を發揮する事を遠慮するが如きは、たゞにその人の心臟が弱い爲めばかりでなく、又自己の人格に對する尊重の念の缺乏せる者であつて、又卑怯であるといはなければならない。（つゞく）

（一九二三、一、五）

宗教意識を基礎として 自力主義他力主義の特質及び調和

木村泰賢

一

吾等の安心立命は自力的精進によつて得らるべきものであるか、將た、吾等以上の或者によつて得らるべきものであるかといふことは宗教的信仰に於ける一大問題である。之を世界の大宗教に徴するに基督教、回教、及び婆羅門教の一派の如く、人格神を立つる側は大體に於て他力主義の上に立つてゐるけれども、佛教(特に原始佛教)耆那教等の如きは大體に於て自力主義である。卽ち大體よりすれば所謂智的信仰を主とする側は自力主義を主張するに對して情的信仰を主とする側は他力主義を主張するといふことが出來やうと思ふ。

併乍、こは眞に大觀である。嚴格に云へば自力他力は必ずしも信仰の對象として、人格的客體を立つるか否かといふ問題と一致するものではない。宗教史の示す所によれば所謂智的信仰を主とするものゝ中にも自力主義もあれば、他力主義もあり、同樣に情的信仰を主とするものゝ中にも同じくこの兩主義の對立するありて、一概に定め難きものがある。

今試みにその例を擧げて見るならば——

基督教の信仰は前にも述べた如く、大體に於て他力主義であつて、耶蘇自らの祈れるが如く、自らの意志を遂げむとするにあらず、神の意志をなさしめ玉へといふをその立脚地とするものである。乍併、その神學的解釋となれば、矢張、この問題に撞着するを免れなかつた。救濟を以て全然、神の御覺召によるもので、吾等の如何ともすることの出來ぬものと

見る所謂豫定觀（Prädesbinations Theorie）を奉ずる側も生ずれば、又吾等自身の精進努力の結果として、初めて神の恩寵をかち得るものと條件付に考ふる派もありて、少くも初期の神學者間には必ずしも一定してゐなかつたのである。今の正統派（カトリツク）の神學は言はゞ右の兩說を調和して、救濟は自力と恩寵との協同によつて成立するといふ所謂 Synergismus の上に立つてゐるといふことであるけれども、そこに到るまでにはかなりの考慮が費されたのである。之に似て而も殊に面白きは印度のラーマーヌヂャ派（紀元後十二世紀の成立）の間に於ける南北派の爭論である。共に言ふまでもなく、最高神としての毘紐拏（ヴイシユヌ）（Vishnu）の恩寵を仰ぎながらも、その救濟の條件に關して、他力、自力の爭を生じたのである。その南方派（Tengalai）にありては、神の吾等を救ふこと恰も母猫が未だ步行し得ざるその仔猫に對するが如きもので、卽ち仔猫が何等の努力を費やすことなきも母猫が自ら之を諸所に運びて保育するが如く、かくの如く救はれる方の側の努力を俟たないで、神は吾等を救ふものであると主張した。この點よりしてこの派を喚ぶに通例、猫說（Mārjāra-nyāya）の稱を以てしてゐるが、之に對して北方派（Vada-galai）は所謂猿說（Markata-nyāya）なるものを主張した。謂へらく、神は慈悲心によつて吾等を救ふけれども、その救に與る爲には吾等はそを把持するだけの努力を費さねばならぬ。恰も仔猿が自ら母猿の懷を抱いて離れぬことによつてその身を保護するが如きものであると。卽ち猫說にありては絕對無條件の他力主義を主張したるに對して猿說の方にありては、この間に自力の條件を加味しての他力主義、卽ち一種の Synergismus を主張したもので、基督敎神學と著しく類似する所に面白味ありといふべきである。

更に之を人格神を立てない、大體上、自力主義を立脚地とする側に於けるこの問題を見るに、原始佛敎は言ふまでもなく全くの自力主義であつた。「自らを光とし自らを依處として住し、また他の依處に依る勿れ」といふを主張する派である。乍併、その悟りの門に入るの一條となればこの間に一種の他力主義者を生じ、所謂「他によつて聖道に入ることを得」といふ論者を出し（大衆部の主張）爲めに敎會內に一論爭を起したことは、初期佛敎々會史上有名な事實である。殊にこの點に於て面白きは、同じく印度の例であるが、かの數論派（Sānkhya）と瑜伽派（ヨーガ）（yoga）との相違である。共に略ぼ同じ敎理の上に立ち、智的信仰を主として、自己の本性に徹見することが、解脫であり救濟であると主張する派ではあるけれども、數論派の方にあつては、飽くまで自力の觀法によつてその域に達せんとしたるに反し、瑜伽の方にありては、その本體觀

と調和せぬながらも一種の神を立てゝその加被力を仰いで少くもその目的を達する方便としたのである。即ち兩例とも、大體よりすれば自力主義ながらも、こゝに一種の自力、他力の對立を見ることになつたのである。

更にこの問題の最も著しく開展した例を擧ぐれば、いふまでもなくそは大乘佛敎であらねばならぬ。所謂、自力聖道門と他力淨土門との優劣は佛敎信仰上、或場合には、火花を散らして論戰された問題となつたのである。蓋し、大乘佛敎は要するに原始佛敎の延長であり、開展であるから、前に擧げた自他力主義の分化はこゝに來りて明白なる對立となつたものであらうが、殊に大乘佛敎に理の一特徵は一方に於ては吾等の心に神性を認むると同時に他方に於ては、慈悲救濟の主體としての佛身常住の思想を開展した所にあるので、自力他力の問題は自然、之に關連して生ぜねばならなくなつたのである。かくして、自力論者は佛陀の救濟といふも所詮は、指導者たる意味に於てゞあつて、眞の解脫救濟は矢張、吾等自らの努力によつて所謂佛性を開發する所にあると主張するに對して、他力論者は、佛の役目は無緣の慈悲心を以て一切衆生を救濟せんとする所にあり、殊に阿彌陀佛の如きとなれば、衆生を濟度し終らねば成佛せずといふ誓ひを立てた程であるから、言はゞ佛自らの約束として吾等の要求や努力を保つことに、向ふ側より來り救ふべき筈であると主張して、この間に種々の優劣の批判などを設くるに到つたのである。之を日本現在の各宗に就て言ふならば、淨土宗、眞宗は所謂他力淨土門に屬し、他の宗派は所謂、自力聖道門に屬するのであるが、しかし、その最も際立てるものと言へば蓋し眞宗と禪宗との對立であらう。眞宗は一切を彌陀の本願に歸して一毫も自力を認めざらむとするに反して、禪宗は所謂、直指人心見性成佛で一切を自力に歸する所兩方共に最もよく徹底してゐるからである。

吾人はこゝで自力主義、他力主義に關する歷史を述ぶるが目的ではないから、事實の指摘はこの位にし置くけれども、若しあらゆる宗敎に涉りてこの見地より調ぶる時は何等かの形に於て兩主義の對立は到る所に見出さるべきことである。而もそは必ずしも人格神を認むると否とに一致すと限らず、上述の如くその何れにも涉つてゐる所、總て、こゝ兩主義の對立は宗敎の本質上、最も重要なる意義を帶ぶるの問題たるを示すといふべきである。

自分のこゝにこの問題を提起したのは、自力、他力の優劣得失を批判的に明にせんがためではない。寧ろその自力主義、

他力主義の分るゝに到つた宗教意識其者を明にして出來得るならばその調和點を見出さんとする所にある。蓋し、自分の見解に從へば宗教意識其者からすれば、自力といひ他力といひ所詮、たゞ文辭上には概念上の相違であつて、本質的には甫く異るものではないからである。少くも歴史上、この爭論は、自中に他を含み、他中に自を含むの道理を看過して、徒らに名相に拘泥したゝめに起れるものが多かつたといふことは爭ふべからざる事實である。從て今、幾分なりともこの兩主義に關する本質を明にするを得ば、少くも宗派的偏見を除去するに多少の功能があらうと信じたのは即ちこの小論文ある所以である。

二

右兩主義の本質を明にせんがためには先づ宗教意識自體のいかなるものなるを説明するの必要がある。乍併、宗教意識自體を明にせむが爲には、更に先づ吾等の生命活動の本質から初めねばならぬ。

抑々宇宙論上の問題は暫く措くとして、生物の本質の欲、即ち生きんとする意志にあることは、佛陀及びショーペンハウエルと共に吾等の是非とも認めねばならぬ所である。然るにこの生きんとする意志たるやそれ自體としては本より盲目なもので、佛教の言葉に從へば所謂、無明自體であり、ショーペンハウエルの言葉に從へば所謂、盲目意志（Der blinde wille）ではあるけれども、それ自身の中に自ら三方向に活動すべきの傾向を具備してゐる。佛陀の言葉を借るれば即ち生存欲(Bhava tairhā)を中心として愛欲(Kāma tairhā)權財欲（Vibhava tairhā）への擴がりであつて、即ちかの本能としての食欲（自己保存欲）性欲（種族保存欲）遊戲欲（自由欲）として表はるゝもの即ちこれである。而して一切の生物は意識的たると無意識的たるとを問はず、實にこの三欲を基本として一切の活動を營むものたることは吾人の嘗て『改造』誌上で論じた所である。

然らば宗教意識はこの生命活動に於ていかなる地位と意義とを有するものであるかといふに、右の生命活動は自體としては盲目的ではあるけれども、開展するに從て心理活動を惹起する。佛陀の行（意志）より識生すといひ、ショーペンハウエルの意志により表象ありといへるもの即ち之である。蓋しこれ盲目的欲動に光を與へて之を目的に導かしむる爲の機關と

解すべきである。かくして生的活動は心理活動に進展し、殊に人類となりて、理性の發達を來たすや、こゝに卽ち自己意識といふものが起つて來る、卽ち盲目的衝動に含つてゐる意味なり、方向なりに對する反省であつて、而もその結果として無限生命の要求が起つて來るのである。蓋し我等の欲動は之を表面的に見る限り、要するに當面の渴欲(アペタイト)に對する滿足を求むることに外ならぬけれども、一旦、その內部に潛める意義を尋ぬれば、所詮は生命の持續、擴大、自由を目標としての進展に外ならぬことが明になつて來るからである。勿論、必ずしも凡ての人々は之を意識的に自覺してゐるといふ意味ではないけれども、少くも迎へて解釋するに於ては、人類は、假令、無意識ながらも凡て之を直接なり間接なりの目的として行動してゐるといふことは、到底、見逃すことの出來ぬ事實である。而もその持續も自由も擴大も遂には無限にまで進まねば收りのつかぬ點に於て率直に人類は無限を目當として思惟し行動してゐるといふことが出來やうと思ふ。凡ての點に於て有限なる吾人に無限に對する要求あり、憬れあるは實にこゝに基くものと解すべきである。吾人は暫く之を無限生命、又は絕對的生命の要求と名けたいと思ふ。勿論之を心理學的にいふならばこの要求なるものも、要するに現實的生命の要求を延長したもの、又はその充たされぬ缺陷に對する補充觀念であるから、客觀的妥當性を有せざる言はゞ投影的產物であると言ひ得るかも知れぬ。しかし、たとへ、それにした所で、この要求は、少くも創造の目標として吾等を動かし、而もあらゆる希望や計畫や施設の基礎となる點に於て、その限り、生々した實在性を有するものであるといふことは、是非とも認めねばならぬ所である。自我に醒めるといひ、生命に徹底するなどといふのも、少くも宗敎的に言ふ限り、この絕對的生命に對する憬れを如實に痛感する義に外ならぬと解して然るべきであらう。

かくして、一度びこの要求に醒むるや、吾等の意志的要求はこゝに二重性を帶ぶることになる。卽ち一は欲動の當面に基く現實的求樂的傾動で他は言はゞ絕對的理想的生命に對する憬れである。而も此の兩要求は元來、生命自身に具はれる表面と裏面との相違ではあるけれども、少くもその兩極を對比する時はこゝに絕對的に相容れざるが如き觀を呈するに到るのである。一は切々の要求ではあるけれども、他は全一のそれであり、從て前者の個體的なるに對して後者は普遍的であり、前者の物質的なるに對して後者は精神的靈的であり、前者は絕えず求めて不滿足であるに反して、後者は絕對滿足の理想であり、前者の暫有的なるに反して後者は永遠的である——。卽ちかくしてこの兩者は遂に一か他か、その間に妥

協を許さぬといふまでの際どき對立をなすに到るのである。卽ちこの兩要求は之を發生的に見れば、向上的漸進的に連絡すべきものであらうけれども、一度び理想生活の頂點に高躍して、こゝを基點として現實生活を顧みる時は、こゝに天地の相違が痛烈せらるゝことになるのである。意志の分割はかくして起り、靈肉の爭はかくして生ずるのである。

さて全體としての生命活動をかく考察し來つて彌々宗敎意識の問題に進むに——言ふまでもなく、成立宗敎には種々の種類と程度の相違があるけれども、之を要求の側からすれば、要するに何れも右の絕對的生命を自內證として自己に實現せんとする欲求に外ならぬ。卽ち無限の持續と自由と光明とを屬性とする無限生命と現實的自己とを靈の交涉といふ形で密接不離に結び付けんとするの要求である。而してこの求むるの心が卽ち宗敎心又は菩提心と名けられ、結び付けられたといふ自覺は卽ち悟り、救濟又は解脫と稱せらるゝ狀態である。全智全能を屬性とする基督敎の神、無量壽と無量光とを屬性とする阿彌陀佛、久遠實成、常在靈鷲山の釋迦佛——皆凡てこの要求に應ずる絕對的生命の異名に外ならぬ。尤も佛敎の中には涅槃寂滅を理想とする派もあるけれども、その精神に從へばその涅槃寂滅なるものも、畢竟するにこの無限生命の異れる表現に外ならざることは吾人の他所に屢々論じた所であつて決して上述せる所と異るものではないのである。また種々の宗敎中には如實に無限にまで到達しかねて、その理想の極めて局限された範圍に止まるものもあるけれども、是等は要するにその要求を徹底せしむる程度の低きが爲めで、その內部には矢張、無限に到るべきの意味を含んでゐるものと解すべきである。かくして一切の宗敎は何等かの形で、少くも隱約の間には、無限生命を目標とし、その實現を期するをその本質とすると言はねばならぬことになる。

三

所で、然らば、右絕對的生命を自己に實現するの方法いかにといふに、こは正しく今の問題たる自力主義、他力主義に歸るべき中心題目である。

一體宗敎史を案ずるに、古來より此方法として採用され來つた宗敎的行法に無數の種類があるけれども、之を前述の宗敎意識に關連して分類すれば、相互に關連しながら、而も少くも名目上全く異れる二種とすることが出來る。卽ちその一

は專ら現實的生命の遣去を旨とするの方法で、他は專ら絕對的生命自身の活躍に俟つの方法である。

前者を旨とする側に從へば、吾等に無限生命の要求ありながらも、そを如實に實現し得ざる所以は、吾等は餘りに現實生活に拘泥するによる。物欲に縛せられ感覺に執着し、固別に捕はれ過ぎて絕對的生命の理想に高躍することの出來ないがためである。故に絕對的生命を實現せんがためには、絕對的生命その者を高調するよりは寧ろ現實的不自由生活を超越するを急務とする。而して現實的生活を超越するためには本能的欲望殊に我執我欲を抑制する所があり、然する時、吾等の奥庭にさゝやきつゝある絕對的生命は求めざるも自らを呈露するであらうと。かの解脫(Mukti Erlösung)といふは實に主として、この方面より進んで安心の自覺を得たに名けたものである。而して自力主義とは實にかゝる考の下にその修難を進むるをさすものである。何となればかゝる考案に從ふ限りその我執我欲の抑制は飽くまで自己自身の努力に俟つべきものにして絕えず精神生活の爲めに鬪ふの勇猛心を要するからである。

之に對して第二の主として絕對的生命自身の活躍に俟つの立場に從へばこの小自己はいかに努力した所で畢竟するに微力なすなきものである。到底、獨立に絕對的生命にまで躍進すべき力を有せざること、恰も自力を以て自己を空中に支へ能はざると同班である。從て絕對的生命を自己に實現するの道としては、所詮、向ふ側より降下し來つてこの微少なる自己を攝取するを願ふの外はない。而も(この側の立場に從へば)絕對的生命はその自らなる特質として慈悲、博愛を以て人を救はんとするものであるから、苟も至心に願ふ限り、その救濟に漏れべき理由がないから、たゞ小自己としては願ひ、且つ受入るの敬獻なる率直心さへあれば足る。特殊の自力的行法の如きは敢て要とする所ではない。然る時、絕對意志の動く所、そは吾等に天啓として發現しこゝに更生の自覺を得ることが出來ようとは卽ちこの方面から絕對意志に進むの考方である。他力主義といふのは卽ちこの考を飽くまで推しつめたものであつて、主として絕對的生命を小自己以外に求むる立場の主張である。而してこの方より進める結果は、第一の方法よりするを解脫といふに對して救濟、攝理などと喚ぶを通例とするのである。

かくして成立の根據を得たる兩主義は、絕對的生命實現の二方法として、種々の宗教に於てその立場々々に從て種々の形で主張せられたのは卽ち、先きに例示した如く、諸宗教に涉りて兩主義の對立する所以である。勿論、嚴格に云へば、

この兩主義はその純粹なる形をとる爲めには、その信仰の哲學的基礎に依存するものであつて、單なる方法のみの相違ではないから、所謂、絶對他力主義、絶對自力主義の對立的主張となれば必ずしも、到る處の宗教に見出さるべきものではない。日本に於ける禪宗對眞宗のこの點に關する主張の如きは、之を同一宗教の異派と見る限り、寧ろ珍らしき例と言つて然るべき程である。しかし之を絶對とまで推進めないで、言はゞ相對的自他力主義とすれば前述の如く何れの宗教にも宗派にもある二傾向で、而も稍々もすれば爭論の種となつたものである。而してその基く所は全く前に述べた絶對的生命實現の方法に關する見方の相違であつたといふことは吾人の忘れてはならぬ所である。

四

彌々進んで然らば、右兩主義相互の關係はいかに、之を調和するの道はいかに——

之を漠然と無批判的に言へば、多くの宗教の立場は寧ろ何れかといへば、兩主義の自らなる調和の上に立つてゐるが如きものである。其間に自力により多く傾き他力により多く傾くの相違があるとしても、所謂相對的の範圍にある限りは、一面よりすれば兩主義の調和とも見得るからである。即ち一方には何程か我執我欲の自力的制御によつて所謂、罪を償ひながら他方には神又は佛と寫象したる絶對者の他力的救濟を仰ぐことを安心立命に到るの道とするは、一般に宗教的行法として不斷に見る現象となつてゐるのである。かの神前に犧牲を捧げてその加護を仰ぐといふが如き信仰より進んでは苦行、內觀、德行等によつて絶對者の御覺召に契はんとするが如き行法に到るまで、見方によりては何れも兩主義の調和的又は中間的行法といふことが出來ようと思ふ程である。乍併、實をいへばかゝる行法は、之を批判的に言へば、兩主義の調和といふよりは寧ろ未分化的行法と名くる方が適するものである。何となれば已に主義といふ以上、そこに强き批判的徹底味のあるべき筈なるに、かゝる行法には概ねその用意を缺き、從てその自他の關係も遂に不徹底なる妥協以上に出づることが出來ぬからである。絶對的他力主義者はかゝる行法を指して雜行雜修と貶するを常としてゐるが、こは亦絶對的自力主義の立場からも、同じく云ひ得ることである。

吾人のこゝで求めむとする兩主義の關係及びその調和點といふのは、かゝる無批判的妥協的行法を指して言ふのではな

い。飽くまで批判的に取扱はれた絶對自力主義及び絶對他力主義の中に於て而もそれに卽して此間に統一的可能性のあるやなしやを驗するのである。

吾人はこの問題に對して、前に已に暗示し置いたやうに、之を形式的に見る限り、兩主義は絶對に相容れぬものであるけれども、宗教的純粹經驗その者としては異るものではなく、寧ろ同一經驗を異れる表象に飜譯したに過ぎざるものと解するものである。

先づ之を絶對的自力主義の方からするに、――便宜上、原始佛教及び禪宗の立場を頭に置て說くならば――神を頼まず、天に頼らず、たゞ偏へに小自己の自制によつて大悟徹底せんとするは自力主義に於ける修艱の大方針ではあるけれども、しかし、彌々その悟證の一段となれば、矢張、一種の他力に俟たねばならなかつたものである。何となれば悟證に到るの行法は行者の意志によつて左右することが出來るけれども、悟證の當體その者となれば、遂に所謂、時節因緣を俟たねばならぬもので、行者自身のいかんともすることの出來ないものとせられてゐるからである。而もその悟證卽ち解脫の實現たるや概ね不意に爆發的に來るものであるからして、修行者の側からすればそを一種の天啓と感ずるも毫も不可なき程のものである。佛陀はその正覺を成する爲に六ケ年を費やし、阿難は佛陀に隨侍すること二十五年にして而も遂に佛の滅後に到つて初めてその心地を開發したのも所詮、この天來的爆發はそれまで到來しなかつた爲である。殊に支那日本の禪者の悟道誌を見るにこの點は最も明瞭であつて、所謂南頓北漸などの區別があるにしても悟證の一段となれば遂に分別思慮を超えたる一種の天啓的事項に屬すと觀ぜられたのである。而もこの天啓的爆發の襲來は、勿論大體に於て修行の眞劍に應ずる結果ではあるけれども、必ずしもそれのみが唯一の條件ではない。そこに說明し得べからざる一種の機會――所謂時節因緣――が大なる役目を演ずるとせらるゝ所、絶對他力の信仰に於てその救濟の來否遲速を一に絶對者の意志に歸した所謂、豫定論などに可なりに似たものがあるではないか。叩けよ去らば開かれむ、求めよ去らば與へられむ、とは他力主義の耶蘇の道破した所であるが、自力主義の禪者にあつてはこの叩くことゝ開かるゝこと、求むることゝ與へらるゝことの關係を啐啄同時といふ言葉で表はしてゐる。卽ち（傳說によれば）卵の將さに化せむとするや、雛鳥の內部よりその殼を啐くと同瞬時に母鳥が外部より之を啄み、相俟ちて初めて新生の欣びを見るが如く、悟證の境も亦、求むる學人の努力と所

謂時節因縁と内外の合致することによりて初めて遂得せらるといふ意味である。自力主義の極地は遂に深き意味に於ての他力主義と合致するといふことは、到底疑ふべからざる事實である。蓋し解脱境は、たとへそれを內部に求むべきものとしても、小自己を超ゆる限り、またそを他と考ふることも出來るからである。

更に之を他力主義の方からするに、全く我意を沒却して絕對者に對して全然の依憑を表するがその主義の中心であるけれどもまたその入信の當體となればこの間に絕大なる自力の作用するを見逃す譯に行かぬ。祈り求むるの心も所詮は絕對者にせしめられた結果と、觀得するとしても、抑々その赤子の如き純眞の心根は何によりて顯はるゝのであるか。我欲自身を主張するは元來、意志の持前であるのに、そを全然捨離して偏へに絕對者に任せ去るといふことは絕大の努力の結果にあらざれば到底、到達し得べからざる所ではないか。信心も念佛も凡て彌陀の本願より吾等に向ひたる結果と說示する親鸞敎に於ても入信の要として疑情を排し、願作佛心の精進を勵むる所以も實にこゝにあるのである。而もこの點に於て、我執我欲の遣去を旨とする自力的修粮と本質上、何れの點に於て異るのであるか。たゞその異る所は表象の上に於て自力主義者は之を自己の意志力と解するに對して、他力主義者は他よりせしめらるゝと解するの相違のみではないか。而してその何れの考によるも、我執我欲の個人意志を捨離するをその入信又は悟證の條件とする所、その實質に於ては全く同じであるといふべきであらう。

かくの如く、兩方面から觀察し來ると、自力といふ中に他力を含むの道理あり、他力中に自力を含むの道理あり、而もその自他といふも所詮、たゞ視點の相違に過ぎずといふことは、到底、否定し得べからざる事實である。殊にその到達した境界となれば、少くも之を宗教意識自體として見る限り、そは全く同一心態に外ならざることは、たとへその立場は異るも種々の聖者の間に、驚くべき一致點の存するに徵しても疑ふことが出來ぬ。彌陀といひ、ゴットといひ、心性といひアートマンといふ、本これ絕對的生命の要求がさながら自己に實現したといふ自覺の當體を歷史と敎理と言ひ得るならば趣味に從て之を異れる表象と名稱とに飜譯したに過ぎざるものである。その無限の持續(不死)と自由と光明とを屬性とする所謂絕對的生命裡に安住したといふ自內證となれば遂に何れも異る所がないのである。この間にありて小なる自己が大なる生命に引上げられた、感得するも、大なる生命が小なる生命によりて引附けられたと感得するとも、實質上、何の異る

所があるであらうか。

五

右の考察を基礎として、更に之を表象及び實行的精神にまで及ほして兩主義を調和するの道なかるべきか。換言すれば右の純粹意識をいかなる數理を以て支持することにより、而してそをいかなる心意氣を以て實現せんとすることによつて兩主義が止揚され統合さるべきかといふ問題である。

先づ之を數理問題の方からするに、抑々宗敎意識の數理化に種々の發達階段があるけれども吾人はドレヴス氏(ADrews)に從て之を三段に分つを便宜と感ずるものである。卽ち第一は之を感覺的直感(Die sinnliche Anshcaung)の形に直すと、第二は之を表象(Die Vorstellung)の形にすること第三は之を理念(Die joiee)とすることである。

第一の感覺的直感とは所謂多神敎で自己以外に種々の神々を設定することであり、第二の表象とは二元論的一神敎で神をば統一して唯一としたれど、尙ほ世界及び生物をば神以外の存在と見る考である。第三の理念的とはドレヴス氏は又之を具體的一元論(Der Konkrete monsgmus)とも名け、神を以て吾等の內部にありながら、而も個人意識以上の存在と見る、言ひ得るならば一種の汎神論的考察をいふのである(Aurthur Drews; Die Religion als Selbstbewusstsein des Gottes pp 163-184)

然らば右の中、何れの立場は自力主義他力主義を止揚し統合するに適するかといふに、言ふまでもなく、その第三の所謂、理念的考察であらねばならぬ。何となれば第一の多神敎は所謂雜行雜修の對象たるには適するけれども、之に依つて徹底的自力又は他力主義を起すに困難であり、從て勿論その統合に適せず、又第二の超越的一神敎は絶對的他力主義を起し且つ支へるには適するけれども、統合には同じく不適當なるに反して、第三の理念的宗敎となれば、その性質上、兩主義をかねて而もその上に立つことの出來る資格を有するからである。例へば、大乘佛敎中、かの起信論の哲學の如きは正しくこの立場に立つものであつて、而も批判的に兩主義を統合せんとしたものである。卽ちその心眞如(理念の體)を自己に實現するの餘過を明にして、一面に於ては自修的向上法によるといひながら他面に於ては不思議熏とて眞如自體が降下的に迷情を照らすの作用を有すと說ける所全く兩主義の止揚を企てた說明法であつて、而もその立場の理念的たる所にその成功の根據があつたといふべきであらう。同樣に略ぼこの理念的宗敎に近き立場にある奥義書中にも亦、這般の消息を漏らすものがある。

その眞我は吠陀によりても、理解力によりても、はた、多學によりても得べからず。たゞ眞我自身の擇べるものにより

でのみそは得らる。（カータカ書一、二、二八）

と、卽ち眞我の當體は、所謂雜行雜修によりては得ることの出來ないもので、たゞ眞我自身の言はゞ天啓的に活動することによりてのみ得らるべきを明にしたものである。而も奥義書自身は眞我を以て飽くまで吾等の本性にして且つ宇宙の中心たるものと解し、その實現法に於て大體上、自力主義でありながら此間に他力主義的口吻を漏らして而も矛盾なき所、隨て兩主義綜合の意味を寓するものと解し得べしと思ふのである。後に吠壇多派（ヴェダーンタ）に到ると、奥義書に於けるこの思想は著しく明瞭になつたに徵してもこの事は疑ふことは出來ぬ。

以上の二例に照して見ても、理念的宗教は兩主義の統一に契ふ唯一の教理的組織であつて、從てまた純粹宗教意識自體に最も近い飜譯形式と言はねばならぬ。理念的宗教を以て、あらゆる宗教中その最高なるものと見做す所以の一理由は實にこゝにあるのである。乍併、更に之を論理的に究明して、その中に含む種々の問題を解決する段となれば非常の大事業で、とても簡單に片付け得ざるものがあるから、今はたゞ暫く大體の所だけを指摘し置くに止めることにする。

次ぎに然らばこの理念的宗教に應じて、それを實現するの實生活上の態度なり、心持なりがいかにといふに、之を簡單に要約すれば、自力主義の特長はその努力にあり、他力主義の特長は物に安ずるにある。然れば卽ち兩主義を止揚して之を實生活に統合するの一は要するに常に安住して而も絕えず努力する所にあると言はねばならぬ。而もこは理念的宗教の眞髓に徹底する時は自ら湧いて來るべき態度であり心持である。何となれば理念的宗教に從へば、絕對的生命は、吾等と共に世界の本質であるといふのであるから、吾等は已に絕對安住を保證せられゐる身分であるけれども、少くも與へられた現狀としては、未だ如實にそのあるべき當體を實現してゐない點に於て絕えず努力實修の必要があるからである。古くさい喩ではあるけれども、理念的宗教を背景としての吾等の實生活に於ける態度は常に寶珠を磨くのそれであらねばならぬ。瓦を磨して鏡とせんとせば遂に失望に終はるけれども、珠を磨して光あらしむることは、元來確實に備はれる可能性を實現するに外ならざるを以て努力と希望と歡喜とが打して一の實行に統合せらるゝことになる。理念的信仰を背景としての實際的態度も亦全く斯の如きもので簡單に云へば、永遠の理想に鼓舞せられて歡喜勇躍してその目標に進む所に、自力も他力も凡て統合せらるゝことになるのである。吾人はこの點に於て嘗てタゴール氏の道破せられた一句に深き味を感得するものである。曰く

梵（ブラフマン）は梵である。彼は完全に對する無窮の理想である。然れども吾人は未だ眞にあるべき吾人の地位に到らぬ。吾人は不斷に眞とならねばならぬ。不斷に梵とならねばならぬ。このあることゝ、成ることゝの間には無限の奏樂あり。而してこの祕密の底に創造の限りなき進行を支ふるあらゆる眞と美との根元がある。(R.Tagore ; the realication of life p.155)

社會學者の女人崇拜

文學博士　米田庄太郎

（五）ヴォー夫人との戀愛事件

コントが偶然クロチルド・ヴ・ヴォー夫人と相識つたのは、千八百四十四年の十月にして、是れ彼が妻と別居して（千八百四十二年八月五日）、獨身生活を始めてから二ケ年あまり後である。其の詳しき事情は次節に於て述べるから、此處では只右の事實に注意するに止める。而して此處に此の事實に注意することは、コントの同夫人に對する熱烈なる愛情の、根本的原因を理解する爲めに必要であるので、後に述ぶる如く同夫人は斷乎としてコントの要求に應じなかつたが爲めに、彼の同夫人に對する戀愛は、遂に所謂神聖なる戀愛となつて仕舞うたのであるが、併し夫れは始めは主として、又後にも無意識的には肉感的であつたことは、右の事實と青年時代に於ける彼の性慾生活とによりて、推察し得られると思ふのである。

今コントは初見の時からヴ・ヴォー夫人に大に魅せられた樣であるが、併し彼が同夫人を熱烈に戀慕し始めたのは、千八百四十五年の、四月頃からかと思はれる。而して此處に同夫人に對するコントの熱烈なる戀愛を考察するに當つて、先づ同夫人の容貌性格及び當時の生活狀態なぞに就て、少しく述べて置かねばならぬと思ふ。同夫人は當時三十歲にして、夫は或重罪の爲めに終身禁錮に處せられて居たとも、又は外國に遁走して、終身佛國に歸ることが出來ない事情にあつたとも云はれて居るが、何れにしても同夫人は當時の佛國の法律にすれば、夫の死亡が確かめられるまでは、獨身で暮らさねばならぬ狀態にあつた。さうして同夫人は自分の兩親と共に暮らして居たが、別に資產とてはなく、女敎員として漸くに生活を營んで居たと云ふ。同夫人の生活の困難であつたことは、其の在世中コントが屢々金を送りて助けて居たことによりても察される。尙ほ同夫人は女流作者となる大望心を抱いて居たので、又夫れがコントの盲目的讃稱によりて、大に煽り立てられた樣であるが、併し同夫人の公にせる唯一の作「リ

ユシーにや、コントが推奬措かず、寧ろ熱狂的に崇拜して居たに拘らず、其の文藝的眞價は云ふに足らぬものである。然らば同夫人の有する何物が、さほどコントをして同夫人を戀慕し、崇拜せしめたかと云ふに、夫れは同夫人の美貌と、コントが多年苦められて居た彼の妻とは全く正反對の、柔しき、所謂女らしい性格を具へて居たことであると思はれる。同夫人は額の兩邊に房々と垂れた細い絹絲の樣な金髮の持主、濡れ潤んだ非常にやさしい青い目の持主、愛らしい温柔な美人であつた。「肺病が其の犧牲となる女子に與へる一切の美」を具備した婦人であつた。學說に於ては常に女性の柔順性と獻身的愛情との重要を主張しつゝあつたに拘らず、實際に於ては全く正反對の性格を有する女と結婚して多年苦められ、遂には別居して二年餘も寂しき孤獨な生活を送つて居た。又性慾の比較的に强かつたと思はれるコントが、かゝる女子に接して、師として大に尊敬されるに當つて、之れに熱烈なる愛情を献ぐるに至つたのは、敢へて怪むに足らぬかと思はれる。尙ほコントの當時の神經狀態に於て、彼の盲目的戀愛の原因を究明する上に、重要なる資料を供するものがあるが、夫れは次節に於て述べることとする。

却說上に述べし處によりても察せらるる如く、コントのヴ●ヴォー夫人に對する戀愛は、始めは大に肉感的であつた。否な主として肉感的であつたかとも思はれるので、彼は同夫人に對して直ちに肉交を求め、又同棲を求めたのである。併し同夫人のコントに對する愛情は、精々師に對する敬愛の情に過ぎず、夫れ以上に進んで戀愛には達しなかつたと思はれる。而して同夫人は敬虔なる加特利教的信仰を固持して居たからコントの要求には應じなかつたのである。而してコントが千八百四十五年の五月に、始めて同棲を求めて拒絶されし時には、彼は非常に失望落膽し、一週間も寢床を離れずして呻吟し、何事もなすを得なかつたと云ふ。夫れよりコントは同夫人に、彼の慾情を征服し、之を神聖なる友情に化成することを約したが、併し其の約束を實行することが、如何に苦痛であつたかは、二ケ月後同夫人に送れる書簡中に、彼は尙ほ十分に諦らめ得ないこと、又彼の健康は夫れが爲めに攪亂されて居ることを示して居る。併し若しヴ●ヴォー夫人が常に其の態度を變じなかつたならば、コントは遂に其の心の平和を恢復したであらう、少なくも諦らめて仕舞うたであらうと思はれるが、然るに同年九月五日、如何なる理由によるか、同夫人はコントに書を送りて、愛子を欲する切なる情を述べ、コントと同棲することを望む旨を告げた。

右の書簡を得て、コントが如何に喜んだかは容易に察し得られるので、彼は遂に愛するクロチルドを手に入れて、此處

に幸福なる生活が彼に惠まれることを豫期し、翌日叙情詩的な調子で返事を送つた。然るに七日に至つてヅ・ヴォー夫人は亦もや同樣を拒絕した。此の時のコントの失望が如何に大なりしかは、想像するに餘あるので、彼は精神的に大打擊を受け、一ヶ月餘りも泣き暮したと云ふが、其の間に又身體の健康をも大に害したと云ふ。而して彼の熱情は肉交の拒絕によりて、益々燃え上ると同時に淨化されて來たのである。ヅ・ヴオー夫人はコントの態度によりて、彼が自分に眞に要求して居るものは何であるか、又其要求が充たされないが爲めに、彼は精神的及び肉體的に如何に苦痛を感じて居るかを、常に明らかに覺識することが出來たから、何處かで其の苦痛を除く途を求めることを嘗て勸めたが、コントは之れに對して甚だ嚴肅に、左の如く答へたことが、彼の遺言書の中に記されて居る。

クロチルド、あなたは男子の野卑性を、少なくも高尚なる人物に就ては、あまりに過大視して居る。男子の野卑性は、實際、吾々の心が眞に愛に捕はれて居ない時には、愛なき快樂を求めさせる。併し吾々の心が眞に愛に捕はれて居る時には、かゝる野蠻的な行動は、吾々に不可能となるのである。私の不幸なる家庭にありては、一切の性慾的關係が、あなたの結婚の一年前に既に全く停止したから、私は他の多くの人々の如く、長い間其等の賤しむ可き、汚はしき滿足を求めなければならなかつた。併し私はあなたを識り、あなたを愛して以來時としては大に苦痛を感ずるが、常に禁慾生活を守つて居る。併し夫れはあまり誇るべきことでもない。と云ふのは私には外に仕樣がないからである。

實際コントはヅ・ヴォー夫人の在世中は勿論の事、同夫人の死後も彼自身が世を去るまで、全く禁慾生活を固持して居たと云ふ。此くて同夫人に對する彼の戀愛は、益々强烈となるほど、彼の性慾はフロイド派の云ふが如くに愈々昇華 sublimieren したのである。而して彼の戀愛は始めには、變態性慾に於て殊に著しく現はれる、性慾的拜物敎或は呪物敎の傾向を示して居たが、段々に宗敎的となり、純呪物敎的となつて來たのである。併しコントはヅ・ヴォー夫人の死するまで、いつか彼の要求の滿たされることあるを、心潜かに望んで居た樣である。而して同夫人の肺病が益々進み、其の生命が段段終りに近づくにつれて、同夫人は精神的にも亦物質的にも益々コントに依賴し來り、兩者の交りが愈々親密になり、コントをして悲しき日の來るを豫感せしめると同時に、又彼の求める幸福の與へられる日の、遠からざるを望ましめつゝありし其際、病俄に革まり、千八百四十六年四月五日、クロチ

ルド●ヅ●ヴォー夫人は、コントの腕に抱かれつゝ、此の世を去つたのである。されぱコントの不幸なる戀は遂に一年あまりで終つたのである。併し彼がヅ●ヴォー夫人を崇拜する念は、夫れより益々強まり、彼は遂に女人崇拜を組織するに至つたのである。

却説以上述べ來りし處によりて考へると、クロチルド●ヅ●ヴォー夫人に對するコントの戀愛が、甚だ强烈となり、又彼の精神的生活の上に、更に彼の肉體的生活の上にも、重大なる影響を及ぼすに至れる少なくも根本的一原因は、同夫人がコントの肉感的欲求を拒絕して、之を滿足させず、彼の猛烈なる性慾を昇華させたことにあると、云はねばならぬと思ふ。或コント研究者は、若しヅ●ヴォー夫人がコントの要求を充たし、彼と同棲したならば、必ずや早晩喧嘩別れをなしたであらうと云うて居る。是れコントの生涯を通觀すると、彼は彼の兩親を始め、恩人、親友、妻等、彼の總ての親近者と、遂には喧嘩別れをなして居るからである。されぱヅ●ヴォー夫人の場合に於ても、若し同夫人がコントと同棲して長生したるならば遂には同様な結果を生じたかも知れないのである。併し又ヅ●ヴォー夫人に關しては、例外な場合が作られたかも知れない。夫れはとにかく、同夫人がコントの肉感的欲求を斷じて拒絕し、且つ彼れに熱愛されてより、僅か一年あまりにして忽然世を去つたことが、彼の精神的生活の上に重大なる影響を及ぼしたことは、疑はれないと思ふ。夫れで余は是より右の點に注目し、フロイド派の大に重要視する性慾昇華の原理から見て、該戀愛がコントの精神生活に、實際上如何なる影響を及ぼしたかを、考究して見たいと思ふ。

(六) クロチルド●ヅ●ヴォー夫人に對する戀愛が、コントの精神生活の上に及ぼせる影響に就て

今コント自身は、彼の第三期の思想の發達を、全くヅ●ヴォー夫人との關係が、彼の精神上に及ぼせる影響に歸して居るのであるが、併し詳しく吟味して見ると、彼が同夫人を識る前に、既に其の萠芽を發して居ると、認められる傾向もあるので、實際は彼れ自身の考へし程、全然同夫人との關係の精神的影響に、歸す可きものであるまいと思はれる。しかも同夫人との關係の影響が、甚だ重大なりしことは疑はれない事實にして、若し其の影響がなかりしならば、假令第三期の思想は大體上同一の方針に於て發達したとは云へ、其の現實なる形貌は大に異なれるものと、なつたであらうと思はれるのである。

此處に先づコント自身が、ヅ●ヴォー夫人との關係の精神的

影響を如何に考へて居たかを、彼自身の言葉を引用して示して置くが、彼は千八百四十五年五月十七日の書簡中に、左の如く述べて居る。

「私は私の精神的生活の復活を、悲しくも全然斷念せねばならなかつた正に其の際に、毫も豫期しなかつた刺戟によりて、此の如くに私の精神的生活を復活させ得たことを先づあなたに感謝せねばならぬ。疑もなく、私自身の仕事が、平素私を支へる普遍的愛の諸情操を味ふことは、大に愉快であるが、しかも其等の情操の漠然たる哲學的力は、愛に對する私の眞の欲求を充たすには、尙ほ甚だ不充分である。……智力的飛躍と感情的飛躍との此の幸なる結合は吾々の冷淡なる術學者が笑ふ可き謹嚴を裝うて如何に評するとも一切の大事業に對して、一般に必要である。……私はあなたに負ふ處の美はしき精神的復活と私の第二の大著作(實證政治學體系)の着手とが、幸に同時に起れることを、心から祝する。私の第二の大著作は、右の事情によりて決して傷害されない。否な愉快なる經驗が既に直接私に指示する如く、確かに夫れによりて其價値を大に增すであらう。右の事情は、私が十五年前私の基本著作(實證哲學講義)に着手し始めし時に、自分が陷るまいと奮鬪せしに拘らず實際陷れる處の、感情的壓縮の悲しき狀態(同書は結局かかる狀態の下に、殆んど全く書き上げられたのである)。と實に貴重なる對立をなすのである。……私の仕事が停滯しようとする毎に、あなたの親愛なる姿がおぼろに現はれて柔しくも私を抱擁し、さうして夫れより私の思索を害なふことなく、私を支へ、私を復活させる。私が屢々最善のインスピレーションを得るのは、あなたの祭壇に祈ることによりてゞある。……實證政治學體系に於けるあなたの人格的影響は、今日の私の樂しき、幸ひなる著述の仕事を、私が六年前に同一の問題を、他の方面の下で取扱ひし悲痛なる境遇と比較すると、愈々著しく現はれる。

余輩は右の文句によりて、コントはクロチルド・ヅ・ヴォー夫人のインスピレションの下で、彼の第二期の方法及び學說を改變せしこと、彼は同夫人と相識つた時に、實證政治學體系を實證哲學講義の實際的結論として考察して居たが、夫れは同夫人に對する熱情によりて、方法及び目的に於て重大なる變化を受けたことを、推察し得るのである。併しコントの同夫人に對する戀愛は、如何に熱烈であつたとするも、只夫れだけでコントの思想上、實證政治學體系に於て見るが如き、重大なる變化が生じ得たであらうか。余は右の戀愛が、さきに述べしが如き一定の事情、卽ち同夫人が絕對的に肉交を拒絕したと云ふ事情を具へて居たことが、其のコントの精神上

に及ぼせる影響を、特に意義深きものとならしめた、根本原因であると考へる。後に詳しく述ぶる如く、コントは千八百四十二年八月五日から妻と別居し、又其の以前からも妻との性慾的關係は斷へて居たので、彼が同夫人を識りし時には、既に二年半も獨身生活を續けて居た際である。さうして彼の同夫人に對する熱情は始めは大に生理的神經的であつたことは、既に述べし處によりて明らかである。併し同夫人が斷然肉交を拒絕したことは、コントをして彼の熱情を、淨化せざるを得ざらしめたのである。但しコントの熱情は決して容易に、純精神的なものに轉化したのではなかつたので、夫れは肉交を拒絕される每に愈々强烈となりつゝ、漸次に淨化されたのである。而して此の强烈化と淨化との並行的發達によりて同夫人の一言、一句、一擧動も亦、同夫人より贈られる些細の物までも、コントにとりては、戀する人に於て一般に見る處の、又變態性慾者に於て極端な形にて現はれる處の、物件崇拜或は呪物崇拜の傾向（Fetichisme）によりて、崇拜の對象となつて來た。さうして夫れは後にコントが、さきに述べしが如く、新呪物教（Neo-Fetichisme）を唱ふるに至れる素因となつた。尙ほ此處に更に重要視す可きは、クロチルド・ヅ・ヴォー夫人は、コントに熱愛されてより、僅か一年あまりにて死去せることである。コントの愛情が純精神的なものに淨化されつゝ、又其の强度の愈々高上しつゝありし際に、同夫人は此の世を去つたので、此くてコントは只記念崇拜だけを以て滿足せねばならなくなつたのである。要するにコントの思想生活の第三期に於て、新しき方法、新しき宗教、新しき呪物教を發達させた直接原因或は近因は、以上述べし如くヅ・ヴォー夫人との戀愛が純精神的愛情に淨化されたこと、即ちフロイド派の術語によれば戀愛の昇華にあるのであるが、尙ほ此の問題に就て更に少しく述べて置きたいと思ふ。

　上に述べし如く、コントはヅ・ヴォー夫人に對する戀愛を、純精神的愛情に淨化せねばならなかつたので、隨うて純精神的愛情を交換し、記念（スヴニール）を崇拜することを以て、滿足せねばならなかつた。かくて彼は先づ「社會的記念祭」に關する有名な書簡（ヅ・ヴォー夫人へ）を書いたが、此の書簡はつまり「記念崇拜の重要」とも題す可きものである。而してコントは、實證主義は加特利教より記念崇拜を借り來りて、しかも同教よりも一層よく、人類の共同事業の總ての協力者を尊崇することが出來ると云うて居る。尙ほ彼は此の思想よりして、實證主義の禮拜及び曆の觀念に進み、更に中世紀の模倣を續けて、遂に女人崇拜に達したのである。要するに戀愛の昇華はコントをして第三期の新原理即ち普遍的愛を確立させたので而して又第三期の新方法、即ち彼の主觀法と稱するものは、

つまり其の原理からして、本質的な諸情操の組織化を演繹せんとするものに外ならぬ。人間は愛する實在物であるとして、普遍的愛が原理として確立されたとすれば、總てが愛から引き出され、又總てが愛に結び付けられるであらう。而してコントは其の普遍的愛の原理を、ツ・ヴォー夫人に對する熱烈なる戀愛の體驗から引き出したので、同夫人は實に彼の新方法の直接の靈示者であつたのである。

余は尙ほ此處に、コントが其の戀愛の慾情の淨化するにつれて、拜物的或は呪物的傾向、人類教及び女人崇拜へ進める途行を、簡單に指示したいと思ふが、今コントは彼の慾情の淨化するにつれて、記念崇拜に於て自から樂しみ、ツ・ヴォー夫人に觸れた何物でも、之を尊重して來たのである。而して彼の宗教的傾向は一種の詩歌的比喩から始まつたので、彼は先づ同夫人の祭壇を云々し始めて居る。但し夫れはさきに述べし如く同夫人の安樂椅子を比喩的に云ひ表はしたものである。而して彼は同夫人に送れる一書簡中に左の如く述べて居る。「あなたの祭壇の前に跪いて、私は祈る。……私の祈りは、私共の神聖なる愛情の進行及び傾向を、特質付けるに最とも適する、あなたの手紙中の短い文句を、月日の順序で繰り返すことである。云々」此の事はまだ嚴密な意味では禮拜とは云はれないが、併し最後の進行は近づいて居たので、彼は其の後送れる他の書簡中に左の如く述べて居る。「健全なる哲學は宗教と同じく、深く心情に徹到し得る時に、始めて全然宗教に取り代り得るであらう。……あなたの熟知する樣に、私は常に私の思想に於て、此の根本條件を充たさんと努め、又夫れが私の第二の大著作の完成に、私を促進したのである。」夫れよりして又實證科學者及びコント自身は、聖式を行なふ僧侶となつて來たが、尙ほコントを人類教に導ける右の潮流に、彼を呪物教或は拜物教に導ける他の潮流が加つた。

或日ツ・ヴォー夫人は花と詩とをコントに贈つたが、コントは之を大に尊崇し、さうして之を特殊な詳細な、一の禮拜の對象としたのである。更に千八百四十五年十二月五日の書簡に於て、彼は遂に明白に拜物教或は呪物教と云ふ言葉を用ひて居るが、其の文句は左の如くである。「あなたの手紙を讀み、あなたに手紙を書き、あなたが贈られた貴重なる護符(花と詩)によりて、殆んど呪物教を信ずるまでも、感動され、さうして夫より又、涙を流しつゝあなたの美はしき短詩の句を復誦すると、是れ、私のクロチルドよ、私の痙攣的激動を靜め、私の心を和らめる良藥である。」尙ほ夫れよりコントは日常の出來事、其の最とも些細な事までも、彼の愛するツ・ヴォー夫人に結き付けて考へるに至つたのである。而して同夫人の健康が愈々弱るにつれて、コントの戀愛は益々強まり

つゝ、純化し行き、同夫人の言葉や、所持物の崇拜、記念崇拜、神祕主義、呪物敎は益々高上して來た。更にコントは、飽き足らぬ戀愛を以て滿足す可く餘儀されながら、同夫人の終りに近づきつゝあるを憂鬱に豫感して、段々女人崇拜を組織せんと考へて來た。上に述べし處によりて知られる如く、コントの女人崇拜は、始めは只彼の心の奥底で行なはれるに止まつて居たのであるが、今や彼は之を公に行なひ、實證主義信者をして、之を遵奉せしめようと考へて來たのである。此くて彼は千八百四十六年三月一日、即ちヅ●ヴォー夫人の死去する一ヶ月前に、同夫人に送れる書簡中に左の如く述べて居る。「私は女人崇拜を組織することを、あなたに約束した、さうして私は私自身では既に考案を立てゝ居る其の崇拜制度に、優秀なる門人等を誘導するだけ、尚ほ長生することを望む。」コントが憂鬱に豫感しつありし日は遂に來た。千八百四十六年四月五日、クロチルド●ヅ●ヴォー夫人は此の世を去つた。此の時コントは悲痛のあまり再び發狂せんとし、又再び陰鬱なる自殺の念に襲はれたが、大に奮鬪して漸くに危機を脫したと云ふ。併し同夫人死去の後、コントが同夫人を愛慕し、崇拜する念は益々高上し、而してかゝる精神狀態に於て彼の第二の大著作を完成し、又其の中にさきに述べし如くに女人崇拜を、實證主義宗敎、人類敎の禮拜の直接的基礎としての個人的禮拜に於て、組織したのである。

以上述べ來りし處によりて考へるに、要するにコントが彼の第二の大著作に於て、愛を以て彼が第一の大著作に於けると同じ問題を、全く異なれる精神にて論究する新しき方法の原動力となし、夫れより人類敎を引き出し、又其の人類敎が段々記念崇拜、愛する婦人の禮拜、彼女の言葉や彼女の觸れしものの崇拜に化成し、遂に新呪物敎となつた直接の原因或は近因は、つまりコントは熱狂的に一婦人を愛したこと、其の婦人が彼の戀愛を充分に感謝し、又彼を師として獻身的に尊敬せしに拘らず、彼の戀愛を完全に滿足させることを斷然拒絕せしこと、更に彼女がコントに接して僅かに一年あまりにして、世を去りしこと等にあるのである。されば吾人はコントの人類敎及び女人崇拜は、つまりフロイド派の重要視する性慾の昇華作用、及び現代性慾學上に於て變態性慾生活の一現象として重要視される、性慾的フエチシズム（拜物敎或は呪物敎）の原理等の產物として、解釋し得られると思ふ。併し若くして結婚して居たコントが、五十近くの年齡に於て一婦人と上に述べしが如き狂的戀愛に陷つたのは、抑々如何なる原因によるか。是れよりコントの人格、生立及び生活事情等を研究して、其の原因を闡明して見たいと思ふ。

（七）コントの性格、生立、教育、結婚、發狂、著作、失戀及び千八百四十五六年頃の彼の物質的及び神經的精神的状態

コントの生涯は其の生立ちの始めから、晩年に至るまで常に不幸なるものであつた。近世實證哲學の創説者として、又社會學の創説者、或はすくなくも其の最とも重要なる先覺者として、近代の學問の進歩に貢献する處、多大なりしコントが實際的生活に於て酬いられる處、甚だ少なかりしは、是れ古來多くの天才の生涯に於て、稀れならざる一現象であると云へ吾人は之を人類史上の一痛恨事として悲まざるを得ない。而してコントの實際的生活上に於ける不幸は、彼の人格性に基因する處多いと思はれる。勿論彼の人格性は逆境の反動によりてありしが如くに固まつたので、若し彼の生活境遇が順調でありしならば、彼の人格性は大なり小なり異なれる發達をなしたであらうと察せられるが、とにかく彼の人格性には彼の生活の不幸を招く色々な素質が、本來具はつて居たと思はれる。併し此處に彼の人格性や生活事情に就て詳しく論述する暇はないで、只彼が五十近くの年齢で、一婦人と上に述べしが如き狂的戀愛に陷りし原因を、究明するに必要と思はれるだけ、少しく論述するに止める。

先づコントの生涯を通じて現はれたる、彼の人格の主要なる特性を簡單に述べて置きたいと思ふが、今先づ體質の方面に就て見ると、彼は甚だ神經質で、熱狂し易い人であつた。而して實際發狂して精神病院に入院したこともあり、又時に自殺の念に襲はれ、且つ實際に自殺を企たてた事もあつた外に、彼の生涯に於ける重要なる事件は、一般に甚だ强烈な神經的危機を伴なうて居る。次に智力の方面に就て見るに、コントは甚だ早熟の天才であつたので、モンペリエのリセーの花と呼ばれ、同校の誇りとなつて居た。さうして當時佛蘭西の學生の目標となつて居たエコール●ポリテクニク（理工科大學）の選拔試驗に應じて、中部地方の最優等生として及第したが、併し其の時には彼の年齢は入學許可年齢に一年足らざりし故、翌年まで入學を許可されなかつた。それで彼は其の一年間は母校で助敎員として數學を敎へたが、此の間に、又エコール●ホリテクニク在學の二年間に彼は彼の專攻の數學の外に、ナオンテネル、モーペルチユス、アダムスミス、フレレ、チユクロ、デイデロ、ヒユーム、コンドルセー、ヅメートル、ヅボナル、ビシヤ、ガル、及び其他の諸家の著作を通讀したと云ふ。終りに性格の方面に就て見るに、彼は感じが鋭く、熱誠で、勤勉で、さうして自分の信服する師には一

時的には盲從する傾向もあるが、併し規律或は節制がなく猜疑心が強く、何れの權威にも服從するを欲しない、さうして自信の強い、傲慢な、しかも或點に於ては臆病な小心な人であつた。此等の諸特性は彼のリセー時代から、既に明らかに現はれて居たが、其の後不幸なる生活事情によりて、益々強められたと思はれる。彼はリセー時代からして、早く加特利敎に反對する傾向を示し、政治的には急進思想を抱いて居た。さうして夫れは彼の兩親の心を大に痛め、或は彼に對する反感を起させたと思はれる。是れ彼の兩親は熱心な、敬虔な加特利敎信者にしてさうして彼の父は溫厚謹嚴な王黨員であり、又彼の母は柔順な家庭の母であつたからである。

かくてかゝる兩親から如何にして、コントの如き性格の子が生れたかは、コント傳研究者の一問題となつて居る。さうして彼の性格と父の性格との差異や、彼の一生を通じて彼の父が彼に對してとれる不親切な態度や、又彼の母が彼に對してとれる一種不思議な態度や、更に佛國當時の地方の道德的狀態などから推して、彼は彼の法律上の父の實子ではなく彼の母が他の男と野合して彼を孕みながら、彼の法律上の父に嫁したので、又其事を彼の法律上の父が、知つて居たのではあるまいかと疑ふ人々もある。併しそれには何等の確證もないので、只右に述べし事實から立てられた、一の憶說に過ぎない。とは云ふものの、此憶說を斷然付ける確證も亦ないのである。

とにかくコントの父は、始めから彼に對して甚だ冷酷であつたので、彼は九歲の時から學校の寄宿舍に入れられ、家庭の溫き情をよく味はふことが出來なかつたので、彼は兒童として既に不幸な子であつた。さうして彼の成績の優秀なりしことは、勿論兩親を喜ばせたが、併し彼の一切の權威に對する反抗的反逆的態度や、反加特利的及び急進的傾向は、父の反感を招き、母を悲しませたので、彼と兩親との關係は益々惡くなつたのである。殊に千八百十六年エコール・ポリテクニクの學生が、些細な問題で當局者に反抗し、全部退學を命ぜられし際に、コントは主導者の一人として、警察の監視付で鄕里に送り歸されしことは、敎會と王朝政府との權威を、心から尊崇する父をして、如何に激怒せしめたかは容易に察し得られる。

コントは夫れより鄕里に於て醫學を學び始めたが、併し彼の趣味も性格も全く醫師に適しないから、彼は間もなく之を止め、さうして兩親の反對を排し、其の扶助を受けずして、自活しつゝ勉強する決心で、再び巴里に上つた。彼は勿論生活の困難を覺悟して居たが、併し數學の私敎授によりて、どうにか生活し得られるであらうと信じて居た。されど夫れは蓋だ困難であつた。さうして、或將官が、米國に於て彼れに

與へんと約せし地位は、其の計畫の實行されざりしが爲めに與へられず、又カシミル・ペリエの祕書として彼に與へられし地位は、彼の性格上到底止まることが出來ずして、彼は自から之を去つた。かくて彼は甚しき窮境に陷つたが、其の際サン・シモンに認められ、夫より彼の祕書及び協力者となりて、月俸三百法を與へられた。此頃彼は如何にサン・シモンを尊崇し、サン・シモンに心服して居たかは、當時の彼の友人ヴァラに送れる書簡によりて推察される。併し兩者の性格は到底一致し難いものであつたから、間もなく兩者の間に隔りを生じ、遂に數年後千八百二十四年に、コントはサン・シモンから分離した。さうして其の時サン・シモンに對する彼の態度は、彼の性格の自然の結果であつたとは云へ、後人をしてあまり快よくは感じさせないものであつた。

コントは其の翌年一婦人と結婚したが、此の結婚は實に彼の生活をして益々不幸ならしめる一大原因となつたのであるそれで此處に彼の妻の人格及び結婚の事情に就て、少しく述べて置きたいと思ふ。夫れコントの妻となつた婦人はカロリヌ・マッサン(Caroline Massin)と云ひ、一小書店主であつたとも云はれて居るが、實は一喜劇役者の私生兒で、十七歳の時から警察署に登錄された淫賣婦であつたのである。但し同女は其の母によりて若き辯護士セルクレ(サン・シモンの門人の一人にして、同派の機關雜誌の主筆をなせし事ある人)に賣られたが、後捨てられて、淫賣婦となつたのである。コントの記する處によれば、彼が始めて同女に接したのは、千八百二十一年五月三日の夜である。而して其後彼の云ふ處によれば、「彼の財囊の許す時」は、常に同女と夜を過した。されば彼は千八百二十五年二月十九日、巴里市第四區役所で結婚するまで、殆んど四年間程同女と馴染んで居たのである。

此處に何人でも直ちに疑問を起すのは、コントは何故にかかる婦人と結婚したかと云ふことである。コントは其の後或人に送れる書簡中には、彼は嘗て彼の妻を愛したことはなかつたと云ひ、又他の書簡中には、彼は同女の不幸を憐み、其の境遇から同女を救ひ上げる爲めに、人道的感情から同女と結婚したのであるとも云うて居る。併し結婚の當時彼の友人ヴァラに送れる書簡によれば、彼は同女を熱烈に戀愛して居たことは明らかである。尙ほ同女に接する前、コントは既に或家の下女ポーリスと云ふ伊太利の女と通じて、一女子(九歳にして夭死)を生ませて居たのに、其の女とは結婚せずに特にカロリヌと結婚したのは、是れカロリヌを愛して居たからであると云ひ得られる。但しコントはカロリヌと結婚した後も、尙ほ最初の女ポーリヌとの關係を繼續して居たと云ふから、其の頃のコントのボヘミアン生活は、察し得られるの

である。

吾人は又當時のコントの收入狀態から考へて、如何なる女と結婚するにせよ、とにかく結婚すると云ふことは、隨分無謀な行動であると思ふ。幸か不幸か、當時彼の妻は親近者の死亡によりて、小額の遺產分配金を受けたから、夫れで漸く生活を支へたが、併し其の金がなくなるや、忽ちに窮境に陷つた。さうして彼は間もなく、彼の妻の性格に對して非常に不滿の念を起して來たので、夫れは彼の理想とする婦人の性格とは、全く正反對のものであることが發見されたのである。かくて其の頃彼は友人に送れる書簡中に、彼の妻は反婦人的（アンチフエミニス）類型の婦人であると云うて居る。更にコントの心を痛ましめたるは金に窮せる場合に於ける彼の妻の態度にして、かゝる際には彼の妻は或は潛かにもとの商賣を營み、或は家を出でて自分を捨てたもとの愛人セルクレの下に趣き、潛かに彼と同棲してコントを捨てて置いたと云ふ。殊に後者はコントの心を痛ましめたことは、彼の書簡や遺書によりて察せられる。蓋しセルクレはもと彼の妻たる女を見捨てゝ、淫賣婦の群に投ぜしめた不德漢であるのみならず、又サン・シモン門人中彼の競爭者であつたからである。コントは彼の妻がかゝる不德漢を慕ひ、同女を救ひ上げた自分を、假令一時的にせよ見捨てることは、實に許す可からざる罪惡であると考へたのである。然らば何故に彼は彼の妻を離婚しなかつたのであるか。是れ余輩の解し得ない點であるが、要するに彼は矢張り肉體的神經的に、何處か彼の妻に魅せられ、牽引される處があつたと思はれるのである。右に述べしが如くにして、コントは結婚後間もなく彼の妻に裏切られ、又生活に窮し、家庭の樂しみを全く味ふことが出來なかつたので、夫れは彼の性格の齎らせる自然の結果であるとは云へ、吾人は又天才家の不幸を悲まざるを得ないのである。

却說コントは結婚後間もなく、右に述べしが如き不幸なる家庭境遇に陷り、又大に生活に窮して居たが、しかも彼の實證哲學を建設する爲めに、日夜瞬刻をも惜みて努力し、千八百二十六年四月遂に自宅に於て、實證哲學の講義を開始した。而してコントの招待に應じて參集し、聽講した人々の中に、アレキサンダー、フムボルトや、アラゴやブランヴイルやブールセイや、フーリエ等の、當時有名なる諸大家のあるを見れば、まだ三十歲に達せぬコントの名が、既に如何に學界に知られて居たかが察せられる。但しコントは數年前に公にせる彼の著作「社會改造の爲めに必要なる科學的仕事の考察」によりて、其の學才と識見の非凡なるを認められたのである。併し此の講義は僅かに三回で中止された。是れコントは俄かに發狂したからである。

今此の發狂の原因に就ては色々な說がある。而して其等の諸說は、何れも彼の發狂を誘致するに貢獻したものと思はれるが、しかも其の最とも重要なるものは、彼の家庭的不幸と同講義の準備の爲めに、彼が過度に腦力を使うた事とであると思はれる。尙ほ彼の遺傳質に就ては、彼の家系を詳しく調査した或精神病學者の說によると、毫も精神病的遺傳質は發見されないのである。併し若しさきに述べし如く、コントは彼の法律上の父の實子ではなかつたと云ふ憶說を正しいとすると、右の精神病學者の調査は、何等の意味をも有しないことになるのである。何れにしてもコントは生れつき甚だ神經質な人で、さうして本來神經病的精神病的傾向を有つて居たことは、一般に認められて居ると思ふ。

　コントの發狂は一時不治のものとも考へられたが、幸ひに彼の妻の熱心なる介抱により、精神療法によりて遂に全快したのである。但し此の際の彼の妻の獻身的な行動に就ては、非常に之を賞讃する人々と、之を一種の利己的動機に歸する人々とがあるが、余は此處に其の何れとも決する必要はないと思ふ。而して彼は千八百二十九年に、彼の實證哲學講義を再開し、翌年其の第一卷を公にし、夫れより千八百四十二年に、第六卷を公にして、之を大成したのである。

　千八百二十九年より、千八百四十二年に至る第二期の間には、コントの財政狀態は比較的に良好であつた。此の間に彼は先づコール・ポリテクニクのレペチツール（復習敎師）に任ぜられ、次で入學試驗官に任ぜられ、又ラヴィル學院の敎授に任ぜられ、年收入額は殆んど一萬法に達した。併し彼の妻の行動は此の期間にも、絕えず彼の心を苦ませ、彼は屢々彼の妻と別居したのである。されど此の期間に於て、殊に彼の虛榮心を傷け、彼をして不平滿々たらしめたるは、彼は既に大著作を公にして、其の學才識見の非凡なるを證し、又エコール・ポリテクニクの復習敎師及び入學試驗官として評判宜しく、且つ同大學の敎授に數度缺員が生じ、而して彼が熱心に希望して居るに拘らず、敎授間に於ける彼に對する反感によりて、彼は遂に敎授に推薦されなかつたことである。そこでコントは大に憤慨して、「實證哲學講義」第六卷の緖言中に於て、彼の妻の諫めるに拘らず、同大學を非難し、攻擊した。而して夫れが色々な問題を引き起し、且つ同大學敎授の反感を益々强め、彼は先づ入學試驗官の職を免ぜられ、後又復習敎師の職をも免ぜられた。此くてコントは主要なる收入の途を失なうて再び窮境に陷つた。尙ほ此の事件によりて、彼の妻との關係は益々惡化し、遂に千八百四十二年八月五日、彼は年三千法の扶助料を給與する契約を以て、永久に彼の妻を別居させたのである。併し彼は自己の生活費に加へて、妻の扶助料を支拂ふに適するだけの財源を有しなかつた。そこで彼はジョン・スチユワート・ミルニ訴へて、英國の學者の援助を仰ぐこととなつたが、夫れも一年限りにて止んだから、彼は大に窮して來たのであるが、尙ほ此の頃彼は第一の大著作の

大成に續いて、第二の大著作の爲めに大に心を勞し始めて居たので、再び發狂する恐れさへあつたと傳へられて居る。

却說コントは其の生活境遇、及び其の精神的幷に神經的狀態が、右に述べしが如き有樣にありし時に、クロチルド・ヅ・ヴォー夫人と偶然會合し、之れと親交を結んだのである。されば彼が同夫人に對して熱狂的戀愛に陷つた所以は、之を理解するに困難でないと思はれる。當時彼は實に彼の理想とする婦人の類型とは、正反對な類型に屬する婦人と結婚して、彼が婦人に對して求める眞の愛情、心の純潔なる喜悅を嘗て味はふことが出來ず、多年苦しめ痛められたる後、ついに意を決して永久的に別居したが、しかも獨居の寂しさに堪へかね又彼の多年切望せし地位が、遂に永久彼に與へられないことが、確實になりしのみか、現に與へられて居た次等的な地位さへも奪はれて、收入の途を失なひ、齡は將に五十に達せんとして、生活の安定は保證されず、悲憤し、激昂して神經は益々高まり、更に讀書によりて更新されることなき、同一の觀念のみに頭を煩はし、(但しコントは實證哲學を著はす前から彼の思想の統一的發達を妨害されるを恐れて、小數の古典文學書の外は、決して新著、諸論文は閱讀しなかつたのである、)而して第二の大著作の爲めに、「肉體的出產の苦しみよりも以上の精神的出產の苦しみ」に呻吟しつゝあつたのである。かかる神經的精神的狀態にあるコントにありては、僅かな情熱で彼の頭は狂はすに充分であつたのであるが、然るに彼は彼の多年心潛かに、しかも熱烈に憧憬しつゝありし理想的婦人の幻像を彼れに起させるに足る諸性質を具備せる婦人を、一朝忽然クロチルド・ヅ・ヴォー夫人に於て發見したので、彼自身の告白する如く、同夫人の存在の發見は、實に思ひもよらぬ刺激を彼に與へたのである。されば彼の頭は狂はざるを得なかつた。彼はたゞちに同夫人を熱狂的に戀慕して、しかも心潛かに最とも切望する處のものを與へられず、而して彼の熱情は益々高まるにつれて淨化されつゝ宗教的となり、又性慾的拜物傾向は、眞の拜物教的傾向となつたのである。要するに上に述べしが如き物質的又精神的狀態にありしコントが彼の理想とする婦人を偶然發見して、之れに熱狂的愛情を獻げたが、しかも戀愛の最とも深刻なる肉體的基礎は拒否され而して夫れが爲めに彼の性慾が漸々に昇華されて此處に第三期の思想生活の新原理、卽ち愛の原理が、確立され、其の新方法卽ち主觀的方法が設定され、夫れより彼の人類教、女人崇拜、新呪物教等が發達したので、吾人は殊に彼の女人崇拜を以て、彼のヅ・ヴォー夫人に對する戀愛の昇華、及び性慾的拜物傾向の宗教的純化の產物として、理解することが出來ると考へるのである。尙ほ余は近代人の女人禮讃や崇拜と、性慾の昇華及び拜物的傾向との關係に就て、色々論述したいことがあるが、本論文に於ては特に、コントの女人崇拜に就て右の關係の一般を究明するだけに止める。（完結、大正十一年十一月十二日）

私の求める宗教

人間生活から光を奪ふ

有島武郎

　私は宗教といふものに對しては、何にも考へてゐません。また考へて見ようとも思ひません。世間の人々がいふところの宗教なるものは、それほど私には大事でもなければ、必要でもないのです。その意味で私は宗教をもたないともいはれませう。從つて宗教上の信仰もない譯です。
　それにしましても現代の宗教なるものは、あまりに宗教制度に囚はれ過ぎ、傳道者の態度は、民衆より一歩も二歩もおくれてゐるやうに思はれます。ですから力にはなりません。そこに現代の宗教の缺陷があり、一般に物足らない感じをいだかせるのです。民衆の力であり、光であるべき宗教が、今では却つて新らしい生活に對する迫害となり、妨害となつてゐる有樣です。そして人間の生活の全部を動かす力となる代りに、益々人間の生活を消極的に、陰氣に、小さな型に入れて、それから溢れ出るものを全く度外視してゐます。
　元來、宗教なるものは、その最初は被迫害者の立場に在つたものです。キリストが十字架にかゝつた實例を始めとして、聖書の中にはさうした迫害の實例は澤山あります。然るにそれが次第に勢力を得て來ますと、今度は迫害者の位置に移りました。近世の科學者ジョルダン・ブルノーを燒殺したなどは、その最も殘虐な好い實例です。
　然しブルノーの犧牲がやがてルーテルの宗教改革を促す動機となつたのです。ルーテルによつて、信仰の自由を叫ばれた

新教も、矢張舊教に對して迫害を加へ自由思想家に對して迫害を加へることになりました。そしてその迫害はベエーコン時代から始まり、ヒユーム、ダウヰン、ルソー、ルナンに及び、近代になつてスチルネル、ニエチエー、エマーソンといふ如き大きな思想家は、何れもその迫害の下にありました。殊に是等の人々は、當時の思想的指導者であるだけそれだけ大きな迫害を受けてゐることは、キリストが受けた迫害と大して變りはないでせう。

トーマス●ペーンといふ人がありました。この人はアメリカ獨立のためには大恩人です。アメリカが今日の如く獨立されたのも全くペーンのお蔭だといつてもいゝ位です。このペーンが"apeal to reason"といふパンフレットをあらはして、教會にしばられないで吾人は自由でなければならぬと言つて、教會に反對したゝめこの大恩人が獄に投ぜられ、遂に獄中で死にました。

ロバート●インゲソフといふ牧師の息子がありました。このインゲソフは牧師の息子でありながら、キリスト教に對する非常な反對者でした。そしてキリスト教は悪魔の宗教だと罵りました。そしてキリスト教が説く天國は何處に在るのでもなく家庭に在るのだ、又神の祭壇はストーヴに在りとまで極端に叫びました。かうした極端な反キリスト教者だものですから、インゲソフは世間から相手にされませんでした。

インゲソフに就いてかういふエピソードがあります。汽車中のことでした。朝飯の時、母親がその子供に Our God of heaven といふ言葉を教へて、朝のお禱をさせてゐました。子供は廻らぬ舌で母親の言葉を眞似てゐましたが、どうもうまくいふことが出來ませんでした。そのうちにどうしたのか子供は Our God of you と言ひましたら、先刻から傍に在つてこの容子を眺めてゐた一人の老人が、突然その子を抱上げてキッスした。その老人がインゲソフだつたのです。

このインゲソフはペーンの事を調べて、彼は國賊でもなければ、又妾を畜へてゐるやうな不徳の人間でないといふことを發表しました。そして自分のこの發表に對して、若し間違があると指摘し得る者があれば二千弗の金を拂ふといつたが、誰一人としてペーンに對するインゲソフのこの發表の間違を指摘し得るものがありませんでした。ペーンの如き大恩人も全く罪無くして宗教のために犧牲にされてしまつたのです。

ペーンの犧牲は實に恐しいことです。大恩人をも罪人に陷入れなければならぬのは、全く教會なるものは、あまりにその制度に囚はれてゐたに外ならぬ。一人ペーンの場合ばかりでなく、現代の宗教も更により以上形式のみの制度に囚はれす

きてみます。何處に力がありますか、何處に光がありますか？ 人間の新らしい生活を根柢から動かす力は少しも見られないではないですか。さうした宗教に私達は何を求めようといふのです？ 寧ろ宗教に依らない所に生活の光があり、生きた力があります。ですから私は現代の宗教を否定するのです。

生命藝術としての宗教

賀川豊彦

一

私の宗教？ それは生きることだ！ 拜むことだ！ 創造することだ！ これが私の宗教である。

私は生を肯定する。肯定するのぢや無い、生に突進するのだ。否定するのは生の過去の部分だ！ 私は未來に向つて肯定する權利も否定する權利も持つて居やしない。私は生をして噴出せしめる。私は爭闘が怖しいからとか、罪惡が恐ろしいからと云うて逃け出しはし無い。私はしつかと現在を見詰めてその最善に生きる。その生きることは私の力では無い。私の力だと見えるのは、選擇の限られたる自由だけであつて、その凡ての力は、私を存在に導いた生そのものだ。私はその生に生きる。

私は、宗教と云ふ過去の限られた狹い概念が嫌ひだ。私の宗教は、生命そのものだ！ 恰もそれは、噴火口のやうなものだ。灼熱の焰は幾千萬尺下から噴き出してくるのだ。私の宗教はそれなのだ。「無」を考へても、實在の形の無を考へねばならず、「有」を考へても「價値」――卽ち淘汰による自由の範疇を離れて考へられ無い、その生命の道に私は步むのだ。

生命は、凡てゞある。それは超越（トランセンド）し、內在（インマネート）し、分出（エマネート）し、創造（クリエート）し、進化（エボルユート）する。それは人格として、私の魂に竄みこみ、物質の世界として、空間の世界に表現する。

生命を否定するものは、認識を否定するものだ！ 生命に

生きることが、私の藝術であり、その生命藝術を、私の宗教と云ふのだ。

釋迦は、神を立て無いで、自我の解脱――即ち今の自我が次の狀態に移り得ることを彼の宗教とした。イエスの宗教では、その移り行く力を神に求めた。それはどちらでも善い。生命の道の外に、次の狀態に移り行く道は無いのだ。涅槃に生え上ることを、生命の道と切り離して考へ得られる如く說く人がある。その移り行く心Werden は生命の流れの外にあるものでは無い。亂視にかゝつた魂が、今自己が經驗してゐる變化性の外に、自己が知ら無い――經驗しない變化があると信ずるかも知れぬが、自己が經驗し得ない變化がありとすれば、それは絕對的のものと云ふことは出來ない。絕對の力は、私の衷にも働くものであらねばならぬ。

佛敎で云ふ、大乘の道も結局は生命の道を指して居るにしか外なら無いのだ。生命の流轉、生命の成長、生命の陶汰、生命の創造、生命の價値の上に現れてくる「無」と「有」の魔術が、法華經や華嚴經に出てくる樣な不可思議世界として表現せられて居るまでだ。「無」が慕はしければ、生命の否定的の方面を見るが善い。生命は陶汰の爲めに或者を否定して或者を選び、そして前方に延び上る爲めに過去を無に葬る。現在の兩端は常に「無」の兩極を以つて居て、過去の「無」は記憶として再現し、それは回復出來ない破壞の如く考へられる。未來の「無」は「成長」の無であつて、底の無いものと考へられる。それは再現しようにも捕捉することすら出來ない。「無」は私の小さい魂に取つては價値と變化性の上の實在である。然し價値と變化性は生命の上に乘かつて居るから、無もまた生命のトリックである。否、「無」は生命の心理的表現である。隨つて小乘佛敎や印度敎の敎ふる「無」の世界も、生命の心理的一表現にしか過ぎ無いのだ。

私は「無」を肯定する。然し「無」は肯定された時無としての價値は生命價値の衷に移入されたものとなる。

私は佛敎に價値あるを見る。それが「無」を敎ゆる小乘であつても、生命の表現を說く大乘であつても、それはみな生命藝術の一工夫では無いか！　それは生命が延び上る爲めに邪魔になる爲めに、掃きすてようとした過去の大きな努力では無いか！

Renounciation!　餘計な迷路に這入つた文化の迷路を凡て掃き捨てゝ、眞直な生命の脫出に、眞の實在（生命）を發見せんとした努力では無いか！

然し考へねばならぬ、印度とその人種爭鬪は、あまりに人生の減算的眞理を誇大視せしめたので、生命の上に咲いた迷路の花を掃き捨てる序に、生命そのものまでも引き去つて了

うと努力した爲めにそこに恐ろしい大きな誤謬が起つた。

小乘佛教の教へたマイナスの眞理は、大乘に於てよく加算的眞理に――生命の變轉性の爲めに――突き止めたとしてもその本質に於て、生命の乘加的眞理である人格運動の全部の肯定をなし得ないだけそれだけ減算運動に始まつた損失を持つて居る。

それで我等東洋に住むものは印度及び印度佛教の教ゆるところをよく聽くと共に地球の西半分で經驗せられた最初から人格運動に始まつたキリスト教の云ふところをもよく聞かねばならぬ。

殊にイエスの經驗した人格としての神――卽ち救としての父なる神は再生の經驗であり若返りの工夫である。

フレデリック・ニーチエは『反基督』の中に

『道德も宗教も基督教に於ては現實の如何なる點にも觸れて來ない。それは明白な幻影的原因（「神」「魂」「自我」「聖靈」「自由意志」――或はまた「不自由」である。それは又明かに幻影的結果（「罪」「救濟」「精神的存在」「魂」）幻影的自然科學「擬人的」自然的原因の概念の完全なる缺乏）幻影的心理學「自己誤解、快不快の一般感情の說明例へば宗教道德的の個人的好惡の記號語の助けを借りてなる交感神經の狀態――「後悔」「悔恨」「惡魔の試み」「神のみ前」）幻影的目的觀（「神の國」「最後の審判日」「久遠の生命」：…快感よりも不快感の優勢といふことがかの虛構なる道德と宗教の原因である。かくの如き優勢が頹廢に對する公式である。』

と云うて居る。私はニーチエの非難の凡てを許容する。然し、それはイエスの宗教の全部で無いことはニーチエ自身も許容して居ることである。抽象はイエスの罪では無い。希臘哲學者未來派の附加物である。

ニーチエには信仰と云ふことがわからなかつた。彼は人生藝術に於ける觀照と云ふことを缺いて居た。彼にわかつたことは行爲と云ふことだけである。高揚と云ふことだけである。再生の祕義が彼には全然わからなかつた。彼の道はあまりに一本道過ぎる。彼は蹈み附けられた生命がもう一度延び上り得るものであることを信じ得なかつたのである。彼は價値の顚倒が更に顚倒し得ることを信じ得なかつたのである。ニーチエはキリスト教を墮落したるものゝ中の最も墮落したるものであると云ふ。彼のやうに、墮落したものが生命の途に甦り得ることを信じ得ないものにはどうしてイエスの生命藝術の道がわからう。

イエスの宗教は、ニーチエの云ふ生命に勝つ道を更に強めたものである。卽ちイエスの宗教は勝利の生命が低く落ちた下賤なものゝ中に更に大なる生命を拾つて行かうと云ふ、再屈折の宗教である。

成長と再成長の生命藝術に於てイエスの道は決して恥しいものでは無い。

二

科學は宗教を信じたくないと云うた。然し、それは科學の初期の言葉である。眼だけの科學、耳だけの科學は生命藝術に觸れ無くてもこと足りる。

然し、科學も人間を離れて存在せぬものであり、人間の爲めに、そして人間に由つて組立てられて行く宇宙建築であるからして、それは人間の頭の中に立てられる家とも云ひ得る。頭の中に建てられる宇宙建築は生命藝術の優秀なるものでは無いか！　究竟に於て科學は優れたる生命藝術である。それは生命の眞理としてまた藝術としての宗教と別個の道を歩むものでは無い。

宗教は科學によつて淨化し、藝術化し、聖化して行くことを知らねばならぬ。科學もまた宗教によつて人間的眞理を忘れないで居ることが出來るのである。

過去に於て、或宗教と或科學が衝突した。それは譬話に於て耳と眼が喧嘩したことによく似て居る。科學と宗教は別個のものでは無い。それは共に生命の內容を形造るものである。

科學は生命の外に宇宙の組立てを研究し、宗教は生命の衷に生命藝術を研究して、如何に生かされたる實在が成長すべきかを研究するものである。

三

今まだ宗教は藝術ほどに、近代生活に地位を得て居らない。科學の進んだわりに、藝術が進まなかつた如く、對物藝術が進んだわりに生命藝術は進んで居らない。

然し、科學が完備し對物藝術が不足なく具備した時に或はその不足が感ぜられた時に生命の缺乏が用ひ到されるであらう。そして生命の衷に凡ての人間生活が表現とし藝術として刻まれるであらう。

宗教はこれからである。生命藝術はこれから進歩するのである。

今迄の凡ての宗教運動は凡て序論である。宇宙の組立てを工夫して居る科學を併合して、生命藝術は更に力強い再生の宗教を確立するであらう。私等はその日の爲めに強く生きねばならぬ。

我宗教

新居格

しばらく我々の當面の關心事である社會組織の問題から離れて考へてみる。

無窮無限の觀念があり得る。而して我々が有限でありしかも非常に力弱いものであることが當然考へられる。ナポレオンが埃及を征伐に行く途中、地中海を横ぎつた時空の星を指さして無窮を思ふたと云ふ話があつたやうに思ふが、相當強いことを云ひえても、どうかすると隨分弱くもなり意氣地がなくなる人間がその心の何處かに「超人力（スーパアクラフト）」を感ずるものがある。

その點を考へると人間は過去と現代とに於いて宗教を持つ如くいつまでも宗教と云つた風のものを持つであらう。

神があるかないかの問題は別とする。有神論者に信仰がありとすれば無神論者だつて一種の信仰はあると云へる。信仰の肯定も否定も信仰の形相であらう。虚無思想と雖虚無であると觀ずる信仰であるとわたしは思ふ。

既成宗教が宗教の一切ではない。信ずる意思と信ずる情熱とがある限り唯物史觀の原理も信仰であり宗教の形になる。宗門の信徒の狂信的態度と革命家の革命的傾投と心理に於いて差はないと思ふ。テロリストの熱情、サンヂカリストの哲學、それらを信ずるものに取つて至上命令であるべきだ。

宗教が神乃至佛の觀念と聯合してのみ存在しうるともわたしは考へない。既成觀念からする宗教の破綻は宗教的實在の否定ではない。

佛蘭西革命の歴史をよむとロベスピールやダントンは既成宗教は認めなかつたが理性の神をこしらへた。ユートピアなぞもウトピストに取つては地上に描かく社會的樂園として宗教味がある。サンヂカリストの創造的革命は熱烈なる革命宗教と云へる。頗る廣汎な自由解釋であるかも知れないがさう云つた意味でならわたしは宗教の普遍性を認めたいのである

マルクスは宗教を阿片の如く人の心を麻醉させるものと考へたけれども彼の意味する氣やすめ宗教は所謂既成宗教であつて資本主義組織下に於けるブルジョアの宗教を指示して云

つたのに違ひないと思ふ。ブハリンなぞが宗教と第四階級の關係を論じて攻撃した宗教もブルジョアに歸屬しブルジョアのためにのみ役立つ宗教を概念したのであらう。少くとも、こ社會組織の問題が當面焦眉の關心事である限り特に階級鬪爭と暴力肯定を痛感するとき因緣因果の諦らめと無抵抗主義と愛とを唯一の信條とする宗教は邪魔になつても革命の手助けにはならないとして排斥するに違ひない。

大體に於てマルクス主義を地上に樹立した勞農ロシアでもマルクス同樣宗教を目して民衆にたいする阿片のやうに考へたのも無理ではなかつた。

しかし、後には宗教の全的否定が出來かねて基督の教理とマルクス說とを結婚させたかの觀ある赤色敎會を企てたと云ふ事である。

冷嚴苟くもしない唯物史觀的現實主義も宗教を全然無視する事が出來なかつたのは傳統的因襲のあまりに强かつたためか、それとも人間の持つ宗教的性情を承認したのであるか換言すれば政策としてか人間心理としてであるか疑問だが何れにしても勞農政府が宗教と握手した譯であらう。

それはさて措き、近代人の心は複雜多樣である。科學に徹して（科學を宗教に代へて）宗教を輕視する傾向もある。無論科學と雖萬能ではなく科學の力盡き依然として神祕と驚異とが殘される事を感じても宗教よりも科學に傾投する心がある。近代人には一切の權威を否定しようとする傾向が强い。誇大妄想狂の如く決して（自己の幻影を）信じないと共に他も信じない傾向である。平つたく云へば自己も詰らない存在だが他の人間だつて、神だつて、宗教だつて、この外、人を信ずるものを信じえない、と云ふものの暗鬱な疑惑をするのでもない、飄泊性を帶びた虛無的刹那主義の氣持がある。信仰上の浮浪人である。神又は宗教は信じないけれども、主義を、藝術を、生活を强く信じ堅く把持して所謂宗教以外、神以外の自己又は自己の屬性に熱烈なる傾倒をする心がある。それは或は近代人に限らない特質であるかも知れない。しかし近代人に於いて較著になり、且つ多岐錯綜してゐるらしく思はれる。

宗教の第一條件は信仰であり、信仰は單純である事を便利とする。近代人の心はそれには適合しない狀態に居る。

以上を前書きとして我が求める宗教を考へてみる。自分は數年前のクリスマスの日洗禮を受けた。であるから自分は基

督教徒の一人であらねばならぬ。洗禮をうけたのは斷じて一時の氣紛れではなかつた。何時だつて自分の心持の片隅には基督教の事を考へるある感情はある。體質か心性的傾向か冷冷する夕風が身體をふるはせるやうに寂寞の感に襲はれ勝ちである。それはセンチメンタルではない。虚心にして又理由なくしてさうである。さうした心持が聖書と教會とに自分を追ひ遣つた。靜かな心持、和らいだ感情、敬虔にして謙虚な心の狀態はたしかに望んだ所のものであつた。安息日の意味禮拜をすまして教會を出て正午近くの街を(特に晴れた日など)あるいて歸る清々しいほど爽やかな氣持は快いものであつた。しかし生活狀態の不如意(日曜の獻金さへ出來ないやうな)は教會の財政を長老達から報告されて獻金を怠らぬやうに注意される時、教會と無産階級の關係を考へ出した。

植村正久氏にたいする心からの尊敬と聖書の價値にたいする考量には變りがないにもかゝはらず教會から自づと遠ざかつた。

本當に人類愛の氣持と正義感が强烈であれば今のやうな社會組織の不合理の場合心の平和を喜ぶよりも地に平和をもたらす事の代りに劍をもたらす叫びがより强かるべきではないだらうか。教會(少くとも、現在の教會のあるがまゝのやうに赤色教會乃至無産階級教會のない限り)はゆとりのある中産階級、知識階級、の教會であるやうに思はれるのである。

現實のいたましい社會組織の問題を、この根本的考察を體驗的にしないで(書物の上ではするかも知らぬが)矢張り、自分、家族の幸福、平和の精神的要素とし冬のストーブ、眠れぬ夜の眠り藥同樣に聖書と宗教とを取扱つてゐるのではないかと疑はれる節々の信者にある事である。

基督教を捨てたと記憶する有島氏が土地拋棄をしても教會所屬の金持(例へば死んだ森村氏の如きでも)は天國に這入るには駱駝以上にむつかしいと思ふよりも、より多く地上の生活に執着したらしく信仰のために財の思切りのいゝ拋棄はしないし、又その資本主義は捨てやうとはしない。

安息日のある知識階級の教會であつて日曜であらうが街頭に、船着場に、工場に、鑛山に、田舍の田圃に働かねばならぬ人々の教會では教會は未だない。

自分の求める宗教は概念的だが――無産階級教會の持つ宗教である。むしろ、それ以前に社會の不合理に抵抗して突進する既成宗教以外の創造的〇〇の宗教で今のうちはあるより外はないと信ずる。(完)

宗教は婦人の敵

山川菊榮

一

宗教とは何か。有名な社會學者レスター・ウォードは此問題に就てかう云つてゐる。

「若し世界中の宗教大會を開き、總ての宗教は各一人づつの代表者を出すことにして、一つ〳〵の宗教について、この宗教は眞正の宗教か、この宗教は人類を益するものかどうかといふ問題について採決したならば、その結果は各々僅かに一票の投票しか得ないに相違ない。そしてその一票を投ずる者は、其時附議せられた特定の宗教の代表者に極つてゐる。もし諸宗教を保護すべきか廢滅さすべきかに關する此大會の意見が決定的なものだとすれば、世界中の總ての宗教は絕對大多數によつて否決され、廢滅されるであらう。然もこれを爲る者は、吾れ人共に許す正眞正銘の宗教家許りなのである。」

全く此皮肉な言葉に現れてゐるやうに、總ての宗教信者は、自己の信ずる宗教に熱心であればあるほど、他の宗教を異端邪教し、迷信とする傾向が強く、どれが眞正の宗教などいふことに就て、總ての宗教の一致した見解といふものは到底求めることが出來ないのである。例へば未開人種の中に行はれてゐる拜物教の如きは、佛教徒やキリスト教徒に云はせれば、單なる迷信であつて宗教ではないといふことになる。けれども社會學者の見地から見れば、拜物教たると、多神教たると一神教たるとを問はず、すべて「靈的な存在の實在することを承認する」思想は宗教であるといふことになつてゐる。此意味に於ける宗教は古來いかなる野蠻民族の間にも存在したので、文明の程度が幼稚なれば幼稚な程、威力を振ひ弊害を逞しうしたものである。

二

未開時代の人間がその幼稚な理智の力で宇宙の謎を解かうとした努力が宗教の起原であることは、動かぬ事實である。日月星辰の運動、雷電、風雨、地震等の如き自然現象を始め、反響や、水に映る陰影や、病氣や、死は、今日の幼兒と同じ程度の理智をもつ野蠻人には不可解の謎であつた。そして彼等はたゞ吾等の現象に驚き恐れ、その怒りを宥め、その加護を得るために祭事や贄を行ひ、時には極めて殘虐な、不自然な方法をさへ採ることを憚らなかつた。森羅萬象の背後に一個若くは數個乃至無數の靈的存在があつて、それが意のままに此世界を操縦してゐるといふ考へ方は、近代人の眼には愚劣千萬な迷信としか映じないが、然し、自然現象の裡に潜む或必然の力を探究し、其力を人間の意思によつて、人間に有利なやうに驅使しようとしたその起原に於ては、科學と同一泉源に發してゐるのである。隨つて科學と宗教とは最初から全々別ものではなく、所謂宗教は野蠻人の科學であり、吾々の所謂科學は、近代人の宗教であるにすぎない。いづれも宇宙や社會の現象に對する種類の異なる解釋であり説明である。そして此二つのうち孰れを採るかは、その人々の知識なり智的訓練なりによつて定まるのである。卽ち野蠻人の知識、野蠻人の智的訓練より以上に出で得ぬ者は、自然及び社會現象に對する野蠻人の解釋、卽ち宗教に歸し、近代人の知識をもつものは、科學を採るのである。

近頃科學はもはや行き詰まつたから神に歸らねばならぬとか、宗教に戻らねば救はれぬとかいふやうなことをいふ人々もあるらしい。然し近代科學は、生後僅かに二世紀内外——否それよりも若いものが多いのである。數千年を經てゐる宗教を老人だとすれば、科學は僅かに呱々の聲を舉げたばかりの赤兒である。然も近代科學は、宗教の地盤を顚覆するといふ恐怖のために、宗教家、道學者は元より時の政府や權力者からありとあらゆる迫害を受けて、それと戰つて來なければならなかつた。今日に於てすらも、科學の或部門、例へば經濟學其他の社會科學の如きは、現存の制度を脅かすといふ理由の下に、あらゆる妨害を受け、あらゆる困難と戰はねばならぬ。此迫害と此困難の間に、然も近く一二百年の短時日の間に、科學の仕遂げた偉大な功績を思へば、今後一層自由な、一層有利な環境の下に、今日では豫想し得ぬほどの大きな成果を齎らし得ることは容易に信ぜられる。科學は宗教のやうに固定した觀念に執着しない。科學は人間の思想の絶えざる流轉と進化を認める。進步はその生命である。科學は、宗教と對立する、宇宙の原則の研究方法である。宗教は神若くは靈的

存在といふ絶對不變の、隨つて進歩とか進化とかを望み得ぬ永遠の原則を樹立してしまつたが、科學は常に相對的な或假定をもうけてその下に探究を行ふのであつて、より新しい、より確實な眞理の發見に對して、いつでもその席を與へることを拒まぬ程に謙抑である。キリスト教徒が科學者を焚殺したやうな記錄を、新舊科學者の論爭の歷史に求めることは不可能である。吾々は今日の科學が、原始時代のそれに比して遙かに完全な徹底したものであることを認めると同時に、今日の科學の進歩が、なほ絶對完全の域を去ること遠く、今日の科學の力では說明のつかぬ多くの事實もなほ此世に存在してゐることは認めなければならぬ。けれどもそれと同時に、吾々は、科學は未だその搖籃時代にあるもので、今日の科學の解き得ぬ謎は、明日の科學が解くであらうことを忘れてはならない。科學は人間の理智の發達に伴ふて、永久に進歩發達するものである。「科學の行詰り」を說く者は、幼兒の智力を尺度として、人間の智力全體を測定し、その發達の可能性を否定するものに外ならぬ。近代の科學が不完全であるから、一層幼稚な科學、野蠻人の科學たる宗教へ逆戻りせよとは、甚しいパラドックスである。

三

古來、宗教が人類を毒し、その進歩を阻害して來た事實は算ふるに遑がない。根柢に於て保守的であり、反動的であり、迷信を構成的要素とする宗教は、常に人生の變化と進歩とに敵對し、神の名により、眞理の名によつてどれほど多くの人間の貴重な生命を犧牲にして來たか分らない。そしてこの宗教の保守的な性質と超人間的存在に對する信念とは、支配階級の利益と一致し、隨つて政權と教權とは、常に相利用し、相支持して來たので、宗教は、科學に依て其迷妄を根本的に打破せられた今日なほ、餘喘を保つてゐるのである。

支配階級は掠奪や征服によつて得たその地位を神聖化するために、神の力を借りた。支配階級は單に武力により金力によつて民衆を物質上で支配することに甘んぜず、進んで宗教の力によつてその理智を眠らせ、自覺を妨げて、以て自己の地位の安全を期しようとした。かくて地上の主權者は、或は前世の功德により、或は神の恩寵によつてその特權的地位に在るもので、隨つて其地位は神聖不可侵のものであり、是に對する反逆は神そのものに對する冒瀆であり反逆でありとせられた。主權者の背後には常に神が控へてゐる。主權者は神の愛子である。この思想は無智な民衆をして、あらゆる暴虐な專制に畏服させる無二の睡眠藥であり、阿片であつた。多くの君主が其國に於ける最高の僧侶又は神官を兼ね、僧侶又は

神官は常に時の權力に阿附迎合して其地位を固める事實は、兩者の密接な利害關係をよく語つてゐる。佛教もキリスト教も、權力階級と妥協苟合し、何千年の間、相頼り、相扶けなかつたならば、今日の勢力をかち得た筈はないのである。現に其等が今日、慈悲や博愛に何等の興味もない官憲によつて所謂『思想善導』の道具に使はれてまで居ることは、それらの實質が支配階級にとつていかに有利な、安全なものであるかを示して餘りがある。

四

世にはまた、既成宗教の形式は惡い、然しその根柢を流れる博愛仁慈の思想に至つては、大に尊重すべく、これあつて始めて人類は救はれるといふ説をなす者がある。けれども單なる環の高唱、單なる慈悲の宣傳はそれの普遍的な實行を可能にする環境の實現と伴はれぬ限り、到底空想に終るの外ない。狼と小羊の間に無我の愛を説き、資本家と勞働者の間に孰れも全てが神の子であり、此對立は神のみ旨なるが故に自然であり、神聖であると説くならば、狼は喜び、資本家は悦に入るであらうが、小羊や勞働者は、さういふ愛は御免を蒙り、さういふ神は認めないに相違ない。今日プロレタリアが社會の現狀維持に終始する愛の福音や神の教へに手を藉さないのは餘りに當然な話である。勿論人類が憎惡と怨恨のかはりに、愛と協同的精神を以て共存することは、誰れも望ましいことであるが、利害相反し、隨つて必然に感情の乖離するほかはない征服階級と被征服階級との對立する限り、それは出來ない相談である。若し社會全體が一家族の如くに睦み合ふ世の中が來たならば——さいふ社會的、經濟的條件が實現されたならば——愛を説く者は無くとも愛は世界に充ち溢れ、隨つて故らに愛を高唱する必要は無くなるに相違ない。今の世の中で、聲を涸し愛を説く者は、恰も陸上にゐる者に向つて歩む代りに泳ぐことを強ひるようなものである。中には小さな池や水溜まりの中に自分一人、もしくは數名の家族や其中に住んで泳ぎの眞似事をして、自分だけが神聖な神の子、愛の實行者で、他の陸を歩むものは全て罪の子、惡魔の使ひとして嘲り憎む者がある。かの偏狹な人道主義者、逃避的な理想生活者の立場はこれである。

要するに宗教は、未開人の智力に相應した自然現象の説明として起り、支配階級との妥協苟合によつて今日まで其勢力を伸張して來たので、プロレタリア及び全人類の進歩と利益とに反した、最も根強い保守的反動の思想の體現である。特に婦人の立場から見れば、或は女子を不淨とし、或は罪の子として常にその人格と人權とを否認するにあづかつて力のあ

つた、最も憎むべき敵の一である。婦人とプロレタリアの味方は未來を支配する科學であつて、過去を支持する宗教ではないのである。過去の支持者たり、支配階級の思想的武器たる宗教の信仰から解放されることは、婦人がその精神的獨立を全うする上に、極めて重要なことである。吾々は神の國に行く代りに、地上に天國を築かねばならぬ。吾々は見えざる神、否な未だ曾て人間の想像以外に生存したことのない神に人間の利益を捧げる代りに、地上に於ける總ての人間に神のやうな正しき、神のやうな愛の生活を經驗し得る社會を創らねばならぬのである。

一工人としての生活の中に

岸田劉生

宗教に關しては、いろ／＼考へてはゐるが、まだ十分にその考へがまとまらずにゐる、他日私の宗教觀を考へてみたいと思ひつゝ時を得ない。

私は、日常生活に於ては一種の宗教を持つてゐるが、それは思想的なものと云へない。私は仕事の上自己を生かして行けばまあ安心立命が得られるので、そしてそれ以外に今私に本當に「生死」の事を超える道はないのだが、そんな譯で、思想としての宗教の方の事には實際上の交渉がない。

セザンヌは日曜日には、チャン／＼と教會へ行き、信心をして歸りには乞食にほどこしをして歸つて來たと。面白い事に思ふ。私の心境もそれに似たところがある。

私は時々以前の基督教會の信者にもう一度なつてやらうかなどと思ふ事がある。それは、信心といふ事はやはり、きめて、チャン／＼やつておくと氣持がよいものだからである。しかし思想がそれをさまたげて未だにそれはしない。それに日本のヤソ教會といふものは、あまり趣味のよくないも

のだから

私はもう宗教の思想上の方面には、左程御厄介にならずともすむだけのものにはなつてゐるつもりである。私の思想なり、仕事なり生活なりには或る宗教も含まれてゐる。

だから、思想としての宗教は、今の私にとつて、社會問題と同じ様に左程の近い問題とはならない。しかし、社會問題にくらべては宗教問題は、より一層、根本的な深い問題だから、時々は考へる。否、可成り考へる時である。しかし、さし迫つて解決を急がないので、そのまゝになつてゐる。しかし思想としての宗教はいつかもつと考へてみたいと思つてゐる。その點自分でなくては考へられぬものもあらうと私かに思つてもゐる。

私の、仕事によつて得る安心立命とは何かと云へば、私にとつて、死は此上なく淋しく恐ろしいが、しかし、結局、他の何によつても、救はれないが、只仕事をさへして行けば、そしてその仕事に或る點の自負と滿足を得てさへゐれば、それより外には私は、生も死も肯定する事は出來ない。

いゝ仕事をさへ生めれば「死」が恐ろしくないと迄は行かないのである。そんな事はとても駄目だが、只、いゝ仕事が出來てさへゐれば、「「死」はどうにも仕方のない事だと」云ふ諦らめがつくといふのである。

何にしても私は、深い美を見、深い美を表現した時の喜び、は一寸小さい自己以上の感じを味ふ。より深い美、より深い美と、一人だまつて、仕事を積んで行く事、これが、まあ私の「生」への肯定「死」への諦めの唯一の道である。

私はかうして、私の仕事の中にやうやく安心立命を求めてゐる。他の事ではどうしても、それは得られないのである。

私はさういふ意味で、自分を平畫工だと思つてゐる。この小さい一個の工人は、只默つて、仕事を積んで行きたいのである。私の誇りはこの自分を本當の工人と思へる時に生じる。

かくて私は生活に於ては、さういふ仕事の出來る樣な生活樣式をとるのが一番、自分の生き方として合理的だと思つてゐるさういふ點、私は宗教家でも、社會運動者でも、ない私は只の工人以外の自己を小さい善人として生きて行けばいゝと思つてゐる。

愛するものに親切で、人々に愛してゆるやかな愛を持ち、乞食、貧者にあはれみを、病者の平復を祈り、不幸や戰爭のない樣に祈りして生きて行かうと思ふ、それ以上に良心をつつくのは私としては不自然である。

或る人にはかく云ふ私を、本當の愛のないものと云ふかもしれない、しかし、心にたゞへる愛とは要するに愛である。

愛は慈愛である。さういふ點なら私は他人にまけるとも思はぬ、特別に慈悲の深いものだとも云へないが、

要するに、私は畫工である。

（一九二二、一二、一五）

歌と宗教

若山牧水

私は宗教といふものを持たない。また、それを知らない。知るべき機會にまだ遭遇しないでゐるのである。

既成宗教に對する概念も極めて漠たるもので、寧ろ古いお寺とかお宮とか佛像とか、または昔の多くの殉教者たちの傳說などに親しみを感じてゐる位ゐのもので、全く宗教といふことに就いて云々する資格はないのである。

然し斯ういふ心持は或はその宗教といふものに通じてゐるのではあるまいかといふことを折々考へる事がある。それは「歌」に對する私の心情である。

歌に對する私の考へを極く簡單に云ふと、歌は自分を知りたいために詠むもの、守り育てたいために詠むもの、慰め樂しませ勵ますために詠むものと私は思つてて居る。

自分の生れて來てゐること、生きて行かうとしてゐること等に氣のついてゐる人は餘り多くあるまい樣におもはれる。多くはたゞ其處に置かれてあるとだけにぼんやりと生きてゐるので、オヤ〳〵これが自分か、これが眞實の自分かと自分の姿に對して眼を見張る人すらも少ない樣に思はれてならない。

それに反して歌を求むる心のうちには多少とも確かに自分自身といふものに氣づいてゐる心が動いてゐるのを感ずる。また、何か知ら自分の思つてゐることを云ひ現はしてみたいといふ心の下には必ずその「自分」といふものが動いてゐねばならぬ筈である。

斯くして漸く自分といふものゝあるのを知る。さうして其

處に見出でた唯一無二の自分といふものに對して次第に親しみを感じ始めるのはこれは自然である。親しみを感ずると共にその自分を一層濁りのないものに、美しいものに、深い大きいものに進めてゆきたい心の起るのもまた自然であるといはねばならぬ。

一首々々と拙い歌を作り重ねて行きつゝあることは、要するにこの自分といふものをもつとよく知らう、もつとよくしやうといふねがひから出てゐる様に私には思はるゝのである。斯ういふ風に云つて來るといかにも概念的に理解つぽく聞えるのを思ふが實は無自覺ながらに自づとさういふ傾向をとつて來てゐる様に思はれてならないのである。

私の曾つて詠んだ一首に、

　わがこゝろ澄みゆく時に詠む歌か詠みゆくほどに澄めるこゝろか

といふのがある。

まつたく歌に詠み入つてゐる瞬間は、普通の信者たちが神佛の前に合掌禮拜してゐる時と同じな、或はそれより以上であらうと思ふ法悦を感じてゐるのである。

おそらく私はこの歌の道を自分の信仰として一生進んでゆくであらうとおもふ。さうしていま自分の前に横たはつて居る歌の道はいよ〳〵靜かにいよ〳〵寂しく、そしていよ〳〵杳かに續いてゐるのを感ずるのである。

惠心を想ふ

神近市子

高僧の傳記と云ふものは、例へばそれが自分達の生活に直接に迫つて來る何物かを缺いてゐる場合であつても、よんで見て心をうつ何かを持つてゐるものである。それは、彼等の生活には大抵いつもはげしい意欲の制御と忍苦との無形な鬪爭が伴つてゐるからである。理想を目ざして邁進しようとした、肉體の苦患と煩悩とが盛られてゐるからである。

多くの名僧とか高僧とか云はれる人の生涯のうちで、私に特に深い印象を與へてゐる人々が三人ある。常陸稻田に暮し

て居られた頃の親鸞上人、吉水に念佛の大法を宣揚された法然上人、橫河の楞嚴院に世をのがれて生涯を送られた惠心僧都、この三人の生活である。

そのうちで、親鸞上人こそ一番氣の毒である。現在の本願寺はもとより親鸞自身の建てたものでなく、彼の末女の造營になるものと云ふことであるが、今日の腐敗と墮落とは親鸞を大にするやうでその實親鸞をけがしてゐるものである。彼の生涯は全く凡庸な平民の間で送られ、老後京都に歸つてからなど殆ど陋屋で生活したと云はれてゐるが、その事を知つてゐてさへ今日の本願寺の狀態を見ると、親鸞上人を何となく疎ましく感ずるのである。

法然上人に至つてはそれがいくらかよくなつて來る。これはその宗派が法然の是認があつたのに拘らず僧侶の妻帶肉食を許さないので、從つて法然の一門が宗權をとつて勢を振ふと云ふやうなことがない結果である。然し法然には、何となく親しみにくいところがある。追從者には文珠の生れかはりと云はれたと云ふ程に、その博學と識見とは深く廣がつたのである。それでゐて上は關白太政大臣の九條何某の一門から下は耳四郎の素賊の輩に至る迄一味の溫情をもつて包容してゐたものである。その偉大さは一寸私共には計ることが出來ない。が、それと同時に何となくどこかそこに如才ない上手なところがあつたやうで、それが私に幾分上人を親しみ難く感じさせるところである。

そこに行くと、何と云つても名利に緣遠かつた惠心僧都の生活はなつかしい。この人のことを考へると、凡ての理窟をヌキにしてだまつて頭を下げたいやうな氣持になつて來る。その論議眞率な心情と、恬淡無慾な生活とが私をそんなに考へさせてくれる。

惠心は僅か九歳で止み難い道念と母の熱心な追慫に促されて比叡山に登つた人である。年少穎悟であつた爲め神童の評判高く、十五歳の時には既に師に推されて時の宮廷に經典を講ずるほどに學が進んだ。彼が最初進講したのは別譯の阿彌陀經であつたが、御感に預つて僧都の官職を賜はつた。十五歳の少年で僧都の官職を賜はることは、その當時にあつても異數のことであつた。人々は彼の榮達を祝賀した。僧正、碩學の榮職は行末長い彼の生涯に彼を待つてゐるだらうと云ひ合つた。けれど彼の靜かな心は、彼の榮達の爲めに彼の佛道の蹉跌を悲しんでゐる母の苦言に耳を傾けた。彼は賢い母の忠告を道理あることに考へた。そして一度捨てたと思つた浮世を再び比叡の山坊に見ることに驚いた。

彼は再び名利をのがれる必要があることを考へた。彼が入つたのは比叡山より更に數里の山奥にある橫河と云ふ里の楞

殿院であつた。

　横河の奥の惠心僧都の生活のことを考へる時に、私は世に最も美しく貴いものに出逢つたやうな氣持がする。彼が理想の近づき難く、生身の成すなきを感じて煩悶し、大藏經を五度讀返したと云ふのも恐くはこゝである。彼が一整の草根、一椀の飯に僅かに飢を凌ぎ乍ら遠路を訪ね來る後進に路を教へて丁寧深切を極めたと云ふのもこゝである。榮華と名利との都會京都を眼下に睥睨し、只管に淨土の平安と愉樂を願ふ可教へた彼の理想こそは、實に高く且つ淸きものであつた。

　廢寺にひとしいこの楞嚴院で、惠心は恐らく死ぬ迄暮したやうである。勿論こゝに籠り切りにゐたと云ふのではなく、化他の念願が燃えさかる時には、日本國中どことなく道を教へて說き廻つたものらしい。傳說では日本國中足跡のないところはないと云はれてゐる。

　この廻國化他の旅に出て、惠心のその足跡と共に殘して置いたものがある。それは彼が感興にまかせて彼が祈願する佛土の莊嚴を描いたその繪である。不幸にして私は彼の描いたものをまだ一度も見る機緣に出會しないでゐるが、傳ふ所によれ其の作は可なりに多く諸國の寺院、特に彼が屢々步き廻つた京畿の地方と北陸の寺院には多いと云ふことである。

僧侶であつて畫を描いた人は少くない。然し惠心のやうに見事な畫を描いた人は又少ないさうである。彼が只管に祈念する彌陀の佛土を畫いたものは、餘程立派なものであつたらしい。彼が一佛の慈光の下に草も木も人も禽獸もよろこび樂しむ世界を祈念し乍らその生活を寫し出さうと試みた態度には、近代の社會主義者が未來の幸福な新社會を夢み乍ら萬民共樂の生活を描寫して見せてゐるのを照合してその不思議な一致が私を驚かすところがある。

　こゝに列記した三人の高僧は、何れも彌陀の淨土を祈念することを教へた人々である。所謂念佛門の唱導者達である。

　三四年前、私は「彌陀の淨土と彌勒の淨土と」題して一の感想を書いたことがあつた。ところがその原稿がある雜誌社で紛失して、手を盡して手に入れることが出來なくなつた。原稿が失はれらと感興が中斷して、再び同じものを書くことが出來なかつた。

　その感想で私が云つてゐたことの一はかうであつた。こゝに二つの淨土がある。彌陀の淨土と彌勒の淨土がそれである。先づ第一の彌陀の淨土は、只今現在する淨土であつて、第二の彌勒の淨土とは全然別物であることが先づ最初に私共の頭を打つ。彌陀の淨土は現存西方十萬億土の果にあつて、その遠いことは無限であるが、然し彌陀と我等との特殊の關係によつて我等の間の近いことも亦不可思議である。

彌陀の淨土が現在するのに反して彌勒の淨土は未來にある。遠い、私共の想像も及ばぬ未來にある。親鸞はその和讚の中では五十七億八千萬年とか云はれたが、それは只だ無限に長い月日のことを數をもつて現はしたものであるのに過ぎない。ともかくもそれは無限に遠い未來にある。彌勒は恐らく現在はまだその淨土の建設の爲めに準備してゐる因位の菩薩であるのに過ぎない。が、その淨土が出來上つた時の光景はどうであらう? 彌勒は、他の世界でなくこの地球に佛土を建てる菩薩である。淨土の莊嚴は多くの經典にくり返されてゐる通りである。凡ゆる美、凡ゆる愉樂、凡ゆる幸福が充ち溢れてゐると云つたなら、一番簡單にその一般が云ひ表はされようか。その中で私共にとつて一番重要な一番興味をよび起される屬性は萬民の共樂と國土の和樂とである。生命の高翹と罪惡の免除である。この世界が——この不幸と不公平と不正とが横行してゐる世界が、彌勒の世には莊嚴極りない佛土となると云ふのが彌勒淨土の觀念である。

　この對立する二つの淨土——阿彌陀の淨土と彌勒の淨土との間をつないでゐる關係に一度思ひを凝らした時に、私は荒唐無稽の怪話に聞かれた所謂淨土の思想が、實には私共目前の事實を偶した高い眞理であつたことを發見して驚いたものであつた。

　阿彌陀の淨土を說いた經典を披いて見ると、この淨土の屬性とこの淨土に往生する者の義務とが實にくはしく說かれてある。往生とはその佛土に往きて生るゝと云ふ意である。極樂淨土は私共が願ふ時に何時でも一念の祈念によつて往きて生れることの出來る淨土である。その淨土は前にも云つた通り最善最上の國土であるが、そこに往生した者も、決して長くその淨土を享樂することは許されない。それは化他は——他人を自分とひとしく救濟することは、そこに往生する者の目的の一であるのに、救はれない衆生はまだ實に多く殘つてゐるからである。極樂の往生人は、所謂化他の菩薩となつて、無限度にこの娑婆に生れ出て來なくてはならぬ。

　私は再び云ふ。それは無限度にである。何故と云へば佛教で所謂衆生と云ふのは、人間丈けでなく又禽獸鳥魚等丈けでなく、その中には草木國土さへ含まれるからである。計量できない無數の衆生を最後の一人迄救ふには、計量できない無數度生れて出でなくてはならない。恐らく無數不可計の未來に出現すると云ふ彌勒佛の時までも。かう考へて來た時に、最初私の前に個々に現はれてゐた二つの佛土が、實には一つものであると云ふことがハッキリと分つて來た。二つの佛土をつなぐことの出來た私は、更に佛典の中に無數に散在する多くの佛土も亦只だ一つであると云ふことを學ぶには長くは

かゝらなかつた。
過去と現在と未來とを怪しく區別し、その中に悶々として焦るのは私共のはかない意想である。三つの時の間に立てられた扉を排し、その奥に連なる時空の無限を發見する時に、私共は私共にとつては現在の外に何物もないと云ふことを考へさせられる。過去は私共を迷はせ、未來は私共を欺かうとする。然し現在はあるが儘に私共の前にある。この現在をこそ私共は支配し得るのである。

一佛土現存の信仰は、私に多くの物の考へ方を教へてくれた。それによつて私は未來の高い理想を説いて現在の自己の低さを忘れてゐることの虚妄であること、凡ての表現はそれに盛られる意志精神の價値によつて、その價値の定まるものであること、最高の理想は實に今私共の前に私共の手の届くところにあること、その理想によつて高められた感情による行爲丈けが、人生の進歩と向上とに投資するものであること、これらの多くのことを私は學んだ。

人間の立場から

村山勇三

（一）

人々よ、食ひ飲み戀ひ嫁ぎ産み老い、そして死ぬ、死んでの後は永久不易の休みが在る。たゞこれだけを敎へられてゐた人間社會は如何に幸福であつたらうか。

彼等は智慧と力のある限りを盡して洋の東西から珍味佳肴をかり集め、ボルドウのシャンペン、スコットランドのウィスキー、（灘の銘酒）ミュンヘンのビール、正宗、サイダー、そんな物を食卓に並べ立て、醉うては美人の膝に枕し、戀しては義理人情を超越し、と云つた風に兎も角も意の赴き情の動くがまゝに最大限の歡樂を盡し、遂に老い、遂に死ぬる、さうすると親族知己が相集まつてその身分相應に若くは不相應にあと弔ひをして亡き骸を永久の休み場に委託してしまふ

かうして無數の年代を通じて無數の個人は平穏無事に何の懐疑もなく何の執着もなく自動階段(エスカレーター)のやうにつぎ〳〵と願送りに行つてしまふわけであつた。

然るに此樣な人間社會に對して一つの不幸が見舞つて來た舊約聖書の「傳道者」は「神は人の心に永遠をおもふの思念を賦へ給へり」と言ひ出した。イエスといふ一猶太人は「人はパンのみにて生くるを得ず」と敎へた。釋迦は「無間地獄」を説いた。パスカルは『人間は人間の無限の上にあるものを代表す」と云ひ、ゲーテは『久遠の女性來りて人々を高く引き上ぐ」と歌つた。

而して人間社會に取つてのこの不幸の持參者たちは、當の人間社會に依つてどう迎へられたであらうか。勿論大多數の人間等は此樣な不幸の持參者を敵として迎へ、ありとあらゆる迫害、冷罵、嘲笑を加へた。だが、その餘の人々のうちには折角醉つてゐた酒氣から急に醒まされたり、たらふく食はうとしてゐた山海の珍味に背を向けて斷食をしたり、戀ひ焦がれてゐた愛人を振り棄つて或ひは沙漠の荒涼へ或ひは尼寺の寂寞へ逃げ込んで、肉體の美を葬つたりする者が續々と出て來た。

かうなつて來ると人間社會はもはや從來の平和が保てなくなつた。「おれが來たのに地上に平安を齎らす爲ではなく、及を出させよう爲である、見よ、今に子は親に、妻は夫に、嫁は姑に、それ〴〵戰ひを始めようぞ」と言つた（一見誇大的な）イエスの傲語は見事に此場合に的中する。然しこれだけではなかつた。その戰ひは次第に高まつて遂に同一個人の衷にまで延蔓した。靈と肉との抗爭、これが同一個人のうちで激烈に開始された。この災厄に取り憑かれた者は一個單一の個人でありながら最早たゞ一個の行政機關で統率されることが出來ないで、分立した二つの我(が)に導かれ、右と左に、前と後に、上と下に、それ〴〵勝手に進まうとする兩頭の蛇のやうな生物になつてしまつた。その苦痛の激しさは「各人はめいめい一個づつの地獄を胸に抱いてゐる」と言はれた程になつた　謂ふところの自我分裂が卽ちこれである。

かうして苟くも理解ある人間は無理にも一つづつの地獄を現世に於て既に抱かせられたわけであるが、然しそれだけには止らなかつた。食ひ飲み嫁ぎ產み老い、そして永遠の休みに就くものと信じ込んで死んで行くと、其處にはまた他の世界があつて、しかも其處では人々を無事には通さなかつた。肉の世に於ての功過に依つて人々を審判する法廷が備へてあつたそこで人々は驚いた、そして「これは自分たちが肉の世で敎へられてゐた敎理に反する、こんな筈はない」と抗言した。然しその抗言に拘らず、審判は行はれ、或者は永遠の樂園に

また或者は無間の地獄に、それ〲差し向けられることになつた。……と、こんな風にして前記のやうに人間はその肉の日に於て既にめい〱の地獄を抱くのみならず、死後はその永久不易と信じてゐた墓場の眠りから叩き起されて、そして更に無限につゞく地獄を背負はなければならないのである。これでは理解を有つ人間の安住は何處に見出されるであらうか。一方では肉體に限られながらも、他方では所謂靈魂の要求を打ち消すことの出來ない人間生得の本質的要求、これが何時とはなしに或形式を取つて實現されて來た。これ卽ち宗敎なのである。而して宗敎は各民族のあひだにそれ〲の特質を以て實現され來たつたので、隨つてその形式にも種々雜樣の特徴を有するに至つたが、一般的に概括すれば「神」「不滅の要求」「信仰箇條、儀式禮典及び行事から成り立つてゐる。

「神」とは言ふまでもない超人間的な超自然的な大存在者の謂ひであつて、全智全能であり、永久に且つ普遍に不易に存在する者である。この樣な存在者を何時の時代からか想定したところの人間は、それと聯關して「不滅」といふ觀念を抱いた。そしてこの「神」と「不滅」とを一般的に感受し易く且つ容受し易くする爲には、眼で見、手で觸れることの出る或形象にたよらなければならなかつた。そこで信仰箇條が出來、御神體で創造された。然しそれだけでは十分でなかつた。移り氣の豊かな人間をして此神に對する忠誠を確固堅實に保持させる爲には、人間の感情を絶えず刺戟し得るやう儀式禮典及び行事を發明しなければならなかつた。

（二）

人間は夢を見る。夢のうちでは屢々他人の肖像を見ると共に、たまには自分自身の肖像を見ることがある。（つまり、人間は自分の顏を水に映して見た經驗が意識の奥にあるところから、夢のうちで第二の自分――卽ちうつしを見るのであるところが人間といふものは、自分が何時までも消滅しないで永存せしめられたいとの要求を有つ生物であるので、このうつしから聯想して、「自分は死んでも消滅はしない、たゞこの世界から他界へ、すなはち此自分から第二の自分へ轉移させられるだけである」と信ずるやうになる。この信仰は云ふ所の幽靈を作り出すもので、つまり「不滅」の觀念を紹介したものに外ならない。而して宗敎なるものは、要するに此單純な粗朴な迷信がだん〱進化するに從つて構成されたのである……自然科學者側では、宗敎の起原をかう説明する。從つてこの解釋を承認すれば、現今の宗敎が如何に完成し發達してゐるとしても、すべてが粗雜な一迷信から生成した誤謬の虛物たるを免かれない。

人間の知識に依つて既に知られた限りでゞも、この宇宙は三千萬の大陽系統を有してゐるし、その自餘の未知域に至つては殆んど想像力を絕してゐる。こんな無限大の宇宙の創造主として、人間と同形の「神」を立てるなどとは、そしてその「神」が或時アブラハムと云ふ一個人に會見して、「おれに忠誠に奉仕すればお前の子孫の領土を保證する」と契約を結んだなどとは、（それが單なる比喩の物語に過ぎないと解しない以上は）不敬虔の極みである。これは基督敎正統派の宇宙神造說に對する科學者側の反駁である。

（三）

この無限の時間、無窮の空間に遍在する大宇宙、それは果してどんな物であらうか。それは我々人間に對してどんな關係にあるであらうか。この無限の宇宙は永遠から永遠へ、無窮から無窮へ、我々人間とは沒交涉に、無關心に、いや、無意識に存在するものであらうか。それは我々人間に取つて單に機械的な關係だけを有するのみで、それ以上何等の同情同感を有たないものであらうか。

勿論、私は所謂「天啓」としての舊約聖書が記述してゐる文字通りの意味での世界創造說を受容することが出來ない。しかしこれには比喩的に解する限り深甚の意義が含まれてゐると思ふ。

我々の肉體を構成してゐる個々の細胞の一つびとつが全肉體の特性を宿してゐるとすれば、また大洋中の一滴の水がその全大洋の特性を分有してゐるとすれば、この宇宙の或一點に介在して兎も角もその構成分子をなしてゐる個々の人間が廣大無邊な全宇宙を分有してゐないと、誰が斷言し得ようか。宇宙と人間との生命的有機關係――親族關係が無いとどうして言はれようか。そして我々は人間仲間に對する通り、石や樹や星や大氣に對して三人稱を用ゐる代りに、「おまへ」とか「あなた」とかの二人稱を以て話しかけたい氣持を全く有しないのであらうか。同樣に、科學者のいふ「進化の原理」とか「第一原因」とかに對して、「お父さま」と呼びかけ「あなた」と親しむ恩愛の情が絕對に起らないと斷言され得ようか。

（四）

言ふまでもなく、我々の知力は我々の肉體が限定されてゐるやうに、同樣に或不可越の制限を賦へられてゐる。知力に映る星は或物質の大塊に過ぎない、樹も石も大氣も各々それぞれの構成分子から出來上つてゐることは、科學の分析表に明示されてゐる。たゞこれだけであると、我々の知力は滿足してもゐよう。然し或場合の、つまり全體としてまとまつた

人間としての意識から觀る場合の我等の眼には、たゞそれだけであらうか。食ひ飮み嫁ぎ老い死して、そして永久の休みへ――常住の虛無へ歸することに滿足し得なかつた人間そのものは、果して叙上の解釋だけに十分滿足し得るであらうか。我々には云ふ所の美の意識、善の意識が全然缺如してゐるであらうか。物に對し、その物以上の形式を賦與する、若くばその物以上の價値を賦與する素質が人間のうちに包含されてゐないであらうか。

煌めく星どもを、たゞ一塊の物質と觀る代りに、金光燦爛たる靈體と感じ、紺青の大空を、たゞ窒素と酸素との化合物と觀る代りに、永遠の憧憬を象徵する聖母マリアの上衣の色と解することは、無價値であらうか。かの國家と民族と一切の發理とを一蹴して引着けたパリスとヘレンとの戀の行爲は科學的に說明し得られる精蟲と卵子との自然的引著活動、若くは二の水素と一の酸素との自然的和合活動に外ならないとさう解釋することに依つて人間は十分の滿足を得るであらうか。

人間の生の力を測るには物質の尺度は役に立たない。人間の生活の計測には、一と一とを加算すれば必然二になると云ふ數學の算法は用をなさない。此處では、一に一を足しても矢張り一であり、そして「全」である。生活は數量卽ち廣がりではなくて、質量卽ち緊張である。形式ではなくして價値である。男と女とを引着けるものは戀愛の觀念ではなくて、その實質なのだ。その觀念は科學の研究對象であり、その實質は宗教の努力目標である。肉の終るところで靈が始まる、卽ち科學の終るところで宗教が始まる、とはよく言はれてゐることであるが、それは叙上の意味に於てさうであらう。

宗教は男女の戀愛の實質から發芽するものと、私は信じてゐる。「人ひとり居るは善からず」此處に宗教生活は起原してゐる。二つの個人が一つになる。それは肉愛に依つて勿論つながれるわけであるが、然し矢張り二つの人格が儼として存在する。この人格は單なる生殖作用や肉情だけでは、つまり有限な肉體だけでは融合不可能である。何故なら「人はパンのみにて生くるを得ず」との形式で表言せられてゐる性質が人間に賦與されてあるからである。この二つの人格が融合するところ、其處に第二段階の愛があり、更に個人と多衆とが融合するところに第三段階の愛卽ち社會的意識が生成する。而して更にこれは生命の本源に對する愛に淨化される。宗教の終局的目的は、要するに、普遍の愛及び隨つて生ずる義務の意識であらう。然し私が特に注意を向けなければならないのは、この目的への到達過程なのだ。我々はどうして其處へ達するであらうか。

（五）

普遍の愛、即ち宗教生活に我々をつれて行くものは、知識でなく、意志でなく、生命なのである。この生命は何處にあらうか、またどんな條件を具備してゐるようか。その源泉は言ふまでもなく我々の存在の最深部を形成してゐる感情の裏にある。生命にはひろがりがなく、量がなく、たゞ活動と緊張とがある。一點から他點へ到達しようと力爭する、その努力の過程が生命なのだ。生命の本質は努力である。そして私の信ずる宗教生活は、絶對愛へ到達しようとの目的を有しての力爭努力である。

然し前にも述べたやうに、宗教生活は本質的に單一個人のものでなく、對他的關係を内含してゐる。尤も所謂神祕家は他の人間を計入しないで、たゞ憧憬の對象たる絶對者のみの爲に生きるとも云へる。が、苟くも人間に對して傳道する以上は、「神」自身に取つてでも、やはり人間に理解し得られる形式を取らなければならぬ。しかもこの神祕な生活は、それにしつくり相當する觀念を通じて人間のうちへ傳遞されることが不可能なので、或象徴を通じて、換言すれば人間意識のうちに此神祕な生活を表現し得べき情緒となつて、初めて自らを表現する　である。教儀とか信仰箇條とかは即ちこの象徴なのだ。隨つてこんな象徴そのものに價値があるのではない、價値あるものはたゞ生活その自身のみである。而して絶えず努力し力爭し向上し轉移するのが生命の本質なので、從てその形式として適當であつたところの象徴、即ち教儀や傳說や信仰箇條が、永久に役に立つものではない。一切の形式は絶えず進化し、革命されなければならない。

さて、人間の言語は活きてゐる。絶えず進化する。そこで源氏物語時代或言語に依つて表現せられてゐた同一觀念を現代に於て表現するには、別の言葉を使用しなければ意味が通じない場合がしば〳〵である。そしてかうした撞着が生起した場合に變改されねばならぬものは、その觀念ではなくして、それの現はされてゐる言語であることは勿論である。同樣に宗教生活の場合に於ても、既に年古りて意味が人心に解せられなくつたものが見出されるとすれば、その觀念でなく、その表現形式——即ち教儀や傳說や信仰箇條を惜みなく改革して、生命そのものを生かさなければならない。古來しば〳〵繰り返へされた宗教上の改革は大抵これであつた。或事物に關する革命といふのは、その事物の大本に復歸するの謂じである。

ルソーは三千年の文化を呪つてその出發源へ即ち自然へ歸ることを提唱して、當時の知識階級に一大警惕を與へた。ルー

テルは羅馬教會の覊制を不當と認めて基督へ復歸せしめようと目指した。而して基督はモーゼ以前の大古に―即ち「神」自身に復歸して、猶太民族の思想界に大狂瀾を卷き起した。

(六)

翻つて現代はどうであらうか。基督教といふ一つの宗教に就て觀るとして、その信仰の形式は現代の人心に十分な靈的滿足を與へてゐるであらうか。換言すれば、十六世紀の宗教改革以來ずつと引きつゞき進展して來た所謂現代文明の心意は、その靈的渇望の對象として有りのまゝの基督教を不可缺のものと認めてゐるであらうか、そのうちに絕對の權威を認めてゐるであらうか。これに對しては勿論「否」と答へなければならない。それは現實の事實が明白に證明してゐる。

來たるべき第三の宗教改革!

それは何處まで復歸する革命であらうか。「愛あるところに神あり」を信條とする基督への復歸であらうか、それともその基督を越えて更に本源への復歸であらうか。私の興味と期待とのかゝるのは此處である。(完)

私の求める宗教

木村久一

一

「私の求める宗教」と云ふ題で書けとのことだが、私は今宗教を求めて居ない。私は無宗教者だ、不信神者だ。併し人間は弱いものだ。そして私は殊に弱い男だから、將來ひどい不幸にでも會つて、宗教に走つて神を信ずることになるかも知れないが、今のところ私は無宗教者だ、不信神者だ。これは私が、まだ眞にひどい不幸に會つたことがない爲かも知れない。併し私は耶蘇の嘆美者だ。私は或る人々のやうに、耶蘇を神とは思はないが、同胞の中に耶蘇を有することは、人類の最大の誇りだと思ふ。併し私は、どうも彼に近づくことが出來ない。臆病な私には、彼は餘りに强い。私は彼の歩んだ足跡を踏んで行く程の勇氣がない。だから私は、彼の嘆美者ではあるが、彼に近づくことが出來ない。

耶蘇は共産主義者だつた。それはクリスチヤンが、始め—即ち彼の教がまだ訛らない時代に、共産生活を實行して居ることを見ても分る。その時代の事を書いた使徒行傳には、彼等の生活を左の如く書いて居る。

「信じたる者の群は、同じ心同じ思ひとなり、誰一人その所有を己が物と云はず、凡ての物を共にせり。……彼等の中には一人の乏しき者もなかりき。これ地所或は家屋を有てる者これを賣り、その賣りたる物の價を持ち來りて、使徒達の足下に置きしを、各人その用に隨ひて分け與へられたればなり」

耶蘇は人々に道を說く時、天國或は神の國と云ふ語を用ゐたが、彼の謂はゆる天國或は神の國とは、或る人々の信ずるやうに、佛敎の極樂のやうなものではなく、黃金時代と云ふやうな意味だつた。即ち現世のもの、地上のものだつた。彼は『天國は近づけり』と說いた。又『願はくば御國の來らんことを』と祈れと敎へた。前者の意味は、黃金時代の實現近きにありと云ふことで、後者の意味は、早く黃金時代を實現させ給へと云ふことだつた。『近づく』とか『來る』とか云ふ語から考へて見ても、彼の所謂はゆる天國或は神の國が、佛敎の極樂のやうに、我々が死んで行く所でないことは明かだ。それは改造された社會、即ち彼の理想する共産社會を指す語に外ならなかつた。

彼の謂はゆる天國或は神の國、即ち彼の理想社會は、共産社會だつたと考へると、初めて、彼が人々に、「何を食ひ、何を飮み、何を着んとて思ひ煩らふな、これ皆な異邦人の切に求むるところなり」、或は「明日の事を思ひ煩らふな、一日の苦勞は一日にて足れり」と敎へた理由が分る。これらの言葉は、文字通りそのまゝに解すべきもので、或る人々のやうに比喩的乃至精神的に解するのは誤りだ。

二

聖書の中に、耶蘇の『福音』と稱するものが二個所にある。一は馬太傳の五章で、他は路加傳の六章だ。左に兩方を書いて見る。

「福なるかな、心の貧しき者。天國はその人のものなり。
福なるかな、悲しむ者。その人は慰められん。
福なるかな、柔和なる者。その人は地を嗣がん。
福なるかな、義に飢ゑ渇く者。その人は飽くことを得ん。
福なるかな、憐憫ある者。その人は憐憫を得ん。
福なるかな、心の淸き者。その人は神を見ん。
福なるかな、平和ならしむる者。その人は神の子と稱へられん。
福なるかな、義の爲に責められたる者。天國はその人のものなり。」(馬太傳)

「福なるかな、貧しき者よ、神の國は汝等の有なり。

福なるかな、今飢ゑる者よ、汝等飽くことを得ん。福なるかな、今泣く者よ、汝等笑ふことを得ん。

されど禍成かな、富む者よ、汝等は既に其慰安を受けたり。禍なるかな、今飽く者よ、汝等は飢ゑん。禍なるかな、今笑ふ者よ、汝等は悲しみ泣かん』。(路加傳)

注意すべきは、同じ耶蘇の福音が、二人の使徒に由つて、斯くも違つて傳へられて居ることだ。多くのクリスチャンは路加傳のそれよりも、馬太傳のそれを重んずるやうだが、私は馬太傳のそれよりも、路加傳のそれよの方が、訛り方が少ないのだと思ふ。耶蘇の敎の誤解は、この時代――即ち彼が死んで間もない頃から、既に始まつたものと見える。

耶蘇の敎は、貧しき者即ち無産者の爲の福音で、彼の理想社會は、無産者本位の社會だつた。されば路加傳の方の第一節は、「福なるかな、無産者よ、來るべき新社會は汝等本位のものなり」と云ふ意味だ。新社會が實現されゝば、今飢ゑて居る者は飽くやうになり、今泣いて居る者は笑ふやうになると云ふのだ。

併し今富んで居る者、今笑ふて居る者は福だと云つても、耶蘇の理想する新社會は、無産者獨裁で、以前の富者が復讐される社會ではない。耶蘇の敎は愛の敎だ。而も敵をも愛せよと說く敎だ。されば耶蘇の理想する社會で、以前の富者が不幸なのは、以前のやうな贅澤が出來ないことから來る心理的な不幸に外ならない。

兎に角耶蘇は共産主義者だつた。そしてそれを勇敢に說いた。彼の如くにして生命を全うすることはむづかしい。路加傳の十三章には、耶蘇はパリサイ人に向つて、國王へロデを「かの狐」と云つたとある。勿論へロデは、私人として卑しむべき小人、公人としては惡むべき暴君だつた。併し感泣派のパリサイ人の前で、彼を狐と罵倒した耶蘇の大膽には驚かざるを得ない。

私は耶蘇の嘆美者だが、彼は餘りに强い。私は彼の足跡を踏んで行くだけの勇氣がない。私は弱い臆病者だ。

宗教について

武者小路實篤

宗教は人間が全智全能でなくつくられてゐる所から當然生れたものと思ふ。

人間には自力では解決出來ないことがある。又人間の智慧では解決出來ないことがある。我等はなぜ生れたか、何のた

めに生てゐるかこれ等はわからない方が當然な位である。

又我等は何かことをしようとしても、又自分の生命を長びかせようと思つても、人間の力だけでは出來ないことがある。

自分の力にない力をかりて自分の望みを果さうとする心が宗教心の初步である。之は人間が全智全能でない所から當然起る感じである。しかし之は宗教心の起る初步であつて、この要求を何かで滿たさうと、人間があらゆる努力をして、段段宗教が生れだすのである。

自分達の力にないことを、何か人間に理解出來ないものゝ力を借りて果さうとする。これは人情として自然であるが、そんなものがないと思へばそれまでゝある。又その望が叶へられなければそれまでゝある。よく家內安全や、病氣をなほしてもらひたいと云ふ要求に應じてあらはれた宗教もあるがその宗教を信心して運よく(偶然に)その望が果された時はいいが、果されなければ、すぐ信仰はなくなつてしまう。

世にはよくかう云ふ物質的、或は肉體的の要求を滿すための宗教がある。しかし人間は進むに從つてそれでは滿足が出來なくなる。そんな神は無力な神で、決して萬能の神でないことを知るからである。人間を肉體的に不死にする力のある神は見出すことが出來ないのである。

それで人間の內にある宗教心は更に根據のある、確實な基礎のある宗教を求める。求めるものを與へてくれる宗教を求める。しかしそれは言葉を換へて云ふと宗教心を教養することによつて求めて得られないときまつたものをもとめずに、求めれば必ず得られる方法で、心の平和と、永遠性を獲得しようと心がけるやうになつた。かくて宗教は外部に求めるよりも、內部に求めるやうになつた。即ち出來るだけ不幸の種をまかず、又どんなことが起つて來てもそれを最上に生かすことが出來るやうに心の用意をすることが宗教になつて來た。

人類がうけた不幸をどう喰ひとめたらいゝか、又各自がどう心の用意をしたら安心して生きてゆけるか、これが宗教家の使命になつた。そしてそのために役に立つ。信仰を築きあげ神を生み出したものが、宗教的天才である。

我等は我等だけで生きてゐるのではない。何かの勢ひ、或は力に支配されて生きてゐる。我等はどう生きたらいゝのか。それが理窟でなく、感じでぴつたり感じられるやうにすべての人の心を導く力をもつものが宗教家である。

宗教は我等に心の用意を知らせてくれるもので、その心の用意が出來た時、我々が何となく何かに守護されてゐるやうな氣のするものである。

さう云ふものがこの世にないと思ふものは人間がどうつくられてゐるかを知らないものである。

今の世には人間其者について無頓着な思想家が多すぎる。

我等の內にある宗教心を滿足さゝないものは遂に我等の生命とは沒交涉なものである。それは我等に生る道を教へてくれない、我等の心をより所の無混沌の內に見すてる者である。

しかし我等の心はさうはつくられてゐない。我等が何ものかに純粹な愛を感じたり、美を感じたり、感謝を感じたりすることが出來るやうに我等はつくられてゐる以上、我等は宗教をつくり出し、神をつくり出すことが出來ることは音樂家が作曲をするやうなものだ。たゞ音樂家は音によつて美を生みだすのを宗教家は人の心によつて美を生み出すのである。時間がないので之で。(一二、一二、一二)



赤薔薇の有島武郎

遠島哲男

□

『有島といふ男は氣に入つた。偉い、之れはほんたうな赤だつ、否美くしい赤薔薇だつ』

と感う私が獨りで叫んだのは『泉』創刊號の『小作人への告別』の最後の一行を讀み終らんとする刹那であつた。『氣に入つた偉い』なぞといふ獨囁きは、何だか私自身が高い所にゐて、有島氏を底い所、――少くともつまらぬ男と思つてゐたが案外偉いもんだと云つたやうに見へぬでもあるまいが、實はさうぢやない。私は全く氏の徹底にして眞劍な態度に兜を脫いでひれ伏さん許りの共鳴を感じた結果、無遠慮に云ひ放つた言葉である。(――此の邊は、諒解して貰ひ度い――)

「終りに臨んで諸君の將來が、協力一致と相互扶助との觀念によつて導かれ、現代の悪制度の中にあつても、それに動かされない丈けの堅固な基礎を作り、諸君の精神と生活とが、自然に周圍に働いて、周圍の狀況をも變化する結果になるやうにと祈ります」と。

此小作人への告別の最後の一節を讀むだ時私の心に浮んだのは、『此の短い言葉の中から暗示された幾多の事象』である。私は有島氏のいつた言葉の『相互扶助』といふことを、すぐにクロポトキンの全生活と全思想と、その平和の經典 Theory of Mutual Aid に延長して考へを及ぼした。

それから『現代の如き悪制度』と痛快に然も何の蟠りなくいひ放つた有島氏の態度を見た時彼の最も謙遜にして最も圓滿な愚禿親鸞が鎌倉時代の上下を痛罵して『諸寺の釋門、敎に昏くして眞假の門戸を知らず……云々』と臆面なく云ひ放つた時の雄々しい然も純眞率直さとを對比せざるを得なかつた。

最後に私は、有島氏が小作人達に向つて、此の土地開放といふ事は此の事が自然に周圍に働いて周圍の狀況をも變化させる結果になる樣に祈るので有るといふ一語を深く味つて見てそこに此の試みの偉大さを感じたと同時に現代社會制度の一大變化たる「土地改革」の世界現象に想倒せざるを得なかつた

□

有島氏が單なるブルジョア階級であつて、その藝術の立場から或る感情を動かして、北海道の土地を開放したといふやうな、そんな簡單無意味なものだとは、少くとも私自身は考へられない。之れは實に日本に於ける「土地改革」の烽火を揚げたものだと見ることが出來ると思ふ。從つて私は有島氏を以て堺氏のいふが如き一種の人道主義者であると見ることは出來ない。また有島氏自身のいふが如き第四階級には無緣の衆生の一人である所の第三階級であるといふことも肯へられない。(――その理由は後で述べる――)それかと云つて純然たる赤だとは云はれない。何故ならば本人がさうでないと云つてゐるからである。恰もアインシユタインは心は赤だが顏は白いといふのと對比して、有島氏は――諦遜といふ美德に抱擁された美くしい赤卽ち赤薔薇の有島武郞――とも云ひ得ることが出來やう。

□

資本的帝國主義の治下にある藝術的表現や、一般言論は恐く自由を失つてゐる。綠を黑と云ひ、白を背といひ、赤を赤薔薇と云はねば生きてゐられない世の中なのだから仕方がない。從つて有島氏の土地開放といふ實に天下の一大事件が白蓮女史の出奔程にも世の注意を索かないのは無理はないが、然しその事件の本質から云ふならば、東京朝日新聞が白蓮學件の爲めに一日の論說欄を費し、十數段の名家批評記事を掲出した以上、有島氏の土地開放事件は十日間の連續的論說を掲出し、百段の名家批評記事を網羅して世論を喚起するに足るものであると私は思ふ。(―最も新聞雜誌が資本家の手に依つて統整され、その傀儡となつてゐる今日ではコンな事を謂假するのは無駄な話だが――)

有島氏の土地開放が何故にそれほど重大意義があるかといふ事は、現代世界一般勞働運動及び農村勞働運動とその成功の程度がどの邊まで進んでゐるかといふ時代背景を十分に知つて後始めて知られるのであるが、悲しい哉日本人は、その世界思想の動き方も、成功の程度も知る自由を持たない。

歐洲殊にチエツコスロヴアキヤ、デンマルク、ハンガリー、ユーゴースラヴイヤ、ギリシヤ、ルーマニア、ノールウエ、エストニヤ、ポーランド、ラトジヤ等の諸國は悉く土地改革を行ひ、殊に、ソヴイエツトロシヤの制度を完全に採用した

國に最も理想的であり、土地私有を禁ずることゝ、土地の公平分配及び協同耕作といふことが如何に民衆の幸福であるかといふ事は着々として實證されてゐる。而して伊太利を始めとして何れの國に於ても社會黨の政策が次第に徹底的に實行され功果を收めてゐる（——但しフアスチス黨內閣の出現と共に從來築き上げられた伊太利小作制度が此の後什うなるかは疑問——）要するに土地私有の禁止と新らしき第四階級の協同耕作は人類の爲めに最も幸福であるといふことは今や試驗ずみの現狀にある。——と恁う私は知ることを得たと共に、之れを知ることに依りて一層有島氏の態度と行爲とが重大なる意義を有する革命的烽火であると云はざるを得ぬのである然もその先見の明、來るべき時代を透視しての行動に對し痛く感嘆せざるを得ぬ。

□

歐洲に於ける土地改革が好成績を收め、殊にソヴイエツトロシアの制度を採用した地方が最も好成績であると私が見て來たやうなことを云つたのでは諸君は承知しまいが、此の出所は、昨年十一月〇〇〇〇協會の研究會で、外務大臣から發言を禁止されてゐる某省の高等官〇〇〇〇氏が一ヶ年に亘る歐洲小作制度視察の結果を話されたその結論を信ずるからである。洵に過去の有島武郎氏は北海道の一小資本王國の國王であつた。然るに今やその國王自らが土地改革に熱心であり遂にそれを斷行したのである。之れは恰もユーゴースラヴイアの國王が一九一八年十二月自ら土地改革を宣言して Kmets（農奴）を解放したそれに對比して事の大小こそあれ同じことであると思ふ。況や氏は、この行爲が第四階級たる彼等自身（有島氏所有であつた土地の農民）の相互扶助により健全に發達して、惡制度を打破し、その周圍（大きく解すれば全日本）に及ぼさんことを祈るに於ておやだ——。

□

有島氏が此のやうな思想と行爲に出ることは、氏の父が農場經營者であり、且つ氏もいくらか農學上の學問知識を得てゐたから、此の知識が次第に氏の藝術的思索と混和され琢磨され遂にその知識の純化を見たものとも觀察されぬでもない。而して、虐げられたる第四階級に對する氏の理解と同情とが、どのくらゐ深いものであつたか、その爲めに氏がどんなに涙を絞つたり、感情を昂奮させたり、或は深い理智の世界に彷徨したかといふことは、その過去の作品が證明してゐる。

一九一七年六月十三日、氏が鷄鳴を聞きつゝ擱筆したといふ「カインの末裔」に於ける仁右衛門夫婦の生活とその周圍。

同年十月に書いた『凱旋』等を讀むと、今日の有島氏の心持ちが、ハッキリと投映される。

□

『宣言一つ』以來、隨分とゴタゴタした問題も、土地開放の一擧で、やゝ解決がつき、氏の眞實の腹の底も次第に露はれて來つゝあると共に、一部の知識階級(堺氏の如き人)や一部の有島信者(多くは單に文學好きだといふだけの無自覺な女性達)が思つてゐたやうな、淺薄な人道主義を振り廻して矢鱈に女にモテることの爲めに筆を舞はす有島武郎ではないといふことが明瞭になつて來た。

私はいふ――有島氏の藝術に眞に共鳴し得る女性であるといふ以上は、現在の一切の社會制度の規範から超脱し、民法的な家族制度の溫情趣味の惑溺から離れ、封建制度の女性美の標準(現今資本主義制度の下に所謂美人たらんとする理想)を拋り棄て、夫と共に糞尿桶の車の後押しを堂々とやつてのけることを實際に行ふものでなくてはならぬ。之れでなければ有島氏の藝術に共鳴したのでもなく、また有島氏に惚れたのでもない。

それは何故かといふに、有島氏は藝術と實生活との融合を唱へ且つ實行せんとするものであると共に人類の將來がプロレタリアの文化が支配することを確信してゐる人であるからである。

故にプロレタリアの文化の支配下に於ける女性の生活は斷じて現今の如き資本主義的美人の存在を許さないと共に、官僚道徳的な婦徳を讃美さるゝやうな時代でないからである。在來の社會制度を是認しつゝ尙ほ有島氏の小說を讀むで共鳴し得る女性があるとするならば、それこそ狐につまゝれた女性であるに相違あるまい。

□

之れに就て私は資本主義的女性と有島氏との思想の扞格に考へを及ぼさねばならぬ。最も手つ取り早いのは、有島氏と彼の母との關係である。

『ー聖フランシスの傳を讀んで、聖者がその父に衣服を投げ返して神に還つたといふ件に來ると、彼れはいつでも物足りなく思つた。命まで投げ返すのでなければ、人はその親から本當に獨立することが出來ないからだ。然し親から思想に於て離れた以上は、他の部分に於ても出來る丈け離れなければならないと思ひながら、彼はそのまゝに問題を放置してゐた』(『迷路』二〇一頁)

大正六年十月中央公論に掲載された『迷路』の一節に右のやう

な箇所がある。その頃であつたかと思ふが、それともその前後であつたか、或る人が有島氏から聞いたといふ言葉に「僕も母がある間はしたいと思ふことでも控へたいやうなことがある」といふ意味の述懐があつた。また此のほかにも、こんな香ひのする文章が書いてあつたやうに記憶してゐるが、恐らく氏が十年來の苦悶の一齣をなすものは此の母堂の思想と氏の思想との諒解點を見出す方法であつたらう。

氏の母堂は資本主義的思想に教養された人であり、且つは傳統的な所謂古來の純風美俗に根ざす所の家族制度の支持者であつたらう。從つて新興階級に走らんとする思想傾向とは大なる扞格がある。有島氏が所有土地を開放し、その家を賣り、兎にも角にも氏の藝術と相一致する生活を實現すべくブルジョア生活を拋棄しやうとすることを、その母堂が理解する迄に十年の歳月を要したことは之れまた速かであつたとせねばなるまい。

之れは親子の機微な情緒も絡つてゐるから一層至難であつたらうが、翻つて此の點から押して考へて見ると、有島氏の藝術とその生活とを理解せんとする現代一般の女性が、果して十年の後に完全に氏の藝術と生活との殿堂に入り、氏の心に抱擁され、その接吻を甘く受くることが出來るか什うか。

手つ取り早く、簡單に云へば、現在有島氏に共鳴してゐる女性であるならば、先づ氏が土地を開放したごとくその所有を悉く拋棄せねばなるまい。氏が家を賣つたごとくに、その愛するブルジョア的色彩の強いエンゲージリングも棄て、お白粉函も廢棄し、お嫁入り仕度も、晴れ着も拋り出し、少くとも第四階級の生活程度に立ち入るほどに生活を簡單にせねばなるまい。それでも尚ほブルジョア美の誇りであり、資本主義制度の遺物である白魚の如き指、花の顏、月の眉を什うして吐き出すか、――私は一部の女性諸君に敢てお伺ひし度いものであると思ふ。

□

有島氏が最近に至るまでのやり口は頗るベルナルドーネのフランシスの如き對照を感ずる。また一方から見ればトルストイの最後の生活を豫想させる（――最も有島氏の將來がドウ變化するか、氏が死んで見なくてはわからぬから、或はトルストイの如く曠野にのたれ死にをするものやら、せぬものやらその邊は眞にわからないが）兎に角にも、一種のフランシス、一種のトルストイのやうな生活に彷彿としてゐることは事實である。

茲で思ひ起すのは氏が一九二一年八月十五日碓氷峠で完結された「クララの出家」といふ創作である。

假に有島氏を日本のフランシス（――勿論フランシスの思想は別問題――）と名づくれば、今日氏の藝術を渇仰する女性はクララの如き立場のものである。現今日本には此の日本のフランシスの手にて清められ、彼れの禮拜所たるポルチウンクウラの小龕の灯を望むで來り投じやうと志してゐる夥多のクララがある。

けれども、日本のフランシスの禮拜所にはキリストの十字架は輝いてゐない。人道的愛の祭壇も設へられてない。そこには第四階級の爲めに平等に分配させるべきマナが、搾取の世界から放れて赤薔薇の花に包まれて置かれてある。然し、これを食べるのには、感傷的な祈禱を以てしても駄目である。花の顏、月の眉で、媚びへつらいの資本主義的女性美を發揮しても與へては貰へない。――日本の女性諸君。日本のフランシスの禮拜所に行き、その花嫁たらんとするには什うしたらよいのでせうか――。日本のクララたらんとするものは茲に大悟一番すべしである。蓋し「クララの出家」は有島氏の藝術とそれを理解せんとする女性に對する一つの大いなる謎の暗示である。

□

氏の文學に共鳴するものは炬燵に當りながら氏の小説を讀むことは出來ない。大正十一年一月の「改造」に「宣言一つ」が表はれてから、その反響は大きな渦をまいて、ブルジョア文學とプロレタリア文學との問題が旺んに議論された。その後三月氏は「我等」紙上に「片信」を發表した。長い螢眼期も終りを告げた。「宣言一つ」吐き出す迄にもいゝ加減胸がつかへてゐた氏にも漸く春が來た。何か出來るかも知れないと考へてゐたが、果せるかな八月十七日には氏が全生活に最も意義あると共に客觀的に偉大なる烽火たるべき仕事として此の日本のユーゴウスラビヤ國王は、四百五十町歩の土地私有を抛棄する「土地改革」を斷行した。世界の事情にも通ぜず、新興階級の潜在力の傾向も知らぬブルジョア新聞紙や雜誌は、小さき一藝術家の小さき一つの行爲として氣にもとめなかつた。

けれども氏は、それ等の無頓着な周圍とは沒交渉な立場から、今にも第四階級の勝利の日の來ることを豫感し且つ叫んでゐる。而して有島氏は來るべきプロレタリヤ文化の恩惠に浴する資格なきことを自から絕望してゐる。

□

氏の社會運動及社會運動家に對する考へ（「宣言一つ」「片信」參照）及び表現主義の藝術に對する考へ（一九二二年大觀正月號所揭）は、各方面の問題の焦點となつてゐるが、要する

に氏が一切の虚僞を脱脚して考へて見れば、氏自身は遂に第四階級となり得ない。從つて第四階級の文化の恩惠に浴する資格がない、氏のみならず、現在の思想家や、社會運動家と稱するものもさうである。又プロレタリヤ文學者を氣取るところの自稱表現派の藝術家と雖も歸する所は第四階級ならざる畑に人工的に作り上げられた一本の庭樹に過ぎない。故に氏としては第四階級の爲めに辯解し立論し、運動するそんな馬鹿げ切つた虚僞も出來ない、そこでクロポトキンやマルクスの如く、第四階級以外の階級者に對して或る觀念と覺悟とを與へるより他はない。氏は炬燵の中で物をいつてゐるどころでなく、物さへ云つてゐないのだと思つてゐる。氏のみならず此の立場から云へば堺枯川氏ですらさうであると云ふのである。

「宣言一つ」によれば人類の將來はプロレタリアの文化が支配することゝ信ずる。けれども氏自身はブルヂョア階級に育ち、ブルヂョアの教育を受けて來てゐる。そこで「昨今あらん限りの物を抛つて、無一文の無産者たる境遇に身を置いたとしてもなほ氏には非常に有利な境遇のもとに永年かゝつて積み込まれた知識と思想とがある。外見はいかにも無一文の無産者であらうけれども、氏の内部には生活手段として頗る都合のよい武器が潜んでゐる。これは氏が到底失はうとしても失ふことの出來ないものだ。かゝる優越的な頼みを持つてゐながら氏は自ら果して内外共に無産に等しい第四階級の感情の中にまで這入り込んで、その境地に融合した藝術を作り出し、それと膠着した生活が出來るだらうか――と氏は之れを嘆息してゐるのである。

□

之れに對し一部の人達は、氏を以て女性的な點があるとし、又斯くの如き場合に咏嘆を洩らしてゐる處に所謂ブルヂョアーの繊弱さが顏を出してゐるものだと批評する向きもある。それかと思へば一方では氏を目して人道主義者であるとし「勞働階級を是認するけれども、自分としては中流階級の自分、知識階級の自分としては、勞働階級の立場に立つて其の運動に參加するわけには行かない、そこで彼等は、自分の中流階級的の立場から、自分の出來る丈けをする人達」の一人として氏を算してゐる。

私は、之等の人々の有島論を一顧の價ひなきものであるとして一蹴し去ると共に、有島氏の此の考へ（一九二二年大[illegible]正月號及び同年正月號改造の「宣言一つ」を左の樣に解釋せんとするものである。

私は想ふ考へる――、

服

變つた面白い小説
死線」と對照して讀
んで下さい肩のこ
らぬ極めて輕く讀
める小説ですから

發行所
東京市芝區愛宕下町
振替東京八四〇二
改造社

愛観

す。

「しかし男と女との戀、そこには今も昔も變りない永遠性があり恒久性がある。千歳を隔てて猶ほ滅びざるものは兩性の戀だ。幾世紀間の馬鹿騒ぎ無駄骨折り、この勝利をも光榮をも黄金をもすべてを皆葬り去れ。戀のみが至上である。」

—本書の一節—

發行所

東京市芝區愛宕下町
振替東京八四〇二

改造社

有島氏が自ら第四階級になり得ぬといふことゝ、その藝術が第四階級から逆襲を受けるかも知れないと云ふ心持ちを推察して見ると、第一有島氏は「現在」といふことを忘れてしまつて第四階級の完全な勝利の時代にその魂を没入させてしまつての立場から、自己とその周圍とを眺めてゐる。故に普通一般に云へば、有島氏は第四階級の爲めに眞劍に無言の辯解をなし、無文の立論をなし、無作爲の運動をなしつゝあるのである。即ち有島氏のブルジョアーに教養された肉體とそれに基いて起つてゐる個性とは革命期前の時代に置かれてあるけれども、その眞實の心は既に革命を通り越してプロレタリア文化の恩惠境裡に遊んでゐるのである。

此の有島氏の心持ちは、自分を中流階級に置かうといふのではない、もう眞實には置いてないのである。眞實の心は第四階級の世界に置かれてある。從つて現在の自己（傳統的個性）を顧るときは如何にも自己の不眞實（取り去り得ないブルジョア的教養）が醜くていやで叶はないのである。その立場からして氏は「馬鹿げ切つた虚僞」は出來ない即ち「眞實」は出來るが「虚僞」が出來ないと云ふのである。

第四階級の文化を明瞭に是認してゐる氏が何で、第四階級の世界の實現に努力せぬことがあらうか。只虚僞は出來ぬ眞劍さからやるといふのである。氏の純粹なる態度と、燃え切つた眞劍さが却つて此の反語の中に見ることが出來る。從つて現在の社會運動家や思想家や乃至自稱表現派藝術家は恥ぢ入つて然るべしである。

「馬鹿氣切つた虚僞は出來ない」といひ「第四階級にはとてもなれない」と慇ういふた氏の心持ちを私は他の人の精神現象と比較して見ればよくわかると思ふ。例へば、彼の親鸞は淨土眞宗を起してその信仰の極致に達したとき、彼は『淨土眞宗に歸すれども眞實の心はありがたし、虚假不實のわが身にて清淨の信もさらになし』と云つて嘆き、一切の虚僞から脱して眺めた時萬善諸行は悉く雜毒の善であるとして排斥した。即ち、有島氏が眞實にプロレタリアの文化を人類の福祉であると感じ、ブルジョア文化を憎忌すればするほど、迚も自分はプロレタリアたることを得ざることを痛感するのは深刻なる自己の反省に透徹した玲瓏な叫びである。ソコラ近所の自稱プロ先生達には一寸此の境地は解るまい。何となれば眞實に自己のブルジョア的存在の姿の醜さを反省し得ないと共に眞實にプロレタリヤ文化の恩惠を豫感する鋭敏さがないからである。

□

虚僞の出來ないことを痛感する人は、眞[illegible]である。從つて

有島氏の敏感には、目の前に勞働階級が純粹に自分自身の力を以て動かうとし出して來た現在及將來を痛切に豫知してゐる。然るに多くの人達はまだ、勞働者が左程までに眞劍であるかの如く眼に映じてゐないだけにブルジョア的自己生活の危險や罪惡であることがさう痛切に感ぜられない。よしそれを感じてゐても思ひやり丈けに勞働者の運動に參加しようとする位ひに止つてゐる。然るに有島氏の考へでは、勞働者が之れでは承知出來るか什うかと疑問を起してゐる。此の疑問を眞に起さない人は、未だ〳〵もう一度位ひはビリケン政治や、お大名政治の時代が出現して更に自分達が此の世から去つて後にプロレタリヤの文化が來るだらうと、その「だらう」の態度で一生の醉生夢死を冀つてゐるものである。

□

一日、麻生久氏と語り會つたとき偶々現代の勞働運動のこと並に有島氏の噂が話題に上つた。その時、麻生氏は恁う云つた。

　前の時代に虐げられたものが次の時代に最上の地位に立つのは當然である(プロレタリア文化の肯定)。而して我々はその實現に向つて努力してゐる。實際のことを云へば我々は一介の第四階級勞働者になつてしまへばよいのだ。然し乍ら自分は第四階級にならずして、尚は多くの吐き出すべきものを保留して持つてゐる(有島氏と同じ立場の中産階級)といふのは、來るべき時代を早からしめ、その境地を開拓する運動をするに都合がよいからである。つまり、我々は濁流に泳ぐもの(東京日日新聞所載、近日單行本として出版される氏の著參照)であると云つた。

　麻生氏は吐き出すべきものを保留することが第四階級の文化を促進させる爲めに好都合であると感じて自からそれを保留し、以て直接實際に第四階級の運動に參加してゐる。故に一面から云へば炬燵にあたつて物を言つてる人の立場であるとも云へよう、然し、これはつまり理窟で突きつめて、勞資階級とその生活を對立させて全々油と水との如きものであるとする先入的概念に囚はれた見方である。前述の如く有島氏にして見ても、麻生氏にして見ても共に赤線を突破した境地に眞心が置かれてあるのであつて、その現在生活は佛教的に云ふならば正定聚不退の位にあるものであり、有餘涅槃の境地にあるものである。

　第四階級の勝利の世界が滿月清澄の湖水であるとすれば、現在の有島氏や麻生氏は濁流に泳ぐものである。

　麻生氏は恁う云つた。

「我々の運動も一つの宗教的信念で支持されてゐる。實際の

話が、信念あり、それに依つて慰むる所がないなら、何で監獄に抛り込まれて、幾多の苦節を甞むるやうな馬鹿な事が出來るもんか、有島氏にして見ても、ブルジョア生活に對する憎忌からその土地を賣り家を棄つるに至つたのも、それは一つの信念の上に於てなし遂げられたものである。トルストイが家をすて財を抛り出して最後に曠野にのたれ死にしたのも、また彼れの信念から現はれた生活現象である。有島氏にしても或は遂にトルストイのやうな結果になるかも知れないよ」

と。勿論此の「信念」といふものは、既成宗教の信仰とは本質に於て異つてゐるであらう。然し濁流に泳ぐものには必然に一つの強い宗教的信念が沸いて來るに相違ない。有島氏の將來が、如何になつて行くかは別問題として、私は或は氏が藝術の境地が進んで第四階級の勝利の時代に用ひらるゝ所の、全然既成宗教と異つた赤い薔薇に相應しいプロレタリアの宗敎の創造者となり得るかも知れないとも思へる。

人間に「信念」のなくならない限りは宗教は亡びない。ソヴイエット・ロシヤですら赤い教會を認めたといふ。資本主義的官僚道德の塊偶である既成宗教が崩壞して、プロレタリヤの藝術から一歩を進めて最も新らしい未だ嘗つて無かつたプロレタリヤの宗教が生れ得ぬでもあるまい。有島氏が一思想と生活」の融和に焦慮する結果として、此の煩悶解決の爲に得た滿足の心境を以て一つの新宗教の體驗者たらしめたい—とは之れは私の願ひである——。

□

現代の知識階級の大きなる惱みは何であるかと云つたならそれは「ホントウにプロレタリヤに成り得ぬ」といふ絕望的叫びである。

—茲に私は一つの挿話を提供する—。

現代文壇で女性にモテる文士と云へば久米正雄氏、有島武郎氏、倉田百三氏、三島章道氏等いろ〱ある。その內一番ブルジョア式な生活をしてゐるのは子爵三島章道氏である。千駄ケ谷の邸宅には家令家扶がゐて、それは〱御旺んなものである。三島氏もまた貴公子然たる風丰を備へ、先づ日本のブルジョア階級の文士としては押しも押されもせぬ人である。

所が、本年の夏、私は或る用件で三島氏を訪問した。構への堂々たる應接間で此の日本の一貴族文士が私に洩らした述懷は斯うであつた（——茲に氏の談を書くのは甚だ禮を失したことであるが、時代の思潮がどのやうに變化しつゝあるか、三島氏個人としてゞはなく、日本のブルジョア階級、貴族階級

の日記と其の懊惱とを物語るに意味ある鍵として此の内輪話を公開する。三島氏が或は怒るかも知れないが、時代傾向を闡明する爲めの犧牲だと思つて許して貰はうと思ふ――）三島氏は眞に、優しい然も謙遜な態度で次のやうな意味を語つた。

『私は有島氏のやうになることを實に羨ましく思ふてゐる。有島氏は土地を開放して、家を賣りそして自由な小さい家に移つて傳統の殼から脱去して行つた。私も、どうかして有島氏のやうになりたい（――卽ち此の親讓りの千駄ヶ谷の邸宅から退去したいとの意味？―）然し、私の家庭の事情はそれを許さない（―第一ブルヂョア的母堂が承知せぬ―）家令だとか家扶だとかいふものがあり、とても私は思ふやうに晴れ〳〵した生活は出來ない（現在のブルジョア生活がイヤで〳〵たまらぬと云つた風な深い悲痛を見得られる――）、新生活に入り得ぬのみならず現在のブルジョア的生活すら自由でない例へば氣の毒な人に金でもやりたいと思つても自分の財産は勝手に使へなくて、實の話が私はまだ毎月定められた金を家扶から受取る月給取りのやうなものだ一文だつて、自由にならない。從つて人道的な恩惠をすら人に與へる自由がない。どうか有島氏のやうになり度い。私は今、そのやうな時機を窺つてゐる云々』

と。此の三島氏の言葉には、現代の目醒めたる貴族の惱みが表徴されてゐる。

之れは三島氏のみならず、有島氏のやうになり度いが因襲の殼を破るにはあまりに資本家的敎養に馴らされ過ぎて什うすることも出來ぬといふやうな人が澤山あらう。また三島氏も有島氏と同じく、資本主義的敎養に固まつた母堂に對する氣がねがある。怖らく此の種の惱み、此の種の潜在的悲劇は濁流時代の一つの生活現象であらう。

白蓮女史が夫をすてゝ愛人に走る位ひはまだ〳〵新思想的傾向の所産として騒ぎ立つるほどのものではない。官僚道德的生活に反抗した位ひのことは別に珍とするに足らぬ。然し乍ら、有島氏や三島氏は單に古い道德の桎梏から去らうといふやうな簡單なものでない。そこには階級鬪爭意識のまざまざしい、傷ましい痛烈な新意識が閃めいてゐる。

□

私は玆に再び現代の女性の事を考へさせられる――。

所謂現代の女性は大分自覺して來た。官僚道德に對する反感とその他律的規約の不公平な制度から去らんことを努めてゐる女性が可成り多くなつて來た。男本位に作られた國家概念とその資本主義的國家の法律が、あまりに女性を蹂躙して

ゐるといふことにも氣が付いて來た。有島氏の藝術に心醉する婦人であつたならば、少くとも男女無差別で行かうといふ考へは當然起つてゐるであらう。また離婚問題（女性改造新年號の「一罪は何れにあり」參照）の如きものを法律の力を借りることは誤りであると知り寧ろ法律といふものが設けられてあるために却つて眞直に行く事柄までがこぢれて了ふから、こんな意味なら法律は却てないはうがよい――といふ考へを持つ女性も多いであらう。

然し乍ら私は一歩進めて、現代の女性が有島氏の如く第四階級を認め、ブルジョア的教養を厭つて、少くとも有島氏の禮拜所に跪いてその說敎をきゝ、その思想を享けて直に實生活に用ひんとする眞劍さがあるか什うかを疑はざるを得ない。私は現代の多くの目醒めたる女性と稱せらるゝものは、單に道德的に自覺したに過ぎなくして、經濟的、階級的意識にめざめてゐるものではないと思はれる節がある。例を取つて云へば、白蓮女史のやうな考へを持つものはあるが、山川菊枝女史が昨年野依雜誌に「第三インターナショナルと婦人」を書いて同誌が發賣禁止になつた事件に對して、その內容が何であつたらうかと注意を喚起したやうな婦人は多くあるまいと思ふのである。

もう一歩進めて云へば――、現代の多くの女性は倉田百三氏の禮拜所に行き同氏に融け込むことは出來ても、一方、有島氏の魂の底が眞髄に觸れたら、そのあまりに崇高さに驚いて禮拜所に入ることを躊躇するのではあるまいかと思はれる。

花の顏、月の眉、白魚の如き指を持つことを理想とし、資本主義の所產たる纖弱な女性美を以て永久不變の女性本來の美的標準であるかの如くに誤解し公設市場に行つて菜つ葉一束を求むることに羞恥を感じ、エンゲージ・リングを一生の寶物とし、己れの鼻の低さを怨むと共に御亭主の色の黑さが氣に食はぬと云つたやうな現代のブルジョア的教養に惑溺した女性、加ふるに男本位の社會制度で極端にその個性を蹂躙されて硬化し切つた道德箱に納められてゐる人形のやうな女性が、什うして、第四階級の文化の恩惠にまで思ひを及ぼすことが出來やうか。

□

將來の有島武郎氏とその藝術が什うなつて行くかは見當が付かない。恐らく氏自身にもわかるまい。けれども氏はその敏感を以て來るべき次の時代をはつきり眺めてゐる。否その境地に旣に行つてゐる。が時代はいついつどうなるかわからない。赤薔薇が野に咲いたまゝ終りを告げるか什うか。然し、有島氏の思想や生活は之れからいよ〳〵社會の注意をひくべきもので、氏自身もまた之れから本舞臺であると思つてゐるだらう。

私に繰り返していふ。

ボルチウンクウラの禮拜所に赤薔薇に包まれて置かれたマナを、現代の女性達が什ういふ態度でいたゞきに行くか。ああ、日本のクララたらんとするもの二三者を要するであらう。



サヰェート・ロシヤの學藝

片上伸

1

ロシヤ・社會主義的・聯邦的・サヰエート・共和國(R.S.F.S.R.＝Русская социалистическая федеративная советская республика)は、今のところ私たち日本人にとつては禁制の國であつて、これを直接にうかゞひ知る方法は、殆どないやうな次第です。私たちは、或ひは外國人の見聞調査の記錄によつて、或ひは斷片的に傳はつて來る禁制の國からの消息によつて、おぼろげに、不十分に、大體の樣子を、またはほんの一部分のことを知るのに過ぎません。勿論、この禁制の國の政府のことや、經濟組織のことや、それ等は極めて一部分の人々には可なり細かく傳へ知られてもゐるでせう。しかし、私たちの何よりも知りたく思ふのは、さういふ公けの、表面の報告、禁制の國と他の國々との交渉關係を處理する上に差し當り一と通り心得てゐなくては、全く見當もつきかねるといふやうな種類の知識ではありません。その禁斷の國の人々が、日々の糧りことの外に、他の國々との外交的交渉の外に、彼等自身の生活に於いて、何を考へ、何を感じ、何を樂み何を貴としとしつゝあるかといふこと、言ひ換へれば、彼等の新らしく築き上げつゝある新らしい文化の性質なり方向なり景況なりが、どういふものであるかといふことこそ、私たちの何よりも知りたく思ふところです。

それ〲の國民が、自分自身の意志によつて自分の國の生活の組織や運行の樣式方法を選ぶ權利を有つてゐることは言ふまでもありません。しかし、政治のことや外交のことや經濟のことなどは、時として、或ひは寧ろ屢々、國民自身の意志

によつて必ずしも自由に選ばれないことがありがちです。少くとも今までは殊にさうでありました。しかし、さういふ場合に於いてすら、その國民が、彼等自身の平生の生活に於いて何を考へ、何を感じ、何を樂み、何を貴しとするかといふ方面では自から自由に選ぶ權利を有ちながら、心ならずも他動的に選ばせられる――といふやうな傾向は、政治、經濟、外交、と云ふやうな方面に於ける選擇の不自由に比べてははるかに少なかつたのが事實です。たとへば、ある國とある國との戰爭は、それぐ\の國民の好むところ選ぶところではなかつたといふ場合があつても、その國民の好む娛樂遊戯といふやうなものは、その國民の好む藝術といふやうなものは、恐らくあらゆる障碍にかゝはらず、それ等を潜りぬけてまでも國民自身の意志が自然に選んだものであつたに違ひありません。私たちの何よりも知りたいと思ふことは、これを個人と個人との關係に就いて見ても、これを國民と國民との關係に就いて見ても、それ等の個人なり國民なりの「あらゆる障碍にかゝはらず、それ等を潜りぬけてまでも彼等自身の意志が自然に選んだもの」であつて、卽ち相手の本音です。本質的な、必至な、さうでなくてはゐられない所のものです。この方面の生活の消息を知ることなしには、向ひ合つた個人と個人と、國民と國民との間は、まことに不安な、うす氣味の惡い、上つらな、空虛なものでなければなりません。どんな公けの、外面的の約束も、信賴の告白も、この根本の必至な本質的なものを知り合ふことに基かない限りは、空なみだと空起請に過ぎません。殊にもし、相手が或ひは恐るべき、或ひは怪しむべき、或ひは疑ふべきたぐひのものであるらしく見えれば見えるほど、その相手のかやうな方面を知ることが、一層重要緊切となつて來るわけです。

個人と個人との間では、かういふ方面の相互の知識の必要が、相當に感ぜられてもゐたし、またかういふ方面を知りあはうとすることが、今までとても相當に行はれてゐました。しかし國民と國民との間では、それが考へられてはゐながら、しみぐ\と感ぜられてゐるほどでなく、また折々の便宜や辭令的の意味以外、かういふ方面を重要視することが、十分に行はれてゐなかつたやうです。少くともそれが、事務的な、大人らしい人々の世界では、心から重く見られるところまで往つてゐなかつたやうです。そこからして、少くともそれが大きな一面の理由となつて、相手に對する見そこなひや、殊に過度の疑ひや恐怖やが生れて來たやうです。

話しが思はずやゝ他の方面へ深入りしさうになりましたがとにかくサヰエート・ロシヤに就いて私たちが最も知りたく思つてゐる方面が何であるかはそれで明らかになつたことゝ

思ひます。また何故にさういふ方面を重要視するかの理由もほゞ明らかになつたことと思ひます。たゞ禁制の國であるサキエート・ロシヤからは、直接には何の材料をも手に入れることが出來ません。前にも申すやうに、外國人の觀察調査と、ドイツその他でロシヤ人の出版してゐる書物雜誌新聞と、ドイツを經てたま〳〵手に入れることの出來るモスクワ、ペトログラードなどでの出版物と、まづその位の材料によつて、きれぎれの夢か何かのやうに、出來るだけつなぎ合してあちらの樣子を想像して見るに過ぎません。こゝでは、さういふ範圍の材料のうちから、前に申したやうな興味もしくは精神から、なるべく日本の一般の讀者に耳新らしさうな事實を拾ひ出して、お話して見ようと思ひます。事實の大小輕重の配置宜しきを得ず、遠近をあやまるやうなこともあるかも知れません。しかし、今のところでは、何分手さぐりで物をつかまうとするやうな次第であつて、萬一さういふことがあつても已むを得ないと思つて頂く外ありません。

2

サキエート・ロシヤに於ける一般文化の方向、性質乃至その景況を知る上に、先づ一應明らかにして置く必要のあることは、出版界の景況です。演劇、音樂、美術、學校乃至講演會などの方面よりは、出版の方面の事實は遠くにゐても比較的分りやすくもあり、また比較的正確な材料によつて間違ひの少ない推察をすることも出來ます。またサキエート・ロシヤへ自から行くことの出來ない私たちにとつては、出版以外の方面の事情を知るためにも先づ第一に出版物によらねばならないわけですから、最初にこの方面のことを話して見ることにしませう。

打ちつゞく內亂、戰爭、革命また革命、かういふ出來事が、物質生活の混亂疲弊を招くことは勿論、文學その他の精神的創造の生活にとつて、差し當り好適な事情を生まないことは言ふまでもありません。或ひは、國民生活乃至社會生活の上に大混亂の生起する前には、一時は文學方面でも興奮激越の傾向が見え、勢ひづいて見えるやうなこともありますが、それはやがて來るべき嵐の前兆であつて、嵐そのものゝ來たるとゝもに、その前兆の聲は全くかき消されてしまひます。文學の方で言ふと、抒情的要素を主とする作品に於いてさへ大體さういふ傾向になりがちであるのですから、叙事詩的要素を主とする作品の方面では、尙更さうであつて、靜觀叙述を主とするものは、嵐が靜まつてから餘程の時を經なければ創造構成せられることが困難です。これは創造構成の心理上自然の結果でありませう。それに外面の事情から考へても、混亂の時代には物資は缺乏する、價は高くなる。人間生活に必

要な極めて基本的な日用品、たとへばパン、薪炭、火、衣服といふやうなものゝための心配が眞ッ先きに來るやうになつて、それ等以外のものは差當り必要のない、贅澤なものだといふことにさへなつて來ます。藝術の中でも繪畫、彫刻などが殊に不必要な贅澤なものになつて來るばかりか、文學さへもさういふ風に考へられがちになります。印刷機の不足、インキの不足殊に紙の不足から印刷刊行は非常に少なくなり新らしいものは自然書かれもしなくなるといふ次第になるのです。

千九百十七年の三月革命が起つて後のロシヤは、だん〳〵さういふ徑路を辿つて來ました。日露戰爭後のロシヤの社會事情に伴つて、出版言論の自由がいくらか許されて來たと同時に、それから世界の大戰の起る前までの凡そ十年間は、ロシヤの出版界は異常に發達し、盛況を示しました。それが千九百十七年の革命以後は、また急に火の消えたやうになりました。敎科書さへも出なくなり、今まで容易に手に入れることの出來た、ありふれたプーシュキン、リエールモントフ、トルストイなどの最も一般に普及してゐる古典的な作集の出版さへ、珍らしがられました。殊に出版界の不況のどん底は千九百十九年の中頃から千九百二十年の秋頃まででありました千九百十八年の秋から、全ロシヤを通じて、共産主義でない一切の定期刊行物は禁止せられました。それは恰度ボリシェヰキと反ボリシヱヰキとの内亂時代の始まりでありました。ロシヤの文學、ロシヤの出版は、恰度その頃から二つに分れました。一つは共産主義ロシヤに於ける文學乃至出版、今一つはロシヤ本國を離れた國外に於ける移住ロシヤ人の文學乃至出版です。此二つの分裂は今でも尙對立してつゞいてゐます。

ロシヤの本國では、これまで度々誤傳せられたやうに、一切の出版事業が國有にせられたわけでもなければ、國家の獨占事業と法律的になつたわけでもなかつたのです。しかし、事實上殆ど一切の出版事業は、國立出版局（Государственное издательство）に、集中統一せられるやうな結果になりました。獨占とか專賣とかいふことは、一體に害が多いものですが、殊に出版方面の仕事の獨占的集中は、その當時の政策上已むを得なかつたのではありますが、自然にロシヤ國内に於ける出版事業、乃至文學一般の進展のためにおもしろくない結果を生ずるやうになりました。勿論その當時も、グルジェビーンとか、アルコノーストとかいふ私人經營の出版書肆もあるにはあつたのですが、經濟上の原因から、或る場合には寧ろ共産主義者自身の意志に反して、だん〳〵にその仕事を休止し、新らしいものを出せなくたつてしまひました。これは政府當局の禁止とか檢閲とかのためといふよりは、それとは全く無關係に、純然たる經濟上の理由からであつたのです。

勿論こゝでは古典の再刻を問題にしません。全くの新作品の出版を主としていふのです。しかし、この自由な出版の沈衰休止といふことを、直ちに政府の文學者に對する迫害と結びつけて考へては間違ひです。ボリシェヰキの時代になつてから、學者などで死刑にせられたものは、傳へられ、もしくは漠然と想像せられてゐるやうに多くはありません。極めて少數のやうです。(ヤーシェチェンコ教授の記すところによると、千九百二十年の終頃迄に、四人だけ銃殺せられた學者あり、その名前も分つてゐます)寧ろあの混亂時代に於いて、最も安全な位地に置かれてゐたものは文學者や學者であつたのです。文學者や學者に對する尊敬は、十月革命即ちボリシェヰキ革命以來最初からの態度で、今までも變りはありません。勿論、それに拘らず文學者や學者の生活狀態がみじめなひどいものであつたのは事實でせうが、それは特にそれ等の人々が苛められたといふためではなく、一般に、自然の勢ひとして、打ちつゞく混亂内亂のために生じた生活の破壞が招いた窮乏の結果であつたのです。

3

そこで文學者の生活を維持し救濟するために企てられたのがゴーリキーの發意に成る「全世界文學」の出版であり、ゴーリキーの關係ある出版書肆グルジェビーンの出版事業でありました。これ等の事業のためには政府方面でも援助を惜しみませんでした。尤もこの企ても今日までに多少の外國文學の飜譯その他多くは古典を出した位で、これといふ程の仕事は出來てゐませんし、新らしい創作とは沒交渉です。グルジェビーン書肆の方では文學に限らずあらゆる方面のすぐれた人人の傳記の出版を計畫したのですが、これとても計畫の豫定は大袈裟のやうでしたが、その實質は、今まで既にロシヤの出版界讀書界が所有してゐたところのものを、形をかへてひろく普及せしめるといふ位のものに過ぎなかつたのです。また現代文學者の作品を出すといふ方面も大抵これまでに一度出たものを再版するに止まつてゐました。政府のプロパガンダのための出版以外に、やゝ目ぼしさうなものとしては、ポクローフスキーの「ロシヤ文明史」、ブハリンの「過渡期の財政」スハノフの「革命の覺え書き」等であつたと傳へられてゐます。千九百二十年の終りに近くなつて、この出版事業の沈衰休止に堪へられなくなつた心ある人々の聲が聞えるやうになつて來ました。それは千九百二十年十二月十七日の日附でモスクワにある全ロシヤ文學者聯盟の名で、文教委員ルナチヤールスキーに宛てた覺え書きとも請願書とも見るべきものです。その趣旨は――この三年の間ロシヤの文學者は國内生

活の安定とともに再び自家の作品を公衆の前に印刷して提供する時の來るのを待つてゐた。而かも今に於いて尙且つその機運は來ない。千九百二十年に於いて、ロシヤの文學者は自作を手寫して書店に出したり、室内で相互ひに朗讀して聽いたりするより他に作品を公表する手段を持たなくなつた。現在全ロシヤ文學者聯盟の調査によると創作乃至批評の著述は千五百種ばかり原稿のまゝで印刷せられずにある。印刷所は凡て政府の印刷のために用ゐられてゐる。政府が現在政治上の必要から民衆にその方面の印刷物をひろく分つことを第一として、他を顧るに遑なき有樣になるといふのも、已むを得ないことゝして吾々は了解する。しかし政府はまたその國の文學の存在を保證すべき重大な責務を有する。吾々はこの三年間自から出版事業を計畫し自力によつて事を成さうとさへして來た。しかも今や出版所の閉鎖、用紙の沒收、印刷所の閉鎖一旦與へられた出版許可の取消、當局者が國家の必要上自から著者及び出版者と結んだ契約の取消、かういふことによつて遂に此の上文學者の生存は不可能にならうとしてゐる文藝の司にある足下が文學の運命、文學と讀者との關係の可能を保證することに盡力せられんことを望む云々——さつとこんな樣な意味のものです。これには、サクーリン敎授、リヲフ・ロガチェーフスキー、エフロス、クレキッチ、チェボタレーフスカヤ、ウェーラ・フィグネルなどが全ロシヤ文學者聯盟の全權委員として署名しました。

これと殆ど時を同じうして、ゴーリキーからもまた、第八回サヰエート全ロシヤ會議へ公開狀を發しました。これは千九百二十年十二月二十日の日附で、ペトログラードで書いたものです。

ゴーリキーの公開狀には、ロシヤ全國を通じて刊物の不足缺乏の甚だしい狀態が述べてあります。政府の印刷出版にかかる宣傳用の册子さへ、十分に行き亙らない狀態で容易に手に入りがたいこと、かりに手に入つても、印刷のインキが惡くて非常にうすく讀みにくいこと、活字が磨滅してゐること誤植の多いこと、而かもかういふものさへ十分に手に入らないので、折角讀むことだけ覺えた民衆が、だん／＼その讀書能力を減退せしめ甚だしきは文字を忘れるに至る傾向さへあること。學校の敎科書の極端な不足は、敎育の結果を極めて不十分なものにするであらうこと、甚だしきは十五人乃至二十人の學生が一團となつてやつと一册の專門の敎科書を手に入れるといふ程に書物が不足し從つて高價であること、一般に創立以來三年に及ぶ國立出版局の印刷出版に一定の方針もなく經營宜しきを得てゐないこと、宣傳用の册子以外の文學書でも、選擇を誤り、不用不急のものを濫發して有用緊切の

ものを沿してゐること、殊に科學、工業方面の大學程度專門程度の出版の乏しいこと。要するに國立出版局の無方針無秩序、局に當る人宜しきを得ないことを指摘し、速かに調査委員を設けて、その事業の不振の事實を明らかにすべき必要を說き、國立出版局の事業が十分に行はれないかぎり、サキェート全ロシヤ會議は個人の出版事業を止めるやうなことをせず、寧ろこれを活用して國內に書物の十分行き亙るやうにすべきであると說いてゐます。

4

前にも述べたやうに、革命後のロシヤ出版界のどん底も、千九百二十年の秋頃までで一とくぎり付き、その年の暮からは、既に上に掲げた全ロシヤ文學者聯盟やゴーリキーの公開狀などが示す如く、國立出版局（Госиздат＝Gosizdat）に對する非難となり、個人の出版事業を更に自由にし、更にこれに便宜を與へねばならぬといふ主張となつて、漸く千九百二十一年以後のロシヤ出版界の復活を見るやうになつたものと察せられます。この事實は、千九百二十一年の春、ペトログラードの出版書肆「コーロス」の出版監督キチィヤゼフの書いた「サキェート・ロシヤに於ける私人經營の出版事業」といふ册子が、明らかに語つてゐるやうです。この小册子はサキェート・ロシヤの政府乃至有力な各團體へは特に配布せられたもので、隨分大膽に國立出版局を非難したもののやうです。この册子の內容はさういふわけで一面抗議であるとともに、また他面その頃のサキェート・ロシヤ國內に於ける出版事業の狀態を詳記したものであつて一般の出版事業が事實上殆ど政府の獨占事業のやうな狀態から、一轉して多くの私人經營の出版を復活せしめるに至つた、一轉機に於けるその方面の消息を知るに最もよい材料であらうと思ひますから、それによつてお話をして見ませう。

キチィヤゼフの記してゐるところによると、千九百二十年に於けるモスクワの重もな出版書肆だけが、凡て五十八ヶ所あり、その中十ヶ所は以前になかつた新店であるといふことです。これがモスクワだけの話なのです。勿論これ等の本屋は殆ど何も出版しないがしても年に二三册位のものであつたやうです。

最初にペトログラードの方から申しますと「アルコノースト」といふ出版書肆は、創立は千九百十八年の七月といふことになつてゐますが、こゝからは多くシムボリズムの傾向の文學者のものが出てをり、千九百二十年の初めまでに二十八種の出版があつて、その內二種だけが舊作の再版、アレクサンドル・ブロックの晩年の作は全部こゝから出てをり、（詩では

有名な「十二人」、論文では「ロシヤとインテイエリゲンツイヤ」など）、アンドリエイ・ビールイの詩」キリストは甦れり」やその他の論文、イワノフ・ラズウームニクの評論文、その他にミゾフのもの、レーキャチエスラウ・イワノフのもの、イワノフ・ラズウームニクの論文、その他に雜誌風の文集「冥想家の覺え書き」を出してゐます。また「ブイロエ」といふ本屋からは、千九百十七年創立以來二十六種（内、十三冊は雜誌「ブイロエ」）を出し、主としてロシヤ革命運動史の資料の出版を企てゝゐます。アナルホ・シンディカリスト組合の「ゴーロス・トゥルダ」といふ本屋からは、千九百十七年創立以來三十八種出版した中二十四種は全く新らしいもので、バクーニン全集五卷の出版の如きは、ロシヤでは初めてのものです。その他シンヂイカリストやアナルヒストのものが多く出てゐます。

「クニーガ」といふ本屋は千九百十七年から千九百二十年の間に、百五十種ばかりの書物や小册子を出してゐます。多くはマルクシストのものですが、その出版目錄の中に、ロージユコフの「比較歷史より見たるロシヤ史」の第一卷（四百五十ページ）は既に出てをり、第二卷ももう多分出たでせう。千九百十八年の二月に創立せられた「ナウーカ・イ・シコーラ」といふ本屋からは二十三種のうち十八種まで新らしいもので多く一流の學者の研究的なものや專門學生の參考書風のもので、コトリヤレーフスキー教授の「吾等が遠からぬ過去」、同教授の「十九世紀」ローゼンベルグの「佛教哲學の諸問題」その他、哲學、哲學史、經濟學、社會學等の相當中實（なかみ）のありさうなものが出てゐます。コトリヤレーフスキー教授の「十九世紀」は、十九世紀に於ける西ヨーロッパ全體に亙つての文藝思潮評論ともいふべきもので、この本だけは私も手に入れることが出來ました。私人經營の出版事業が沈衰してゐるといつても、上に擧げたやうな種類の書物が、千九百十七年革命が起つてからその沈衰の極に達したといはれる千九百二十一年の春頃迄の間に、ともかくも出てゐるといふところを見れば、一面からはロシヤといふ國が、窮乏の極にあるやうなことを言はれながら、またたしかにさうでもありながら、またその一方で不思議にゆとりのあるやうなところも見られます。いくら窮乏の極に陷つても、自分の大事なもの、——眞の知識、心からの主張、それを多くの同胞に傳へようとする意氣、希望、さういふものだけは、書く人も、出版業者も失ひ切つてしまはないでゐるといふ風にも思はれます。このことは尙幾多の事實によつて感ぜられます。

能率主義者なる人類其他

長與善郎



能率主義者なる人類

人類は曰ふ。

『俺は今の處、まだ〱能率主義者だ。なぜと云つて、俺は事業主義者だからね。それにまだ若いのだからね。尤も昔は今ほど事業に實が入つてはゐなかつた。もつと單純な腕白小僧だつたから、俺は夜中にふと眼をさました子供のやうに物を考へ、空想し、晝間は太陽の下で遊ぶ事に夢中だつた。だから仕事の能率抔と云ふ事は大して考へる齢ではなかつた。又ずつと先きになつて俺が老境に入つたら、俺は又今ほど事業熱に驅られる事もなくなるだらう。俺は自分の一生の事業の整理をして、それを質によつて篩にかけ、その篩に殘された傑作を今よりもずつと餘裕のある鑑賞者の立ち場に立つて眺め乍ら、靜かに己れを樂しむ時が來るだらう。そして其時は俺はもつと落ちついた好々爺になつて、俺が我武者羅な能率主義者であつた間に生んだ多くの不平均や凸凹を平らかにならし、隱れたる功勞者と犧牲者とに相當の榮位を與へ、悔みをのべ、又その間に俺が慌しく取殘し、見落した多くの寶を地下から掘り戾すであらう。無論それも完全な正しさと、公平に於て——とは行くまいが、とに角俺はそれに心掛けるだらう。

併し、今は、俺はまだ若い。俺は何はさておき、俺の事業に專らだ。從つて俺は何よりも自分の仕事を重大視する。仕事の能率さへ上ればいゝのだ。今の俺はどんな道徳や、社會問題が何を云はうと、叫ばうと俺の仕事の能率を引き下げ弱める主張には耳も貸さない。多くの犧牲が拂はれる事にも俺は一向頓着しない。どうもそれは豫定で仕方がないのだ。それは殘酷だ、ひどいと云つたつて駄目だよ。俺は頑固な能率主義者なんだから俺はどうせ事業にかけては氣違ひじみてる

るんだから。

俺は此能率主義によつて資本主義を生み出した。産業主義を生み出した。而して見よ。能率は眼に見えて上り出した。又上るのが當然だ。俺は人間の慾と野心と云ふ奴に油をそゝいで、奴等が本當にムキになれる活路を開いてやつたのだからな。併し實を云へば、其意味での能率主義者と云ふのは矢張り俺の一面に過ぎぬのだ。俺の本當に欲する事業は實はまだまだ深く大きい。俺は自分の一生の全事業によつて俺を不滅化し、俺自身を救い度いのが目的だ。それで、俺の一面の能率主義は、同時に他の慾望の能率を刺戟する。俺は常に生き生きとして、進歩して行き度い爲めに間斷ない刺戟を必要とする。俺の裡の凡ゆる本能を互に刺戟させ合ふ。物質によつて精神を。精神によつて物質を。道德によつて藝術を。藝術によつて道德を。正義人道に對して直接には無頓着なるものによつて正義人道を。又人道主義によつて他の主義を。そんな風に。凡てそれは刺戟によつて俺の事業の能率を全體として擧げんが爲めである。

大きな板を平らかに上に持ち上げる事はむつかしい。それはどうしても彼方へ傾ぎ、此方へ傾ぎし乍ら段々に擡げられる。まあそんなものだ。俺の體は人間にとつては小さくないからな此方へつつかへ棒を立てれば彼方へも立てる。彼方のを高くすれば此方のも高くしなければならぬ。

かくて俺の一面の能率主義から生れた資本主義は、それか餘りに他の方面の能率主義を壓迫した事の爲めに、今や非難と責苦の的となつてゐる次第だ。と云ふのは、俺も實はもうそれで獲る丈けのものは豫想以上に獲たので、少しは又形を變へてもいゝ氣になつてゐるからだ。

しかし、それに代るに何を以てするかね。もしそれに代る事が俺の事業の能率を少しでも弱める事であつたら、それは決してものになる事は出來ないだらう。そのやうな空想的な主張に始めから成り立たない事は豫め注意しておくよ。

今日の資本主義に代るものは必ずや更により多き能率を有する主義でなければならない。

より多き能率が、より正しき組織の中に於て約束され、用意された時にのみ、今日の資本主義は自ら息を引き取るであらう。さもなくして徒らにその資本主義を崩すものゝ上にはロシアの饑饉があまねく來襲するであらう。

今日の資本主義が兎に角斯の如き根強さを有するのは何故か。それは俺の一面の能率主義に根を張つてゐるからの事だ。そしてその能率主義は俺の尨大な事業慾に根を張つてゐるからの事だ。

社會主義者は俺の此性質を知らなすぎる。俺の性質を知ら

ず、それに從屬して生きる道を見出す事の出來ぬ者に、俺はうか〱俺の愛兒を任せる氣にはなれない。

一萬年後、十萬年後の俺の狀態は、俺と雖も知らぬ。が、兎に角俺はまだ若いのだよ。そして事業熱に驅られてゐるのだ。勞働を何時間に定めるべきか。そんな事は俺は知らぬよ。併し兎に角能率さへ上げてくれゝば今の俺は文句は云はぬのだ。能率を下げたら文句を云ふぞ。

其事をよく心得て新しいすなほな生活法を見出すがいゝ。組織を立てるがいゝ。こはすべきものはこはせ。しかし無理をしたつて通るものぢやないよ。俺の性質を變へようとしたり、それに逆つたりするものは俺は干乾しにしてくれる。

俺はな、正直の處、死ぬのは怖はいのだ。死が怖ろしいのだ。それは君達と同じ事だ。そして俺は今その死が最も怖ろしく感じられる最中の齡頃にゐるのだ。だから俺は仕事に多少あせるのだ。昔、子供の時代には俺は大の臆病だつたが一方暢氣だつた。快活だつた。又ずつと老年になつたら、君等の齡で云へば八十か九十になつたら、死に對する恐怖も餘程今とは違つて來るだらう。その時分には俺も大分事業をして一種の自己滿足と、生活に對する倦怠とを感じ出してゐるやうからな。又肉體の力も、肉體としての生きむとする慾望もよほど衰へてゐるだらうからな。今よりは生に對する執着も減退してゐるにちがひない。

しかし今の俺は精神的にも肉體的にも慾望が熾んだ。最も熾んな時代だ。だから俺は死が實にいやで、仕事に夢中なのだ。やがては死を喜んで、花嫁との結婚のやうに迎へる時が來るかも知れない。俺はさうなり度い。そして死が俺にとつて如何にも自然で、苦でなく、不調和でなくしたい。が、俺は今その用意をしなくてはならない。

之で俺の一面の氣持ちはほゞ分つたらうな。」

二二、二三、二五、

唯一つのものが必要だと云ふが

『なくてならぬものは唯一つなり』と云ふが、そしてそれは眞に宗教的な人間のみが痛感する事の出來る深い實感であつて本當の事ではあるが、併しその唯一つの缺くべからざるものを持ち、其上に猶ほ多くの寶を所有するものがあればそれは正に一段と幸福な事である事は分りきつた事にちがひない。

唯一つの必要物さへあれば、と云ふのは本當に生きんとする者の人生に於ける覺悟である。いざとなつたら、と云ふ場合の據り處である。確かにその缺くべからざる唯一つのものは人生に於ける如何なる他のものにもまさつて吾々人間に貴重なものであり、それを把持する者は惠まれたる幸福者であ

ろには相違ない。併し吾々は其のやうな「いざとなつた場合」そのやうな覺悟が必要な場合を人生と、他人とに願ふべきであらうか。常住に生か死かの覺悟の中にゐなければならぬと云ふ狀態は、願ふべき至福の狀態であらうか。人生がそれほど餘裕のない、寒冷落寞なものである事は人間の願ふべき境涯であらうか。

吾々は、いざとなつた場合にはいつ何時でもそこに引き上げて何物にも脅される憂いのない安住の城を高き心靈の中に持ち、而も生活として生を樂しましめ、豐かならしめ、幸福ならしむる他のいろ〳〵の物財――缺くべからざる唯一つの物より見れば贅物となる處のもの――を所有する精神と共に物質的にも惠まれた幸福者――ゲーテーや、ロダンの如き――を知つてゐる。

社會主義によつて思想と感情とを歪にされた人間は又其人らしく考へるがいゝ。僕は唯自然界に生きる一個の生物として、又人間としてすなほに、單純に、自分の本當と思ふ事を考へる。そして其れを子供のやうな心であくまでも主張する。

自然は豐かである。富んでゐる。自然は決して貧乏主義者ではない。むしろ過剩主義者である。自然は吾等に必要物丈けを與へもせず、又必要物丈けを生めとも云つてゐない。汝の欲するあらゆるものを生み作り、そして豐かに富めと云つてゐる。

吾々が只肉體に於て生きる上には、星や月は必ずしも必要ではない。八大遊星が五大遊星であらうと、又ある星座が天空から消えて了はうと、吾々には差支へのない事である。少くともそれらのものは空氣や、太陽や、食物のやうに吾等生物にとつて必要でない事はたしかであらう。又花や、草木や、禽獸も是非必要なものではなく、青空が青い事の必要もないであらう。青空は常にもつとどす黑く汚なく、星の光りはたとへ見えても鈍く濁つたものであつてもよい譯である。しかしそれらのものがたとへ吾等に必要でないにしろ、それらの存在が知らず〳〵の中に吾等の心に及ぼしてゐる感化、影響は不必要なものとは云へないであらう。否、たとへそれが非常に必要でないとした所で、それらのものが存在してくれる事はどの位吾等の惠みであり、喜びであるか知れない事は明かな事である。そしてそれが實に「文明」と云ふもの眞の

文化と云ふものゝ性質所以なのである。

進歩した文明の證據は單に必ず生活に必要である事物のみに人間の需用が止まらず、更にそれ以上に人間の愛と慾望とが廣く天地萬物の事物に及び、そしてその博い要求が滿足せしめられる如きものが多く供はつてゐると云ふ事である。人間が生きつて行く上には之丈けはどんな事があつても缺くことが出來ないと云ふ必要物のみが備はつてゐると云ふだけの生活が、決して幸福な狀態でも、讃美すべき狀態でもない事は無論の事である。

野蠻人の生活はそのやうな必要物のみで成り立つてゐる。しかし彼等の生活とても蝶々や、鳥獸のそれよりも遙かに複雜である事は明白な事で、その生活が簡易と云ふ點では迚も禽獸には及ばない事も無論である。蝶は花の香ひにさそはれてその蜜を吸へば足りる。雄は雌を戀するのではなく、只生殖の故に求めて交尾すれば足る。そして彼等はその食つて生きる事と、生殖以外の事には全く興味を持つてゐない。鳥はどんなに美しい花が傍らに咲いてゐようと、どんな美しい蝶が眼の前を飛んで行かうと、それよりは只一粒の粟を選んでその方へ飛んで行く。そして又そこが美しいのである。獅子が溫室を作つたり、籠の中に小鳥を飼つたりしてゐては滑稽であらう。凡て文明人であればあるほど鑑賞が廣くなり、愛が廣いのである。野蠻人の簡易生活の中にある面白味、無邪氣さは野蠻人自身には少しも分らないのである。小泉八雲が日本人は蛙の聲にも詩を見出してゐると云つて驚いた話があるが、芭蕉だつたかは馬の尿（いばり）にさへ詩興を見出してゐる。一茶はシラミを詩にしてゐる。かう云ふ例は限りない。美に對する愛と鑑賞が進めば普通の美では物足りなくなる。そして普通には醜と思はれるものゝ中にさへ一種の美と力と、生命とを見出すやうになる。しかし美に對する愛でさへ既に「必要」と云ふ原始的條件よりは進化したものなのである。

此事は少し專門的に考察すると、興味ある問題であるが玆では餘り長くなるから省く事にする。とに角人間は生活に必要なもの丈けで滿足に生き得るにしては事實もつと高尚なものに作られてゐるのである。吾々がもし自己の生活に出來る丈け簡易淡白である事を望むならばそれは道徳的な事であらう。しかしもしそれを人生と他人とに請求して、人生と、他

人の生活とを貧寒にする事を主義とするならば、それは不道德である。自己の生活を簡易ならしむる事の目的は他の一般の生活を豐富ならしむる事でなくてはならない。自己を苦しめる事は他人を安樂ならしめんが爲めでなくては嘘である。吾々は人生が少しでも富み、贅澤に足り、華麗の如く美しくなる事を願はなくてはならない。それが人間の道である。

態々そんな風に願はなくとも人生にはもう贅物があり餘つてゐる。そしてそれが禍なる哉、文明とされてゐると云ふならば、一應は道理であるが、道德のみが文明ではなく、道德のみで「善」が達せられるものでもない。美は道德以上のものである。そして美がなくば、最高の善は決して達し得られないのである。今日の文明に弊害が伴ひ過ぎる事は事實であるが、さればと云つて、吾々の生活が原始人のそれの如く、文化の弊害もない代りに荒凉として美意識もなく、デカダンスもない代りに哲學や、詩や、發達した音樂美術や、劇場や美術館がなかつたならば、そう云ふ人生は吾々の滿足し得る理想的なものであるか否かは言を俟たないであらう。

併しデカダンスでさへも發達した藝術家が見れば一種別のものである。野蠻世界には決してデカダンスはあり得ない。デカダンスの中には捨てがたい、進み切つた文明の華がある事を忘れてはならない。高尚なデカダンスのある事はそれ丈けでいかに文明が進んでゐるかゞ示されてゐる。その證據はフランスと日本にはそれがあつたがアメリカにはない。アメリカは野蠻人が一番先きにその幼稚な感じに於て驚嘆する丈け野蠻に近いからである。徳川末期の文明抔野蠻人に介るものではない。

とにかく人間は作られたやうに生き、作られた方向に延びるよりない。そしてその作られた方向は祝福されたる方向である。逆悖りをしようとしたつて出來る事でもなく、生きられもしない。吾々は人類の此文化主義を飽く迄押し通して前進するよりないのである。

一九二二、一二、二六

婦人として議會に要求する第一のもの

議會其のものゝ改造

山田わか

議會に對して要求したい事は數々ありますが併し私共の殊に婦人の要求に議員達が耳傾けてそして眞面目に取り上げて呉れるでせうか？　今日の政治が國民の意志とは全く無關係のものであると云ふことは世間周知の事實です。私共が議會に對して要求することは、それは唯一種の主觀的の氣やすめに過ぎません。

私共が議會に要求を出すには、こちらでボタンを押せば向ふでベルが鳴ると云ふ風に、私共の意志と議會の仕事との間に連絡が取れて居なければなりません。けれども、今の政治組織はさう云ふシカケになつて居ないのです。

私共の要求は議員達には馬耳東風でありますですから、今、此處ではどうすれば議員達が私共の要求を聞くようになるかに付て書きませう。

議會政治と云へば、國民が國民自身を治める筈のものに定まつてゐますが、併し、事實はそれに反對です。どうしたら、議會政治が其の實を擧げ得るかは、要するに、テクニツクの問題で、今の處では政黨と云ふものがあり、これが國民を代表して居るものと信じ、國民は政治の一切を政黨に任して置いて、そして、議員を通して政黨に注文するようになつてゐます。

けれども其の政黨は國民の意志などはそつちのけで金力腕力又は策略によつて政權を自分等の手に入れ、そして、自分等の主張を通さうとしてゐます。そして一黨派の成功は他の黨派の失望と云ふことになつてゐますが、それが一般國民とは何等の關係もありません。普選が行はれゝば其の弊が除去されるように信じて居る者も今では澤山ありますが、併し、それは當つてゐません。

で、其の理由は、個人對社會の關係が全く間違つた基礎の上に置れてあるからです。人は獨立に考へ、感じ、判斷すると以ふ理由で一人切り離した個人を社會の單位と見る誤解に陷つて居るからです。併し、今日に於て、進歩した人は、一人切り離した個人と云ふものゝ存在を信じません。

所謂個人なるものは、相互作用によりて創造されるものです。個人は社會の要素である

と同時に社會生産物です。故に、個人は個人として社會に直接反動を與へません。相互作用は一方には個人を他の一方には社會を同時に造つてゐます。言ひかへれば、個人對社會の關係は行爲でも反動でもなく一つの無限な相互作用です。

其處で、前に云つた議會政治に於て、國民が國民自身を治めて行くテクニックは先づ政黨の代りにグループ組織にならなければならないでせう。政黨と云ふ死んだ固定した形式の代りに、生きたグループ組織が國民全體の意志と同情と熱した判斷とから成立した政治團體を造ります。さう云ふ團體が出來た時に、始めて、私共は私共の慾望を議會に提出し、それが眞面目に取り扱はれるやうになるでせう。

先づ、それ迄は議會に要求を提出することは無駄なことであるでせうから、私の議會に要求する第一の問題は議員政治のテクニックの改造であります。

眞に尊敬と信頼に價せよ

大橋房子

全的な尊敬と信頼とに價するほどのものであれ――これは凡ての男性に對する私の希望であると同時に、その男性の代表的集團の一つとも見ることの出來る議會全般に亙る空氣と、その空氣を組成する議員各自のポーズに面接する場合、絶望的な吐息と共に發せられる嘆聲でもあります。今のやうでは、議會政治そのものに疑惑の眼を注がずには居られなくなりますし、その疑惑をつきつめて行くと、婦人參政權などといふものも與へられない先に返上しておいた方が氣がきいてゐるようにさへ思へて來ます。

民衆よりも立ち遲れた議會

鷹野つぎ

婦人が現代の議會に向つて、多くの事を要求する前に、先づ現在の社會組織の根本的改革を考へたい。これは婦人にとつて重大な、總べての要求の本源として考へられる事は勿論であるが、寧ろ現今では、男子自身にとつても更に一層不滿足なものであらうと思ふ。

斯う云ふ過渡時代にあつて、婦人が自己の進展を叫び、多くの要求を提げて社會に起つことは、實に困難な事である。考へるまでもなく從來の議會に於て、總ての代議士によつて提案され討議されたる問題の中には、一つとして婦人の要求するものを本旨として、眞劍

に考案された場合はなかつた。一見していかにも彼等の餘技として、義理的に討議されたに過ぎない、斯う云ふことは婦人にとつては一種の侮辱であつて、寧ろ現今の議會要案の輕浮、薄弱であることを痛感するものである。

婦人として議會に注目すべき點は、先づ此の一事でなければならない。是れを思へば、現代の議會——代議士と云ふものは、餘りに政治家氣質に囚はれて居て、今日民衆の意圖するところよりも、遙かに偏狹卑近であり、且つ雜駁である。それだけ民衆よりも立ち遲れてゐる觀がある。斯うした彼等に對して現代の婦人の要求するものが、ともすれば等閑に附せられようとし、敗北の結果に終らうとする事は洵に止むを得ないとかと思はれる。

併し乍ら何時までも此の狀態が續くものとは思はれない、必ず何時かは人類共存の上に於ける議會として、彼等も眼從める時がくるであらう、近時婦人にして政治運動に携はる者が年一年と增加しつゝあるに際しても此の機運に並行すべき力ある議會として、一刻も早く覺醒せん事を希はざるを得ない。

人格なき議員の自滅を望む

兒玉眞子

私の議會に要求する第一のものは婦人觀とせず寧ろ國民として眞に議員の方が人民の代表者であると云ふ感じを民衆に與へる云ふことが立憲政治要道の第一であると思ひます。云ひかへれば黨派心の爲めや。賣名の演説や。紳士らしからざる卑論惡罵。すこしの教育なきものでもようしないような穢らはしい行動や。野次。あれで憲法の精神などが論じられましては憲法が涕くであらうと思ひます。

民衆の代表者としての、同情、威厳、識見、辯舌、それらが十分とまではゆかずとも、せめて我利、亂暴、無節操、雷同、など云ふやうなつまらぬ議員の自滅する事を第一に要求いたします。その上で婦人としての要求は澤山御座います。が…………。

悲劇を深大に爲す勿れ

奥むめお

私は、現在の議會に對しては、何にも、積極的に要求を持つことが出來ません。たとえ私達が、何等かの要求を、現代の議會に對して持つた所で、議會が現在のやうである限り、私達の要求は無視されるか、笑殺されるか、或ひは利用されるか位のもので、決して、眞面目に取扱はれる筈がない事は、あまりに解りきつた事であります。何故ならば、現在の議會は、特權階級を代表してゐるだけで、一般の民衆の意志を、況してわたし達婦人の意志を、代表してゐないからです。ですから、特權階級の利權の擁護とか、その伸張とかに

は、非常に役に立つかも知れませんが、一般の民衆のためには、從つてわたし達婦人のためには、非常に縁遠いものです。

私達は、現在の社會制度が根本的に革つて、議會といふものが、或ひは、それに代る何等かのものが、必ず民衆全體を代表したものである事を要求するのです。ですから、私達は現在の議會に要求する代りに、その要求する事を、民衆に要求し、期待するのであります。この場合、民衆とは、その半數に、婦人を含むものである事は云ふまでもありません。

もし、强いて、現在の議會に對して何かを要求するとすれば、それは消極的なものでありますが、せめて、近頃のイギリスの勞働黨ぐらいの政綱を持つた政黨が、近き將來に我國の議會にも出來て、今までのやうに、政治が、政黨政派の權力の爭ひである事から、民衆を代表したものと、さうでないものとの對抗となつて、それが次第に發達して、結局、社會制度を革めてゆく一助にもなつて異れたらいゝだらうと思つてゐます。

ですから私は、普通選擧も(勿論この中には婦人參政權を含んでゐます)、現在の議會を根本的に組立て直してゆく爲に必要なのでありますから、現在の代議士達の好意に依つてその手を經て實現を期さうとする運動には、興味をもてません。むしろ、民衆は、今の議會に地歩を占めて得々としてゐる人達とは、全で違つた事を考へて居、全で違つた方向に向つて、一歩一歩と着實な歩みを進めて居るのである事を、彼等が知つてくれたらいゝと思ひます。

そして、彼の人達が、今の立場に頑張つてゐれば頑張つてゐる程、より少くて濟む筈の、社會改造に必然的に伴ふところの悲劇を皆々深大にするばかりである事を、とりわけて婦人の立場から云ひたいと思ひます。

舊きものゝ上に

小見山富惠

兎に角○○○○一人出ないことを見ても、いかに彼等政治屋の良心が痲痺し、時代を洞察するの無能であるかを知ることが出來ます。しかし、今日の議會がどれ程に、民衆から忘れられ、白眼視せられ、面を覆ふほどな陷落と倦怠に沈淪してゐやうとも、六千萬民衆の生活の上にかゝはる政治を、全然默殺し去ることは、怯懦か不忠實か、若しくは一切の上にある偉大なるものかであらう。

議會の萎微して振はないのは、巳に來るべきところに必然に來つたものであつて、彼等の革命と事業とは滯りなく爲し遂げられて終つたのである。彼は今や老朽せるその膨大なる病體を横たへて、黑き死の影に惱まされてゐるのである。

この時期に、時代を繼ぐべき若き新興階級と共に携へて婦人も起ち上り、新らしき社會に適應する、新らしき政治への飛躍を試みることは、最も正しき相繼者としての使命であり任務であらう。すべてがこの意味に於ける

要求努力でなければ、何の意味をも爲さない。彼等が不眞面目で、吾々の聲に耳を傾けないからといつて、努力を惜しんではならない。頽廢の議會に、新鮮な血と生命を送るものは、眞劍な民衆の力より他には何物もない。

小さくとも、弱くとも、覺醒の普及と團結とは、弱きもの貧しきものゝ唯一の武器である。一度の失敗に挫折してはならない。大きな岩石は一發の火藥では、よく粉碎されるものではない。未來と共に生きるものゝ前途には數えきれぬ、失敗と挫折とが待ち設けてゐる。失敗は希望への第一歩である事を思へば。

――プルジヨア婦人の暇に飽かした樣な、姦通廢止運動などといつた粋な考案は、生活のための鉄鎖な勞働の桎梏と、つきつめた貧困の冷めたい手に脅かされてゐる、われ／＼せちがらい職業婦人には一寸思ひだせない名案である。

婦人の參與しない、男子中心の今日の法律制度には（婦人のみでなく無産階級も同じく參與しないが）、婦人全體が服從しないと、ガンヂー式の無抵抗の抵抗と不服從とに倣つて頑張つても、致し方がない筈である。

しかし積極的に、建設と更新の意氣込でゆくとすれば、何は兎もあれ、婦人に不利な現行法の撤回と、幸福增進のための要求運動を起す前提としての參政權運動であるが、その中最も切實な私の體驗からいへば、何んといつても矢張り自活しなければならぬ婦人をして、（卽ち恒産なきもの）眞の人格者たらしめるために經濟的獨立、卽ち生活の安定を得しめる事がその第一のものであらう。（勿論これは婦人のみではなく性別を超えて階級的のものであるが。）但し、いくら生活の安定が與へられるにしても、十時間の直立勞働や、一週間交代の夜業や、カロリーの少くない粗食での安定では勿論ない。

母性の保護も、兒童保護も、共に無産階級特有の問題である。

新らしき意味に於ける敎育の普及解放も同じく、吾々間の重要問題である。

要求して容れられなければ、民衆は其實現のために戰ひ、――且つ實行するのみである。

民衆のドン底から湧きあがる要求を無視する議會の運命は、歷史が證明してゐるから呶呶する要もあるまいと思ふ。

議員の質の改造

吉屋信子

代議士の方達の考へ方、氣持、その各自持たるゝ思想――それが私共若き國民の心に近く觸れてほしいと思ひます。

さもなくば現在の樣では若き私共國民はもはや議會といふ立派な政治機關を何ら價値なき不良老年共の集りと見なしてゐるより外仕方がありません。

又、代議士の人達がもう少し女性觀を高められて、婦人問題に思ひを及して下さるなら女性の爲に不正な人道的にも法律などは速に改められるのに――と思ひます。

考へて見れば私共が議會に何かを望むからには、その前に議會そのものを形作る議員の方達の質に望まればなりませんのね。

教育の機會均等を望む

井上秀子

個々の問題につきて解れたい事は種々あるが自分は寧しろ根本的の問題より進みたい。

一、女子も眞に國家の一員として取扱はれたい。

女子が國家の一員であるとすれば參政權を得る事は當然の事である、此は女子が自己の爲にする權を要求するといふよりも女子が國家の一員たる以上其の國家に對して義務を盡す要求は卽ち參政權である、參政權を持つと云ふ事は團體の一員として當然の事である。

併し選擧權は其義務を盡すの自覺なくて要求する事は出來ないから實力問題となる。

二、教育の機會均等を與へられたい。

男女に性的心的の差別のあるのは當然である高等教育の門戶開放教育の機會の均等は一日も早く與へられたい教育の機會均等は女子の人格と實力を高め社會的經濟的位置をも高むるのである、今日女子の要求自覺は未だ此の機に達せずとの論もあるが併し此に機會を與ふる事は卽ち其の自覺、實力を發揮する事となるのではあるまいか。

要は教育の機會均等により其の人格と實力を高めて參政權の獲得に進めたい。

法律的獨立人格の承認

中條百合子

若し、今日の議會に、眞實な價値と信賴とを認め得るとしたら、婦人の提出したい、第一の問題は、婦人參政權、法律的獨立人格の承認に關してであると思ひます。種々な法規が、消極的意味に於て女性に不便であり或時は不公平であるとしても、直接法規作製に力める内部からの影響がなければ、改正も覺つかないでせう。

外廓を廻つて叫んでも、原動力とはなりません。例へば、民法第十四、五條。第七百八十八條、七百八十九條、八百〇一條、第八百十三條、最も注意すべき、刑法第百八十三條等に就いて何とかなさるべきであるとは感じても其等を、自分達の問題として、適切に考究する代辯者を、女性は持ちません。

積極的に見れば、女性の勞働、女囚取扱法、婦人陪審官制度の問題に關し、又は、幼兒保護法、授産院其他、我國には恥しい程貧弱な社會事業も、内部から働らきかける眞劍な力さへあれば、決して今のまゝ不活潑な狀態にとどまつて居ることはないでせう。

然し、現在の議會の有樣では、物を云ひ頼む心持にもなれません。眞實の婦人參政權の要求を持つなら、或は先に、普通選擧法の實施を團結し熱烈に追求すべきであるかもしれません。



新婦人協會の解散

山川菊榮

幾度か動搖の噂を傳へられ、幹部の頻繁な更迭を見た新婦人協會が、創立以來滿三年未滿で遂に解散し、新たに――とは云へ、新婦人協會の古き綱領と古き基礎との上に――婦人聯盟が組織された。新婦人協會の創立者たる平塚明子氏が、會の近狀に快からず、然も單に自ら脫退することに甘んじないで、自分自身を聯想される恐れのために、行きがけの駄賃に會名の看板をも持ち去つたといふやうな、子供らしい潔癖が一しきり新聞を賑はせた。

然しそれはともあれ、あゝ新聞で傳へられたやうに、日本婦人には團體運動に適した資質が缺乏してゐるから、といふやうな理由で、平塚氏が婦人運動に絕望されたとすれば、餘りに感情に捉はれた皮相な見解を惜しまぬ譯にはゆかない。日本婦人の團體運動と云つた處で、新婦人協會が生れて三年にも滿たず、家庭以外の世界と隔離され、夫や子供より外の人間と協力し親和し合ふことを罪惡視されて來た女の生活は數千年の歷史をもつてゐる。數千年來の習慣や偏見が、僅か二年や三年の團體運動の經驗で根こそぎ拂拭し得られるものであつたなら問題はない譯であるが、さうは思ふまゝにならぬ所に先驅者の苦心が潛み、またその犧牲の價値も潛むのではあるまいか。

婦人運動に限らず、一體に日本人は團體生活に向かないとか、協同的精神に乏しいとかいふことが屢々云はれる。然し

かやうな缺點は、團體生活又は運動を嫌忌し逃避することによつて除かれるものではなくて、それらの經驗をより多く積むことによつてのみ、次第に脫離することの出來るものである。何處の國でも、いかなる運動であつても、初期に於ては極めて少數の個人の指導者を中心とするのが常であり、隨つて中心となる少數者の思想や人物が特に重きをなすことゝなる。此時偶然に集合した少數者が、いづれも群雄若くは群小割據の狀態を演じて、運動が所期の如くに進展しないからとて、運動そのもの、又は大衆の運動に對する能力までも否定することは許されない。

勿論吾々は日本に於ける婦人運動の現狀を心細く思ふ點に於て平塚氏に讓るものではないが、さればとて運動そのものを、又は日本婦人の運動に對する能力をも否定する態度に出でるよりは、寧ろ進んで運動に參加することによつて、團體生活の訓練を作るべきであらうと思ふ。新婦人協會の動搖はいつも個人關係を中心として、主義主張の問題に觸れないので、外間の者には、新舊幹部の變更や會名の變化が、何の意味をもつかを解することが出來ず、その間に思想や政策に關する進步や發展をも認めることが出來ない。然しどの道、一般會員の輿論といふものが全然、又は殆ど全然無力であつて、少數幹部、若しくは活動的分子の專制が行はれてゐる限りは、運動が停滯し、頽廢するのは當然の結果である。私は平塚氏の希望にも拘らず、一般婦人が新婦人協會の内紛を見て、婦人運動に絕望することなく、一層の勇氣と一層の誠意を以て解放の運動に參加されることを希望するものである。多くの運動者が輩出すれば、婦人運動が賣名の道具に使はれることもなく、少數者の獨裁に委せられる恐れもなくなるのであるから、婦人運動の現狀に甘んぜぬ人々は、これを罵倒し去る代りに、自らその渦中に投じて、これが廓清と發展とを圖らねばなるまい。私は多少なりとも團體運動に顏出しした自覺あると稱する婦人達が、稍やもすれば「女なんて厭なものですね。」「女はとても駄目ですわ。」「女の仕事の齒痒さには呆れました」などと、運動の上の同僚排斥の口實として同性全體、隨つて自己の人格を否定した侮辱的言辭を平氣で口にするのを聞く時位、苦々しい感じのすることはない。同性に對して斯の如き不信用、斯の如き侮辱の態度を以てする者こそは、團體運動の反逆者であることを吾々は知らねばならぬ。同性の缺點をよく知ることは結構であるが、自分だけはその缺點に對する例外者であるといふ態度を以て、徒らに他の同性を一般に非難することは、却つて自己の無自覺、無反省、狹量を示す許りで、運動全體を阻害するとも稗益することは困難であらう。

——女教員會議とその使命——

十一年度創立委員を任命した女教員協會が、愈々來る四五月の交に創立大會を開く旨が報ぜられた。日本の職業婦人の中で、女工を除けば數に於て最も優勢なものは女教員である。女工の方は、數に於ては百萬に近く、全國工場勞働者の過半數を占めてはゐるものゝ、大多數は二十歳未滿の少女で、殊にはその中の大部分は、一時的出稼人であり、封建的な小規模の製絲工場に年期奉公をしてゐる者も多く、賃銀勞働者とは云ひ條、農村の舊い家族生活の中に根と幹とを留めてある者が多いので、どの點から見ても、男子の工場勞働者とはよほど性質を異にして居り、隨つて同じやうな立場に立つて勞働運動に參加することには多大の困難が伴ふ。

これに比すれば、數に於て女工の二十分一內外にしか當らぬ女教員は、年齢に於ても、廿歳以下の者は寧ろ稀であるし大體勞働條件を一にして居るといひ、種々の點から比較的團結し易く思はれる。その代りには彼等は小ブルジョア階級の出身であるがため、階級意識に目ざめることが容易でないといふ困難もある。勿論今回の女教員協會は、修養とか向上とかいふ神聖な目的のために組織されるので、女教員の地位改善とか、惹ては國民教育の主義方針に對する發言權とかを要求するために組織されるのでないことは明白であるが、苟も全國に亙つて同一職業に從事する婦人——然も相當の年齢に達し、相當の知識ある——を網羅する限りは、職業生活に伴ふ種々の不平や希望が、銘々の心頭に次第にはつきりと意識せられ、やがて具體化した要求となつて現れることは、まづ避け難い勢と思はれる。同一仕事に對する男女賃銀の差等撤廢、母性保護の問題等を始め、女教員諸氏の奮起を促すに十分な問題は目前に幾らでも轉がつてゐる。

此會が獨り小學女教員のみならず、男女に亙つて全國の小中學の教員を網羅することになつたら、日本の教育界の非常な刺戟となることは疑を容れない。殊にさうした團體が、階級意識を強められて、一般運動の中に融合すれば、その及ぼす影響は察するに餘りある。吾々は小學女教員に倣つて他の總ての男女教員も此種の運動を組織されることを切に希望する者である。眞に良心ある教育者、誠實なる教育者は、今日の社會が決して眞の教育の目的と一致しないこと、また教師自ら信じない傳統的思想や虛僞の歷史を教へて、子供らの若い正直な心を、芽ばえの中に萎縮させ、踏み躪つてしまふやうに强制することを知つてゐる筈である。教育家としての本分を果すためには、傳統的思想に盲從する代りに、眞に次代の國民を生かすために戰ふことをも辭してはならない。團結は力である。女教員協會を機として一般に、壓伏せられてゐる教育勞働者——單に文部省の使ふ道具にすぎず、教育家としての自覺も、個人としての創造的能力も、良心も、すべてを犧牲として機械的な勞務に服することを餘儀なくされてゐる人々——がこの團結の力に想ひ到られたなら、ひとり教員自身のみならず、次代の國民も少からずその利益を受けるに相違ない。

婦人聯盟の再生と姦通運動

室伏高信

新婦人協會が改名して婦人聯盟となつた。改名は平塚明子氏が要求された。新婦人協會には平塚明子の「幽靈」が常に付きまとつて離れなかつたので平塚氏が協會から退くために改名の必要が起つて婦人聯盟となつた。聯盟には「幽靈」はゐなくなつたわけである。しかし化物屋敷は矢張り化物屋敷である。平塚明子の幽靈がゐなくなつてもこの屋敷は決して幽靈の缺乏離に苦るしみはしない。松本君平以下大小の幽靈が始終付けまとつてゐるではないか。

それにしても鯡の兒は數の子である。數の子は鯡そのものであるのではない。婦人聯盟は幽靈が一匹ゐなくなつただけに一匹ゐなくなつただけのことはある。先づその手始めに婦人參政權運動を中止した。普通選擧も出來ないうちに婦人參政權は未だ早いからださうだ。男の云いさうなことである。男のすなることを女もしてみんとはすなり。男が「女よ、まだ早い」と云ふたから、早いと云ふて見たかつたのである。松本君平の幽靈がさういふたから婦人聯盟もさういふたのである。でもそれだけではあまりにあつけない。婦人參政權運動をむげに捨てさつたのでは新らしい女の團體としての名折れである。そこで模範は既に彼女等の面前に示されてゐる。政友會のやり方を見習ふがいゝ。普通選擧はまだ早い。地方自治體の方を普通選擧にして見てその試驗が通つてからでも遲くはないではないか。政友會の怜悧な策士が考へた。そしてもうやつた。婦人聯盟の女政治家の諸君は政友會の策士の智慧をだまつて借りた。政友會の行くとほりに行つた。女の政友會ができたのだ。革新俱樂部の女政客の向うを張つて友の政友會ができたのだ。

だが婦人聯盟だつてさう〳〵馬鹿にしたものではない。流石に有夫の女が會の牛耳を握つてゐるだけに痒いところに手が届く。姦通罪の廢止運動がこれである。この運動が起るとともにも一つの婦人團體である婦人矯風會では非常に憤慨したと云ふことが新聞で傳へられた。この人たちも同じやうに有夫の女であらう。同じ有夫の女にしても流石に目の付け

所は違ふ。亭主が待合遊びをする。それが止めたい。法律の力で止めたい。それには有妻姦もまた罰しなくてはならない。婦人矯風會は多年有妻姦處罰運動をつゞけてきた。その矢先きに婦人聯盟が横合から出てきて姦通罪廢止を叫び出した。人氣は後者に集まるにきまつてゐる。前者は多年續けてきた運動ではあるがまた多年不人氣な運動であつた。島田三郎と根本正の二人は贊成したであらう。だが多数の議員は昔の商君となつて自分の手で造つた法律をもつて自分を罰したくはない。有妻姦通罪運動はかくして失敗であつた。

姦通罪廢止運動はそれとは正反對である。それは最も人氣を呼ぶ運動である。市町村婦人參政權運動の不名譽を拭つてあまりある位ゐに人氣問題である。それは慥に婦人聯盟の大手柄である。有夫の女も馬鹿にしたものではない。凡てが婦人矯風會の贊成者だと考へるのは今の「新らしい女」への大なる侮辱であつた。永い間家庭の監獄に押しこめられてきた女が――男だつて貧乏人の男は同じことなのだ――その性的自由を考へついた時にこゝに有夫姦の罪が彼女等を脅かしてゐた婦人參政權なぞは第二、第三である。なくてはならないほどの痛切なことでもない。人が云ふから私も云ふのである。外國でやるから私もやるのである。やつた方が新らしいと人が云ふから私もやるのである。有夫姦の方はさうではない。性的に自由を求める男女は先づ家庭の監獄に氣がつかなくてはゐられない。その監獄の獄手の一人として姦通罪が立つてゐる。姦通罪を廢止せよ！これが新らしい女のモットウであるのかしらと考へうる人でなくては新らしい女の理解者だと云ふことはできないであらう。

私は無論人の心事を邪推してゐるのではない。私は必ずしも婦人聯盟の諸君が有夫姦を希望するがために姦通罪を撤廢せよと云ふたと解してゐるのではない。姦通を望む人もあるだらう。望まない人もあるだらう。それはどちらでもいゝ。しかも姦通欲望がないのなら姦通罪はあつてもよし、なくてもよい。たゞ男女平等のためにと云ふだけなら矯風會のするやうに有妻姦を罰したら十分である。それにもかゝわらず婦人聯盟が凡ての姦通罪を廢止する運動を起したとしたら、私たちはそれをたゞの男女平等の問題日で片づけてしまひたいとは思はない。新らしがる序にも少し今の女も新らしくなつてもいゝと思ふからである。



下獄二年（三）

神近市子

六、淋しき正月

監獄でかゝつた神經痛が、その後私の痼疾となつて秋口になると毎年どの程度かで苦しむのであるが、今年は珍らしく姿も見せなかつたので、昨年試みた注射がよかつたのであらうと喜び乍ら忘れるともなく忘れてゐた。すると、十一月のそれも下旬になつて引いた風邪につゞいてそれが猛烈に起つて來て三晩と云ふもの私は痛みの爲めにオチ〳〵と眠ることさへ出來なかつた。が、それもいくらか快くなつて、かうして暖かくして机の前に起き出して獄中記のつゞきを書かうとするこの頃では、風當りの好い郊外のこゝらでは毎日寒い風が吹いて、夜など近くの裸木が冷たく鳴る。監獄もこの頃が一年のうちで一番耐へ難く物悲しいことであらうと考へ乍ら嘗て八王子で淋しく送つた二度の師走のことなど次から次に思ひ起してゐると、かうして暖かく病氣を養つてゐることもやつと言葉を聞き分くるやうになつた子供が机の周圍をチロチロとすることも、それらは凡てが夢であつて、私自身まだあの寒く冷たい牢獄の中で暮してゐるやうな、陰慘な悲しい氣持になつて來る。

飢ゑと寒さと勞働と、これが監獄が囚人を苦しめる三つ道具である。そのうちで私共は勞働とは一番早く握手して了ふ。それは私共が、監獄で何にもしないで暮すことは二重に監獄を苦しくすることで、監獄に居ると云ふことを少しの間でも忘れるには與へられる仕事を一生懸命にやるに限ると悟る迄

には、半月とはかゝらないからである。

飢餓とは私共はもう少し長く戰はなくてはならない。一週間經てば大抵の人が所謂もつた飯が喰へるやうになる。それで空腹は一時的に免れるやうになるが、極端に營養價の乏しい變化のない食物を與へられるので、空腹は忘れても何とも說明することの出來ない飢餓の感が私共に殘つてゐて、嘗つて味はつた營養豐かな物の味が私共の記憶に甦へつて來て、滿されない慾望の爲めに私共は可なりに苦しめられる。

が、それも二箇月と三箇月と經つうちに、私共の組織は嘗つて多く與へられてゐた物の影響を見失つて來る。そして新しく與へられる一層粗末なものをもつて滿足しなくてはならないことを學んで來る……

けれど寒さはさうは行かない。十二月の始めからはじまつて三月の下旬迄、私共は今年も去年も來年も同じ寒さをその最初から最後迄忍ばなくてはならない。監獄で何年暮してゐても「冬が來る—」と考へる時ほど囚人にとつて物の惱ましく悲しい時はあるまい。寒さは一月と二月とが一番強いのである。けれど囚人には十一月と十二月、特に十二月が一番たへ難い。それは一月二月の次には直ぐに三月四月が來ると云ふ樂しみがある。それが十一月十二月となると、苦しみは今始まらうとしてゐるのだ。絕望的な暗い陰慘な氣持が私共凡ての心を閉して了ふ。

十二月が來ると、若い囚人の顏が急に物思はしく悲しげにうなだれる。誰も何とも云ふのではないが。

「正月だのに、社會に居つたら……」

と云ふ羨望とも悔恨ともつかぬ一の感情が彼等の憐れな心を苦しめ始めるからだとは云ふ迄もない。かう云ふ時に人は人を求める。私共はせめて同じ感情を持ち合つてゐると云ふことをお互ひに語り合ふ丈けで、その暗い物悲しい氣持を忘れやうとする。十二月になつて、廊下を通る囚人達が急に何となく物騷しく、犯則として禁じられてゐる話をして通ることが多いことを私は氣づいた。

ある日曜の午後、私の前の監房のTさんが、風呂から歸ると大きな咳ばらいをした。私は讀みさしの書物を置いて視察窓の口に立つた。

「あと十日で正月になる。」

Tさんが手眞似と小さな聲とでかう云つた。

「これで私は監獄で正月を四つ迎へる。」

私共は顏を見合はせると少し淚ぐんだ。

「私は二つ。」私は自分の鼻を指して、指を二本出した。

「あなたはあと一つで社會に歸られる。けれど私はまだ澤山！」

Tさんはかう云ふと又少し涙を出した。私は慰めやうがなくてだまつて了つた。

實際にこの人は長い間意地の惡い古風な姑にいぢめられ、その姑の爲めに愛し合つてゐる夫との間をさかれやうとしたので怒に捕へられて姑を傷つけこゝに來た人であつた。十七で彼女を生命のやうに愛した夫に嫁した彼女は、どこかに子供らしい無邪氣さを持つてゐた。私はこの人を陷れた老婦人を思ふ毎に、その婦人を許してこの人を許さない制度には決して正義も公平もないのだと云ふことを新しく感じた。

役人の足音がしたので一度引込んでゐた彼女は、今度出て來た時には涙を拭いて了つてゐた。

「正月には御馳走がある。」と、彼女は又話し出した。

「三日は三度々々何かお菜がついて、朝はこの位の（二寸角位の）餅が二枚づゝつく。」

私共は今度は云ひ合はしたやうに笑つた。御馳走の貧弱さと、その貧弱な御馳走をも樂しんで宛にしてゐる自分達が可笑しくなつて笑つた。

囚人は三十日の午後から仕事を休んだ。工場、學校、監房の煤拂ひをして、三十一日には風呂があつて皆ザッとではあつたが髮も洗はして貰つた。

三十一日の午後には年末の教誨があつた。囚人達がゾロゾロと私の監房の前を通つて行つた。そして何時もより馬力をかけた教誨に惨めな氣持を一層惨めにして歸つて行つた。夕食の時には、いつもの薄い味噌汁の代りに油で煎つた饂飩のお汁が出た。

その晩の物悲しいいやな氣持は、私は何時迄も忘れない。どの監房にも平生の通りアカ〳〵と燈はともつてゐるのに、監獄全體がシーンとして音もなかつた。霜のつよい夜で、何とも知れない地鳴りのやうなものが頻にした。その間を八王子の町の歳暮の物音や――賣出しの樂隊や子供の騒ぎや自轉車のベルや――北風に送られて聞えて來た。

どこかで若い囚人がシク〳〵と泣き出した。それに誘はれたやうに、方々で鼻を啜る音がしだした。

「お取締樣！お取締樣！」

細い弱々しい聲がする。舞蹈病と肋膜とにかゝつてゐる年老つた無期囚が、始めも終りもなく哀願してゐるのであつた。彼女は寒さと無聊とに苦しめられて、早く床に入らせてくれと許されないことをいつ迄もクド〳〵と哀願してゐるのであつた。

云はうやうのない陰鬱が私の心を閉し始めた。

憤怒に逐はれるか誘惑に打ち敗けるかして犯罪を犯した者は、われとわが手で自分の墓を掘つたやうなものである。そ

して監獄と云ふ小墓に生埋めにされた私達には、明るい正月もなければ盆もない。在監の第一日から、その最後の日迄が、一の長い悲しみの連鎖である。

けれど喜びには喜びの持つ棘があるやうに、悲哀にも悲哀の持つ救と慰めとがある。夜の眠と晝の忘却とがその後者である。一箇月、二箇月、半年と暮してゐるうちに、私共はいつの間にか自分達の悲しみと運命の挫折とを忘れかけてゐる。全然忘れ切ると云ふことは出來ないけれど、少くも他の何事か——思想上の問題か、學校で課されるやさしい數學の宿題か、仲間との雜談か、役人の陰口かに紛れて暮してゐることがある。それが大晦日のやうな社會にゐる人が何等かの緊張を感じて暮すやうな日になると、私共は彼等と自分との相違をハッキリと感ずると共に、自分の悲哀と不幸と苦痛との全部を一度に呼び起して了ふ。

翌日はよく晴れた靜かな元日であつた。昨夜は淋しくて泣いてた者も、何となく晴々として明るい顏をしてゐた。扉があいて點檢のあとで、私共の監房では一寸した餘興があつた。舞蹈病の無期囚が年始廻りを始めた。「あけまして」から、始めて、「本年もどうかよろしく、」と彼女は一つ〳〵の監房の前で踊つてゐた。妙に筋肉の引つれる手足を動かして、威儀を正した彼女を見ることは一のよい見物であつた、私共は遠慮なく笑つた。最初は氣づかなかつた役人が、急いで私共の監房を見廻つたほどに笑つた。

この時だけでなく、この夫殺しの無期囚を私共はよく物笑ひにした。若い時分の美貌を偲ばせるには、整つたよい容子をしてゐたが、舞蹈病に肋膜を患つて白痴のやうになつてゐた。病氣になつた頃久しく虐待されて、その爲め私一人殘つて居る監房で、首をつらうとしたことがあつたが見付けられて病監に移された。そしてもう死んだのであらうと私が考へ始めるほど長く歸つて來なかつたが、半年ほどたつて、もう單衣を着るやうになつて仲間と一緒に教誨堂に出て行くのを見た時には、私はこれがあの人だつたらうかと驚いた。急に白くなつた頭髪を前半分少し長めにして殘し、後方は剃り上げ半年の間にスッカリ曲つた腰の上に兩手をおいてそれで中心をとつて歩いてゐた。そのぜー、ぜー、と引く息づかいと、はげしく廻る身體の運動とで私はそれと始めて知つた。迚も長くは生きられまいと考へてゐたが、こないだ八王子を出て訪ねてくれた人の話では、もうとつくに死んだと云ふことであつた。それを聞くと、私は何となく荷が一つ下りたやうな氣がした。

七、春を待つ心

正月が濟むと、慘めな氣持がいくらか和らげられて、一日一日が暮しよくなつた。この頃から、私共はひたすらに春を待つた。

私の部屋の外には、私だの未決囚が入つた時だのよく運動に出された、小徑のついた空地があつた。そこには桐だの躑躅だのかなめの木だの植ゑ込んであつて、側には櫻の大木も一本ではあつたが立つてゐた。これらの植込みが花だの葉だのつけると、運動に出される時それを見るのが、私には殆どタッタ一つの大きな樂しみであつた。暗い監房に、何にもない、何にも見ない生活をしてゐると草木の姿や空の明るさや人間の顔が、實に美しく生命にみち〳〵て見えて來る。花などはこぼれるやうな表情をもつて、私に話しかけてゐるやうに考へることさへある。

が、私の高い窓からは、その櫻や桐の梢が見える丈けであつた。冬の間、私は毎日その眞黑な死んだやうな梢が何時となく脹らんで來るのを見詰めて暮した。あるかなきかに木の芽がめぐむのが、どんなに私にはよろこびであつたらう！朝起きると、その芽が昨日より大きくなつたかどうかを見るのも、毎朝の一の樂しみとなつた。陽が少しアカ〳〵と賑かに照つても、私共は嬉しかつた。

「今日はまるで春のやうだ。」

私共はかう云ひ合つてよろこんだ。この時分、私は友達にこんな歌をかいた。

そらを渡る雲のたちまひのどかなり
春はくるらし、春はくるらし

桐の木に五分ほどのびし芽のありき
少しうれしきこの日ごろかな

二月から三月にかけて、八王子には秩父颪の猛烈な冷たい風が吹く。監房の中にゐて、今にもさらつて行かれるかと思ふ位にそれがひどい。そしてそれが年に二三度はきつと來る。然し、これが最後の寒さだと考へると、私共は一種の樂しい心持でこの大風に吹かれて痛い耳を押へた。風の後では必ず太陽が昨日のことは知らないもの〻やうに暖かく慰め顔に輝き始めるからである。そしてそんな嵐の夜の「ねかし」の鳴るの〻嬉しさ！布團の中に入ると全身がポカ〳〵として火を吐くやうに暖かい。

櫻の花が咲く頃は、社會にゐても何となく嬉しいものである。長い冬から解放されて、誰しもホッとした輕い氣持になるものであるが、監獄の中で櫻を見るのは又一段と幸福な好いものである。冬はもう行つて了つた、私達を苦しめる霜も雪も寒さも、もう歸つては來ない。かう考へてよろこぶ囚人の心裡は、涙ぐましくなるほどにいぢらしい。若い囚人達が

廊下を鼻歌で通つて行く。鼻歌を唱ふのは、彼等が幸福である證據である。

八、冷たい罰房

私の窓の直ぐ下には、囚人が犯則をしたり抵抗をしたりする時に入れられる罰房があつた。廣さは私共の分房と同じく一坪ほどのもので、それが空地の中にポツンと立つてゐた。夏などそれほどにも思はなかつたが、冬はそれを見ると淋しいいやな氣がしたものであつた。

罰房は、この外に二つ舊監房の近くに並んであつた。(私共がゐたのは新監房で、舊監の方には第一工場の主に窃盗の累犯が入れられてゐた。)私が入つた翌年、新監と役人の休憩室との間のやうなところに、石造の二重罰房が出來た。土臺をコンクリートにした丈夫なもので、灰色の石が冷たく冬の陽を吸ふてゐた。恰度舊監の罰房に入れられてゐる放火犯の氣狂が、毎日々々あばれて罰房の重たい破目をはがして了つて役人をさわがしてゐた後で「石の罰房が出來る」と云ふ話は次から次に傳はつて獨房に一人ゐる私の耳にさへすぐ入つた冷たい心と無言の反抗とで私共は男囚の仕事を見廻つてゐる役人の横顔を睨んだ。私の曲んだ顔は、直ぐにM――と云ふ分監長とその石の罰房を結びつけた。私はM――と云ふ役人が態々囚人を脅かす爲めに、それを建てたやうな氣持がしてならなかつた。今でも、私は他のもう少し人間的な感を持つた分監長であつたなら、あの石の罰房は決して造へなかつたやうな氣がしてならない。

私の窓外の罰房には、冬の間若い累犯の窃盗囚が入つてゐた。この人は私共の獨房の仲間の一人で背の高い色の白い女であつた。隣の監房にゐた放火犯の話によると、この囚人は發作的に――月經時の前後などに――輕い發狂の樣子になつて、勞役に織つてゐる織機の絲を切つたり、隣りの織機の絲を窃んで織つたりした。そしては懲罰と賠償とを命令されて罰房の中でマニラ麻をつないでゐた。

この人はそれで三度の犯罪で、大した盜みをしたのではなかつたのに、一年半か二年の刑を喰つてゐた。矢張り發作的に起る不可抗的な衝動で犯罪を起して來るやうすであつた。他の發作の時、私はこの人が勞役に使ふ鋏で自分の髪を切つてゐるのを見た。ある時は、工場の便所に塵紙をかくして見付かつて罰になつた。

寒い夜など、この人が罰房で陰氣に哀愁を帶びた調子で親鸞上人の「正信偈」を頌してゐるのを聞くと、私迄が暗い氣持になつて仕方がなかつた。こんな人を監獄に入れることや、監獄の中の監獄である罰房に入れることの矛盾と無意味とを

その度に感じた。そしてかうした人にも叱責的の教誨と改悛の心情とを求めなくてはならぬ教誨制度と云ふものも、職業的な型にはまつた、面白くないものだと考へた。

こゝの罰房に來る人は、二人か三人かで顏振れは大抵極つてゐた。その人達が代る〲來た。その中で私は五號と云ふ番號をつけた囚人の事が一番よく覺えてゐる。それは殆ど監獄一のあばれ者で、一二度實に痛快な反抗と喧嘩とを役人に賣つたからである。

ピチ〲とした、壯健さうな身體をもつた二十五六の女で、どこか私に獵犬のはしつこさと執拗さを思はせる婦人であつた。前に云つた累犯の窃盗囚がゐる第一工場の人で、その工場の人としては一番若い部の人であつたが、それでも十犯位は重ねてゐると云ふことであつた。少し足が短かゝつたが、顏などは色の白い引き締つた實に好い顏をしてゐた。

全體に、囚人は正直でゐて氣が早い。何事でも眞直ぐに押して行つて、物が思ふやうにならない時は怒つてそれを投げ出すか打ち壞すかして了ふ。打算をしたり、思ひ返しをしてゐたりする間がない。

監獄ま犯則をする囚人にも、それと同じやうなところがある。監獄で「便捨」と云つてゐる監房の汚穢の搬出は、皆第一工場の中の悪種と考へられてゐる者が驅り出されて從事するのであるが、五號もそれを長いことやつてゐた。その頃大雪が降つたことがあつて「衞生」と「便捨」との人が朝早くから出されて雪を掻いてゐた、恰度私の窓の下は五號と二三人の便捨とが掻いてゐたが、仕事の手筈のことで五號が仲間の間に何か相談をやつてゐた。するとそれを見つけた役人が遠くから恐しく叱責した。仲間の者はそれを聞くと直ぐだまつて仕事にとりかゝつたが、五號だけは決してだまつてゐなかつた。彼女は自分は仕事に必要な相談をしたので、決して犯則をしたのでもなければ無要な口を利いたのでもないと申立てた。彼女は役人に理由もなくどなりつけられることの不合理を頻りに感じてゐる風であつた。けれど役人の心理は、いくら五號の申立によつてもその不合理を受入れることは出來なかつた。彼女ははげしく叱られ、最後には雪の中になぐりとばされた。

私がこゝに話をしようとしてゐる時の懲罰は、五號は何の爲めに受けたのであつたか私は今それを忘れて了つてゐて思ひ出せない。ともかく、彼女はある日役人に逐ひ立てられてそこにやつて來た。私は又一人だけ多くの人の聲が聞かれるので少し嬉しかつた。一人の「衞生」が五號の布團と枕をもつて來た。

罰房には、減食と暗黑とがおまけについてゐる。食事は皆

通の食糧の三分一、つまり一食分が三度に分けて投げ與へられる。日が暮れると鼻をつまゝれても分らぬ闇だ。晝間は辛うじて仕事ができる程度の光線が來る。けれど風は晝も夜も分ちなく吹き通る。

騷ぎは「日歩貸し」と云ふ綽名の役人の罰房襲擊から始まつた。この役人のことは前にも一寸書いて置いたが、私が出獄後つまらない窃盜の現場を仲間の役人に捕まつて免職になつた人である。近所の貧乏な者に高い日歩か何かでその僅かな月給を貸して利殖をしてゐる樣子であつた。囚人はこの役人には名を云ふ代りに「日歩貸し」と云つてゐた。土地の者が時々入るので、監獄外の役人の噂なんか囚人にはすぐ分る。

寒い、霜など強い夜には役人の罰房襲擊が時々あつた。十二月と一月は夜業の時間は五時間だ。懲罰囚は五時間の間暗黑な罰房の板敷の上に、視察窓の前に正坐して「ねかし」が鳴るのを待つてゐなくてはならない。かう云ふ時、役人は時々提げランプを袖でかくして、足音を忍ばせて罰房を臨檢した。廊下を忍び足に行く「日歩貸し」を見かけると思ふと、(全體この人だけは、夜はいつも忍び足で歩いたが、)直ぐに罰房でえらい騷ぎが始まつた。

「五號、貴樣は寢てゐたな？」

監獄中にひゞく大きな聲で、「日歩貸し」がかうどなつた。

「嘘です。寢てなんかゐませんよ。」

五號は割に穩かな調子でかう云つてゐた。

「もつとこつちに顏を出せ！」

それは引づり出しさうな調子であつた。

「寢てゐた！寢てゐた！その顏を見ろ、顏にチャーンと痕がついてゐる。寢てゐなくつてどうしてそんな痕がつく？」

役人の聲は、急に手に入らうとする手柄を見ていくらかはづんだ急き込んだ調子になつてゐた。

「嘘ですよ。寢てなんかゐないのですよ。痕があると云つたつて、それはあなたの氣のせいでそんなに見えるのですよ。私は寢てなんかゐません。」

五號はいくらか陰氣なうるさゝうな調子で、平生よりおだやかであつた。

が、それは一層役人に疑をまさせる原因となつた。役人は五號がおとなしいのを、犯則してゐた證據だと見たやうすであつた。なほ二三押問答の末、役人に捨ぜりふで引上げやうとした。

「見ろ、明日は報告してやるから。」

「勝手にしあがれ！」

たうとう、五號はいつもの喧嘩調子になつて了つた。

「手前ら、犯則しないものも犯則にすると手柄になるんだら

う。寢てゐたなんて噓つきあがつて、報告するなら勝手にしろ！」

彼女は怒つた調子でキツパリとかう云つた。

役人が去つて、物の十分と經たないうちに彼女の無念の怒は燃え上つて、狹い獨房は引くりかへりさうな騷ぎになつた。最初ははげしく物を打つけるやうな音が聞えてゐたが、それが止むと大きな聲で俗謠を歌ふのが聞えて來た。ラツパ節、しのゝめ節、カチユーシヤの歌、その他何、何、なんでも口から出まかせに調子も文句もなく唱ひ出した。そしてそれが濟むといろ〳〵な物賣の眞似が始まつた。豆腐屋、納豆屋、新聞賣……社會にあるいろ〳〵な呼賣が私共の幻影の中を通つて行つた。監獄全體がそれを聞きつけて、何となくザワザワと騷がしくなつて來た、「日歩貸し」は自分の責任上だまつてゐられなくなつて來た。そしていくらか慌て氣味に立かへつて來た。

「だまつてゐろ！」

彼女はかうどなつた。

「だまつてなんかゐるかい。この高利婆あ！」

五號はかう酬ひた。

「高利！であらうが何であらうが大きなお世話だ。見ろ、明日は看守さんに頼んで、うごけなくなるほど撲つて貰つてやるから。」

「おゝなぐらせろ。囚人であればこそ手前のやうな糞婆に文句を云はせて置くのだぞ。その代りにあと半年したら歸るから、その時こそ社會でお目にかゝりませうだ。」

「何がお目にかゝりませうだい。手前のやうな泥坊にお目になんかかゝつてたまるかい。手前はぬすとしてこゝに來たのではないか。手前はぬすとだぞ、このぬすとが、ぬすと！」

喧嘩が餘り突調子なものになつたのと、しつッこいのとで私共は笑つてゐたのを止して、耳をすました。

私は、役人が囚人に對して泥坊、ぬすつとと惡罵するのを聞くと隨分驚いた。役人が囚人を叱つたり辱めたりするには言葉なんか選んではゐないけれど私共がその爲めに刑罰を加へられてゐる犯罪でもつて、囚人を辱しめてゐるのを聞いたことはないからである。

この役人だけがどうしてこんな役人として沒常識なことを口にしたらう？私にはこの人が後で物を盜んで免職になつたことを考へる時だけ、その時のこの人の氣持が分るやうな氣持がする。この人は、工場のものや囚人の食料を盜むので監獄の役人の間でも噂の種になつた人で、囚人もうす〳〵事情を知つてゐた。それは囚人が工場で織つてゐる織機の系が度度なくなることがあるのが、それが大抵その役人がその工場

を出入した後で起きたからであつた。

囚人は自分が織つてゐる織機には責任を有つので、管に巻いた糸がなくなる度に大騒ぎで取り調べられる。そんな事から、誰にそれを盗まれたかと云ふ事に敏感になつてゐる。「日歩貸し」が窃むと云ふことが、いつの間にか囚人の間にはヒソヒソと話の種になつてゐた。

これも後で出て來た囚人の話であつたが、この役人が免職になつたのは正月の支度に監獄に持つて來て囚人につかせる仲間の餅米を窃んだ爲めであつたさうである。自分も一緒に搗いて貰ふ筈で、別々に水にひたしてあるのを、自分の餅を多くする爲め他人の米をすくつてゐるところを男の看守に見つけられ、その場は何とか云ひ繕つて免かれたが、辨當箱とかに窃んで入れてゐた米については云ひ開きすることが出來なかつた。結局、諭旨免職になつたさうである。

米を窃むとか豆を窃むとか、チツとも珍らしい話でもなければ又道徳上にも大した問題であるとは思はない。只だ私がこゝで特に問題にするのは、それが監獄の役人であつたからである。この役人がしたと同じことをした者を罰してゐる監獄の役人であつたからである。

私が云はうとするのはかう云ふことである。黒い着物を着た役人と、赤い着物を來た囚人との間には、人間としての等差の上に天と地とほどの相違があると普通考へられてゐる。M――と云ふ分監長なんかいつか囚人は獸の仲間だとさへ云つた。監獄の獄と云ふ字はけもの扁である。然し少くもこの「日歩貸し」の場合だけは、役人も囚人も道徳上同じ立場にゐたのであつた。黒と赤とは着せられた丈けの相違で、着た者の相違ではなかつた。ゴルキーの小説であつたかにロシアの百姓達は、監獄に入つた者を「救はれない災難にあつた人」とか、「氣の毒な人」とか云つてゐるさうであるが、私も私の仲間の爲めにさう云ひたい。囚人も社會の人より大して惡くはないのだと。私は監獄に行つて囚人に逢つて來た。が、彼等は私が社會で逢つてゐる人々より決して惡くはなかつた。

役人がした惡いことは私はまだこの外に澤山知つてゐるがそれはどれも小さな窃みなどのやうな他愛のない愛嬌のあることではないから、こゝに書き立てることが出來ない。で、話は五號のことに戻るが、その晩の喧嘩はそれからもつゞいて、聞くにたへぬ呪咀と脅威とがつゞいたが、その翌日五號はひどく撲ぐられて泣き乍ら歸つて來た。そして敎誨師が敎誨に來ると、恰度へつてゐた食器を食物の入つた儘窓からほうり出した。そしてその儘布團をかむつて食事も貰はず寢て了つて二三日は起きなかつた。

この時は五號は二箇月以上も罰房に入つてゐた。役人の方

で根負けして、二三週してからは普通の分量の食物が宛がはれた。敎誨師と仲直りしたのは、よほど立つてからであつた。半月でも一月でも、敎誨師にも役人にも手出しの出來ぬほど强情を通したのはこの人だけであつた。今思ひ出してもこの人ほど痛快な、感じの捷い人はなかつたやうな氣がする。罰房を出て一二箇月すると刑期が充ちて歸つて行つた。

「あゝ馬鹿々々しい。お取締り樣、私もう來ないわ。」

かう役人に云つてゐたが、役人は笑つてかう云つた。

「噓つけ。又半年もすると押送で來て訊問所のところで編笠をとつて、まあ暫時！とか何とか云つてゐる癖して。」

九、子爵夫人の監獄見物

本野とか云ふ子爵の後家さんが、監獄を見て廻つたのもその時分であつた。恰度春さきで時候もよかつたし、一日位の旅に東京からはなれる事は好い氣持であつたらう。靑くむくんだブヨ〳〵した顏と足の短い姿を見た時、私は佛蘭西大使館かどこかで見かけたことのある顏をすぐ思ひ出した。來たな、と思つてゐると敎誨師が來て本野さんが見えましたと云つて、大變な光榮でもあるやうに話して行つた。囚人の子供を預かる保護會か何かの會長が死んで、本野夫人が會長になつたのでその新任の挨拶をかねて、その時迄監獄にゐた囚人の子が規定の滿一ヶ年になつたのでその子を連れに來たと云ふのであつた。侍女らしい若い女が影のやうについてゐた。

監獄にはこの外にも時々見物人があつた。かゝりの役人達が出張して來るのや、敎誨や救護の事業に從事してゐる人は別として、單に見物の爲めに來る人が決して少くなかつた。男も來れば女も來るし、それらが立派に着かざつて物見のつもりで來てジロ〳〵と無遠慮に見て行くのは實際に不愉快なものであつた。

囚人は、役人に對しては勿論のこと、社會人に對してもよく自分達の落された位置を意識してゐる。それで社會人に對しては嫉妬に近い反感と敵意とを持つてゐる。それで自分達の思ひ上つた位置から愍み位しか持ち合はせない見物人に對しては、檻にゐる動物が感ずるやうな感を抱くものである。特に案内してゐる役人が、見物の餘興に供へやうとして、平生とはまるで違ふ愛想のよい調子でくだらない話を仕かける時など、それに答へるのは不愉快ないやなものであつた。私は、見物人がありさうな時には用ありげに立つて腋をいぢつてゐて、態と顏が見られない樣にしたことがあつた。すると、見物は又屹度歸つて來た。『神近』を見せることは、役人には一の手柄の樣で、見せないでは濟まない樣であつた。それが分ると私はあきらめて、だまつて顏を見られてゐた。（つゞく）

文藝作品中に現はれた私の最も好きな女性

◇悲劇の女主人公アントワネット

有島生馬

私の讀書は極めて範圍も狹し、貧弱であるから、何んの御參考にもなるまいが、ヂヤン・クリストフ中のアントワネットといふ一卷は未讀の方、殊に今日の若い御婦人方には讀んで頂きたい、さうして御讀みになればきつと同情し、且つ讀んだ事を後悔はされまいと思ふ。

アントワネットの運命は餘り悲慘でり、淚に充ち過ぎてゐるに相違ないが、その自覺、その奮闘、殊にその自愛心（ラムル・プロプル）と弟オリヴキエに對する深い愛情とは何人にも同情と感激とを强ひる强さ深さ淸さなるものと信ずる。

一昨年の夏輕井澤で、このアントワネットを隣人のさる佛人に借して置いた。するとある日その人が散歩から歸つて來て玄關に這入つてみると、留守居をしてゐた細君がおいおい云つて泣いてゐる。何事が起つたのかとその人は怪みながら室に這入ると細君は目を眞赤に泣きはらし、濡れたハンカチイフを顔にあてがひながら立つて來た。彼女のお母さんが死んだ時でも、こんなには泣かなかつた彼女のこの有様に、その佛人は全く驚きあわてた。彼は手をとつて慰めようとしたけれども、妻君は聲が出ない位泣きじやくりしてゐた。

佛人は何氣なく傍の卓上をみると、このアントワネットが開いたまゝになつてゐて、その上に點々たる淚が小さな泉を湛へてゐるのを見た。それでやつと事情が氷解し、遂に大笑になつたと云つてこの本を返しに來た事があつた。

小說を讀んで泣けるか泣けないかはその作品の價値奈何に關係ないものにしろ、泣けることは決して讀者に不快ではあるまい。却つて一つの樂みになる。殊にアントワネットの場合のやうな悲劇的な運命と、淸い性格から、しぼり出される淚は吾々のだらしない、物質的な、底調子な日常の生活感情をして淸化し、高揚せしむるに足る力を十分に持つてゐるといふ事が出來る。

アントワネットのやうな卑近な生活の中にあつて輝く無名のヒロインも、赫々たる功績を萬代に傳へる天才の雄姿も、時には同じ强度の刺戟を吾々に與へ得るものだ。

◇文學に現はれたる女

正宗白鳥

私は傑れた詩人や小說家によつて創造され描き出された女の殆んどすべてを好む。ホーマーの唄つた妖艷無比のヘレンに心惹かれると同樣に貞淑堅實なアンドロマキーにも限りなき愛着を覺える。「神曲」の中にほのかに現はれてゐる數々の女性、「十日物語」の中の女性。シエークスピアの生んだ女性、フアウストのマーガレットなど、昔の詩や物語の中にはどうしてかうも懷しい女が晴夜の星の如くに光つてゐるのであらう。昔の世に見られるばかりでない。アンナカレニナも惚れ〴〵させる女性である。ラスコルニコフとともに、われも、ソニアの前に跪きたい。「即興詩人」を讀んでアヌンチヤタに魅せられないでゐられようか。近松の小春にも梅川にもおさんにも、私は愛着を覺えること、われ近松秋江氏に讓らないのである。一葉の「たけくらべ」のみどりでも「濁り江」のお力でも惡くはない。

要するに古今東西の傑れた作家によつて描かれた女はすべていゝ。つまらぬ作家によつて描かれた女はすべて嫌ひだ。八犬傳の濱路や雛衣（ひなぎぬ）など何といふいやな女であらう。

私は繪に書いた女を見てのみ心を動かしてゐるのを悲しむ。見聞の狹いためか、現實の女性には、一人のアンナもない、一人のソニアもない。

◇愛の圓味をもつたナターシヤ

有島武郎

トルストイの「戰爭と平和」の中のナターシヤのやうな女が好きです。幾人かの男の手から男の手へ移つて行くのだが、而もそれにも拘らず、ちつとも彼女の愛といふものは損はれてゐない、それは大抵の女は男を對象物としてゐるに反して、ナターシヤは自分の愛を中心として、自分の愛をしつかりと自分の中に掴んでゐて、その愛に誘はれて來る男はみんな拒まずといつた風で、その代り自分から男が逃げ去らうとそれを一向氣にもしないといふ所に、一寸他の女に見られない面白味が彼女の中に見出される。それがいつまでも彼女の愛を損はず、圓味を持たせ、泉の如く生生と可愛らしく湛へさせてゐるのであらう。さうした彼女だからこそ一倍と男の心持を誘ひ、又讀者の私共にまでも、あゝした我儘な生活をしてゐるにも拘らず、それが彼女であれば惡るいことゝもまた、憎む心にもなれないのであらう。約婚の男が出征の間際に他の男と戀に落ちるなんて、これが他の女であつたら必度私達は心から憎んだかも知れないが、それがナターシヤに於ては、寧ろ彼女のあどけなさ可愛らしさに魅せられて了ふ。私はナターシヤのやうな女がほんたうに好きだ。

◇立場によつて好き嫌ひは生ずる

志賀直哉

好きな女はと問はれると、一寸かうすぐにあたまに浮んで來ないが、モオパツサン作「ベラミイ」中の、名は忘れたが、何とかいふ女主人公などは好きな女の一人だ。彼女の放縦な所はあまり感心しないが、もつと節操があれば尚更いゝと思ふ。もつと深く好きになれると思ふ。

然し好ききらひといふことは、その人々の立場によつて自ら異つて來る。例へばトルストイ作『アンナ・カレニナ』に於て、ウロンスキーの立場に在つてこそアンナのやうな女が好きなのだらうが、アンナの夫の立場からすれば夫をすてゝ他の男と關係するやうな女は決して好きでないに違ひない。自分の妻が、他の男と關係する樣な女を好きになれるやうな男もあるまい。さうした意味で、私のほんたうに好きな女といふものは今は思ひ浮ばない。

◇生きて居る人間にはあるが

谷崎潤一郎

斯う云ふ質問が僕は度々出されます、が、まだ一ぺんも答へた事はありません。と云ふのは、どう考へて見ても、私の最も好きな女性と云ふやうなものを作品の中から思ひ出す事は出來ないのです。好き嫌ひと云ふ事は、個人的の關係から生ずるものであるから、生きて居る人間にはあるけれども、文藝作品の中にはない。要するにすぐれた作品の中に出て來る女ならみんないゝと思ひます。淫奔な女、貞淑な女、氣の毒な女、みんなそれ〴〵に、よく描いてありさへすれば好きになります、同情を寄せずにはゐられません。そしていつまでも何等かの印象を殘す、そこが文藝作品の値打だと思ふ。ですから、これでは答へにはなりませんが、强ひて聞かれゝばさう云ふより外はありません。

◇お吉とアンナ

近松秋江

私は淨瑠璃ものゝ中の女が好きである。近松の『女殺の油地獄』のお吉などは、先づ理想的な女である。紙治の女房のおさんなども好い。

『アンナ・カレニナ』のアンナなど好い女の一人である。但しアンナを好いといふのは、前云つたお吉やおさんを好いといふのと、いくらか違つてゐる。

一體トルストイの書いた小說の中には、好

きな女が到るところにある。アンナ・カレニナの中にはアンナの他に令孃達で好い女が澤山ゐる。

又復活の中のカチユーシヤも嫌やな女ではない。トルストイはどんな罪を犯した女でも、決して徹底的の惡人には書いてゐない。罪を犯すに到つた理由、又罪を犯しつゝも常に良心の苛責を感じてゐる悩ましげな心理狀態卽ち罪を犯しつゝある女性が、いかに現境を解脫せんかとして、藻搔いてゐる、さういふ心理狀態を透徹して、正直に書いてゐる。

トルストイの書いた、いかなる女性を見ても、善良な女性はいふまでもなく、罪を犯してゐる女性でも全て正直である。例へば、人に向つて僞りを云つてゐても自己は正直であるといふことが讀者の側に立つてみると、よく判る。

これは作者の性格が、正であつたからだと思ふ。女も男も作品中の人間は全て、その作家が生んだので　つて、殊にトルストイの如き作品は實に多くの善良なる女子を生んだと云はなければならぬ。

私は常に思つてゐる。作家としていろ〳〵の性格を書かうと志す以上は、トルストイの如きよき男性や、女性を生みたいと思ふ。

では、アンナのどういふ點が好きかといへば、それはいろ〳〵あるが、あのアンナ・カレニナの何處を開いてみても、アンナといふ女性の人となりを描いて、直ちに同感されるやうに書かれてゐる。殊に私の妙味を感ずるといふは、彼女が情夫のウルンスキーとイタリーの旅から歸つて來て、先夫との間に出來た一人の男の子に逢ひたいと思つて苦勞するところ、其處が私には非常に妙味を感ずる一節である。

近松はトルストイとは又ずつと違てゐるが併し、彼れの生んだ女達も容易に同感される人物に書かれてゐる。

お吉は近松の中でも珍らしく、戀愛の女性として書かれてゐない。一人の極めて親切な思ひやりの深かい世話女房に書かれてゐるのである。その親切が仇となつて不慮の横死を遂げるといふのである。あの作の結末の方に三十五日のお逮夜の晩、お同行中の老人で帳紙屋の五郎九郎が「昨日のやうに思ひしが、早や三十五日の逮夜にまかりなる。二十七を一期として不慮の横死、平生の心立て人に優れ、上人の御恩德報謝の心も深かりしが、この世こそ劍難の苦しみはありとも、未來は諸諸の業苦を除き、本願往生疑ひはよもあらじ云々」といつてゐるところになると、私はいつも暗然たらざるを得ないのである。

お吉は、自から招いた誤ちによつて横死したのではない。全く親切が仇となつて不慮の災難に逢つたのである。さういふ事は何時の世でも有りがちのことで、あの人は親切な好い人だといふ人はよくそんな災難に逢ふことがある。近松はその點をよく見て立派な藝術にしてゐる。これを凡手が書いたなら、實に新聞の三面種の二行か三行にかならないことである。

あんな善良な婦人でも災難に逢ふといふ、——災難に逢つた婦人が善良な人であつたといふことが近松の書き現はし方によつてその善良さが一しほ鮮かになつてゐる。

そのために讀んでひどく氣の毒で堪らない氣がする。これも作者が水晶の如き心の持主であつたから、あゝいふ女性を書き得たのであらうと思ふ。

◇好きな女性はない

長谷川如是閑

嫌ひなのなら幾らでもあるが、好きと思ふ女性は先づ思ひ出せない。考へて好きな人を探すのでは眞實に好きな女性ではないから止めて置く。

◇ナターシャの様な女が

武林無想庵

ずつと以前によんだのだから、今ははつきり記憶がないが、トルストイ作『戰爭と平和』中のナターシャといふ女などは好きな一人だ。たしか許婚のオブロンスキイがあるにも拘ゝず、戰爭が始まつてオブンロスキイが出征する時、同じく出征する何とかいふ色魔的な男と關係するのだが、而も以前にも彼女の從兄とも關係するのだが、それでゐて私はナターシャを惡い女と憎むことができない。オブロンスキイが出征中負傷して後送されたのを看護婦となつた彼女は心から看護するのであるが、彼はとうとう死んで了ふ、その死の間際に於て彼は自分の友人のピエールに彼女と結婚してくれるやうに遺言する。彼の死に會つて彼女は非常なショックを享ける。そして戰爭が終つて平和に返つた數年の間に、彼女はいく人かの子供の善良なる母となるといふやうな筋だつたと思ふが、許婚の男をすてゝ男から男へ移る女でありながら、而もそれを惡いと憎ましめなかつたやうなナターシャのやうな女が私は好きである。

◇「秋の胡弓」の細君

片上伸

文學に描かれた好きな女のことを話せなどといふ頼みを受けたのは、これで二三度目のやうな氣がします。しかし、いきなり鉛筆と紙とを出して、話してくれといはれたとて、「文學に描かれた好きな女」の用意が平生出來てゐて、即座に御返事の出來るやうなわけには行きません。一體かういふ質問は、文學を本氣で考へてゐるものにとつては、ほんの座興式の、遊び半分の質問なのですからね。日本の婦人雜誌も、いつまでこんな質問の答へを集める程度にゐなくてはならないのでせう。

ですから私はかういふ質問に答へるのは好みません。答へなくてもお互ひに少しも人生がつまらなくはならない筈の質問ですから。

しかし、この質問を持つて來た柴山君にさう言つて返事をしたら、それだけでもいゝ、一つの返事になると言ふことです。そして、好

きな女といふのが無いなら、讀んだ作品の中で記憶に殘つてゐる女のことを何でも話せといふことです。一體よく考へて見なくては思ひ出せないやうでは、本當に好きだといふ問の意味には外れるでせう。しかし記憶に殘つてゐる作中の女性といふのなら、いくらでもありますが、ロシヤのものなら、たとへば

プーシユキンの『エウゲーニー・アニエーギン』の女主人公タチヤーナの、小さい時分から、自分のうちにゐながら、どこか、よその子が來てでもゐるやうな感じのするところがあつたといふやうなところ。今から見れば舊時代のロシヤの女ながら、どこか全くコンヴエンシヨナルでなかつたところ。

トルストイの『生ける屍』のマーシヤ。

スルゲーチエフの『秋の胡弓』の何とか云つた盲辯護士の細君。

メレジユコーフスキーの『うれしいことがあるでせう』の女學生。

さういふ女性がそれ〲違つた味ひの記憶となつてゐます。

◇私の好きな女性

倉田百三

作品に現はれた女性の中、私の好きなものといへば、先づ、ダンテの『新生』に於けるベアトリーチエ、ゲーテの『イフヒゲニイ』の中のイフヒゲニー、『親和力』のオツテイリエ、ドストエフスキーの『カラマゾフ兄弟』に現はれたグルセンカ、レツシングの『ミンナ・フオン・バルムヘルム』のミンナ等で、我國のものでは『竹取物語』のかぐや姫、近松の書いた『お七』それから淨瑠璃の『中將姫』歷史上の女性では光明皇后などである。

その中、『新生』のベアトリーチエは、眞實の意味の天的な淑女で、優美で高貴で私の最も理想的な女性である。彼女の天的な淸麗がこの地上に堪へないために夭死したことは、更に美しきものゝ上に永遠の淨光を射たものであらう。

イフヒゲニーは、神に捧げて、冷めたい理性的で高貴な美の持主であつた。

オツテイリエは、燃ゆる情熱を靜かに内に湛へて戀人に仕へた、忍耐深く寂し味のある女性である。

グルセンカは、墮落したやうな境遇に在つても靈魂の純潔を失つてゐない。卑しいものと、貴いものを感じわける力を、墮落した境遇にゐて失つてゐない。

ミンナは、眞に令孃らしい令孃である。快活で、無邪氣で、しかし、大事な點では眞面目な女である。少しお轉婆であるところが特色である。

かぐや姫は、月の都のものが誤つて地の上に住んでゐる。從つて地上に相應しくなく、本來天的なものである運命を持つてゐる女として、その特殊な宿命的な運命に私は心をひかれる。

お七は、ほんたうに娘らしい娘である。その人間的な情熱の生一本で美しいことを思ふ。

中將姫は、不幸な運命に在つて、信心深く、世を離れればならない尼としての美しさを持つてゐる。

光明皇后は、地上的な意味で、眞實な后であり、最も貴婦人らしい貴婦人である。さうして信心深く美しい女性である。

婦人生理學講座

（四）

內分泌と生殖腺（下の一）

永井潜

「吾等が婦人に於て敬愛すべきあらゆる物は、悉く皆な卵巣の賜である。」私は茲に重ねて、碩學ギルヒヨウの語を引用する。第二次性徵、第三次性徵、第四次性徵、悉く皆な第一次性徵の爲めに喚び起さるゝものであるとしたならば、生殖腺は、果して如何なる手段によつて斯る深甚なる影響を他に及ほし得るのであるかと云ふに、是れ全く內分泌の作用によるのである。已述の如く、身體の一部が遠隔せる他の部分に對して緊密なる關聯を保ち、相呼應することの出來る方法は二つある。其の一は神經系であり、他は內分泌物即ち「ホルモン」であるが、生殖腺が第二次第三次性徵に影響を及ほし得るのは「ホルモン」によるのである。其の證據としては、幼時に去勢せる動物にして、第二次性徵の發露せざるものに、生殖腺を移植すれば、遲れ馳せながら夫れが現はれて來るのは勿論のことであるが、敢て生殖腺其の物を移植せずとも單に生殖腺の化合成分を含有せる生殖腺のエキスを注射した丈けでも、十分に効を奏することの事實を擧けることが出來る是れ即ち生殖腺內に於て造られたる或る化合物が、直接其の作用をなすことを語るものである。

生殖腺が、生殖細胞を造る働をするのは勿論のことであるが、其の他なほ、內分泌をも行ふものであることが、斯樣にして明瞭となつた。然らば生殖細胞を造るものと、內分泌を行ふものとは、同一の物であるかと云ふと、左樣でない。生殖腺內には、生殖細胞になるものゝ外に、內分泌を行ふものがある。睪丸に於ては、顯微鏡でなければ見ることの出來ない細い管即ち細精管なるものが、無數にあつて、其の管の內壁に竝らんで居る細胞が增殖し變化して次ぎに精蟲になり、細精管が集合して成れる輸精管によつて外に出されるのであるが、なほ此の多數の細精管の間隙を滿たして居る或る種の細胞がある。之れを間細胞、若くは發見者の名譽の爲にレーチツヒ氏細胞と呼んで居る。此の間細胞が、如何なる役に立

つのであるか全く不明であつた所が、近時に至つて、この者が内分泌を行ふものであることが分かつた。夫れは次の事實からである。

幼い時に去勢した隨つて第二次性徴の現はれない動物に、生殖腺を植ゑると、晩蒔きながら夫れが現はれて來ることは已に述べた通であるが、其の際移植された睾丸を顯微鏡下に檢らべて見ると、細精管の細胞は死滅して、獨り間細胞のみが增殖して居る。して見ると、間細胞さへあれば、立派に第二次性徴を喚び起すことが出來るもので、敢て細精管の細胞を必要としないことが分かる。次に又レントゲン線即ちX線で、屢々若い動物の睾丸を照射すると、該動物は、生長した後、普通の雄と同樣に心身共に雄らしい性質を立派に表はし性慾もあり交尾も行ふが、併し子供は出來ない。即ち性交可能であるが、生殖不能に陷るのである。今、其の動物の睾丸を取つて、顯微鏡下に檢査して見ると、X線の爲に、專ら精蟲を造るべき細精管の細胞のみが侵されて、間細胞は少しも害を蒙つて居ない。此の事實は、X線照射が、動物をして何故に生殖不能ならしむるかを語ると同時に、間細胞さへあれば、心身の第二次性徴を十分に發露するに足ることを立證するものである。此の關係から、人間でも、常にX線を取り扱ふ人は、十分に注意しないと生殖不能に陷る憂がある。

次に輸精管の結紮法、即ち簡單な手術によつて、股の付き根の皮膚を切り開き、輸精管を出して、二ケ所で之を縛り、其の縛つた二箇所の中間で輸精管を切斷する方法も亦、X線照射と同一の結果を齎らすものである。蓋し此の場合、輸精管結紮の爲めに精液が外部に出ることが出來なくなつて、夫れが細精管に鬱滞して、管壁を壓迫し、其の結果、精蟲となるべき細精管壁の細胞を死滅し、細精管は萎縮し、夫れに代はつて間細胞は增殖する。そこで幼稚なる動物に此の手術を施すと、第二次性徴は現はれ、性交可能にはなるが、生殖は不可能となるのである。生長せる動物では、此の手術の爲に、性交可能性は繼續せられ、しかのみならず間細胞增殖の爲めに却つて性慾が亢進する傾向があるが、精蟲が出來ず、精液は外に出ないから、生殖能力は固より絕滅せられる。夫れであるから、常習犯罪人とか、遺傳性の恐るべき病的體質とか、凡て劣惡なる遺傳的素因を人類の間から一掃して、社會生活をして、より安寧に、より幸福ならしめんことを企圖する消極的人種改善學(消極的優生學)の實行に際しては、斯る法を採用して、人道問題と衝突することなしに、よく劣種撲滅の效果を收めんとするのである。

輸精管結紮法の新らしい應用は、近時スタイナハによつて試みられた。是れが即ち一時非常に有名であつた『若返り法』

である。生殖腺は、已に述べた樣に、又た後に述ぶる樣に其の內分泌作用によつて、心身の上に非常に重大なる生理的影響を及ぼすものであるから、若し生殖腺の此の機能が衰へると、心身に病的の變化を起すであらう。然らば心身の一般的衰弱、卽ち早老や老衰の如きも、斯の生殖腺の內分泌の機能が不十分になる爲ではなからうか。多くの人は、老衰するからして生殖腺の作用が弱る樣に考へて居るが、實は反對で、生殖腺の衰弱が原因となつて、老衰なる結果を齎らすのではなからうか、斯樣な考を先づ以て起したのは、其の當時世界に有名であつた佛蘭西の生理學者ブラウン●セカールであつた。ブラウン●セカールは夙に內分泌に關する幾多の研究を遂げ、斯の重要にして興味ある輓近の內分泌學說の基礎を築き上げた第一人者であつたのである。若し上述のブラウン●セカールの考が正しいものでありとするならば、老衰した人に何等かの方法で、生殖腺の內分泌物を補給すれば、老衰の暗雲を一掃して、再び若き生命の光を輝くことが出來なければならない筈である。ブ氏は先づ自分の體に就いて、この破天荒の實驗を試みた。

一八八九年、新翠滴らんとする六月一日、巴里の生物學會に於て、白髮等の如き七十二歲の老翁ブラウン●セカールはその新らしい試驗の成績を發表した。曰く、自分は生來心身共に强健で、精力人に過ぐるものがあつたが、併し最近十年以來、著しく老衰の影がさして動もすれば疲勞倦怠を起し、記憶は減じ、食欲は少なく、消化は障碍を受け、聽視聰明を缺くなぞ、又昔日の勢がなくなつた。自分は斯の老衰の主なる原因か、生殖腺の內分泌作用の減弱にあることの信念から、其の內分泌の不足を、人爲的に補給する目的を以て、犬の睪丸を取り、之を食鹽水の中に磨り潰ぶして、睪丸中の成分を溶かし出し、斯くて得たる睪丸液を、反覆自分の皮下に注射して見た所が、案に違はず、老衰の諸症狀が日を追ふて薄らいで、心身共に爽快となり元氣旺盛なりし壯年に復することが出來た。かくて斯の回春の靈藥が、斯の道の大家によつて提唱せられたのであるから、其の反響は實に非常なものであつて、睪丸液の使用は隨所に試みられたのである。然る所、獨乙の學者達の冷靜なる研究によつて、ブラウン●セカールの斯の研究は、美事に裏切られた。卽ちブ氏の若返りの現象なるものは、何れも主觀的のものであつて、實は自己暗示に基づいたものであることが明にされた。卽ち始めから卓効ありと確信して使用した結果、疲勞も去れば、消化も良くなると云ふ風に、實際心身の狀態に一轉化を行つたに過ぎないもので、全く一種の主觀的精神療法であり隨つて若し此の暗示作用を杜絕すると、睪丸液の効能の大部分は失

はれて仕舞ふことが明かにされた。爾來斯の生殖腺を應用せる臓器療法は頓挫を來たして醫界の一隅に辛うじて餘喘を保つて居たのである。

斯のブラウン●セカールの舊き考に、新らしき學說の糧を與へて復活を企てたのが、卽ちスタイナハであつた。スタイナハは、ブラウン●セカールによつて植ゑ付けられた生殖腺內分泌說の擁護と建設とに多大の功勞ある一人であるが、ブラウン●セカールによつて手を着られたこの空前の大問題は、大なる執着を以て追跡した。さうして人爲的に生殖腺內分泌物を補給する方法として、ブラウン●セカールよりも、より良き方法を實行した。夫れは卽ち輸精管の結紮であつた。蓋しブラウン●セカール法の如く、睪丸の食鹽水エキスを造つて注射するのでは、第一には睪丸の化學成分が殘りなく溶けて出るか否かゞ疑問であるし、第二にはよし全成分が溶けて出たとした所で、時々睪丸のエキスを注射するのは、自然の狀態に於て、睪丸が絕えず必要量の內分泌物を造り、之を血液に送り出して居るのと餘程關係が違つて居る。そこで生殖腺の作用が衰へた場合、生殖腺內分泌物の人爲的補給の理想として、出來得る限り自然の儘に近似せしめんとするには、內分泌を行ふべき組織其の物を復活せしむるに如くはない。此の復活を期待すべく、スタイナハは、最も簡單にして且つ確實なる輸精管結紮法を選んだ。已述の如く、輸精管を結紮すると、細精管は萎縮し、夫れに代はつて內分泌作用を行ふ間細胞が著しく增殖するからである。

スタイナハは、先づ白鼠を試驗動物として研究を重ねた。白鼠は比較的短命で、約三十ケ月の壽命しかなく、又病氣でない自然的老衰の兆候として、毛が拔けたり、體重が急遽に下がつたり、食欲が衰へたり、運動が不活潑になつたり、就中生殖腺が著しく萎縮して、性慾が甚だしく減退するものであるから、夫れを標準として若返り法を試み、果して奏效するや否やを知る上に多大の便利がある。スタイナハは、先づ雄の老鼠に就いて輸精管結紮法を試みると、其の結果、漸次に上記老衰の兆候が退散して、若返ることを見た。雌に於ては、勿論輸精管はないから、若い雌から卵巢を取つて、雌の老鼠に移植することによつて、若返りの目的を達せしめた。スタイナハの報告の一例によれば、二十九ケ月の雌に、若い雌の卵巢を移植した所が、其の移植した卵巢の間細胞の內分泌によつて、一般に老衰せる組織細胞が機能を復活し、一旦萎縮した老鼠自己の卵巢も、勢力を盛り返へして、卵細胞が成熟し、受胎を遂げ、懷妊し、分娩し、乳腺もよく發達し哺乳をも行つたと云はれて居る。



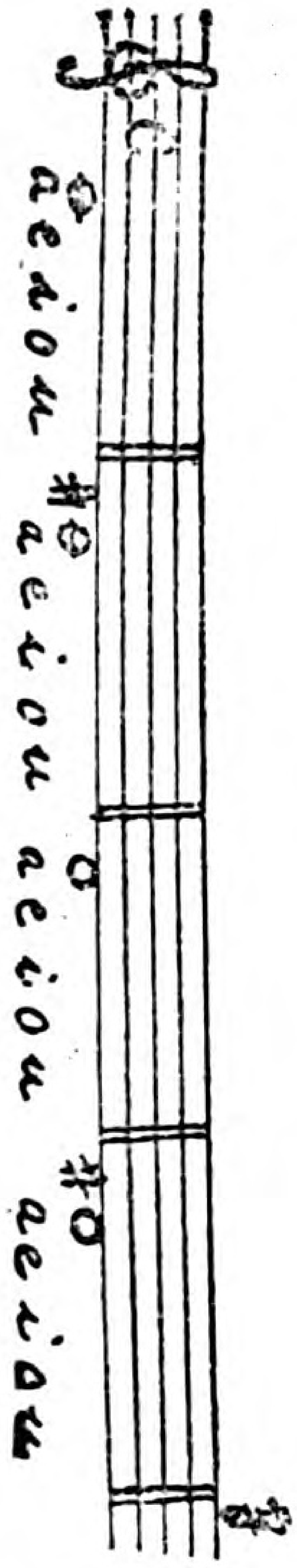
聲樂の道（二）

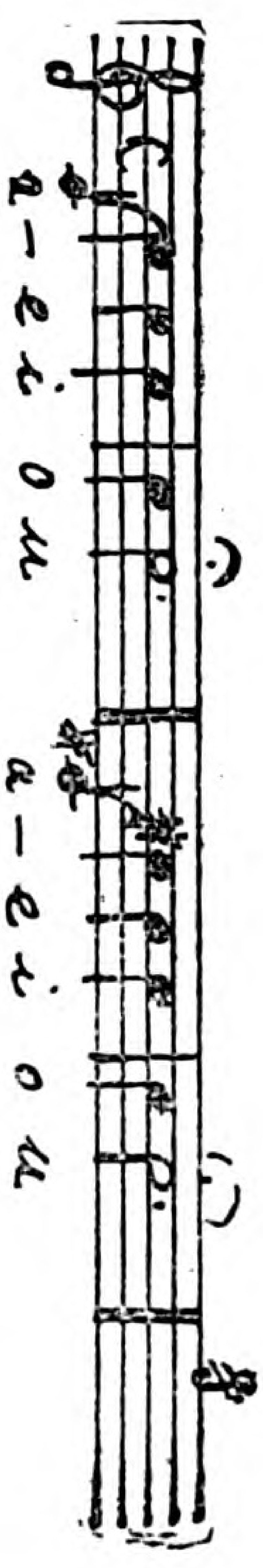
柳兼子

五、母音の發音

地聲、上聲、頭聲と、聲樂上用ゐられる各種の音聲の性質が解りましたら、今度は母音、卽ちａｅｉｏｕ（アエイオウ）の各音を用ゐて各音程を發聲致します。

母音發聲の練習は最初に、ａならａばかり、ｉならｉばかりと、各音を別にして發聲するよりも五音を繋げてした方がよろしう御在ます





ａの音を發聲する口の形は、前に口の開き方として說明した通りになさればよろしいので御在ます。ａからｅに移ります時には、ａを發聲した口の形を殆んど變へずにそのまゝｅを出す樣になさい（舌の尖端に多少押す力を感じる位の程度より出でぬ樣に、出來るだけ口の形を變へない樣に注意なさい）。そしてそれをｉに移す時も、ｏ、ｕと移してゆく時も、出來るだけ口の恰好を變へぬ樣にし、それで居てａはａと聞え、ｅはｅと響き、ｉはｉに、ｏはｏに、ｕはｕに明瞭に響く樣に、注意と工夫とを以て練習なさい。而して、五音いづれの音を發

するに當つても、aを發聲する時と同じ程度に、上齒と下齒の間が開いて居らなければいけません。そして發聲の最初、卽ち右にあげた例で云へばaの音の頭にだけ attack をつけ**後はe i o uとなだらかに移していらつしやい。又音によつ**て前方に響いたり、奧の方に響いたりする事はよく御在ません、各音むらなく一樣に前方に響く樣に注意なさい。

玆に述べました樣に、口の恰好を各音に從つて變へないやうにすると云ふ事は、日本に一般に行はれて居る在來の唱歌敎授法には全然反して居るので、不審を挾まれる方が多からうと存じます。敎科書に迄も、母音は各音響の特色によつて口の恰好を變へて書き示されて居ります。恐らく多くの方は敎示された在來の此の方法が至當と信じて居られるに違ひ御在ますまい。併し私は自分の持つ經驗を立場に、その敎授法が如何に間違つて居るかといふ事を指摘して置き度く思ひます。

成る程、母音各々の相異を、口の形に表はして出來るだけ明瞭に說明しようと云ふには、敎科書の圖に示された通りに表はすのも間違ひでは御在ません。そして發聲練習に應用しても、一つ一つの音を分けて、念入りに發聲する樣な場合には、あの通りでも立派に響かし得られるに違ひないので御在ます。(それにしても敎科書圖中のィ音の口の形の如きは、隨分發聲に無理の樣に思はれます)。併し、歌を唱ふ場合には、發音の爲に一々十分の注意を届かせると云ふ事は不可能なので御在ます。玆に技術上の素養のない人に、自然のまゝに母音を出させて見たなら必ず證明される事で御在ますが、五つの母音は各音によつて、奧の方に引つ込んだり、前の方に響いたりする特質を持つて居ります。然るに聲樂上に於ては、各音は皆前方に一樣に響かなければならない必要が御在ますので、五音各々の特徵に從つて口の形を明かに變へる事は、各音響の特質もそのまゝに露骨に現はれ、外面への響きに必然むらが出來る一原因を作ります。從つて、連續した言葉を唱ふ場合など一々口の形を變へて各音を發聲する時には、尙の事、各音響の特質、卽ち前方とか奧の方とか、響きの場所の關係が混亂して、却て發音の明瞭を妨げる結果を産み易う御在ます。

要するに、聲樂上の發音法といふものは、聲樂上と云ふ事を立場にして硏究されなければならない筈で御在ます。假令一般の發音學上正當であると見なすべき方法も、歌ふ場合に應用して無理を生じる樣では、聲樂上の發聲法として價値あるものと云ふ事は出來ません。これに代つて必然と他の適當な方法は求められなければならない筈で御在ます。

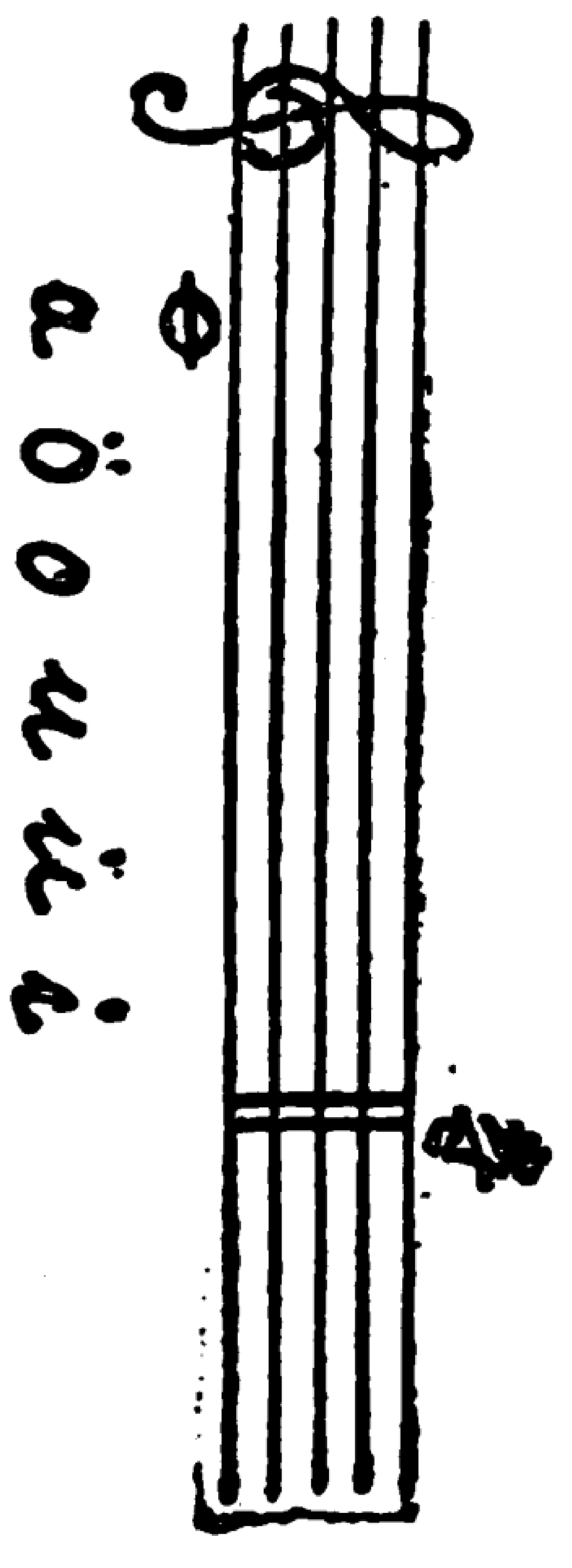
自分が最も適當なやり方として前に述べました方法に、只

一筋に私が研究の結果から産み出したものでは御在ません。伊太利式の發聲法として、既に永い間聲樂上に用ゐられて居つた方法に過ぎないので御座ます。井の中の蛙の樣に育てられた私逹には、自分逹に敎へられる發聲法以外の方法を知るよしも御在ませんでした。そして敎へられた範圍の中で苦心するばかりで御在ました。それが或る機會で伊太利人の語學の先生に伊太利語の歌をきいて頂いた時、『それは純伊太利の發音ではない。』と評されて、伊太利語の語學上の發音の響きから、伊太利語の唱ひ樣等示されました。又殆どそれと同じ時分に、或伊太利の歌手が一人の弟子に母音發聲の敎授をして居るのを見ました。この二つの機會によつて、始めて、伊太利語の發音の性質を知る事が出來、同時に伊太利式の發聲法を知る緒を捉へる事が出來たので、自分の苦心を新たに得た世界の方へ延ばす事を得たので御在ます。その結果は私に聲樂上非常に發音の自由を與へました。それまで、獨逸語を唱へば母音に響く音が開き過ぎる樣な缺點を感じますし、日本語を唱へば發音がこもり過ぎて曚朧となる樣な傾きがあつて明瞭に發音する爲めに隨分骨を折りながら、一向に滿足な結果を得る事が出來なかつたのが、新しい方法で母音發聲の練習を積んだ結果、各種の音を移變させる事が非常に容易になりました。私が獨逸語の歌の發音に就いて、先生から非難を受けなくなつたのはそれから後であつたのも、後に伊太利式の發聲法が有名な聲樂家の多くによつて推奬されて居る事を知つた時、それと思ひ合せて頷かれたので御在ます。

母音發聲の方法以外に渡つて語り過ぎた樣に思へますが、兎も角、單に邦語の歌を唱ふ場合のみの上から云つても、在來の唱歌敎授上の發聲法によつて習つた人の多くが、發音に特別の苦心を要される樣に見えたり、不明瞭な發音で暢氣にすまして居られたりするのを聽く時、根本的に母音發聲法の改革をおすゝめし度いので御在ます。

六、曖昧なる響きを持つ音の發法

之は獨逸語の umraut の附せられたる音、卽ち ö だとか ü 等の如き音、或は佛蘭語の en in ui 等の如き場合の母音の響きで御在ます。¨ の附けられた音は、一つの音譜に一つの音を附けて長く發聲するのも一方法では御在ますが、次の例の樣に普通の明瞭な母音を間に挾んで、各發音の區別がよく分る樣に練習するのも最もよい方法の一つで御在ます。

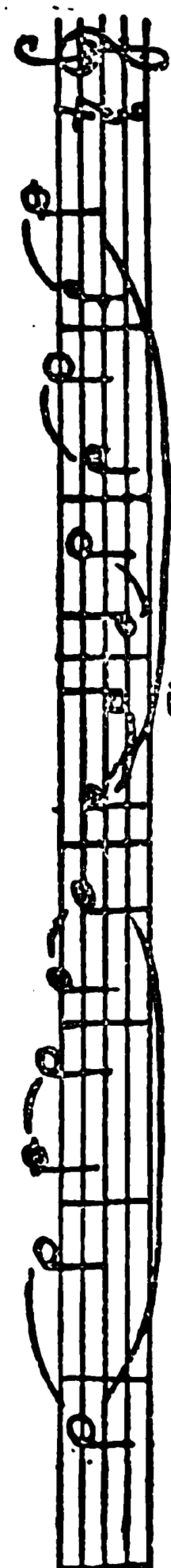


勿論音の順序は種々に變へておやりなさい。Stockhausen の "Gesangstechnik" 中に此の爲の良い練習曲が澤山出て居ります。

佛蘭西語の、前に揭げた樣な音は後に n の樣な子音が伴つた場合に特別な響きを持つ場合が多いので、母音だけ獨立させての練習は一寸仕難う御在ます。之は後に佛蘭西語の歌を



ポルタメントの例



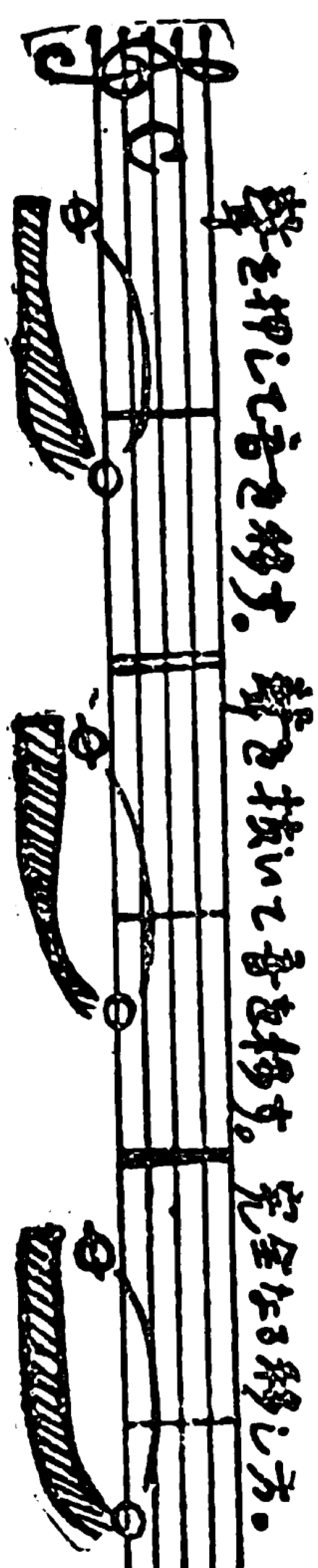
マルチーゼ練習曲第二番より

唱ふ時に際して特に練習をされるのが便宜かと思ひます。

七、ポルタメント

二つ以上の連續した音程を唱ふ場合に、音から音への移り變りが、ぶつきら棒にならない樣に、成るべくなだらかに自然に繫げる方法をポルタメント（Portamento）と申します。

此練習に際しては、兎角聲を押す惡い癖がつき易いもので御在ますから、その點をよく注意なさい。又なだらかに聲を移さうが爲に、音から音へ移る際に聲を拔く樣に加減する人がありますがそれも大禁物で御在ます。聲を押す癖は、引いては一つの音を下から持上げて出す樣な癖を作る原因にもなるもので御在ます。終りの圖例を比較して御覧なさい。三番目にあげた圖に示した樣に音の幅がいつも同じにゆく樣に氣をお付けなさい。

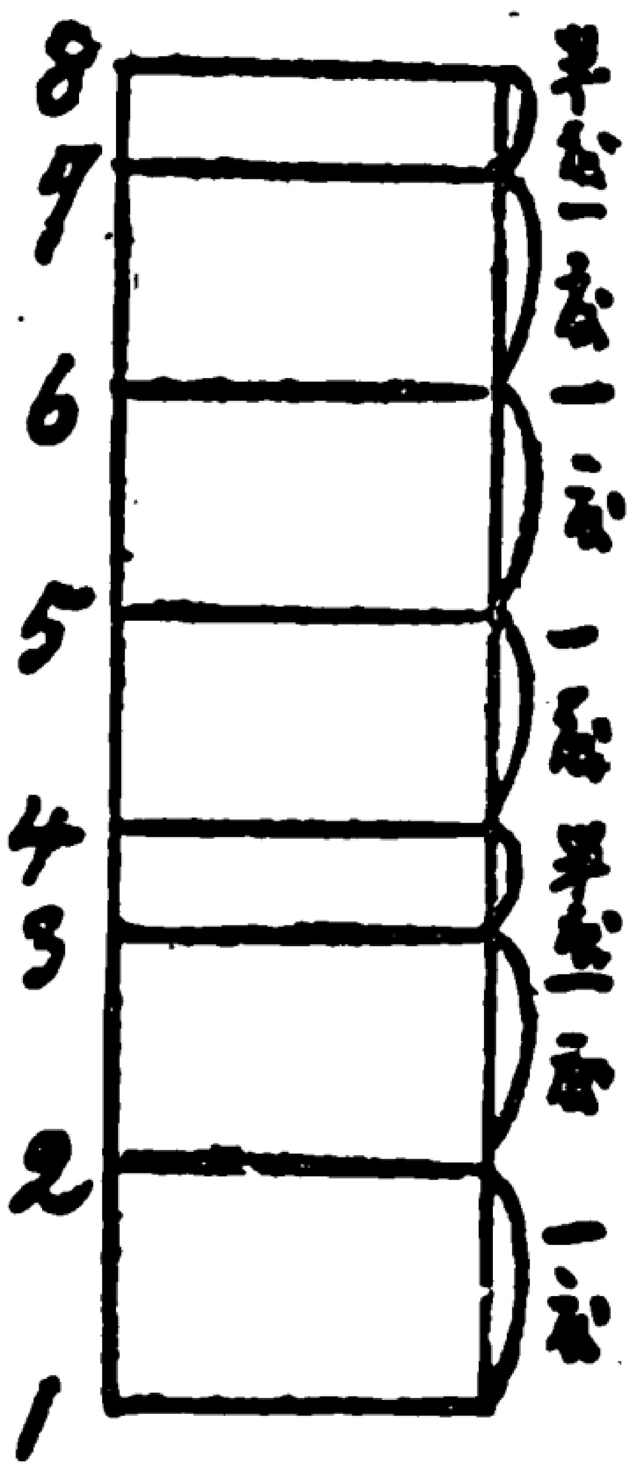


八、音階の練習に就て

音階には長音階と短音階と御在ますが。最初には先づ長音階を基礎にして十分練習を積んでゆくのが普通で御在ます。

長音階は何誰も知つて居られる樣に、第三音と四音の間、及び第七音と八音の間が半度音程の差で、他の音は一度の音程の差によつて繋がれて居ります。

長音階音律圖解

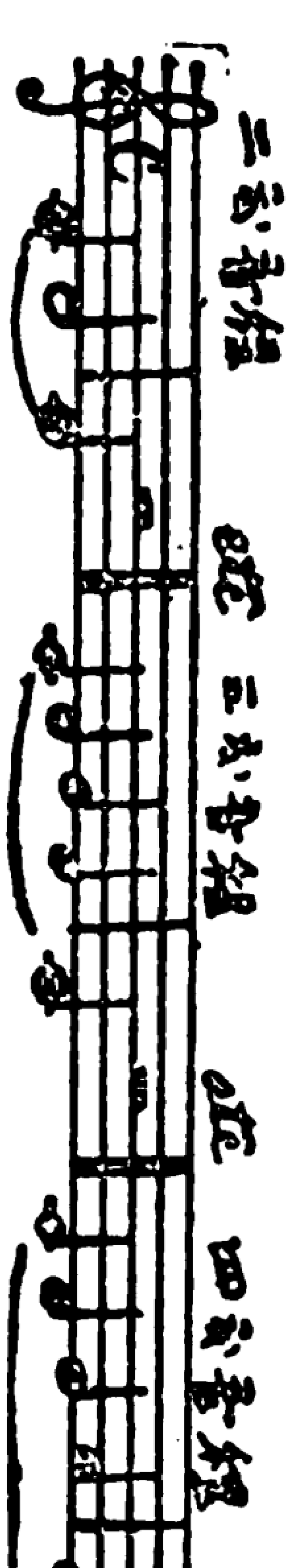


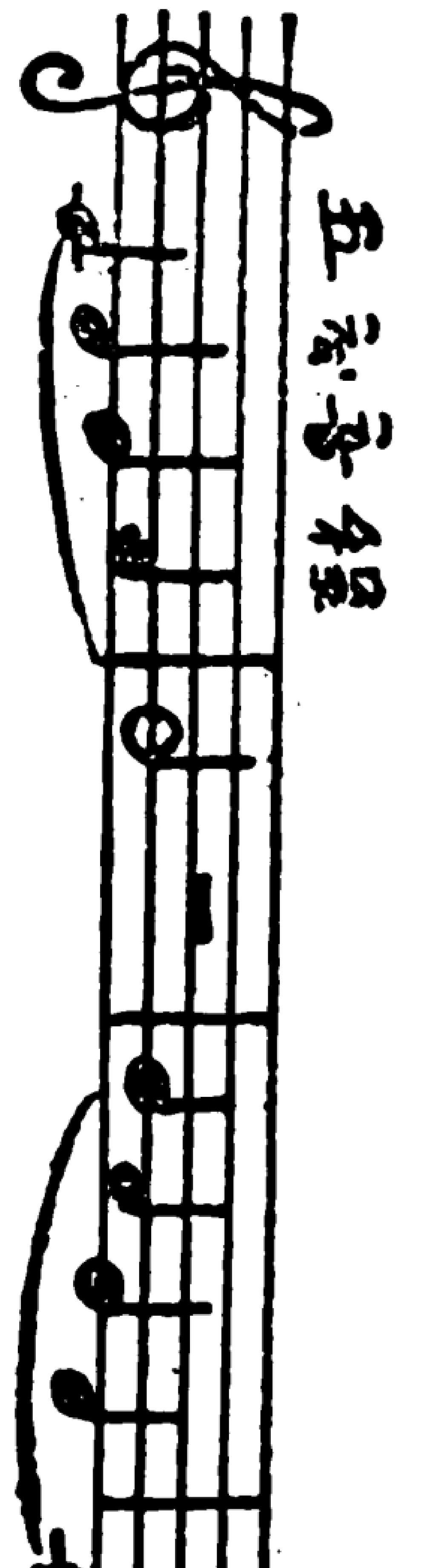
既に私達の耳によく馴染んで居る筈の簡單な此の一オクターヴの長音階を唱ふにも、正確に定まつた音程に聲をはめる事が出來ないで樣々な癖をもつ人を見出します例へば、音階を上る時には第四音が上り氣味になるのと第七音が下り氣味になつて從つて第八音、卽ち一オクターヴ上の基礎音に聲が完全に納まらないのとが一番多くある癖で御在ます。

勿論さうばかりとは限つて居りません。人によつて種々で御在ますが概して右のやうな缺點を見出す場合が一番多う御在ます特に長音階に於ての第七音は導音と名附けられて居る通り、必ず第八音に導かれて基礎音程に納められなければならない運命を持つて居るので御在ますから、七音に深き注意を拂ふと同時に、第八音がきつちりと納まるべき所に納まる樣にお唱ひなさい。

音階を上る時にも下る時にも、アルトの人はラ以下を、ソプラノの人はミ以下を地聲で唱ひ、夫等以上の音からは上聲に變へてお唱ひなさい。聲にむらのない樣に、いづれの音も同じ强さに、併し第八音は特に氣を入れてよく響かす樣にする事を普通長音階の練習上の注意として忘れてはいけません。

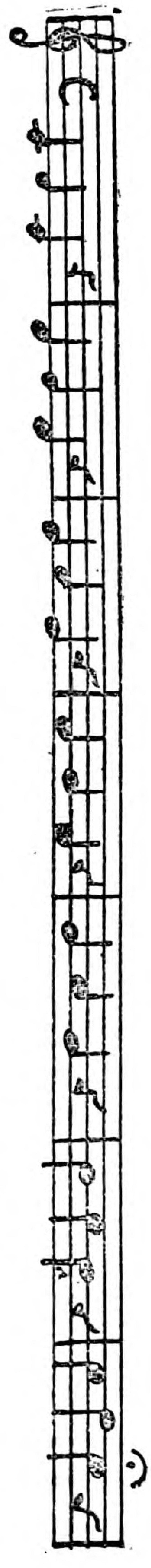
右に一オクターヴの長音階練習に就て述べましたが、一オクターヴの練習に先立つて、音階を小部分に分けて念入りに練習する事は非常に有效で御在ます。





右の樣な例を段々に半音づゝ基礎音を上げて練習してもよろしう御在ますし、又左の樣に一オクターヴ中の各音に渡つて少部部づつ分けて仕て見てもよろしう御在ます。





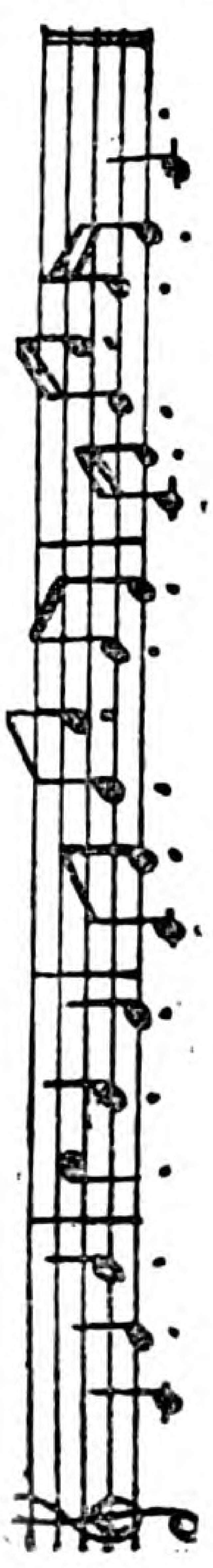


一オクターヴ以上の音階は、オクターヴの旋律を重複してゆくに過ぎないので御在ますから、普通一オクターヴの音階が完全に唱へる樣になりましたら、一オクターヴ中の音階を樣々に變へて應用練習して見るとよろしう御在ます。Marchesi の "The art of singing" 第一卷中の二十二番から四十三番あたり迄の練習曲など適當で御在ます。

右の樣な長音階の練習が相應に積みましたら、追々に拍子の速度を加へて、コルラテューア卽ち、音聲を急速度に轉がして唱ふ方法へと練習を進めて行くので御在ますが、それは別にコルラテューアの方法として後に述べる事に致します。

九、スタカット

スタカット（stcatto）は何誰も御存じの樣に、音を極めて短く切つて出す方法で御在ます。之には、▼と●との記號によつて、いくらか長短の區別が御在ますが、練習上にはわざ〳〵二種類を用ゐる必要も御在ません。只出來るだけ短く切つて出す方法のみ會得すれば、いづれにも應用が出來ます。



右の例の如くスタカットの連續した音譜を唱ふ場合には、音と音との間に少しでも繋りの出來ない樣、はつきりと完全に切れる樣に出來るだけの注意をお拂ひなさい。極弱聲、乃至普通の弱聲で輕く、併し音程が狂はない樣に、前額から前頭部によく響かせて練習して御覽なさい。尙スタカットの練習には a e i o u の母音の代りに ha he hi ho hu の音、卽ちハ行の音を使用するのが最も有效で御在ます。就中最初には ho 音で練習すると容易で御在ます。

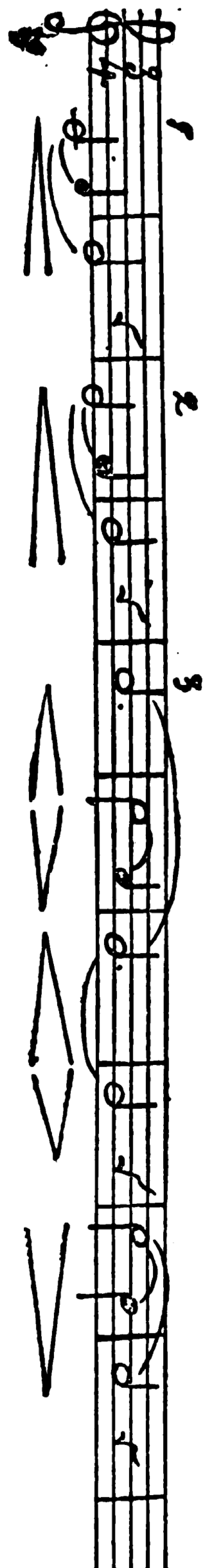
十、クレッシェンド・デクレッシェンド

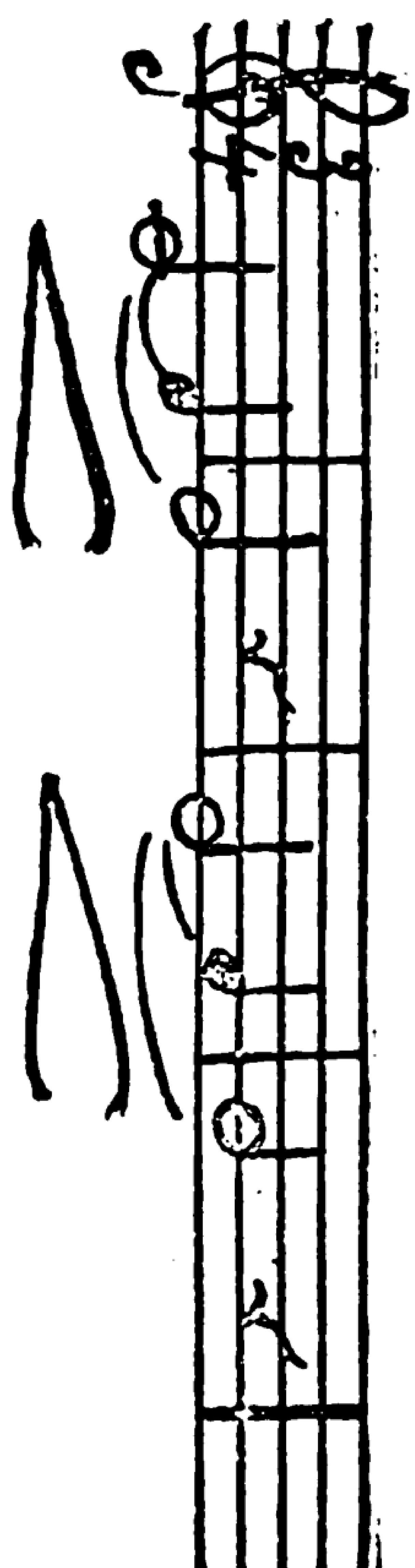
クレッシェンドは音聲を弱聲から漸時に強くし、デクレッシェンドは強聲から漸時に弱聲にする方法で御在ます。(クレッシエンドの記號∧。デクレッシエンドの記號∨。)之は急に強くなつたり、弱くなつたりしてはいけません、記號が表はすやうに漸時に強く、漸時に弱くなるのがよいので御在ます。左に圖に示した樣な恰好になるのはいづれもいけません。



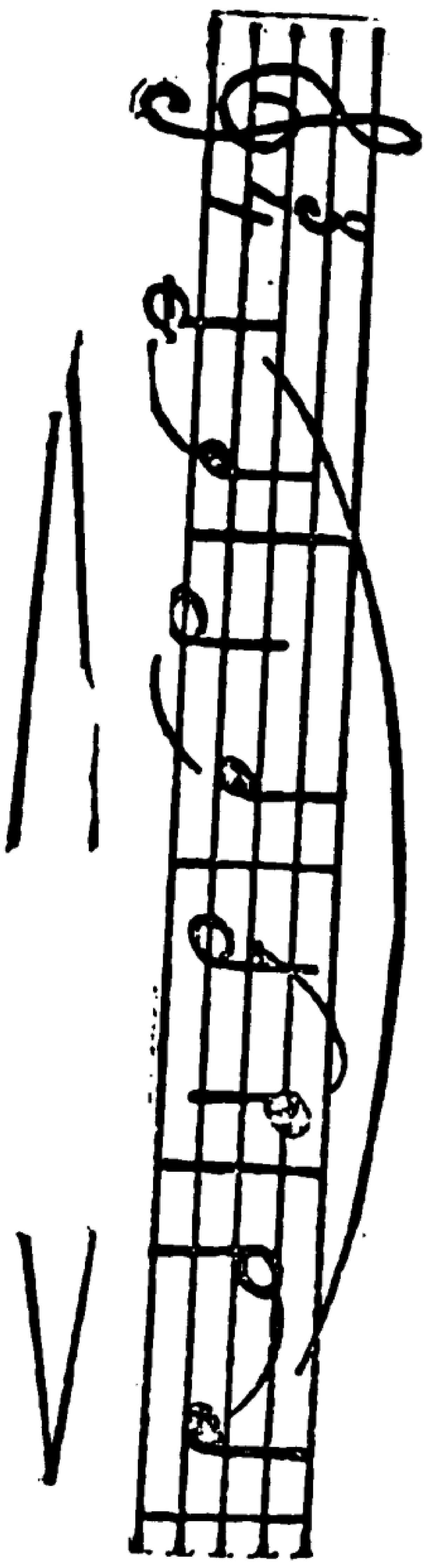
強くする聲は響きを強くする心でして、息で押して太くしない樣になさい。弱くする場合には、音響が奥の方へ抜けてゆき易いもので御在ますから、なるべく上顎から鼻柱の方にかけて響きを弱めてゆく樣に氣をお附けなさい。

Marchesi の第二卷の中から旋律を借りて練習上の注意までに二三述べ添へて置かうと思ひます。便宜上音譜の上に番號を附けて置きます、1と2は共にクレッシェンドで切れて居ります。此の場合には前に述べた樣に段々になだらかに強めてゆき、最後の處で強くしたまゝにぶつつりとお切りなさい。

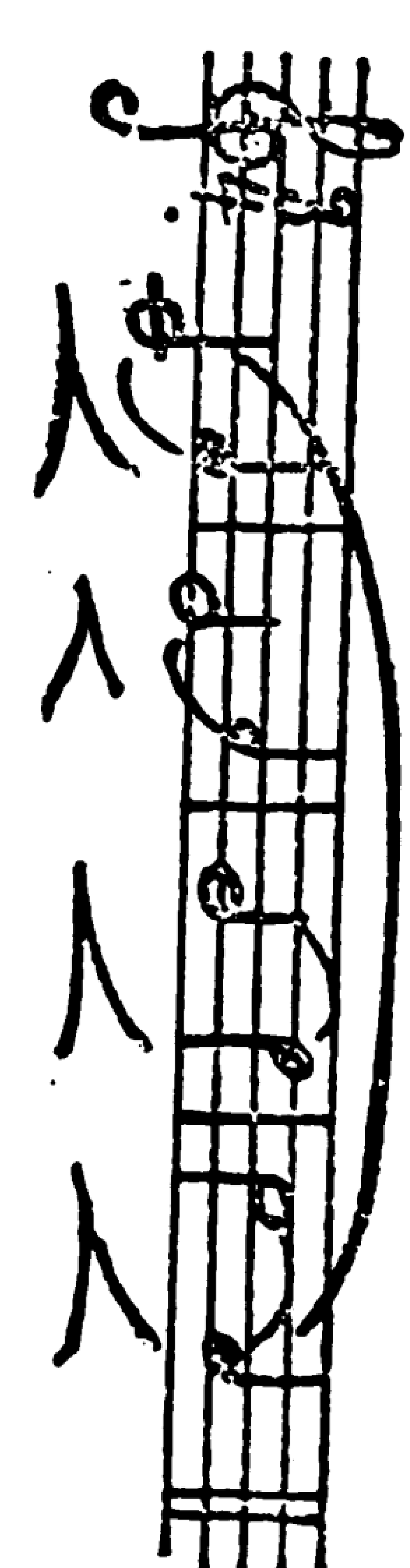




右の様な形にならない様に注意なさい。3の處でクレッシェンドから、更にデクレッシェンドになつて居る時には、何の音の處で一番強くなつて居るか、何の音の處で一番弱くなつて居るかを注意深く觀察する必要が御在ます。4の處の様にいきなり強聲から始まつて居るのは頭に attack を利用して、いきなり思ひ切り強くお出しなさい。attack は無論、クレッシェンドの場合、如何に弱聲から始められて居ても發聲の最初に必ず附けられて居なければならないので御在ますがデクレッシェンドの時には殊にその效果が明かに目立ちます。併し弱聲に移る爲めに attack するやいなや聲を拔いてしまつてはいけません。兎角さういふ弊に陷り易う御在ますからよく御注意なさい。どんなに強く attack しても、その強さから漸時弱めてゆかなければなりません。アクセントとクレッシェンドとは相違のある事を知らねばなりません。

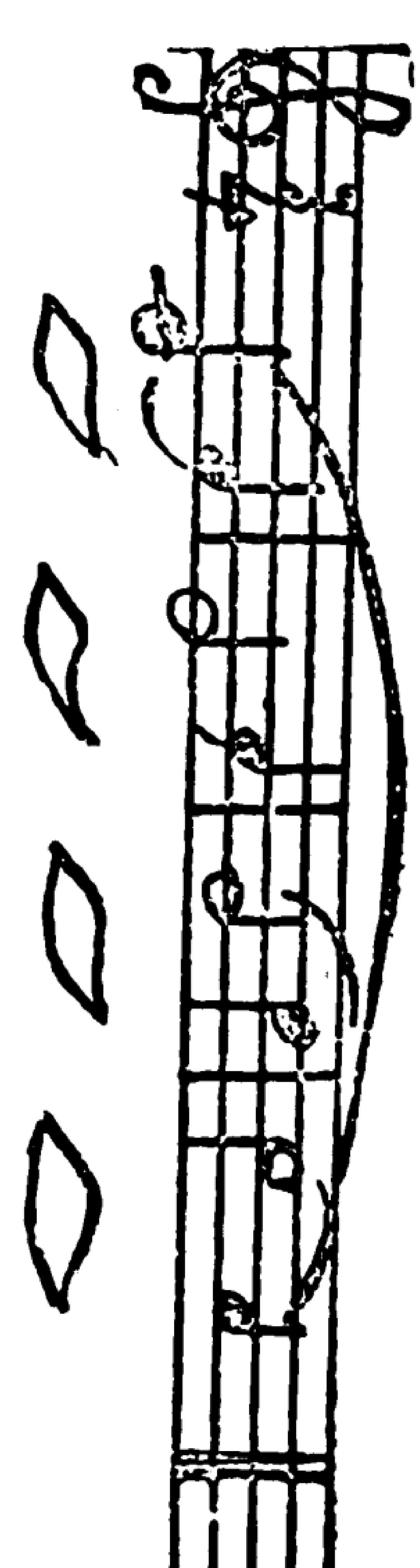


右の様な旋律に一體に渡つて大きくつけられたクレッシェンドを歌ふ時には、左の様な弊害を伴ひ易う御在ます。いづれもいけません。



一番目の音より二番目の音、二番目の音より三番目の音と順次に強くなつてゆくので御在ますから、そのつもりで唱はねばなりません。

例によつての注意はこの位に止めて置きまして、茲に一つ申し添へて置きたいと思ひます。之はクレッシェンド、デクレッシェンドといふ方法の説明ではなく、まとまつた曲を唱ふ仕方として述べるべきものかとも思ひますが、クレッシェンドやデクレッシェンドに關係が御在ますので序に申述べて置かうと思ひます。



素人が一つの纒つた旋律を唱ふ時に、往々音の一つ一つ夊

は一つの纏つた旋律を細かに分けてクレッシエンドやデクレッシェンドを應用し度がる樣な傾きが御在ます。「歌曲に現はれた音といふものは、其音一つ〳〵に意味を持たせなくてはいけない」。といふ自家一流の異見をとなへてさういふ唱ひ方をする人にも出逢ひました。(大方その人はクレッシエンドやデクレッシエンドの力だけで音一つ〳〵に意味を附ける事が出來ると思つて居るので御在ませう)。併し私はそれに反對し度いので御在ます。纒まつた一つの旋律といふものは、幾つかの音の連續によつて構成された所に價値があるので、此の場合音の意味といふものは、その旋律を運いて行き渡つて居らなければなりません。決して一音々々離して考へてはいけないので御在ます。

之は後に歌曲の唱ひ方の所に於て重ねて述べる事に致します。

その道に深く入らない人の内には、假令歌がせゝこましく聽えても、生半可な技巧を澤山に使ひ度がる方を多く見うけます。さうする方が上手に唱へたと思ふので御在ませうか。併し事實は反對で御在ます。(續く)

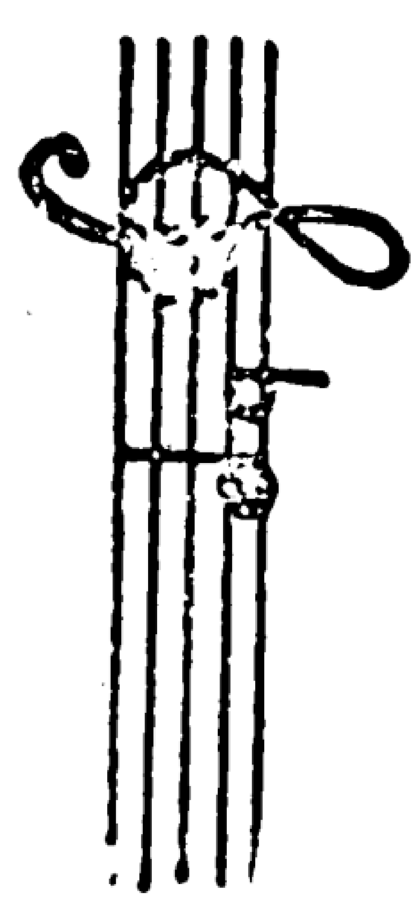
前號の訂正

一二五頁下段左端の attack 練習用にかゝげた音譜はあゝ記しては記譜上の規則違犯で御在ました。次の樣に訂正致します。

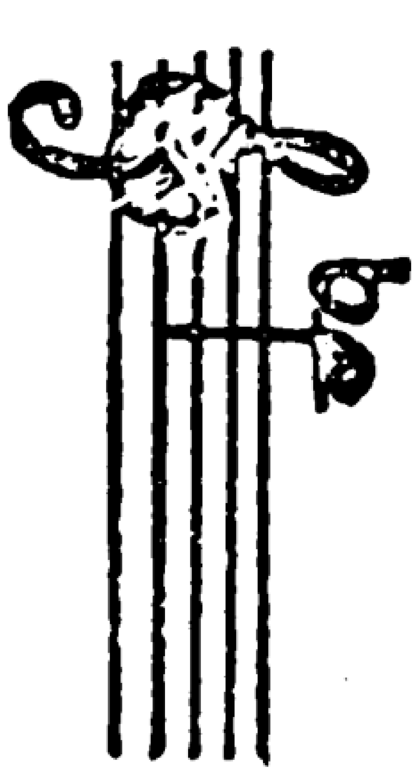


それから一二七頁の音域に就いて記した處は二行目から全で何の事かお解りにならなかつたで御在ませう。あれは原稿にはりつけて置いた音譜がとれたのでぬけてしまつたらしく思はれます。左の通りの説明になる筈で御在いました。

「各自の持つ音聲の區域は練習によつて或る程度までは擴げられるもので御在ます。例へば始めせい〳〵



位までしか出なかつたものが、上聲や頭聲等の練習を積んだ結果自然に



位まで出る樣になつた例はいくらも御在ます。」

も一つ、自分は別に氣もつかずにそのまゝ使つて居りましたが、素人の初歩の方から、「やis」とは如何いふ音かといふ質問を受けました。之はこれから一般の何誰にも解りやすい樣に伊太利式の音名を用ゐて「a」とか「a嬰」とか記す事に致しませう。

燒野の雨

濱田廣介

茅のやけ野に
雨がふる
松がいつ本
墓ひとつ
むえん佛の
墓ひとつ
いつかきぎすが
啼いたろに
濡れる茅野の
青がやよ
はやく芽を出せ
青がやよ

二つの懸賞募集

一、『女性改造』表紙の圖案

『女性改造』が有つ使命にふさはしく、而も現代女性の感情にぴつたりと合ふ、柔しい中に力の籠つた新らしい表紙の圖案を廣く募集致します。

賞金　一等　二百圓（一人）
　　　二等　百圓（五拾圓づつ二人）

規定

一、應募圖案は必ず創案たること。
二、應募者は男女共差支へありません。
三、寸法は菊判（縱七寸四分横四寸八分）大のこと。
四、色は三色乃至四色のこと。
五、使用文字は自由なること。
六、締切は二月十五日（但し當選發表は四月號誌上に）
七、審査は『女性改造』編輯部に於いて行ふ。
八、封筒には『表紙圖案』と朱書し『女性改造』編輯部にお送り下さい。

二、私の尊敬する現代日本の作家

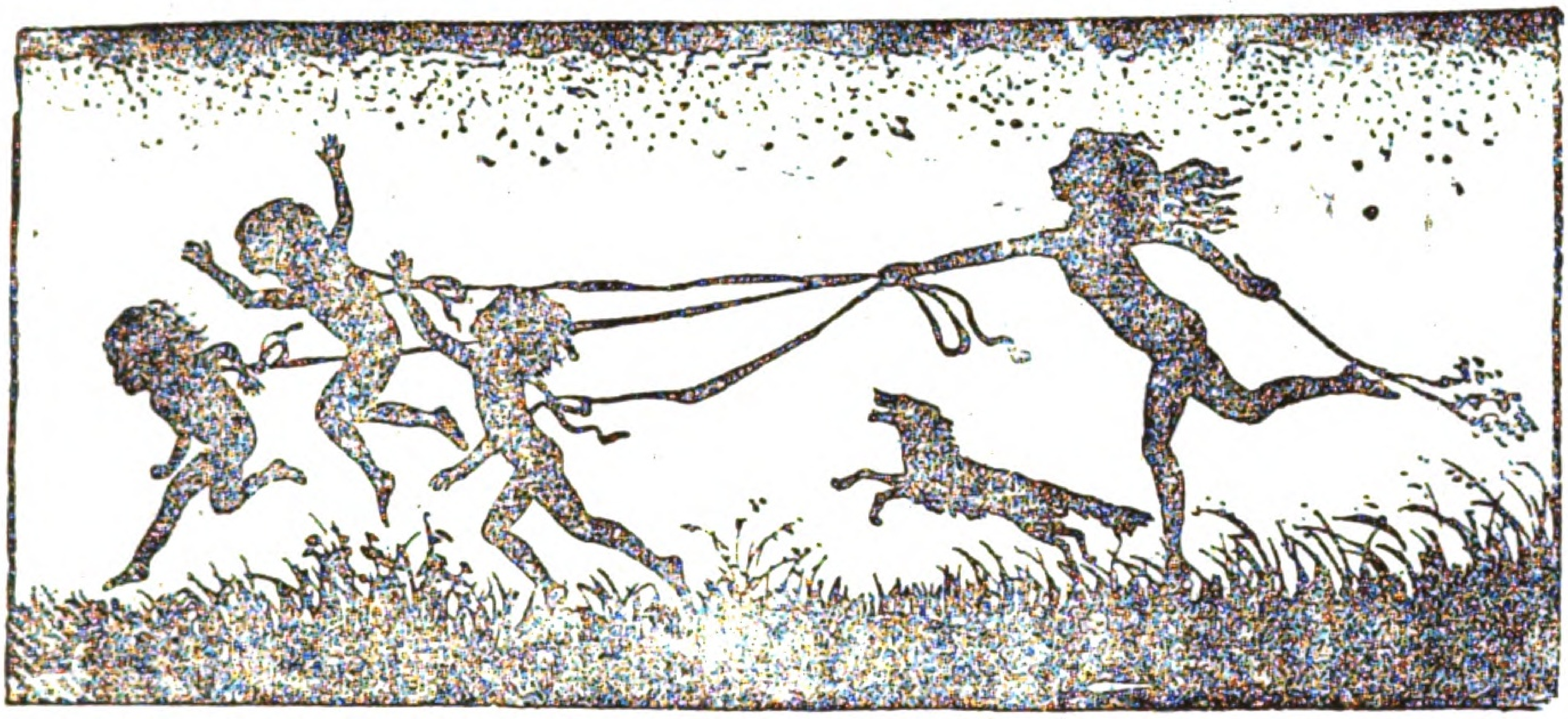
皆樣が最も尊敬して居られる現代日本の作家に就て、その作品に、その思想に、又人間として、生活乃至人生に對する態度、その他出來得るだけ廣く觀察して、その尊敬する理由を、遠慮なく思切つて書いて下さい。

賞金　一等　百圓（五拾圓づつ二人）
　　　二等　百圓（貳拾圓づつ五人）

規定

一、應募者は婦人に限ります。
二、原稿は二十字詰二百行以内のこと。
三、締切は二月廿五日、當選發表は『女性改造』四月號誌上に於て。
四、原稿は返戻せず。
五、封筒の表に『應募原稿』と朱書して『女性改造』編輯部宛にお送り下さい。

創作



踊つた男

葛西善藏

此の町の若い人達で、『青春』といふ同人雜誌を出して居る。雜誌の名の示す通りそれは二十歳前後の青年達の集まりであることは言ふまでもない。私は此の種類の地方雜誌を月々幾種類か、方々から寄贈されて居るが、大抵殆ど目を通すことは無い。たゞ終りの六號活字の雜感風のものとか、編輯後記とか言つたやうな部分を、徒然のまゝに一寸覗く位が關の山である。それも大抵は同巧異曲で、文學といふものに對する熱情的な興奮で、妙に元氣がつたり嬉しがつたりしてゐる若さが眼につくぐらゐである。

『青春』も決して其の例に洩れるものではなかつた。たゞ其れが、此の地方の若い人達の出してゐるものである關係上、最初の内は只雜誌の寄贈を受けるだけだつたのだが、私が近くに住んでゐるために、其所の同人が、時々私を訪ねて來るやうになつてからは、三四人の人を個人的に知るやうになつて了つた。よく二人連れか三人連れで訪ねて來ては、元氣に、愉快に、話して行くのであつた。對談の間に、彼等の書いた物の話が出ると、いつも私は、『まだ讀んでゐないんですが……』と言つ

て諒解しなければならなかつた。

さうして訪ねて來る中に、花井君と言ふのがゐた。或る私立大學の文科に籍を置いてゐて、連中の中でも比較的文學に就ての素養もあり、話をさせても一通りの理解力も有つてゐて、よく文壇のイズムとか傾向とか、誰彼の作家の批評などを論じたりすることもあつた。そんな風なので、その點で彼は同人連中の中では皆に尊敬を拂はれて居るらしかつた。差當り彼を中心にして、他の同人は其れに馳せ參じた恰好であつた。少くともさう私の眼には映つてゐた。

今一人、彼よりは少し年上の、肥田君と言ふのがゐた。肥田君は花井君ほど才氣走つたやうな所が見えなかつたが、多少年上のせいもあらうが、何所となく落付いたところがあつて、話をしても妙に大人らしいところが感ぜられた。肥田君も少し前までは、花井君と同じ學校に籍を置いてゐたのであるが、そして肥田君の方が上級で、今暫くで卒業できる所を學校は面白くないと言つて、自分で止して了つた。

それまでにも二三度私を訪ねて來たことは來たが、學校を止して了つてからは前よりも度々私を訪ねてくるやうになつた。所がその反對に、才人の花井君の方は、何故だかだん〲遠のいて了つて、もう其後は、雜誌を寄贈された時位のほか、私は花井君の名前に接しることはなくなつてゐた。

或る時、肥田君がいつものやうに訪ねて來た時、私は偶と話の序でに、

「此頃花井君は何うです、些とも來ないやうですね」

と訊いて見た。すると肥田君が、例の落付いた調子で、

「僕も近頃餘り會はないんです、友達に聞いたのでは、何だか僕に反感を抱いてゐるやうな話なんです。僕が藝術に厚意を持たぬとか何とか言ひ觸らしてゐるやうですよ。實際は然うぢや無いんですが、何しろあんな調子ですから、僕も面倒臭いもんですから、向うで何と言はうと平氣でゐるんです。かうなると僕も別に近付く必要も無し、結局此の方がらくで

すよ。」と言ふのである。そして『だから雜誌の方も段々旨く行かなくなるでせう。同人の氣持が今のやうにバラ〳〵になつて了つては、迚も永續きはしないでせう』と、まるで他人事のやうに附加へた。

私には、肥田君等の雜誌が旨く行かうが行くまいが、永續きしようがすまいが、それは何の關はりも無いことだつた。それよりも私の興味を惹いたのは、肥田君が花井君の戀愛に厚意を有つたとか有たぬとか、そのために二人の友達の氣持が分れ〳〵になつたとか言ふ事實だつた。成る程さう言へば、これまで『靑春』に發表してゐた花井君のものには、大抵若い男女の戀愛らしいものゝあつたのを私は、無論忠實に讀んだわけでは無いが、雜と眼を通して感じたゞけで、知り得てゐる。然し私は、それは、能く文學靑年の好んでするやうに、空想の所產だらうとばかり思つてゐた。で今、花井君が戀愛して、その戀愛に對して肥田君が厚意を有たなかつたとかいふ話を聞いて、私は思はず興味をそゝられるのを感じた。

しかし咄嗟の場合、私は何と言つていゝのか言葉に躊躇して、

『さうですかね――』と無感情に言つた。

『何しろあの調子ですから、誰だつて終ひには厚意を有てなくなりますよ。無理な話なんですからね。』

私が何も彼も知つてゐるやうに思つてゐるらしいので、私は『一體何ういふんです、その戀愛の話も些とも僕知らないです』と言ふより外無かつた。

すると肥田君は、私が旣う疾うの昔に誰かゝら聞いて知つてゐるものと思ひ込んでゐたと見えて、平然とした中にも多少の意外さを含んだ口調で、

『さうですかね、旣う疾くに御存じかと思つてゐましたが――』と前置きして、所謂花井君の戀愛に就て語り出した。以下肥田君が私に話した筋のあらましであるが、最初私の豫期してゐたやうな話ではなかつたけれども、決して私の興味を裏切るものでは無かつた。

「いつかの「青春」に、花井君が、前の死んだ戀人のことを書いてゐたでせう？　御存じありませんか。花井君には其の前にも三人ばかりの戀人があつたのです、それも御存じないでせうね。花井君は始終戀してゐないと淋しがる男なんです。と言ふよりも、戀しては別れ、別れては淋しがり、淋しがつては直ぐ又後とへ戀人が出來ると言つた風の男なんです。不思議な位、あとへ／＼と能く戀人が出來るんです。それは別として、今言つた其の死んだ戀人ですね。此の人とは、花井君も隨分永い戀仲だつたし、又隨分愛し合つてゐたやうですから――その人が病院で――もう今日明日にも死ぬといふ日など――花井君の苦しみやうと言つたら、他所眼にも十分同情に値するものでした。丁度その、もう駄目だといふ日の晩、ひどい雨降りの中を、病院から歸りがけに、私の所へ寄りまして、

「あゝ實に堪らない。若し彼女を今一度生かせるものなら、僕は此の泥濘(ぬかるみ)の中へ跪きもしよう、雨の中に裸になつて天に祈りもしよう。嗚呼何故僕は、こんなに度々戀愛の苦(にが)さを嘗めさせられるんだらう！」

と言つて、既う何の希望も此の世にないやうなことを言ふのです。實際其の氣持が、私にも能く分りますし、又その戀愛にだけは私も隨分厚意を有つてゐたものですから、色々と慰めの言葉やら、勇氣づける言葉やらを花井君に言つてやりましたが、花井君は思ひ出したやうに、感慨めいた口調で、

「あゝ！金さへあれば戀愛も旨く行くのだがなあ」と言ひました。實はその女の家は貧しくて、それまでに思ふ樣な醫者に見せることも出來ず、病院へ入つた時は、もう可成り手の盡しようもなくなつてゐたんです。病氣は肋膜でしたが、實際花井君の言葉も無理が無かつたのです。

「その晩おそくなつて了つたし、雨も土砂降りになつて來ましたので、花井君は遂々私の所に泊つて了ひました。所が何うでせう、私と一つ床に入るなり、暫くすると、私より先きに眠り込んで了つて、鼾さへかいてゐるぢやありませんか。私は、隨分暢氣な奴だと思ひましたね。今先きまで、あゝ苦しいとか、泥濘の中へ跪づきたいとか言つてゐた癖に、横に

なるなり直ぐ眠込んで了ふなんて、餘り暢氣過ぎると思ひました。多少憤慨の氣持さへ致しました。口でこそあんなことを言つて苦しさうに見せてゐても、心の内ではそれほどぢや無いんだらう。どうせ又今頃は、次の戀人のことでも夢見てゐるんだらうと思ふと、その寢顔を見てゐる内に、反感と云ふよりも寧ろ憎しみの氣持さへ湧いて來て居りました。ね、實際さうですからね。或る氣持があるなら祈ればいゝぢやありませんか、自分の愛する戀人が死の床に橫はつてゐる時、暢氣に眠つてゐる奴があるもんですか。これでは、癒ほる病人も癒ほらないだらうと、私は思つてゐました。丁度さうして暢氣に眠つてゐる間に、病院では事實その戀人が死んでゐたのです。

「その戀人が、さうして若く死んで行つたのですが、その當座といふもの、どんなに花井君が、例の誇張した口調で、苦しさや悲しさや淋しさを訴へたことでせう。大抵想像がつくでせう？　友達の中には隨分同情を寄せてゐるものもありましたが、私は、同情はしたと言つても、それほど同情する氣には、何うしてもなれませんでした。然しその戀人の死んだことが、花井君には、今までに無い打擊だつたことは言ふまでもありませんでした。花井君は今度こそ隨分碎かれたに違ひない、可成り參つたに違ひない、然しその淋しさと悲しさとを生かし切れば、戀人の死は花井君に良い結果を齎らすに違ひないと、私は心の内で獨り思つてゐました。所が事實は然うならなかつたのです。一體そんな辛い經驗を嘗めて直ぐ後へ、又新らしい戀愛を求める氣持が出るものでせうか？　私が花井君の戀愛に厚意を有たぬとか言つて、花井君が私に反感を抱き出したのは、斯うしたところに原因してゐるらしいんです。事實花井君が、戀人に死に別れてから、まだ一と月と經たないのに、又新らしい戀人が出來たのですから。

「何しろまだ戀人を失つた當座で、機會さへあれば心の疵の痛むのが當然だと思はれますのに、或日私を訪ねて來て、何たか勿體振つた調子で、

「君、大へんお願があるんだが」

と言ふぢやありませんか。戀人の病氣以來花井君が自分の小使をいろ〳〵其の方へ廻して、可成り不自由してゐるらしい事が私にも能く分つてゐたものですから、花井君の顏を見るなり、屹度お金のことだなと感付きました。

「何だ？」と訊きますと、花井君は妙にもぢ〳〵して、

「實は大變言ひ出し難いのだが……君、僕を輕蔑しちや不可ないよ。」

斯う前置きして、「實は僕、ある女を戀してゐるんだが……」と言ひ放ちました。

私がどんなに驚いたか、想像がつくでせうね。實際驚きましたよ。何しろまだ、機會さへあれば、前の戀人を追想してゐた當座なんですものね。しかし私は、一時は驚いたものゝ、直ぐあとから、又かといふ氣がしました。當然成るやうに成つたまでだといふ氣持がしました。花井君には、さうなつた方が自然の氣がしました。話を聞いて見ると斯うなんです

「そら、××呉服店の食堂を御存じでせう？　或時、何か一寸した買物に行つた序でに、その食堂へ入つたのださうです。そして何か食べるものを註文して、卓子に肱をついて、見るとも無しに、忙しく立働らいてゐる給仕女たちを眺めてゐた時、その中の一人の顏を見て思はずハッと驚いて、まるで電氣にでも觸れたかのやうに、今一度自分の眼の確かさを試驗する爲に、瞼を二三度パチ〳〵させたさうです。花井君の言ふのでは、その女が死んだ戀人と生寫しだつたといふのです。

「僕はもう、隨分辛い經驗を嘗めて來た。大抵の女には恐らく心を動かさないだらう。然し君、その女が、死んだやつとそつくりなんだ。僕は何だか恐ろしいものを見たかのやうに早々と家に歸つた。然し僕は、運命といふものを信じたい氣がする。家に歸つて、其の女のことを考へれば考へるほど、ます〳〵運命を信じたくなつた。ねえ君、僕が平生餘り好まないあの食堂へその日に限つて行つたのには、何か僕を其處へ行かしめたものがあるに違ひない。又、たとひ行つたにしても、其の女の顏が僕の眼に映らずに濟めばそれまでぢやないか。その女を見ないで終つたかも知れないのだ。で僕は、其女こそ運命が僕に與へたものぢや無いかと思はれてならない。僕は四五日の間、寢ても醒め

ても其このとばかり考へた。果して運命の神の思召しで、その女を僕に惠んで呉れたものとすれば、僕は自分の氣持をその女に打明けずに居つていゝ譯が無いと思つた。本當の自分の氣持を其女に打明けることが、神の思召に副ふものだ、屹度運命の神が二人に祝福を與へてくれるに違ひない、二人の爲すことを善しと見て下さるに違ひない、神は僕の胸の痛手を是れで劳はつて下さる思召しなのだ、斯ぅ僕は結論した。そして昨日、今一度行つて見た。矢ッ張りその女はゐた。運命の神の思召しを感じてか感じないでか、僕といふ男の居るのを、知つてか知らずにか、時々無邪氣な微笑を浮べ乍ら、客や卓子の間を縫ふやうにして、忙しく往き來して居つた。神の思召を、まだ感じてゐなければ其れでいゝ、僕といふ人間の居るのを知らずに居るなら、其れでもいゝ、今に分る〳〵、僕は心の内で斯う言ひ乍ら家に歸つた。所が、家に歸つて見ると、僕の心は何うしても落付かないのだ。これから今一度出掛けて、あの女の歸りの時刻を待つてゐて、何處か人通りの無い處で呼止めて自分の氣持を打明けようか、然しそんなことをすると餘りの突飛さで、不良少年と間違へられるやうなことになると取返しがつかない。それよりも、あの女の家まで隨けて行つて、家を見屆けて置いて、明日にでもあの女の居ない内に兩親にでも直接會つて話をすることにしようか、然し運惡るく兩親が斯うしたことに沒理解な人だつたら、尙更取返しのつかぬことになる、で僕は遂々手紙を書くことに決心した。手紙を書いて、何かの方法であの女の手に渡すことが出來れば、そして讀んで貰へさへすれば、屹度旨く行くに違ひない。僕は然う信じて、昨晩一と晩かゝつて、卒直に有りのまゝの氣持をすつかり手紙に書いた。これがその手紙だが」

斯う言つて、懐ろから其の手紙を出し乍ら「僕の氣持は出過ぎるほど出てゐるんだから、何とかして只あの女が讀んで呉れさへすればいゝんだが」

と附加へました。成る程自信ありげに言ふだけあつて、その手紙といふのが一寸見ても二三十枚はありさうなんです。

「で、何ういふ方法で渡したらいゝだらうね、只、彼女の手に渡りさへすればいゝんだが」

と、花井君は私の顔を、穿鑿するやうな眼をして訊きましたが、その眼の底には、手紙を渡す役目は僕に引受けて欲しいと言ふ表情が十分現はれて居りました。言ひ忘れましたが、それまでにも僕が花井君の戀の使者をつとめたことが一度二度では無かつたのです。何しろ僕が年上だし、年上なうへに少し老けて見える方ですから、さうした役目には實に持つてこいの男と見えるらしいので、いつも僕を見込んで信頼してくるんです。實は有難迷惑ですよね。しかし、友達甲斐にいつも、花井君の幸福になることならと言ふ氣がして、引受けてゐました。で、今度の話も、實は僕の方では、內心何だかピツタリしない所があるやうな氣がして、何う考へても花井君の運命論に不自然さを認めずには居られませんでしたが、ツイ僕の氣性として相談に乘る氣になつて了ひました。今から思へば、其時最初からその役目を斷ればよかつたんですが――。で、まあ兎に角引受けたのです。花井君の悅びやうは、ありませんでしたね、僕に對して幾度も〱感謝の言葉を氣味の惡るくなるほど言ひましたよ。そして、

「これで先づ僕も一安心した。では午後から一度一緒に行つてくれないか。君に一度前以て本人を見て貰つておく必要があるからね、いゝだらう？　是非一緒に行つて吳れたまへ、食堂は僕が奢る、何でも奢る、」

こんなことも言ふのです。その調子には、多少上ッ調子なところが見えて、何だか私は不快でしたが、まあ花井君の氣持も分つてゐましたから、言ふがまゝに其の午後二人で出掛けました。

「あの宏壯な感じのする例の吳服店の玄關を這入つて、二人はエレヴエーターで五階へあがりました。又あのエレヴエーターの感じといふものは一種異樣なものですからね、いえ、僕にはそれほどでもありませんでしたが、その間中、始終そはそはしてゐた花井君には、エレヴエーターで昇つて行く時の感じは變なものだつたと思ひますね。それでも花井君は、エレヴエーターの中の姿見に自分の姿を映して、帽子を脫いで頭の髮を撫でつけたりしてゐました。本當の戀人に會ひに行く時みたいに。それまでゞも、いつも然うしてゐたんだなと思ふと何だか滑稽な可愛いゝ氣もしないことはありませんで

した。何しろまだ花井君一人で力んでゐるだけのことなんですものね。一人角力をとつてゐるのと同じですよ。此方でそはそはしたりなんかして戀人氣取でゐても、先方では、さうした男が來てゐるようなどとは夢にも思はずに、只お客さん達の卓子の間をせか〳〵しく往き來してゐるだけに相違ないんですものね。二人は食堂へ足を踏込むなり、流石に直ぐ右側の隅つこの所に席をとりました。成るべく人眼を離れてゐたい氣持が一致してゐたのです。

「席に就くなり私は、花井君の顔を覗くやうにして、隣りの卓子の客に氣を兼ね乍ら、

「何うだ居るかい？」と小聲で訊きました。初めてその花井君の戀人なるものを見るわけなんですから、私も何だか一種異樣な氣まり惡るさのやうなものを感じました、そして宛ら知つて居る人を捜すやうに、ずつと給仕女達の往き來するのを見渡しました。何だか白いエプロンだけが一時に、幾つも眼に映つたゞけでしたが、花井君はと見ると、何だか盜み見する時のやうに、顔を卓子に喰付ける程にして、低くなつて、矢ッ張り往き來するウエートレス達を物色してゐる最中らしいのです。すると其時急に花井君の顔付が異樣な表情に變化して來ました。

「何うしたんだ。居ないか。」私は依然として小聲で訊きました。花井君の視線は隨分早い速度で、あちこちと轉廻してゐるましたが、

「うん、何うも變だ」斯う言つて相變らず物色の眼を放たずにゐるぢやありませんか。何だか其れを見てゐると哀れな氣がしましたね。暫く沈默が續きましたが、と、突然花井君は私の袖を惹き乍らゆすぶるやうにして、

「あッ、あれだ〳〵」と言つて、又元の元氣な表情に變りました。

「どれ、どれだ！」と私も、小聲ではあるが可成り緊張した聲で、身體を乘り出すやうにして訊きました。二人が何だか興奮したやうな口調で、何やら聲高に噂をしてゐるのを、近くのお客達に感付かれやしないかと心配して思はずそッと聲を低めたほどでした。氣がつくと花井君は獨言のやうに、然し私に聞える程度の聲で、急き立てるやうに、英語で、

「エーティ。ナムバー・エーティ」と早口に言ふぢやありませんか。
「エーティ？」
「エーティーンだよ、エーティーンだよ」
「何だ、そりや」
私は何だか變なことを言ふと思つてゐましたが、聞いて見ると成る程と思ひましたね。そら、ウエートレスが皆胸にメダルのやうな丸い番號をつけて居るでせう？　例の女の番號が十八番だから、早く見ろと言ふ意味だつたのです。私は慌てゝ花井君の視線を辿るやうにして、其の方に眼をやつた時、
「もう這入つちやつた、今、直ぐ其處まで來たんだけど。そら今衝立の所を曲つて行くのが其れだ。」と、何だか物足らぬやうな顔をしてゐました。
「又出て來るだらう。十八番だね、」
「うん」
二人は先刻註文してあつた菓子を食つたり、珈琲を飲んだりしてゐました。その間にも花井君は、氣が氣ぢやなかつたのでせうね、始終首を上げて彼女の出て來るのを、今か〳〵と待つてゐるやうでした。暫くさうした時間が續いたと思ふ時分、花井君は突然、口に持つて行きかけてゐたコーヒのコップを下に置いたと思ふと、
「來た〳〵」と言ひました。
私は花井君の前の戀人の顔も能く知つてゐました、そして今度の戀人が前の人に能く似た人だといふことを花井君の口から聞いてゐました、それに、胸の番號まで今先き知つた譯ですから、殊に花井君は今度の女を前の戀人の化身のやうに言ふ以上、直ぐ一見して當の女を認識出來ると思つて、思はず顔を上げて其の方を見ました。丁度衝立の影から、同じ服

裝をした少女が三人ばかり、前後して手に〳〵盃に載せたものを大事さうにして此方へ來る所でした。所が何うでせう、その中に私の記憶にある花井君の前の戀人に似通つたやうな人は一向見當らないぢやありませんか、おまけに十八番の番號をつけてゐる女がゐないんです。私は變だと思ひました。それで、

「一體どの人だい？　十八番なんてゐないぢやないか」と言つて花井君を顧みました。すると花井君は焦れつたさうに、

「あれさ、あれさ、一番初めに來るのがさうぢやないか」と、多少怨めしさうに言ひました。私はその一番初めに來る女を恍てゝ見ました。所が妙なことには、胸の番號は十八番では無くて確か二十四番かなのです。その上、一向前の戀人に似たやうな所が無いのです。

「だつて、あれや先き言つた番號と違ふぢやないか」

花井君は初めて氣がついたやうに番號に視線をやりました。

「さうだね、違ふね、何だか變だ、」

「先きの人は違つたのかい？　だつて變ぢやないか十八番だと言つたのに。一體どつちが本當なんだ。」

「此の人だ、確かに此の人だ、」

「此の人に違ひないんのかね、確かりして呉れよ本當に。冗談ぢや無い。」

私は少し憤としましたが、强ひて顏にも現はしませんでした。花井君も氣まり惡るかつたと見えて、又隣りの卓子のお客に氣を兼ね乍ら、異樣の微笑をしてその氣まり惡るさを紛らしてゐました。だつて變ぢやないですかね、自分の戀人を間違うなんて。後で思ふと、前の戀人に似てゐるなんて言ふのは嘘なんで、全く自己辯解に過ぎなかつたのですね。それに又不快なことには、暫くするとね、隣りの卓子へ來たのが例の十八番の女なんです。二人が偶と何氣なしに顏を上げて見ると、胸の丸い徽章に、立派に算用數字で十八と書いてあつたんです。美人かつてゞすか？　さうですね、僕だつたら

二十四番の人よりも此の方をとりますね。可笑しいぢやありませんか、僕が冗談半分に、

「此の人の方が綺麗ぢや無いか」と言ひますとね、花井君が、まあ何うです、一寸口籠つてから、

「さうだね、僕は何方だつていゝ、一層此の方にしようかね」

と言つて、流石に少し顔を赧らめてゐましたよ。實際心の中では、何方だつて良かつたのでせうね。女さへ出來ればあの男は滿足なんでせうから、さう言つたのは實際はあの男の正直な所だつたのでせう。然し何ぼ何でも眞逆さうは出來ないもんですから、花井君も、

「いや、そりや冗談だけど」と言つて、又赧い顔をして話を濁してゐましたよ。餘り不眞面目な話ぢやありませんかね。僕に向つて其の朝、嚴肅な顔をして、運命の女だとか、運命の神の與へたものだとか、亡くなつた戀人そつくりの人だとか、その人と一生を倶にすることは自分に定められた神の攝理だとか言つてゐた癖に、これでは餘んまり出鱈目ですよね。然し善意に解釋すると、先生餘んまり上ほせあがつてゐたもので、その場合一寸眼の識別力が狂つてゐたのでせう。いづれにしても僕は何だか厭やな氣持がしましたね。十八番の女は卓子の上を形付けて、二人の會話や二人の氣持には何の關はりも無く、彼方へ行つて了ひました。と突然に又花井君は、

「來た〳〵」と言ひました。顔を上げると又二十四番の女が衝立の後ろから此方へ來るのです。花井君は俯向いてゐました、向うでは何の氣も無いのに、此方だけ一人よがりで、羞づかしがつたり、嬉しがつたりして居るのですから滑稽と言へば滑稽ですよ、實際運命の神なんてものがあつて、此の光景をそッと見下ろしてゐたら、屹度噴飯したらうと思ひますね。私は少々五月蠅くなつて來ました。で「出ようぢやないか」と促すやうに言ひますとね、

「うん」と言つて、何か考へ込むやうに默つて居るのです。

「何うしたんだ、まだ何か食べる？」

すると、花井君は、例の新聞紙にくるんだ三十何枚かの手紙をいぢくるやうにして、

「これを何うしたらいゝだらうね、此の場で渡すわけには行かないね」と言ひました。まさか其んな所で渡すなんて出來るものですかね、話を交へることもむつかしい位でせうからね。僕は花井君の氣持が能く分るやうな氣持がしましたが、まさか其の席で何うする譯にも行かないわけですから「まあ出よう、歸つてから何かいゝ方法を考へようぢやないか。君みたいな風に考へてちや駄目だよ」と言つて、勵ますやうに促しました。それでやつと食堂を出て、またエレヴエーターで降りました。今度は姿見に容子を映したりしませんでしたが、妙に物思ひに沈んで居るやうでした。二人は電車に乘りましたが、二人共妙に默つて居りました。私はその手紙を彼女に何とかして渡す役目を引受けたことは引受けましたが、さて能く考へて見るといゝ方法も思ひ付けなさうだし、第一あの食堂での花井君の態度を見てから、何故ともなく乘氣がしなくなつて了つてゐました。それから、花井君はずつと電車に乘つて行くし、私は途中で下りて家へ歸りましたが、電車で別れ際に、例の手紙を私に渡して、

「何なら今晩一度これを讀んで見てくれたまへ、僕の氣持が十分出て居るつもりだ。さうだ是非讀んで置いてくれたまへぢや又明日行く。ぢや宜敷く」と、「宜敷しく」に力を入れて行きました。

その晩、どう些[illegible]も花井君の書いてあることが大抵想像出來るのでしたが、書齋へ入つて讀んで見ました。豫想通りの文句が例の才筆で幾度も繰返へされて居るのです。

あなたは運命が僕に與へて下さつた一個の女性ですとか、私は學校で、忙しくノートにペンを走らしてゐる時、又は困難な數學の問題を解かうとしてゐる時、偶とあなたの俤を、如何に幾度眼の前に描いたことでせう、又私はあなたを一目見たいばかりに、人知れずあなたの食堂の一隅に身を潛めるやうにしてゐたことでせうとか、あなたの面影は若きエンゼルを想はせます、あなたは羊の如き優しさとエンゼルのやうな慈しみを湛へてゐますとか、あなたこそは私の永遠の道

倖れです、運命の神樣がさうお決めになつたやうな氣がします。神樣の思召しに從順なるものに祝福あれなどと、獨りよがりのことはかり並べてゐるのです。それが三十幾枚かありましたからね。實にやつたもんですよ。私は、花井君がいつも此の手で戀人を手に入れるんだなと初めて合點が行きましたが、ほんとに、何も知らない無邪氣な娘なら、こんな手紙を讀まされたら心を動かさずに居られないでせう。私はそんな手紙を渡す役目を引受けたことを今更のやうに後悔し初めました。實際その時は困りましたね、言はゞ不良少年の手先の役目をつとめるわけですものね。考へると厭氣が差すぢやありませんか。所が、何うしたらいゝだらうかと色々考へた揚句、偶といゝ考へが浮んで來たのです。そら、矢ッ張り雜誌の連中で桑田といふのがあるでせう？ 連中の中でその桑田だけが細君があつたんです。まだ結婚して間が無かつたんですが、僕は偶と思ひついたといふのが其の細君なんです。詰り私が引受けた使者の役目をその細君にやつて貰ふに限ると思つたんです。女のことは女の人に賴む方が却つて僕なんかよりも旨く話がつきはせぬかとも思つたのです。さうするに限ると思つて、翌る日花井君が來たらそのことを話して見ようと決心しました。で翌る日、午前に花井君がやつて來ました。折角私が引受け甲斐も無いのを心細く思ひましたが、私の方から口を切つて、斯う言ひました。

「君、僕は昨晩から能く〳〵考へて見たんだが、僕なんかが行くより桑田の細君に賴む方が良くはないかと思ふんだ。却つて女同士の方が萬事都合よくは無いかと思ふんだ。」

花井君は話が餘り意外なので、一寸憤としかけたやうでしたが、そのあとから直ぐ、その方が成程いゝと思つたのでせう、「さうだね、僕は何方でもいゝと思ふけど、さうする方がいゝかも知れないね」と言ひました。私は、自分がさうした役目を免れたい一心でゐましたから、その心を花井君に見隙かされやしないかと心配してゐましたが、花井君の方では其所まで氣がつかなかつた樣子でしたから、今更のやうに自分の思ひ付きの良かつたことを感じました。何とかして免れられゝば私の方はそれでいゝんですからね、あとに野となれ山となれで、第三者の地位に立つて傍觀して居ればいゝのですからね。

花井君は、

「ぢや是れから桑田の所へ行つて細君にお願して見よう」と言つて、例の手紙を持つてその足で早速出て行きました。

「その後何うなつたかつてですか？　僕はさういふ具合にして都合よく役目がのがれられて、やれ〳〵助かつたと思つてゐましたが、それでも何だか花井君に濟まないことをした氣がして、又その内にやつて來るだらう、さうしたら樣子が分ると、心待ちにしてゐました、所が一向來ないのです、又僕の方から聞きに行くのも臆劫な氣がして其のまゝになつて了ひました。所が、其後桑田君に會つた時聞きますとね、桑田君の方でも早速承諾して、細君を翌る日かに早速行つて貰つたさうです。その話が又面白いんです。いえ、何しろあんな食堂なんかの場所で直接手紙を手渡すわけにも行きませんからね、細君も智慧を絞つて、直接事務所へ行きましてね、私は食堂の二十四番の番號の方とお友達ですが、此の包みをお渡し下さいます樣にと、何でも無い事のやうに賴んだ相です。何しろ此方は女ですからね、事務所の方でも信用して承知して呉れた相です。言ひ忘れましたが、細君と一緒に當の花井君も桑田君も行つてゐたんです。そして細君が事務所へ行つたりしてゐる間、二人は休憩室かで待つてゐたんださうです。細君は今言つたやうに使命を果たして休憩室へ歸つて來た時、細君も自分の使命を果したことで莞爾してゐるし、花井君も其の報を聞いて何とも知れぬ嬉しさうな顏をして感謝したさうです。桑田君に聞いたのでは、何でも三人が往來へ出るなり、突然花井君が狂人のやうになつて、其の邊を踊り廻り乍ら、あゝ斯んな嬉しいことは無いと鳥頂天になつて踊つたさうです、ほんとに踊つたさうです。警官さんでも其邊にゐたら、花井君は屹度拘引られたらう、あの時は實に駭いちやつたと桑田君が言つてゐましたからね。嘘ぢやないんでせう。その後が又振つてゐるんです。其後花井君は元より桑田君夫妻も、毎日〳〵返事の來るのを今か〳〵と待つてゐたさうです。桑田君夫妻は別として、花井君の方では、屹度いゝ返事が來るものと信じてゐたのでせうね、あんな性格の男ですから。なんでも例の手紙の中に、返事は直接花井君の所へか、桑田君の所へ呉れるやうにと書き添へて置いたのださうです。所が幾日經つても一向返事が來ない、いえ、幾日と言つても ほんの四五日の間だつたさうです、花井君にとつて

一日千秋の思ひと言ふやうなものでせうね。その四五日目に桑田君の方へ一通の手紙が來たさうです、一向知らない人の名前なので、若しかするとゝ、直ぐ直覺して封を切つて見ると果してさうだつたさうです。その女の父親から來たんです手紙には要領よく、自分はあの娘の父親であること、此の間の手紙は何とも感佩の外なく、手紙の御本人の如き人を大變賴もしく思ふけれども、實は既に娘の勤め先きの或る事務員と許嫁になつてゐて、あれの姉が近日結婚するので、その方が形付くと、妹には勤めを止さして適當な時機に二人を一緒にする積りだから、御本人へも可然御傳へを乞ふ、といふ意味のことが明瞭に書かれてあつたさうです。そりや然うなるのが當り前だと思はれますね。然し斯うなると運命の神も少し悪戯が過ぎるぢやありませんか。其後花井君は何うして居るか聞きませんが、何でも淋しいとか苦しいとか、會ふ度每に言つて、或時などは、さうなつてもまだ、あゝ自分は運命の女を取逃がした、自分はあの女と一生を俱にする使命を受けてゐたのだとか、若しあの女が將來不幸な生活を送ることがあつたら罪は自分にある、僕はあの女の幸福を祈らう、などと言つてゐたさうです。自惚といふのか、何といふのか、一寸困り者ぢやありませんか。誰が考へてもね。其後、誰でしたか、僕は或る友達に、花井君のやうな戀愛には好意を持てぬといふ意味のことを言つたんです。それが友達から友達へと傳はりましてね、誰かゞ屹度花井君の耳に入れたのでせう。僕を非常に怨んでゐるさうです。友達の戀愛に僕が好意を有たぬとか言つて。實際はそんな話ぢや無いんですけどね。何でも向うでは、途中で僕と會つても物を言はぬとか言つてる位ださうですから、僕も結局此の方が、觸らぬ神に祟り無しだと思つてゐるんです。さあ、此頃また何處かで相手を見付けてるかも知れませんて。こんな風に同人の氣持がだん〳〵バラ〳〵になつて來ちや、何うせ雜誌も永續きはしないでせう、折角今まで續いたんですから一寸惜しい氣もしますけどね。」

肥田君が近頃花井君に會はないといふ理由も是れで分つた。肥田君等の雜誌が永續きしようがしまいが、私には何の關はりも無いことだつた。私は、每月々々雜誌を寄贈されるよりも、又恐らく其れに載つてゐるものを讀むよりも、肥田君のした話の方が餘つ程面白いに違ひない氣がした。又斯うして肥田君が話してゐる間にも、何處かで花井君は又長い手紙を書いてゐるんぢやなからうかといふ氣がした。（終り）



ハルピンの一夜

南部修太郎

頭の禿げた、うす穢いフロック姿の老人の指揮者(コンダクタア)がひよいと立ち上つて指揮棒を振ると、何回目かの、相變らず下品な調子のフォックス・トロットが演奏團席(オオケストラ)の方で始まつた。落ちぶれ貴族の息子とでも云ひさうな若いロシヤ人、眼の動かし方に厭味のある、會社の書記風のイギリス人、髪の毛を妙に凝つた仕方に縮らせたアメリカ人の下士官、金儲けにぬけめのなささうな、商人らしい中年のフランス人、何れも其處の常連だと云ふ、何處となく下等な身成をした、一癖ありげな顔付の男達の十餘人と、それを彩る酒場稼ぎ(カバレエ)のロシヤ人の賣笑婦達――壁際のテエブルのまはりに休んでゐた彼等は順々に立ち上つて、それぞれに腕を組み合せながら、強い酒の香と、煙草の烟のむつと立ち罩めた、明りの色の如何にも陰氣くさいホオルの中へ、樂の音に合せて踊の輪を作つて行く。まだお客の攫めない女達は自分達同仕の組を拵へて、紅を使つた厚い化粧の毒々しい顔に蓮葉(コケツト)な笑ひを浮べながら、腰の振方に蠱惑するやうな誇張を交へながら、踊の輪の中へ加はつて行く。氣持を變に浮き立たせる樂音の渦巻、靴の踵と床の擦れ合ふ響、踊りながらする男女の囁き、そ

の間に時々洩れる女達の淫蕩な笑ひ聲。正面の酒賣棚の右手の壁に掛かつた六角時計を見ると、恰度一時五分だつた。私はふと思ひ出して、半分殘つてゐたグラスのウイスキイをぐつと呑み干した。

「おや、何時の間にはひつて來たんだらう？」と、その時踊の輪の方を眺め降してゐた水島君は、一息吸つた葉卷の烟をふうつと吐きながら呟いた。

「何だい？」と、とろんとして來た眼を見張りながら、私は水島君の視線の行手を追つた。

「ほら、あのでつぷり肥つたロシヤ人と組みながら、今、こつちを向つて笑つてる女があるだらう。――綠色の上着を着た……」

「うむ、ゐる／＼。――素適な美人ぢやないか……」頷き返しながら、私はその女の方を思はず惹きつけられるやうに見詰めた。

それまで私もその女には氣付かずにゐた。丈の高い男の頑丈さうな腕に、もたれるやうに腰を抱きかゝへられながら、女は踵の高い赤革靴の運び輕げに踊つてゐる。房々した、亞麻色の髮を羊の毛のやうに縮らせた、小柄の、然し肉附の好い女。強い線を描いた彫刻的な鼻と、きつと投げた瞳の光に何處となく智的な感じがあつた。年は二十二三なのであらう。如何にも物慣れた、形の好い恰好に踊り續けながら、時々眞面になる女の顏には、外の女達とは際立つて品の好い、が、同時に強く人の眼を奪ふやうな魅力のある笑ひが始終たたへられてゐた。

「あの女がね……」と、グラスを一啜りして、水島君は云つた。

「うむ……」

「この酒場での一番腕つこきなんださうだよ。」

「さうだらう。――美人ぢやあるし、何處か凄さうな處があるもの……」と、相槌打ちながら、私は水島君を振り返つた。

と、水島君は何故かにやりと笑つた。

「所でね、あの女の前身は何だと思ふ？――何處か感じに變つた所があるだらう？……」

「まあ、さう云へば、何だか上品な氣がするね。――やつぱり貴族か何かの……」

「さうだ。その通りなんだ。――あれがねえ君、帝政時代の或る伯爵の娘だと聞いたら驚くだらう。」

「驚くね。――ふうん、伯爵の娘か……」と、私は思掛ない氣持でまたその女の方を見返つた。

と、恰度その時、フオツス・トロツトの一くさりが終つた處だつた。顏に踊のあとの疲れと興奮の色を浮べた男女達は組を解いて、それ〴〵の席につくのであつたが、その女は肩越しに首筋を男に抱きかゝへられたまゝ、窓際の、酒瓶棚から五番目の椅子に腰を降した。そして、テエブルの上にあつたグラスの、琥珀色の酒をぐいと呑み干すと、いきなりまた男の首筋に白い手を卷きつけて、じやれつくやうに短い接吻をその唇に與へた。女が唇を離した時、男は淫らな眼を光らせながら直ぐそのあとを追つた。そして、締こめた女の體をぐいと自分の胸に引き寄せて、二度目の接吻を交したかと思ふと、二人は身を搖す振つて一時に笑ひさゞめいた。

「驚いたなあ……」と呟きながら、笑ひすまして私は、思はず顏をそむけてしまつたが、如何にも捨鉢氣味な二人の歡樂の姿は私の氣持を曇らせずにはゐなかつた。

「ふふん……」水島君は怒つたやうな顏に苦笑ひを浮べた。

何故となく、私達はそのまゝ沈默してしまつた。

「おい、そろ〳〵出ようか？」と、暫くして水島君が不意に云つた。

「さうだね、出ようか。――あゝ、すつかり醉つちやつたなあ……」と、私はほつと溜息づきながら、水島君を見返つた。

赧らんだその顏には、血走つた、憂鬱な感じの眼がとろんと据わつてゐた。

「僕もほんとに醉つたよ。」
「だいぶ飮んだからな。」
「さうだ。少し飮み過ぎた。——然し、然し、今夜はほんとに愉快だつたよ……」と、水島君は互にふと滅入りかけた氣持を引き立てるやうに、元氣作つた聲で云つた。そして、のけぞるやうにして、背後の壁の呼鈴を押した。
「あら、もうお歸り？」と、その水島君の樣子をちらと眺めた女はあわてたやうに立ち上つて、仕切りの框に肘つきながら云つた。さつきから隣の仕切りの部屋のテエブルに一人凭つて、二人の何れかを一夜のとりこにでもする積りだつたのか、しきりに媚態を送つてゐた、英語の巧い、二十六七の女である。「生れは？」と、訊ねたら、「キエフです……」と、答へた、何れはこれもソヴィエット政府の支配下を遁れて來た、不幸な運命を擔つた女なのであらう。白粉で塗り隱した荒んだ肌、左の頰に拵へたわざとらしいほくろ、眉墨で緣取つた疲れたやうな眼の光、受け口のまつ赤な唇、まづい顏ではあつたが、相當の敎育も受けたらしく、愛想交りにも日本の事を色々問ひ尋ねたりする女だつた。
「歸るんだよ……」と、水島君は素氣なく答へた。
「もう少し入らつしやらない？」
「厭やだ。」
水島君は不機嫌な顏でまた打つちやるやうに云つて、そのまゝ橫を振り向いた。女は、賣れの惡い、氣弱さうな女は諦めたやうにまたもとの椅子に歸つた。そして、寂しさうな中に、何處か反撥的な光を含んだ眼で私達を見詰めてゐた。
「すべため、お前なんかの相手になるもんか……」と、ひよいと私を振り返つて壓高な日本語で云ひながら、水島君は冷たい笑ひを浮べた。
支那人のボオイが持つて來た傳票に少しの酒手を加へて拂ひをすますと、水島君と私とは仕切りの部屋を廊下へと飛び

出した。そして、入口で支那人の玄關番から外套と帽子を受け取ると、また聞えて來た浮き／＼した舞踏曲の音色をあとに殘して、遁れるやうな氣持で酒場「アポロ」の外へ飛び出した。

「歩いて歸らうぢやないか……」と、外套の襟を立てながら、水島君は云つた。

「あゝ、さうしよう……」と、私は直ぐに應じた。

高い煉瓦塀にせばめられた暗い路次を通り拔けて、K街の大通へ出ると、街燈の鈍い光の中に客待ちしてゐた五六人の支那人の俥引達がばら／＼と二人の側へたかつて來た。

「不要……」

「不要……」

變にむかつ腹の立つやうな氣持でかう繰り返しながら、うるさく迫つてくる俥引達を振り向きもせずに、更け鎭まつた大通のうす暗い歩道の上を、水島君と私とは俯向き勝ちに歩き始めた。

ハルビンの十月末、と云つても、あたりはもう索漠たる冬景色だつた。すつかり葉をふるひ落した裸のポプラ並木、かちからに凍りついた歩道、明りを消し、二重窓を降して冷たい沈默を包んでゐる煉瓦や石造りの暗い家並、毎日毎夜の不安な空氣に脅かされてゐる町は、朝から曇つたまゝに暮れ落ちた暗澹たる夜空の下に、わけても眞夜中過ぎのその夜は、人通さへ稀に無氣味な程に鎭まり返つてゐた。處々のとろんとした薄暗い街燈の陰に腕を組みながら、眠さうな眼を見張つてゐる支那人巡警の影のやうな立姿、暗い横町の檐下に客待ちしてゐる支那人車夫のうろん臭い顏付、前部燈をきら／＼光らせながら時折何處からとなく疾走してくる、何かの祕密でも載せてゐさうな自動車の影。厚い外套越しに染みこんでくる夜寒さに體を丸めながら、水島君と私とは互に默り込んだまゝ小刻みに足を急がせて行つた。

勤めてゐる大連のM會社の或る仕事のために、私がハルビンへ來たのは、その一週間程前の事だつた。水島君は私の中、

學時代の同窓で、外國語學校露語科の出身者で、K商事會社の支店員だつたが、互に仕事の餘暇を誘ひ合せて、大正——年の秋、反過激派の勢力が衰へて過激派の勢力が次第にシベリアを南下してくると共に不安騒然たる空氣に包まれてゐるハルビンの町を、日となく夜となく彷徨ひ歩いたのであつた。淫らな見世物のある公園のバアへも行つた。歡樂と頽廢の空氣の漲つてゐる幾つかの酒場も訪ね歩いた。支那の阿片窟へも這入つて見た。馬賊の銃殺も見物した。零落したロシヤの舊帝時代の人達の悲慘な生活振も日々眼のあたりにした。强盗、殺人、喧嘩、自殺——さうした見聞にも幾度となく脅かされた。そして、翌日の夕方大連へ立つと云ふその晩は、酒場（カバレエ）「アポロ」で互に別れを惜む氣持もあつて酒の醉を買ひながら、四時間あまりを過したのであつた。

「おい近藤君、どうしたんだ？——厭やに默りこんでしまつたぢやないか……」と、一町あまりも歩いたあと、水島君は不意に私を振り返りながら詞をかけた。

「いや、別にどうもしやしないさ……」私は漠然と答へ返した。が、醉にぐらぐらするやうな頭の中には酒場で受けた色々な印象が、憂鬱な氣持の尾を引きながら次から次へと繰り返されてゐるのであつた。「然しね、酒場にゐるあゝ云つた女の行末は、一體どうなるんだらう？」

「さあ、どうなるかな？この頃、僕はもうそんな事考へてみようともしなくなつたが、たまに一人ぐらゐが奇蹟的な幸福な餘生にはひれたにした所で、多數は悲慘な末路を遂げるんだと思ふよ。」

「さうかな。——だが、ハルビンて全く堪らない感じのする町だね。人間がまるで踏みくちやにされてしまつてる……」

「うむ、踏みくちやにされてしまつてるは好いね。——實際、こんな處で人間を人間らしく思はうとしたり、人生を眞面目に考へようとした日にやあ、氣違ひになるより外仕方がないよ。」

「はつはつは……」

「はつはつは……」

互に振り返つて、水島君と私とは強ひられたやうな笑ひ聲を洩らし合つた。

「然し、考へてみると、すべてが馬鹿々々しいよ。——より善き、より幸福な人生を建設しようとしてソヴィエット政府が成立する。が、その革命の背後には幾千、幾萬の犧牲者があんな風にして苦しんでゐる。少くとも、彼等にとつて人生は決してより善くも、より幸福にもなつてゐやあしないんだからね。僕は革命なんてほんとに厭やだと思ふ……」

「だが、革命者の立場から云へば……」と、私は詞を挾みかけた。

「待ち給へ。——あゝ云つた犧牲は當然だと云ふんだらう……」と、水島君は強く私を遮つた。

「さうだ……」

「だから、僕は革命なんか厭やだと思ふんだよ。——一體、君はさう云ふ革命者の心持を肯定出來るのかね？」

「いや、別に肯定してゐる譯ぢやない。」

「無論、さうだらう。——それに……」と、水島君の聲は急に高くなつて來た。「根本的に云へば、革命なんかを幾度繰り返してみたつて、少數の革命者が自我の滿足をかひ得るだけで、人間全體は決してより善くも、より幸福にもなり得ないと僕は思ふね。——更に云ひ直せば、人間がどんなにあがいてみたつて、結局人生には永久にユウトピヤは來ないと云ふ事になるんだ。」

「然し、結局さうだとは考へられても、僕は其處まで人生に絶望してしまひたくはないよ。——人間にそのユウトピヤへの夢がなかつたら、云ひ換へれば、自分達の生活をより善く、より幸福にしようとする感激がなくなつたら……」

「そりや寂しい。或は死ぬより外はあるまい……」と、水島君は吐き出すやうに云つた。「だがね、君の云ふその夢や感激つて云ふのは何だらう？人間を胡麻化す或る操りの絲に過ぎないんぢやないかね……」

私はそれには何故か答へる事が出來なかつた。水島君は直ぐに云ひ重ねた。

「でも、そんな操りの絲にでも操られ得る人はまだ幸福だよ。――夢も感激も埋つてゐながら、而も人間は容易に死ねやしない。そして、その矛盾や、寂しさを胡魔化しながら生き續けてゐる。あの酒場(バァ)の女達だつて、またその女達を享樂の對象にしてゐる男達だつて、要するに、さうした人間の仲間に過ぎないと僕は思ふよ。」

水島君はふつと深く溜息づいて、そのまゝ口を噤んだ。私も何か知ら不意に索漠たる氣持を胸に感じながら、そのまゝ口を噤んだ。そして、二人はたゞ白い息を吐きながら、石のやうに凍りついた地面に四つの靴音を響かせながら、默々と歩いて行つた。何時となく酒の醉はさめかけて來た。ひし／＼と迫つてくる夜寒さに、私はこゞえるやうな足先の痛みを意識した。

K街とP街との交叉點で、明日の再會を約しながら水島君と別れた時、町角の高い時計塔の針は恰度二時を指してゐた。其處から私の泊つてゐるMホテルまではまだ七八町の道程だつたが、送らうといふ水島君の詞を强ひて斷つて、薄暗い並木の蔭を私は一人俯向き勝ちに歩き始めた。

「然し、水島君は變つたなあ。――何と云ふ變り方なんだらう？」と、私はふと心の中に呟いた。

若々しい人生の夢想家で、感激的なロマンティシストで、而も、臆病と云ひたい程の道徳家だつた過去の水島君を思ふと、私は三年近くのハルビンの生活が同君の性格に與へた影響の深さを考へないではゐられなかつた。が、またそれ程に同君の心を荒ませ、生活を散文化させ、性格を暗い否定主義(ニヒリズム)に誘つた町の空氣を思ふと、一週間の滯在の間に受けた色々な印象、見聞のすべてが一層切實なものに感じられた。他愛なく笑ひさゞめく男達の前で裸踊する痩せこけた女の顏、血個立てゝコロッと前に轉がつた馬賊の首、死骸の樣に床にのけぞり返つてゐた阿片中毒のロシア人の無氣味な瞳の光……。

「惡と、惡と、醜と。――何と云ふ堪らない町なんだらう？」と、呟きながら、私はP街の大通から近道の暗い横町へ

折れ曲つて、重く頭にかぶさつて來た憂鬱さを遁れるやうに足を急がせた。

商店の倉庫らしい建物の立ち並んだ、高い、じめ〳〵した煉瓦塀の兩側から迫つた、二三間幅の道。遠くの暗闇の中に見覺えのある支那料理屋の明りが、ぽつつと一つ光つてゐる。その明りの處を右へ折れてまた大通へ出ると、Mホテルなのであつたが、人通さへないその道へ足に任せて何氣なく飛び込んで、私は思はず水を浴せられたやうにぞつとした。

私は兩手を外套のポケットに差し込み、首を襟の中に縮こめながら、變に高く反響する自分の靴音におびえおびえ歩き續けて行つた。が、暫くすると、私は不意に背後の方に低い靴音を耳にした。振り返る氣込もなかつた。私は不意に高く動氣打たせながら、たゞ歩調を早めるばかりだつた。

「あなた、あなた……」と、靴音を聞きつけてから七八間も歩いたかと思ふと、私は突然背後から呼び掛けられた。而も、その聲はアクセントこそ違つてゐたが、はつきりした日本語だつた。

「え？」私はぎよつとして振り返つた。

立ち止まつた私の前に、暗闇の中から、影のやうにひよいと近附いて來たのは、肩掛を頭越しにかぶつた、何となくみすぼらしい身形の外國の婦人だつた。厚く白粉を刷いた顔が夜眼にもまつ白く見えた。何か知ら危險に迫られてゐるやうな不安を感じてゐた私はほつと氣持の安らぎを覺えたが、ぢつと向けられた二つの眼の光に氣が付くと、それが女であるだけに變な無氣味さを感じないではゐられなかつた。

「何か用ですか？」暫くためらつた後に、私は日本語でかう訊ねかけた。

婦人はもじ〳〵して默つてゐた。

「人違ひではありませんか？」私はまた云つた。

それにも婦人は答へなかつた。が、俯向いて暫く考へこんだがと思ふと、ひよいと顔を上げて、

「わたくし、日本詞、よく、駄目です。――あなた、わたくし、家、來て下さい……」と、婦人は覺束ない詞で云つた。

突然の思掛ない誘ひの詞に驚いて、私はまじ〳〵と婦人の顏を見詰め返した。と、何故か私の視線を遁れるやうに、婦人は直ぐに眼を伏せてしまつた。そして、灰色がかつた肩掛の端を右手の指先で苛立たしさうにまさぐつてゐるのであつた。が、外國人にしては小柄な體を肩越しにぢつと見詰めながら、その着てゐる上着のひつつこい更紗模樣にふと氣が付くと、私はそれがロシヤの婦人に違ひない事を刹那に感じた。そして、何のために呼び止めたか、どんな種類の女であるかを頭の中にす早く考へてみた時、「素人の賣笑婦」と云ふその想像が瞬間に閃き過ぎた。

「どうぞ、わたくし、家、來て下さい……」婦人は俯向いたまゝまた歎願するやうに繰り返した。

瞬間の想像は私を答への詞にためらはせてしまつた。が、それと氣付いて或る落ち着きを得た私の心には、婦人に背中を向けようとする一つの感情と同時に、婦人に惹かれようとする好奇心らしい感情が明に動いてゐた。そして、其處にはなほ無氣味さに對する氣おくれの心が働いてゐたが、さめかけたとは云へまだ殘つてゐる幽かな醉心地が私をそゝのかし始めたのも事實だつた。答へ澁つたまゝ、私は暫く身動きもせずに佇み過した。

と、婦人はちらと私を見上げて、また眼を伏せながら、半分口の中で不意に云つた。

「一圓（アディンるん）、宜しいです。」

來たな――と云つたやうな、くすぐつたい氣持だつた。もう疑ふ餘地もなかつた。私は水島君から「一圓（アディンるん）……」を繰り返しながら日本人を呼び止めると云ふ零落したロシヤ人の素人賣笑婦の話を、色々聞かされてゐた。私は眼を落して、すくんだやうに佇んでゐる女をもう一度頭越しにぢつと見詰めた。何となく痛々しい氣持がした。が、次の刹那には、何故か私の心には臆病な道義心も、氣おくれもなくなつてしまつた。そして、憐情と云ふよりも、寧ろ不思議の世界に對してそそられた好奇心から、妙に自分を力づけるやうな努力的な氣持で私は云つた。

「行かう……」

すると、女は弾かれたやうに私を見上げて何かを云つたが、それは何の意味か聞き取れなかつた。が、誘ふやうに私を振り返ると、急に勢づいた様子で今まで歩いて來た道を急ぎ足に戻り始めた。私はその左背後から、妙に苦笑されるやうな氣持で無言のまゝ追ひ從つて行つた。半町程も戻つたかと思ふと、女は私の少しも氣付かなかつたまつ暗な、狭い路次を左手へ曲つた。そして、振り向かうともせずに、何か知らむつと鼻芥くさい臭ひのする、右左に煉瓦塀のすれすれになるやうな道をせかせかと歩き續けて行くのだつた。

「あなた、イギリス詞、分りますか?」と、暫くすると、女は不意に私を振り返つた。

「分る……」と、私は答へた。

「おお、あなたは英語を話せるんですか?」と、女は急に調子づいて、流暢な英語で云ひ返した。

「うむ。少しなら話せる……」と、私は何となく氣輕になつた氣持で應じた。

「あなたは何處にお住みですの?」と、女は足を弛めて私と肩すれすれになりながら、直ぐに訊ねかけた。

「M街に……」と、私は出鱈目に答へた。

「さう。――私、日本の人を三四人知つてゐますよ。ミスタア・木村、ミスタア・高柳、ミスタア……」と、女は小聲に微笑を含んだ聲で云つた。

「私、そんな人知らない。」

「さうですか。」

女の英語は私のそれと比較にならない程巧だつた。そして、それは女が決して無教育者でない事を感じさせた。何れはこれも革命の不幸な犠牲者の一人に違ひない――さう思つた時、かりそめの好奇の念に驅られてゐる自分の心に痛みを感

じない譯にはいかなかつた。が、異鄕の見知らぬ町で、異鄕の見知らぬ女との間に偶然起つて來たアバンチウルに對する强い興味は、その痛みを直ぐに覆ひ包んでしまつた。

「君の名前は？」と、私は無遠慮に訊ねかけた。

「カテリイナよ……」と、女は蓮葉(コケツト)な聲で輕く答へ返した。

やがて少し明りのある橫町へ出た。その時、女はひよいと私の方を振り返つたが、かぶつた肩掛の間に初めて照し出されたその白い顏は、瞬間何となくなまめいた印象を與へた。が、女は默りこんだまま斜に橫町を渡り過ぎて、また向う側の暗い路次へはひつた。そして、十間程も步いたかと思ふと、女は不意に立ち止まつて、私の方へ頤じやくりをしながら、內側に鈍い明りの差した家の入口の扉をそつと引き明けた。

「靜にして下さいね……」と、あとへ續いた私の耳元に女は聲をひそめながら囁いた。

煤けた天井から、よれよれになつた電線を引いて、傘もない塵芥だらけの電燈の球が黃色い光をとろんとあたりへ投げてゐた。ほこり臭い感じのする、がらんとしたホオル。右奧へ扉のある部屋が三つ四つ續いてゐる。が、女は短いスカアトをうしろ手にたくし上げながら、直ぐ左手の壁際にそつた、もう板の角のまあるく減りへらされた階子段を、足音を怖れるやうにして昇り始めた。私もそれに續いたが、高かつた踵の、橫に曲つてへつてしまつた女の黑い編上靴がおづおづと動いて行くのを眼の前にすると、私の胸には變な不快さが込み上げて來た。

「來なければよかつたなあ……」と、心の中に呟いて、橫に顏を反けそむけしながら、私は重くなつた足を引きずるやうに昇つて行つた。

一階、二階、人が住んでゐるのかゐないのか、息詰まるやうな靜けさを包んだ、安普請の洋館だつた。處々に落書のある、よごれた白壁、或る窓の毀れた硝子のあとには新聞紙が貼つてあつたりした。階段は足をひそめても無氣味な軋り聲

を立て、泥や小砂利にざらついてゐた。そして、眞夜中過ぎの劇しい寒さにこごえたやうな電燈の光の薄暗さ、刹那の不快さは、何時の間にか恐怖の念に變つて來た。が、女は默りこくつたまゝ涯ない階段を昇りでもするやうに、振り向きもせずに一段、一段を辿つて行くのであつた。二階、三階、それが最上層の四階目の階段を登りきつた時、女は苦しさうに太息づいて立ち止まつた。そして、女はかぶつてゐた肩掛を靜に取りのぞけながら、小聲に云つた。

「其處よ……」

頷いて、薄暗い明りの下ながら、私はその刹那に初めて女の顔を眞面に見詰めた。赤茶けた、艶のない、ぱさぱさ髮、高い頬骨、肩掛をはづした女の顔は見違へる程痩せてゐた。そして、夜目にはただ白くばかり見えてゐた拙い化粧の下に、そばかすが一杯に浮いてゐた。年は二十六七なのであらう。明りに照り反された、黒くたるんだ瞼の陰にありありと羞恥の色を見せながら、まぶさうに私を見詰めた眼は深く凹んで、その奥には生活に疲れきつてゐるやうな昏い影が差してゐた。私は思はず顔をそむけた。そして、幻影消滅の苦々しさに打たれながら、引き摺られて來た今までの自分の姿の淺ましさを感じながら、暫く身動きもせずにその場に佇んでゐた。

「さあ、おはひり下さいな……」と、女は小聲に私をうながした。そして、右手の直ぐとつつきの部屋の扉の前に歩み寄つて、ハンドルに手を掛けた。

「其處かね。――君の家は……」と、私は氣拙さをてれ隠すやうに呟いた。

「えゝ……」と、女は低く頷いた。

然し、私ははひる氣込をすつかり喪つてしまつた。そして、むつつり口噤みながら、女の顔を眺めてゐた。

「まあ、どうなすつたんですか?」と、女は氣遣はしさうに云つた。

私はふつと溜息づいた。そして、女からそむけた視線をそのまゝにぐるりとあたりを見廻した。遁れる事、思ひ切つて

階段を駈け降りてしまふ事、それより外に自分の救ひ場がない氣がした。が、私はためらつた。ためらひながら、探るやうにまた女の様子を眺めた。と、遁げられては――と云ふ不安に捉はれたらしい女は、急に眼色を鋭くした。そして、つかつかと私の側に舞ひ戻つて來たかと思ふと、ぐいと外套の袖を掴んだ。

「金だけ置いてやらう……」と、咄嗟にさうした苦々しい決心で自分を鞭打ちながら、私は仕方なく女のあとに續いた。むか〳〵するやうな氣持だつた。が、扉の内へはひつて、女の指差した壁際の椅子にぐたりと腰を降した時、ほつと氣の弛みを感じた。知らない間に、私の總身は疲れきつてゐたのだつた。

細長い部屋だつた。處々紙の破れた天井から、笠のない、ほこりだらけの電球が此處にも黄色い、乏しい光を投げてゐた。粗末な丸テエブルのまはりに、編目のほぐれたりした椅子が三つ四つ。針金に渡した、みすぼらしいカアテンの奥の方には、寢臺が備へてあるらしかつた。古びた唐草模様の壁紙の處々はげかゝつた四方の壁には、三色版の平凡な風景畫が一つ掛かつてゐるきりで、がらんとした、空氣の冷えきつた部屋の中には裝飾品らしい何物も見えなかつた。女は何か知ら落ち着きのない様子で、テエブルを挾んで私と向ひ合せに腰を降したが、直ぐまた立ち上つた。

「寒いでせう。――火を持つて來ますわ……」と、女は小聲に呟いた。そして、左手の壁の中程にある扉の方へ歩いて行つたかと思ふと、ひよいと私を振り返りながら、そのまゝ隣の部屋へ姿を消してしまつた。

この部屋きりの一人住居――そんな風に女の身を想像してゐた私は、思掛ない氣持で扉の方を眺めながら耳を澄ましたが、こどりごとりと聞えてゐた女の靴音はやがて止んで、隣の部屋は直ぐに鎭まり返つてしまつた。私はその扉と向ひ合せの、右手の窓に眼を移した。降された、貧しい花模様のある、茶色のカアテンが靜に揺れてゐる。十秒、二十秒、三十秒、私は部屋の中をまたぐるりと見廻した。幽かな胸騒ぎがし始めた。それを胡麻化すやうにポケットから煙草を取り出してマッチの音を氣にしながら火を點けた。そして、一息吸つた煙草を吐き出しながら、その烟のからんで行く電燈の方を見

ゐともなく見上げてゐた。すると、その途端に扉の向うで幽かな人聲がした。續いて、力の無い咳音が二つ三つ聞えた。思はず息を抑へながら、私は聽耳を立てた。が、そのまゝあたりはひつそりとなつてしまつた。

「誰かゐるんだらうか？」と、私は心の中にこはごは呟いた。と、刹那に或る人から聞かされてゐた西洋の「美人局（ブラツク・ビユウテイ）」の話が不意に頭の中に閃いた。私はぎくりとした。

やがて私はそつと椅子から立ち上つた。そして、女のはひつて行つた扉の方へ歩きかけた。が、ぎしりと床にきしつた自分の靴音を感じると、足はそのまゝすくんでしまつた。動氣が高まつて來た。神經が針のやうに尖がつて來た。私は體の動きに迷ひながら、入口の扉の方をぢつと眺めてゐた。

が、間もなかつた。よろめくやうな足音が再び聞えたのに、はつとして振り返ると隣の部屋の扉が靜にあいて、その陰に瀬戸火鉢を抱へた女の姿が現れた。火鉢の中には今燃やしつけたばかりらしい木片がけぶつてゐた。瀬戸火鉢と西洋婦人と、それは如何にも奇妙な、同時に如何にも貧乏くさい感じを與へる對照だつた。張り切つてゐた氣持はふと弛んだ。そして、私は怪訝の眼を女の姿に投げかけた。と、女は何故か憚るやうにあわてゝ扉を締めて、置いた火鉢を抱へ直すとけむつぽい顏を横に曲げながら、私の側に近寄つて來た。

「たいへん、寒い……」と、てれ隱すやうに日本語で呟いて、女は硬張つた作り笑ひをその浮のない顏に浮べた。そして、私の前に引き寄せた椅子の上に火鉢を降すと、それを挾んで私と向ひ合せに腰を降した。

私は塵の浮いたテエブルの面に眼を落したまゝ、身動きもせずに默りこんでゐた。が、さうした故意とらしい女の仕草が油斷を作らせるためではないか知らと思ふと、私は警戒の氣持を弛める譯にはいかなかつた。互にこだはり合つた、ぎごちない沈默が續いた。と、やがて女はかざしてゐた手の指先で火鉢の緣をこつ〳〵彈き始めたが、暫くしてひよいと顏を上げながら、

「外套をおぬぎなさいな……」と、變に調子のもつれた聲で囁いた。

それには答へずに、私は探るやうに女の顏を見詰め返したが、何時の間にかそれは化粧し直されてゐた。そして、瘦せてこそゐるが、人の好きさうな、小作りな顏に、素人らしい臆病さで媚びるやうに見開かれてゐる二つの眼には、何の邪惡の影も見えなかつた。火ほこりをかぶつた髮、紅の叠つた唇、上着の間からのぞいた粗い襟足、よごれのついた更紗の上着、毛のすりきれた茶羅紗のスカアト――若い異性らしい魅力を喪つた、痛々しいやうな、さうした姿と、自分の行爲に明ら樣になりきれない、部屋へはひつてからのぎごちない始終の樣子とを思ひ合せると、私は今まで女の上に描いてゐた不安な想像が少し馬鹿らしくなつて來た。が、それにしても隣の部屋に感じた人の氣配と、何處となく祕密を包んでゐるらしい女に對する疑念は霽れなかつた。

「君は此處に一人で住んでるのかい？」と、私はさりげない調子で訊ねかけた。

と、俯向いてゐた女はひよいと私を見上げたが、何となく不安らしい眼をしばだたきながら、返事にためらふ樣子だつた。

「外に誰もゐないの？」

「ええ。――私一人ですの……」と、女は底響のない聲で答へながら、俯向いた。

嘘だな――と、私は思つた。が、妙におどおどして落ちつかない女の樣子を見てゐると、强ひて問ひ詰めるのもためらはれるやうな氣持だつた。が、それだけにまた、何かある、何かある――と、さうした疑念が一そう深められずにはゐなかつた。

「ほんとに一人？」と、聲を高めながら、私はまた云つた。

「ええ……」女は曖昧に頷いた

「でも、さつき隣の部屋で誰かと話し合つてゐたぢやないか？」

女はぎくりと肩先を顫はせた。が、俯向いたまゝ、何故か堅く唇を噛み締めてゐた。

「何か匿してゐるね？」

「いいえ……」と、女は上眼遣ひに私を見上げた。をびえてゐるやうな視線だつた。そして、顔には血の色が消えてゐた。

私は疑ひを深めながら、何故かだん〳〵に身すくみして行くやうな女の姿を頭越しにぢつと見守つてゐた。そして、互に長い沈黙を續け合つた。と、凝りついたやうに動かなかつた女は、やがて靜に顔を上げた。その眼は一杯に涙ぐんでゐた。

「私はあなたのやうな方に初めて會ひました……」と、女は不意に云つた。

「え？」

「あなたは親切な人です。」

私は返す詞もなく女を見詰めた。

「いいえ、外の人はみんな直ぐに私の體を求めます。――あなたのやうな人はありません……」と、女は私の視線を遁れるやうに顔を反けて、擘を顫はせながら云つた。そして、暫くすると、突然机の面に身を投げ伏せて、啜り泣き始めた。

私は浮びかかつた苦笑を苦々しく噛み殺した。

「一體、どうしたと云ふんだ？」と、たまり兼ねてたうとう立ち上つた私は、女の側に近附きながら訊ねかけた。

女は力なげに身を起した。

「ほんとは、ほんとは夫と、子供が二人……」と、女は涙ぐんだ眼で隣の部屋の方に眼くばせした。

「ええ？――君の……」

女は默つて頷いた。

「どうして？」――そして、君は……」と、私は息を彈ませた。

女は答へ兼ねたやうに俯向いてしまつた。

真面にぴしりと何かを叩きつけられたやうな氣持だつた。私は隣の部屋の方を振り向き、女の姿を見詰めながら、不安と、困惑と、羞恥と、疑惑の中に立ち迷つてしまつた。

「何故……」と、やがて云ひかけたが、私はその先を云ひためらつてしまつた。

女は痛々しい視線で私を見上げた。

「夫は、夫は、肋膜炎に罹つてゐますの。――この夏の初めから……」と、女は聲を戦かせながら、絶望的な調子で云つた。

密かな想像が其處へ動きかけてゐた、その途端だつた。で、今までのすべてをはつきりさせてしまふやうなその詞を聞かされた時、驚きに打たれると云ふよりも、騒いでゐた私の氣持はふと鎭まつた。そして、その鎭まつた氣持のまゝに、初めて我に返つたやうに、私は眼の前の女の姿をぢつと見詰めた。と、すべてを打ち明けて張り詰めてゐた氣持の綱が弛んだのか、女は俯向いたまゝまた啜り泣き始めた。

「これも革命の悲慘な犠牲者の一人に違ひない……」と、私は心に思つた。そして、その啜り泣きの聲に惹きつけられながら、默つて膝に眼を伏せた。

長い沈默が互の間に過ぎて行つた。

「然し、御病人の様子はどんななの？」と、私はやがて靜に訊ねかけた。

「ええ、もう長くは持ちますまい。醫者にかける事が出來ないんですから。――それに第一、私達四人は昨日から何にも食べませんの……」と、女は啜り泣きをこらへながら、途切れ途切れに答へ返した。そして、暫く口を噤んだあと、急に身を顫はせながら叫んだ。「これもみんなあのレエニンのためですよ。――あんな憎い、恐ろしい男はありません。」

痛々しい反抗の姿だつた。私は思はず顔を反けながら、ふつと溜息づいた。

「然し、君達はどうしてこんな……」と、私はためらひながら云つた。

「聞いて下さい。――みんなお話ししますから……」と、女は涙をぬぐつた。

やがて女が語り出した話はかうだつた。――夫がペトログラアドの近衛騎兵聯隊の一等大尉たつた事、結婚して長女が生れると間もなく革命が起つた事、職を剝がれ、財産を沒收されて親子三人命からがらにペトログラアドを遁れた事、あらゆる困難を甞めながら二年間シベリアを流浪して來た事、その間に長男が生れた事、ハルビンへ來てから一年半程になる事、食を得るための無理な勞働の故に夫が肋膜炎に罹つた事、夫の死が迫ると共に、子供達に十分の食事が與へられない事、二月程前から賣るべき何物もなくなつてしまつた事、そして、その合間々々に、女は力の限りの反抗心を燃え立たせながら、ソヴィエット政府を憎み呪ひ、革命を恨み罵つてやまなかつた。

「レエニンは惡魔です、獸物です……」と、我と我が涙に興奮しながら、女は幾度か繰り返した。そして、時には齒を嚙み鳴らした。時には握つた拳で机の面を叩きつけた。

時々身振で合槌打ちながら、興奮すればする程早口になり、處々聞きとれなくなる女の詞に、私は默つて耳を傾けてゐた。が、それは女の身の上が餘に悲慘に過ぎてゐるためだつたらうか、それとも何か意識外の理由が働くためだつたらうか、女の話が進んで行くにつれて、私の心は初めの感動を裏切つて、何故かだん／＼に冷えて行くのであつた。のみならず女の感傷が强まるにつれて、その詞の間に、誇張した、お芝居らしい、西洋婦人によく見る仕草が交へられるのに氣付き自分の境遇の悲慘さを私に强ひようとし、わけても自分の生き方の止み難さを私に認めさせようとする意圖が露骨になり出して來た時、幽かな嫌厭の氣持さへ時々胸に迫つてくるのを、私はどうする事も出來ないのであつた。

「私の身の上に同情して下さい、同情して下さい……」と、女は西洋婦人らしい率直さで、何度か私に訴へた。そして、その度毎に、「お氣の毒です、ほんとにお氣の毒です……」と繰り返さなければならなかつたが、その聲がだん／＼空々し

くなつて行くのに氣付いた時、私は密かな痛みを心に感じない譯にはいかなかつた。

一わたり話し終つた女は、やがて疲れたやうに沈默してしまつた。私もそのまゝ口を噤んで、ぢつと俯向いてゐた。ともう三時は過ぎたに相違なかつた。小さな火鉢に僅かばかり燃やされた木片で暖まる譯もない、がらんとした部屋の中は凍るやうな戸外の夜氣と共に冷え渡つて、寒さがひし／＼と身に迫つて來た。私は堪りかねて部屋の中をぐるりと見廻した。女を見詰めた。が、興奮のすつかりさめきつてしまつたらしい女は陰鬱な表情を浮べたまゝ、身動きしようともしなかつた。一分、二分と、白けきつた沈默の時が移つた。そして、私は傷ましい悲劇の女主人公を眼の前にしながら、ただ索漠たる氣持の中に陷るばかりだつた。

「歸らう……」と、私は心に思つた。そして、ずかりと椅子から立ち上つた。と、女は彈かれたやうに顏を上げた。

「まあ、どうなさるんです？」と、女は眼を見張りながら、私を見詰めた。

「歸るんです……」云ひながら、私は二三歩踏み出した。

「待つて下さい、待つて……」と、女は立ち上り樣に叫んだ。

私は立ち止まつて、女の方を振り返つた。と、女は變にぎらついた眼で私の側へ近寄りながら、ぐいと外套の袖を抑へた。私はそれを振り放した。そして、洋服の内がくしから二三枚の紙幣を拔き出すと、手摑みのまゝ女の前に差しつけた。が、女は受け取らうとはしなかつた。私はそれを床に手放したまゝ、つか／＼と入口の扉の方へ歩きかけた。

「いけません、いけません……」と、女はあはてたやうに追ひすがつた。そして、肩越しにいきなり私を抱き止めると生温かな吐息を頰に吐きかけながら引き戻さうとした。私は逆ひながら振り返つた。と、その刹那に私の眼にまざ／＼と映つたのは、ほの白んだ女の顏に、慾情に燃えながら輝いてゐた、まん丸い二つの眼であつた。

「さよなら……」

荒々しく女の腕を振りほどいて、さう叫び殘すと、私は振り向きもせずに扉の外へ飛び出した。そして、二段、三段、と大股に階段を驅け降りながら、苦々しさ一杯に、自分を踏みくちやにするやうな氣持で、私は心の中に呶鳴り續けてゐた。

「馬鹿め、馬鹿め、馬鹿め……」――大正十一年十二月作――



虐げられる

正宗白鳥

『日本の婦人は長い間男子に虐げられてゐる。醒めたる女は男の專横から脫しなければならない』とは、早くから私だちの聞かされてゐるところである。婦人問題の方が資本家對勞働者の問題よりも早くから、多くの人によつて熱心に論ぜられてゐる。婦人雜誌にはいろ〳〵な方面から、婦人虐待の實例が擧げられたり、婦人の生活の不安が說かれたりしてゐる。私はさういふ者を讀むたびに成ほどさういふものかと思つてゐた。法律上でも婦人には參政權がない。貞操についても婦人には苛酷である。何かにつけて男子ばかり勝手なことをしてゐる…………

私は平生、婦人問題や勞働問題について、特別に研究することはなかつたので世間の議論家が口にし筆にする意見を、深い反省もなく受入れてゐたのであつた。が、この頃ふとしたことから、虐げられてゐるのは必しも女ばかりではない、女のために虐げられてゐる男も隨分多いと、心底から感ぜられるやうになつた。理窟はどうであらうとも、外觀はどうであらうとも、他人が說明する他

所の實例はどうであらうとも、私自身が直接に目で見耳で聞き神經で感じた實驗體驗ほど信頼すべきものは私にはないのである。社交の狹い私でも、自分と緣のある家庭を五軒や六軒は熟知してゐる。隣近所の家をも、多少内輪に立入つて知つてゐる。そして、人生の眞相を索るには、雜誌の記事よりも學者の講演よりも、私自身の接觸してゐる前後左右の凡庸な人々の生活狀態に一層多くの價値があるやうに思はれる。

私の身内にも幾人かの女子があるが、それ等の女子が男のために虐げられてゐるとはどうしても思はれない。親戚のある老女は、參政權こそ持つてゐないが家庭の中で權力を揮ひ、主人を頤使してゐる。出入りのいろ／＼な男子にもへこまされさうではない。心の進まなかつた結婚を無理往生にさせられたある男は、結婚後は傍(はた)の者の豫想とは打つて變つて、夫婦仲が睦まじくて、用事以外の外出はしなくなつた。食物の嗜好でも衣服の選擇住宅の手入れでも、家庭内の日常生活が女の趣味で左右されるのは不思議はないが、親子の仲兄弟の仲も、めい／＼の女房の感化によつて、著るしく變つて行くのに驚く。夫婦仲が特別に睦まじい譯でなくつても、亭主は女房の腰巻に捲かれるやうになつてゐるらしい。虐げる力などありさうではない。

先日(こないだ)親戚のある老人が訪ねて來た。老人は非常な子煩惱で、後繼者の嫁選びには苦心したが、親の目から理想的に思はれる女を得て喜んでゐた。ところがをり／＼私の耳に觸れる噂によると、幼いころから柔順で、父の言葉には一度も背いたことのなかつた後繼者(あととり)も、結婚後一年も立たぬうちに、まるで人が變つたやうになつて、事々に父に反抗して、つねに平和だつた家庭にも不穩な風が絕えず吹くやうになつたさうである。おとなしかつた其家(そこ)の子息(むすこ)も妻を得るとゝもに、本能的に妻を守るための刄を磨かなければならなくなつたのであらうと、私には思はれた。新夫婦の一言一行も、子煩惱で執着の強い老父の耳目から等閑視されることはなかつた。夫婦は人目を離れた水入らずの打解けた樂みは樂めなかつた。二三日の旅行さへ許されなかつた。いつも親の膝下にぢつと煩瑣な監督を受けてゐなければならないのらしいが、それぢや

若い者は詰らないだらうと、私には察せられた。後嗣者は妻の不平をも背負つてやつて、二人分の不平を何かにつけて洩らすやうになつた。嫁を娶つてやつたら、夫婦して親を大切にして呉れるだらうと樂んでゐた老父は、嫁のために息子を奪はれたので、六十になつて、はじめて人生の淋しさを感じたのであつた。

「たまには外へ出してくれと云ふのだが、外へ出すのは危いからな。身體が弱いのだから」と、老人は云つてゐた。身體が弱いから家の中に蟄居してゐろとは、理窟に合はないことだが、老人の心では三十にもなつた子息も嬰兒(みどりご)の如く思はれてゐて、外へ出たら自動車か電車に轢かれはしないかと氣遣はれてゐるらしかつた。

老人は私の家の近所を散歩して來て、「皇統中心絕對主義××社」と書いた標柱を見て來て、絕對といふ文字の意味を一心に考へて、私にも訊ねた。この頃は相對性原理といふ事が新聞などで頻りに說かれてゐるから、それに關連した意味の質問かと思つて、私は絕對といふ言葉の意味を說明したが、老人の心に持つてゐる疑問はさういふ方面ではなかつた。平生事々に子息の口から、「さういふお話には絕對に服從しません」と、氣色ばんだ言葉が出るので、老人は絕對といふ言葉を何かしか無氣味なものと思つてゐたのであつた。

昔から有難いお題目のやうに言傳へられてゐる愛情——親の愛子の愛女の愛男の愛——も度が過ぎると、自分の幸福にもならず、相手の幸福にもならないやうである。私は子供の時分から、兩親の溺愛に甚くしちくどい束縛を受けないで通つて來たことの有難味を今になつて感じてゐる。

でも、私の母だつて、成らうことなら、大勢の子供を側へ置いて、食事時には一しよに膳の前へ並ばせたいと思つてゐるには違ひないが、我々兄弟は、歲を取るにつれて、老親や兄弟と每日寢食を共にすることを好まなくなつて、自分々々の世帶をもたうとした。妻を娶り子を生み、そして彼等を養ふために働いてゐる。私は私の兄弟の口から兄弟に對しての不平らしい言葉を洩らすのを聞いたことはあるが、彼等の女房に對する非難を、間接にでも聞いたことがない。私の兄弟

にしても親戚の誰れ彼れにしても、理想的の妻を得てゐる譯ではあるまいのに、それ〴〵に家庭に安んじて日を過してゐる。

舅姑に虐げられてゐる女は私もよく知つてゐるが、夫に虐げられてゐる、妻は私の近くにはゐないやうである。これに反して、妻の無智のため妻の虚榮のために虐げられてゐる男なら、知人のうちに二人や三人は見出すことが出來るやうに思はれる。

私が昨今知合ひになつた人のうちに岩瀬市三郎といふ會社員があつた。彼れは三十をちよつと越したくらゐの年輩で、身體が健かで容貌も立派で、話しつ振りもチャキパキしてゐた。横濱のある會社に勤めてゐたのだが、家庭に事情があつて、内縁の妻とも云ふべき富子といふ女を大磯に住はせて、自分は土曜の晩から月曜の朝まで此方で暮すことにしてゐた。富子は以前女事務員といふやうな仕事をどこかでしてゐたのださうだが、この女も太り肉で丈夫さうな體格をしてゐて、病氣のために海濱生活を必要としてゐるやうには見えなかつた。

一構への内に建つてゐる小さな三軒の家の一つを借りてゐた。稀れには富子一人きりのこともあつたが、大抵は彼女の母親が來てゐたり妹や弟や、その他の男女が來てゐたりした。そして富子は月に二三度は泊りがけで東京へ出掛けるのを例としてゐた。彼女のお氣に入りで、時々は臺所のお手傳ひなどしてゐる女の話によると、彼女は主人の俸給の大部分を取上げて、せつせと衣類を買込んでゐるのださうだ。新調の美服を着けて、主人を伴つて散歩してゐる彼女の姿は、去年の秋ごろから、をり〳〵私の目に觸れてゐたが、知合ひになつたのは、今年の春からであつた。

ある日、私の家に飼つてゐた鷄の行方が知れなくなつたので、隣家の人たちと一しよに騷立つて垣根の外へ出て來て、近所を搜してゐると岩瀬がその鷄を抱へて垣根の外へ出て來て、「私の家の縁の下へ入つてゐましたよ」と云つて渡して與

れた。それが縁になつて、岩瀬も富子も、時々私の家へ遊びに來るやうになつたが、私の方からは滅多に彼れの家へ行つたことはなかつた。夏場海水浴に行つた時に、二三度彼等二人が一しよに泳いでゐるのを見て、富子の元氣のいゝのに感心したことがあつた。岩瀬よりも富子の方が泳ぎが上手であつた。

私の方では、彼等の生活について立入つたことを訊かうとはしなかつたので、多分男の兩親が結婚を許さないために、かういふ所に住んでゐるのであらうと漠然極めて、近所の人の口にするいろ〳〵な噂を、深くは心に留めないで聞いてゐたが、避暑季節も終りに近づいたころ、富子は私のところから持つて行つてゐた雜誌を返しに來て、何かと世間話をしてゐた間に、自分の身の上話をもした。

「岩瀬は大阪の支店の方へやられさうなので御座いますよ。さうすると私も此方にはゐられなくなるかも知れません。變つた土地へ行くのは私にはよろしいんですけれど、母や妹なぞは遠方へはまゐられませんから失望してゐますのです」と云つたので、私が、「しかし大阪邊で暮すのはいゝですね。僕なぞもこの土地には厭いたから、變つた所へ行つて暮したいと思つてゐるんですが、あなたもよう大磯にはお厭きになつたでせう。一年あまりもこんな田舍によく辛抱してゐられましたね」と云ふと、

「よくさう云はれるのですけど、私は別段この土地に厭いたつてことは御座いませんわ。横濱で半年ばかり岩瀬と一しよに暮してゐた時よりや、此方にゐる方が餘程氣樂でよろしんですわ。若しも上方へまゐることになりましても、私、澤子とか、須磨とか、何處か、都會から離れたところに一人で住みたいと思つて居りますの。………私どもは變な性分なんで御座いますわね。一月も半月も一しよにはゐられませんのですよ。喧嘩しないで穩かにして暮さうと思へば、どうしても別れてゐなきやなりませんの」

「そりや毎日一しよにゐれば、どんな氣の合つた夫婦だつて、たまには言合ひも喧嘩もするでせう。だけど、岩瀬さんは

御不自由でせう。それに一軒も家を持つのは非常に不經濟ぢやありませんか」
「不經濟は不經濟ですとも。………でも、つまりは同じことですわ。女中なぞ使つて大きな家を一軒持つかはりに、岩瀬は下宿住ひをして、私は此方でマッチ箱見たいな家にゐるのですから、別居も同居も、月々の掛りはさう違やしないのです。………初め私が此方に住みたいと言出した時には、どうせ長くはゐられやすまいと、岩瀬は高をくゝつてゐたのですけど、私が何時までも我慢してゐるので當てが外れたらしいんです」
「ぢや、岩瀬さんは別居を好んでゐらつしやらないんですね」
「でも、岩瀬も今のやうにしてゐる方がよろしいんでせうよ。一人で下宿にゐれば私に干渉されないで勝手なことがしてゐられるんですから」
「お互ひに滿足してゐられゝば、別居の方がいゝんでせうね」
私は受答へをするのが大儀になつたので、話はそれで終つたが、別居してゐて勝手な事をしようとするのは、岩瀬よりも富子の方ぢやないかと思つてゐた。しかし富子のしてゐる勝手な事と云つて、男の俸給を捲上げては衣服を拵へることくらゐだらうと輕く見てゐた。
「あの奥さんは御自分に魂膽があつて、岩瀬さんの方の籍へはいらないらしいんですよ。岩瀬さんは長男だから、お父さんが亡くなりさへすれば、當然田舍の家を相續して財産が御自分の自由になるんでせうけれど、奥さんは岩瀬さんがお父さんを隱居させてゞも早く戸主にならなければ、自分は籍に入りたくないと頑張つてるんですつて。大勢弟や妹があるんだから、今のうちに決めといた方がいゝのに、岩瀬さんが因循で氣が弱いからいけない、お父さんは六十を少し越したばかりだけど、お酒が過ぎるためか何かで少し老碌しかけてゐるのだから、財産のことでも、側にゐる弟なんぞがどうしてゐるか分りやしないつて、奥さんは云つてるんですよ。でも、戸主にならなければ籍に入らないなんて、そんな理窟が通るの

か知ら」と、私の妻はある日私に話した。

「それは少し可笑いね。外に何か譯があつて、離縁を云つて亭主を困らせてゐるんだらう。しかし、女の方から籍に入れて貰ひたくないと云ふのは、話がアベコベのやうだね」

「横濱にゐると、岩瀬さんの弟妹なんかゞ田舎から訪ねて來るからいやなんですつて。話をしてゐると、あの奥さんも見掛けほど怜悧ぢやなさゝうですよ。病氣でもないのに、年中こんな土地でボンヤリ暮してゐるのは、怜悧な人のすることぢやないでせうね」

「でも、結構な御身分だつて、近所の女は羨んでるだらう」

　何よりものお世辭として近所の人々が私たちに向つて屢々さう云つてゐる口眞似して私は笑つた。私たちは岩瀬夫妻とはちがつて、二人一しよの長い隱居生活を續けてゐるのであるが、こんな土地でボンヤリ暮してゐるのは、詰らないと云ふことは、をり／＼お互ひの胸に湧く考へでもあるし、をり／＼お互ひに口に出していふことでもあつた。だけど、私の心を惹いて生活の方法を變へさせるだけの力のあるものは何處にもなかつた。

　この土地では岩瀬のやうな男でも、私のために話相手の一人に數へられてゐたのだから、彼れが大阪へ移轉する前には一度ゆつくりその家を訪ねて、今まで訊かうとしなかつた彼れの身の上の事でも訊かうかと思つてゐるうちに、富子が急に荷物を纒めて、隣近所へは一言の挨拶もなしに此地を立つたことを聞いた。

　平生手傳ひに行つてゐた女の話によると、大阪へ轉任したのではないらしかつた。

「奥樣の弟さんがいらしつて、大急ぎで荷造りをなすつたんですよ。旦那樣が先日いらしつた時には、お引越しになる御樣子はなかつたのですから、旦那樣は御存じないのでせう」とその女は云つたが、まさかそんなことはあるまいと、私だちは思つてゐた。

ところが、それから一月も經つたころ、私は岩瀨が、今は空家になつてゐる舊宅の側に立つてゐるのを、通りがかりに見つけたので、何氣なく聲を掛けたが、此方へ向いた彼れの顏は、見違へるほどに窶れてゐた。近づいて、
「この頃は横濱にゐるんですか」と訊くと、
「えゝ…………」と、岩瀨は氣のない返事をした。そして、家主に預けて置いた物を取りに來たと言譯をして、裏門から入つて行つた。私を避けてゐるらしかつたので、私は餘計な口を利かないで別れたが、その晩私はいろ〳〵に想像を逞うして、岩瀨のことについて妻と話した。彼れを虐げられたる男の一例とした。

その一構への内の三軒の小さな貸家を持つてゐる阿部といふ雜貨店では、老主人が、その貸家の一つを改築して、今は五六丁離れた下町に住んでゐる次男を其處へ住はせようと企てゝゐるのだが、長男の嫁が剛情に反對するために實行出來ないのださうだ。「側へ來られちや堪らないよ。子供同士が喧嘩でもしたら面倒で爲樣がないからね」と、露骨に誰れに向つても云つてゐた。…………嫁でも尻がすわつて、甲羅が生えて來るとあんなにきつくなつて、舅なぞ何とも思はないやうになるんだと、私だちは噂してゐた。

「阿部のお爺さんは次男を側へ置きたいんだから、反對されされるのが不平で、始終ブツ〳〵云つてるんだけど、嫁さんの反對を押切つて、自分の考へを實行することは出來ないんですかね」と、妻は不思議に思つて、「この邊の人は女でも身體が丈夫で、男に負けないくらゐに荒仕事でも何でもやれるんだから、それで自分の思ふ事が通せるのね。女でも實力さへありや小くなつてゐなくてもいゝんですね」と云つてゐた。

その後十日ほど立つたころ、私は東京へ出掛けたが、ふと岩瀨が横濱から汽車に乘るのを見つけた。室がちがつてゐたので先方では氣がつかず、此方から會ひに行くのも面倒だつたので、私が先日から彼れに對して想像してゐたことの當否を幾分でも糺すことが出來なかつたが、家へ歸つて、妻に向つてその話をして、

「あの男は妻君の行方を捜してるんだよ。目付がさうらしかつた」と云ふと、妻は今度は酷つて、私の想像を信じなかつた。

「あなたもよく溺り極めて故事つけるんですね。先日はあの人が奥さんの長く住んでた家を懷しがつて見に來たのだつてあなたは云つてゐなすつたけど、それもどうだか分りやしませんよ。………あの二人はどちらが虐けられてゐたのだか内輪をちつとも知らないものにや眞實のことは分らないでせう」

「さう云へばさうだね」

「あなたは女に虐けられた男のことを氣になさるけど、御自分でさういふ經驗がおありなさるの？」

「さあ。………おれはいつも何かに虐けられてゐるやうな氣がするが、同じことなら、綺麗な女に思ひ切り虐けられて見たい氣がする。………東京へ遊びに行つたつて面白かあないが、岩瀬のやうに目を赤くして女の行方を搜しに行くやうだつたら、東京へ行くにも張合ひがあるかも知れない」

私は考込んだ。暫くして、妻は、

「妙なものね。戸田屋でも、主婦さんの御機嫌を取つとけば、御亭主が私の家の用をよく足して呉れるし、主婦さんの御機嫌を害ねたと思ふと、御亭主までもプリ〳〵してる」と云つて考込んだ。



黒谷夜話

中里介山

五

室津の東の遊女友君(ともぎみ)は此の日早朝から高樓に登つて朝のつとめをしてゐた。

彼女は一月のうち此の日を父母の命日と定めて朝から精進して父母の佛事供養をつとめとしてゐる。

お經を上げてしまつた時分に濱邊の方が如法にさわがしかつた。

「何といふさわがしい事です」

友君は高樓の扉を推して外面の方を見ると濱邊に人が黒くたかつてさわいでゐる。さわいでゐる中に棒を振り上げて丁々發矢と打ち立てゝゐる者と、地に俯して打たれてゐる者との形があり〱と見える。

「友君樣」

そこへ樓の下から、あはたゞしく驅けのぼつて來た少女があつた。

「御覽なさい、あの通り人が打たれて居りまする」

「今それを見てゐる所です」

「あれは多度津から着きました船の中に船賃の拂へない人があつて、そのお錢の代りに打たれてゐるのださうです」

「わたしも多分さうだらうと思つて見てゐました、僅かの船賃の爲にあゝして打たれてゐる人は可哀想です、わたしはお蘭を呼んでたづねて見ようと思つてゐました」

「ほんたうにお氣の毒です、打たれてゐるのは旅の坊さんのお方ださうです、お金のない人は可哀想ですね」

「小槌さん、お蘭、これから下へ行つて誰か人を頼んであの打たれてゐる出家のお方を助けて上げるやうに話をして下さい、さうしてほんたうに出家のお方ならば此家へお連れ申して來るやうに頼んで下さい、早く」

「畏まりました」

少女はまたあたふたと下へおりて行つた。間もなく樓の下から二人の男が濱邊へ向つてなり出したのがよく見える。

「十五――」

「十六――」

振り上げた笞の音頭が宰に、廿に至らないさきに話がまとまつたと見え、さきに此の樓の下から走り出した二人の男が杖を振り上げてゐる船頭に向つて交渉を遂げた容子が此處から手に取るやうに見える。その交渉も極めて器用に扱ひがついたらしく、船頭等が手もなく納得して廿本目の杖を濱邊に抛り出して二人の男に向つて大きくうなづいてゐる容子まで手に取るやうに見える。

錢を提供して喚きまわつた男は早くも出家の手を取つて引き立てゐる、法衣の塵を拂つてやる。そのまはりに居たり立つたりして、いたはつてゐる容子もありありと此處で見てとることが出來る。

黒山のやうになつてゐた見物も多分、途中で解放された此の小さな私刑の犧牲者の爲にホツと息をついた事だらうが、中にはまた何となく飽氣ない面をして立ち去り兼ねてゐる空氣も見えないではない。けれども、それから一人去り二人去

つて漸く濱邊の人は散つてしまつた。

小半日の後、僧と阿波の男とは東の樓から出て來た。

「あの女性は珍らしい人です、珍らしいといふよりも拙僧に取つてはお恥かしいと申した方が宜いやうです、施を受くるは矢を受くるが如しと古人も申されました、拙僧は施を受くる度に怖れます」

と僧が云つた。

「全くあの遊女さんは珍らしい人です」

と阿波の男は調子を合せたが二人共に、ひどく感動してゐるやうである。兎も角も二人は此處で遊女友君の手厚い供養を受けて出て來たものに相違ない。少くとも當座の急と餓とを救はれて、これからまた連れ立つて志す旅路に向ふものと見える。

これより先きこの二人の者が東の樓の友君の手厚い供養を受けてゐる最中に、忙がしさうに東の樓を辭して西の樓へ走つて行く用ありげな年增の女があつた。

「宮城（みやしろ）様はもうお目ざめでございますか」

「はい、今お化粧をしてゐらつしやいます」

「急にお目にかゝりたい事がありましたから通りますよ」

「どうぞ」

年增の女はそのまゝさつさと宮城の化粧の間へ上つて來て

「宮城様」

「誰方（どなた）です」

雅びをこらした化粧の間に宮城は鏡に向つて化粧をしてゐた。

「わたくしです」

「鷹野さんですかね」

「さうです、御免下さいまし」

「たいそう早いではありませんか」

「あなたに少しお知らせ申したいことがありますから飛んで來ました」

「それは御苦勞樣でした」

「お話し申したいといふのは斯ういふわけなのです、今朝の濱邊の騷ぎをあなたは御存知でしたか」

「いゝえ」

「隨分朝寢坊ですからね、可なり大きな騷ぎでしたのに誰もまだその事をあなたに話しませんでしたか」

「聞きません」

「この朝方、あの船が多度津から着きました、その乘合の衆の中に、乘逃のお客が一人あつた爲に濱邊が黒川のやうな人だかりになりました」

「さうでしたか些とも知りませんでした」

「その乘逃のお客といふのが、あの濱邊で船賃の錢の數だけ打たれることになりましたからそれで人が集まつて隨分朝つから騷がしいことでした」

「それだけですか」

「それだけではありません、その乘逃のお客は旅の坊さんでした、隨分見すぼらしいなりをした坊さんでしたけれども、

云ひ草があまり圖々しいといふので船頭達が怒つて散々に打ちました』
『どうも仕方がありません出家の身で只乘をしようとしたのが間違ひです』
『所が、それもその出家が只乘をしたのではないのださうです、何でも困つた人を助ける爲に自分が代つて打たれたのだといふことでした』
『さうですか、それはお氣の毒でした、誰か何とかして上げれば宜かつたのに』
『所が宮城樣、それをまた助けて上げた人があるのです、出家のお方はある貧しい人を助ける爲に自分が身代りに打たれ、そのまた身代りに打たれる出家の爲に償ひをして取りなして上げた人があるのですが、その人を誰だと思召します』
『いろ〳〵奇特な人が出て來るものですね、乘合のお客樣たちのうちに見兼ねて、坊さんを助けに出た人があつたのでせう』
『いゝえ、それが乘合の人達ではございません、變つたところから現はれたから不思議です』
『でも、それで無事に濟んだのですか』
『無事に濟まなければ大變です、可哀想にあの出家は殺されてしまつたかも知れません、それを運よく助かりました、助かつた出家の喜びよりも助けた人の功德にあやかりたうございます』
『まあ、兎に角、無事で終つたのが幸でした』
『宮城樣、あなたは大そう此の話を冷淡に聞いておゐでのやうですが、もう少し身を入れてお聞き下さらねば、折角出て來たわたしの方で張合がありません』
『それはお前さんの無理です、人の痛いのは三年も辛抱するといふわけではありませんが、事が無事に濟んでしまへば今更らさう力瘤を入れる筈が無いではありませんか』

「いゝえ、話はこれからなのです、その出家を助けて功德をした運のよいお方を、あなたはまだ誰だとも御判じがないのがお可哀さうです、明らかに云つてしまひませう、それは東の棟の友君樣です」

「えゝ、友君さんが」

「さうです〳〵、わたしはやつぱりあの人はえらいと思ひます、評判を聞いてごらんなさい、人の身代りに鞭をお受けになつた出家もえらいが、それを雙方よくなだめて大事に到らせなかつた友君さんの慈悲の心が大きいと、もう一般に船から土地の評判でございます、つまり、あの人は功德をつくるよりも人氣を立てることで成功したわけなんです、拔目が無いですね」

「さうですか、どうしてまた、そんな早朝の騷ぎをあの方が聞きつけたのでせう、誰か忠義な人があつて知らせたから宜かつたのでせう」

「さうではありません、今日はあの方の父母の御命日なんださうです、で、早朝から佛事のおつとめをしてゐるところへあの騷ぎだつたさうです、ですから、友君樣はしほらしい、それほど親孝行の心があればこそ、またあの情けがあるのだと一層人の口が芳ばしいものになりました」

「あの方はさういふ事をしたがる人です、わたしにはそんな眞似は出來ません」

「それから、その出家を呼び迎へて供養をして上げる、お經を讀んでもらう、その上に、もう一つの評判は、情けは人の爲ならずと申しまして、あの功德が緣で、二つと無い結構な鏡を友君樣がお手に入れたさうでこれがまたたいへんな評判になつてゐます……その鏡といふのが、上方のお客樣のお目きゝによりますと唐から渡つた二つと無い品で金錢づくではどうしても手に入らない品ださうです。船賃が拂へなかつたお客が持つてゐたのださうですが、何でも雌蝶雄蝶を打ち出した夫婦鏡になつてゐたのを、友君樣のお情に感心してその人が雌蝶の方を無代で友君樣に差上げてしまつたのださうで

す、さうすると友君様もそれに相當する淨山のお金をおやりになつたと聞きました——まだ一つ雄蝶の方が殘つてゐるのですが、それはどうあつても手放せないと云つてゐました、同じ揃つてゐるならば雌雄を分けずに欲しいと友君様も所望はしてごらんになつたのださうですけれど、それはおことわりをしてゐたやうでした、どちらにしても友君様は運のよい方です」

「運のよい人にはかなひません」

宮城の胸のうちが燃え出して來たのがあり／＼とわかる。東の友君と西の宮城と對峙してゐる室津の港では、些細なことでも一方に風聞の傾くことが禁物であつた。鷹野といふ年增の女は宮城を煽りに來たのだか、忠告に來たのだかわからない、物の云ひ方であつたが、やつぱりこれは最初から宮城派の無二の味方なので、東の樓へ出入することは、體のよい隱密に過ぎなかつた。友君の身邊に起る巨細の事を聞きとめて置いては直ちに宮城へ報告して、少しでも後れを取らせまいとするのが此の女のつとめで、それが爲に樓主からも特別の保護を蒙つてゐる。

「ですから宮城様、あなたは敵の運を逆に利用なさいまし、逆に利用といふのはその出家を此處へ呼び迎へて、たんまりと供養をしてお上げなさいまし、さうして阿波のお客とやらの持つてゐる珍重な鏡の雄蝶の方を手に入れておしまひなさいまし、さうすればあなたの器量がずんと上ります、宜うございます、あなたは、さうしてゐらつしやい、萬事をわたしに任かせて置いて下さいまし」

鷹野は斯う云つて、やはり忙がしさうに辭して行くのであつた。これを云ひたい爲に來たのでその策を行はんが爲に去るのである。

そんな事は御存知のない僧と阿波の男の二人は鹽屋の浦から尾野をかけて話をしながら歩いて行く。

「失禮ですが、もう一ぺんあなたの名をお聞かせ下さいまし、あれでお伺ひしたんですが、よく覺え込んで居りませんで

した」

「拙僧の名は鎭西の光樂坊とお覺え下さいまし、六歳の時から寺へやられて十二の歳に僧となつて今日に至りました」

「これまでの御修行が大ていの事ではございますまい」

「さうです、大ていの事ではありませんでした、つまり法器大ならざるものが法に遊ばんとすることの間違ひです、斯うして今日まで悟ることも出來ず、のがるゝことも出來ないのが自業自得なのです」

「何の道に致しましても一道を貫くのは容易な事ではありませんが、まして出家の道は隨分な御難行と承りました」

「さうです、何の道にしても物になるまでには容易な苦勞ではありませんが、殊に出家の道の難いのは三界の出離と人天の果報が伴ふからです、苟も導師となるほどの人には業惡を斷つの手腕が無ければならりません、法器を宿すには法器に堪へるだけの鍛練が無ければなりません――所が、わたしは何をしても皆落第でした」

「左樣な事はございますまい」

「いや、たしかにさうです、寺を出ましてから九州の靈場といふ靈場は大抵廻りました、修行といふ修行は大抵つとめたつもりです、その時、その時には何か得たやうに思ひます、何かの力が授かつたやうに喜んで見たこともありましたけれど、境が變ると皆ダメですね、心が錯落として亂れてしまひます、四國へ渡つて弘法大師の遺蹟も殘らず參詣して來ました、あなたのお國の那賀郡大瀧嶽にも上つて修行の眞似をして見ました、御承知の通りあの山は古來誰一人上つたものもない時分に弘法大師が險岨をわけてお上りになつて、頂上の窟で求聞持の法を修せられました、僭越ながら拙者も、そのおあとを汚して三日の間、それで修行をさせていたゞきましたが、其の時も絕えず或る感激には打たれてゐました、併しその感激もほんたうに其の時だけでした、山を下つて來るとまたしても、凡下の慾念に支配されてしまひます、土佐の國室戸の崚でも同じやうに一心不亂にならうと企てました、けれども弘法大師のお口へ飛び入つたといふ明星は、拙僧の頭

の上までも來ませんでした、斯う申すと、これは凡夫のわたくし如きが古賢大聖の眞似をしようといふのが第一不埒だと叱られるかも知れませんが、佛道といふものは本來大海の水の如きもので、大きな船も浮べれば小さな舟も浮べなければなりません、昔し弘法大師のやうな大聖だけが救はれて、拙僧風情は救はないものと約束があるならば佛道は、わたくし共には不用なものとなるのです、惡木の梢にも情の露は宿ると申しますから、凡下のわたくし共にも佛道のめぐみは現はれなければならない筈です、要するに求め方が惡いのでせう、やはり眞心が足りないのです、誰を怨まんようもありません』

『それほどに御熱心に修行をなさつて求め方が惡いの、眞心が足りないのといふことはござんすまいと思ひます』

『いゝえ、やつぱり惡いのです、足りないのです、表から精進勤行に見えても實は隙だらけだといふことが自分で最もよくわかります――恥をブチまけてお話をしますと、あなたの身代りに打たれてゐる時――實はあれも身代りではないのですけれども假に身代りといふことを許していたゞいて、あゝして打たれてゐる時は近頃にないよい心持でありました、痩我慢を云うのではありませんよ、本當によい氣持に自分の心を鞭打れてゐました、所が、不意に人があつて償ひをつけてわたくし共を救つて呉れた時――あれも本當は救ひでもありませんけれど、人の好意といふものを其のまゝに受けて見ますと、折角返し終らうとした借金にまた利息をつけられたやうに感じました、その上に招かれて供養を受け布施を受けて見ると、自分はいよ〳〵突き落されてゐるやうな氣になりました、殊に、わたくしは白狀しますが、あの女君といふ女性に迷ひました』

『えゝ』

『あの女性を見て心を奪はれてしまひました』

『あなたは正直な事を仰有います』

「正直な所を聞いていたゞかなければ何にもなりません、遊女といふものには常の女にすぐれた魅惑があります、一目見たゞけで温柔な眞綿の罠をかけて人の魂を持つて行く力があの人には備はつてゐました、わたくしは脆くその力に引かゝつてしまひました、あなたには其れがわからないでせう、表面上は、わたくしは兎も角も少しも出家の威儀は亂しませんでしたけれど、心には蜘蛛の魔絲がグル〳〵とからみついて、それをのがれんとする苦心が並大抵ではなかつたのです、それといふのは一つは、あの女の思ひが、たしかに私の身にまとひついてゐたからなのです、あの時に若し、わたくしがあの遊女のふところに飛び込めば、あの人は容易く私の骨を溶かして呉れるところまで進んでゐたのです。それは、他で見る人にはわからなかつたでせうけれど、わたくし自身に繪に描いて見せるやうによく現はれました」

「と申しますと、つまり、あなたはあの遊女さんに思ひつかれた覺えがあるとおつしやるのですか」

「その通りに思召してさしつかへがありません、あの瞬間に、わたくしはあの遊女から戀慕を受けたのです、魅惑の淵へ一足づつ招かれて行つたのです、斯ういふと何の旅の見すぼらしい出家風情と室津の名だたる遊女が――とお思ひなさるかも知れないが、戀愛の働きといふものはさういふものではないのです、わたくしが修行と懺悔の爲になさうとする善事の眞似事が、たま〳〵女性の弱いところに喰ひ入つて、間違つた歡喜から戀愛の淵へ知らず識らず引ぱつて行かれさうにした經驗は今に始まつたことではありません、さうして、わたくしは今日まで心ならぬ女性の愛を受け過ぎて其の負擔に苦んで來たのです、表面から御覽になるとさういふ消息は誰にもわかりませんが、正直な意味に於ては、わたくしは今日まで女性に惱まされ通しで來たのです、本當の歡美は肉の戀愛へ持つて行かないで、法悅の境地に自他を遊ばせるやうにならなければならないのに、わたくしのは自他を損ふ所へばかり持つて行きます――わたくしが輕々しく女性に迷ふのはつまり、わたくしにまた輕々しく女性を迷はせる惡魔の力が宿つてゐるからなのです」

見すぼらしい旅僧の身に室津で一二を爭ふ遊女から思ひつかれたといふ云ひ分は、話し相手によつては可なりひやかし

の材料になるのだが、相手の阿波の男といふのが一向感激のない、さうかと云つて冷淡ではない受け方だから問題にはならなかつた。
「それですから、わたくしは、もう自分で自分の力といふものに愛想をつかして、どうにも斯うにも動きが取られなくなつてゐる處へ、黒谷の法然上人のお噂を聞きました」
「成程」
阿波の男も何程か共鳴したものがあるらしい、
「黒谷の法然上人が、人の救ひは念佛を唱へるだけである。學問も功なし、修行も用なし、たゞ念佛のみが人を救ふといふ聲を聞いて、今のわたくしには大なる福音であると共に大なる疑惑です、私はこれから都へ上つて其の疑惑をたゞしに行かうと思ふのです」
二人が涙の濱をめぐつて笠松の下まで來た時分に後ろから呼び留めるものがあつた。
「申し、それへお出での旅のお連樣、少々お待ち下さいまし」
「我々共に御用と仰有いますか」
「はい、少々お賴み申したいことがございます」
あとから追ひかけて來たのは才の勝つたらしい年增の女と氣の利いた若い者であつた。僧と阿波の男が笠松の下に立つて待つてゐると間もなく追ひついて
「お賴み申したいといふのは外ではございません、あなた樣は東の樓の友君樣の爲に父母孝養の佛事供養をいとなんでおやりになつた由に承りまする、どうぞ、わたくし共の家の爲にも先祖代々の供養の爲に一ぺんの御讀經が願ひたいのでございます」

斯う云つて頼み入つた女は、さきに西の樓の宮城を説きに行つた鷹野であつた。それと聞いて僧は迷惑げに

「それは近頃迷惑な儀にございます、わたくし共は、ほんの通りすがりの旅僧に過ぎませぬ、御先祖の供養をなさるならば、此の地に、もつと氣の利いた僧侶が居られる筈と存じます故、その方へお頼みになつては如何ですか」

「いゝえ、此の地に御出家もございますけれど、あなた樣のお徳の高いことを承りました故、どうか囘向追善の爲にお立ち寄りを願ひたいと、たつて主人から申しつけられて參りました、御承知が無いと、わたくしが叱られます、枉げてお立ち寄り下さいまし」

「拙僧はそれほどに所望される坊主ではないのです、どう間違つて、あなたの御主人のお氣に入つたのでせう」

「それと阿波のお客樣、あなたも、どうか是非御一緒にその主人の願ひでございますから、お連れ合ひになつてお立ち寄り下さいまし、わたくしがお案内を致します」

「御僧さへ御承知なら、わたしはどうでも宜いのです」

「戻ると云つても遠いところではございませぬ、すでに東の樓へお立ち寄りになつて、西へお立ち寄り下さらなければ永久のうらみが西に殘ります、そのうらみを殘してお立ちになるのは、御出家のお志ではございますまいと存じます、さうして折角、お迎へ申せと云はれた、わたくし共がまた主人をしくぢるのでございます、どちらから申しましても一度お立ち寄りを願はなければならないやうになつてゐます」

「それほどに仰有るのなら、お立ち寄り致さないのも無下と存じまする、暫らくお邪魔を致して參りませう、阿波のお方あなたも一緒に戻つて下さい」

「承知いたしました」

斯うして二人は連れ戻られて西の樓へ來た。汀を隔てゝ東の樓が相對して見える、いづれも優り劣りのない建築を此の

室津灣頭に誇つてゐる。

入ると共に二人は意外の手厚いもてなしを受けた。東の樓でも過分に親切に取り扱はれたけれども、それは主として友君一人の好意に出でたのだが、こゝでは一家の者が氣を揃へてもてなすらしい。二人共に、なぜ此の二軒でこんなに好意あるもてなしを受けねばならないのだかよくわからなかつた、阿波の男は、室津といふ土地はバカに信心家の多い土地だ斯かる稼業體に似氣もなく出家をもてなす事の殊勝ぶりに感心した。

問はるゝまゝに僧は東の樓の友君に就ての物語をした。

彼女が毎月一回この日を父母の命日と定めて精進をしてゐることの殊勝と、その才能の豐かな話しぶりと、人をもてなすことの心から親切であつたことを說いた。この僧の心では一人を賞めることは全體を賞めることの意味であつたらしい。

やがて僧一人だけが佛間へ案內された。先祖の回向といふのにかゝはらず、その通された佛間には佛事に何等の用意もしてないのが意外である。僧を座敷の眞中に設けられた座にすわらせて置いて、案內の女は次へ立つてしまつた。

手持無沙汰に思つて徐ろに一間の中を見通すと襖が殘らず眞紅の炎で塗りつぶされてゐる眞中に炎葉の簑をつけたやうな一大樹がわだかまつてゐる。仔細に見れば其の大樹の幹にすがつて枝の上へのぼらうとしてゐる人間の形が寫されてある。その枝の上に、ひとりの眉目うるはしい婦人の姿が現はされてゐる。なほ仔細に見ると幹にすがつて上つて行くのは痛はしい裸形の男で、上りゆくにつれて肉體がメリ〳〵と裂かれてゐる、木の葉と見えたのは皆一々の刀になつてゐる。眉目うるはしい婦人の一人は大樹の幹の下にはらばうて肥えたる肌をあらはして樹の上を見上げて嬌妖な笑を見せてゐる。

「あゝ地獄の間だ」

僧は身ぶるひした、佛事供養の名で自分を招いて地獄の間へ坐らせたのは何かの試錬をたくらむものがあるに相違ない。さう思つたから身ぶるひはしたけれども、恐怯れはしなかつた。心を落着けて先づ惠心僧都の往生要集を思ひ出してゐる。

獄卒、地獄の人をとつて刀葉林に置く、彼の樹頭に好端正嚴飾の婦女あり、罪人之を見れば即ち彼の樹に上る、樹葉刀の如くにして其の身肉を割き、次に其筋を割る、かくの如くにして一切の處を劈割す、已にして樹の上に上るを得ればたゞ見る彼の美人又下りて地にあり、欲媚眼を以て上なる罪人を見て優しき聲音にて言ふ樣、「汝を思へばこそ妾はここに下りしものを、汝今何故に妾が側に來らざる、何すれば妾を抱かざる」と、罪人これを見て慾心いよ〳〵盛なり、次第にまた下る、刀葉上向きて利きこと剃刀の如く剪刀の如し、遍く一切の身を割く、既にして地に到れば彼女はまた樹頭にあり、罪人見て復樹に上る。

刀葉林地獄の繪の中で此の僧は心得て法華を誦しはじめた。

可なり長い時間の間朗々と法華を誦して願以此功徳を終ると僧は此の一間から靜かに立ち出でた。

「このお部屋は大そう恐ろしいお部屋ですね」

迎へに出た女房に向つて云うと

「はい、ふだんの時は不明間（あかずのま）になつて居ります」

と答へた。

「どうして地獄の繪の間を佛間になさるのです」

「どういふわけですか存じませんが、都からお出でになつた繪師の方があゝいふものを書いて下すつたのです」

「さいぜん、東の樓へ行つて見ますと、間毎に天上界の繪がうつしてございました、私は天人が散華をしてゐる一間でお經を讀ましていたゞきました、お經を讀んでゐるうちに散華が雨のやうにわが身に降りかゝると感じましたが、今こちらへ參つて此の一間でお經を讀ましていたゞきますと、火炎が滾々としてわが身を燒くかと思はれました」

「さうでございましたか、あの東の樓の天上界も此のお部屋の地獄も同じ繪師の筆になるものでございます、あちらで天上界を作るそのお話でしたから、眞似をするのも忌ですから、變つた趣向をと頼みましたら、それでは刀葉林を書いて見

やうと云つて、繪師さんがあんなものを書いてしまひました、女子供は怖れて近寄りませんが見る人が見ると、これがなかなかの名畫になつてゐるさうでございます」

「さうでせう、あれへ入ると、わたくし共も犇と身にこたへるものがあります、現にわたくしがあの刀葉林の大樹にのぼりつゝあるのですからね、身を裂かれてゐるのは畫中の人ではありません」

僧は斯う云ひながら案内につれてもとの座へ戻ると、阿波の男は居なかつた。あの男がいつも身を離さずに持つて歩いてゐる笈も其處には見えない。

「阿波のお客さんは、どうしました」

「あの方は、お疲れのやうで、只今あちらですや〳〵と休んでおゐでになります」

「さうですか、別に急ぎの用もありませんから起きないやうにして置いて下さい、ゆつくりと休ませて上げて下さい」

「承知いたしました」

其處でひとり僧は靜かに休息してゐると、暫くあつて例の女房がまたやつて來た。

「御出家樣、どうぞお風呂をお召し下さいませ」

「わしは、どうでも宜いけれど」

でも、すゝめられるまゝに僧は强ひて辭退しないで風呂場へ案内された。

女房は痒いところへ手の屆くやうに話をして、ぼろ〳〵の三衣をていねいに疊んでやつて

「御ゆるりと」

行つてしまつたあとで僧は杉戸を開いて風呂場へ入つて見た。

木の香の高い風呂場に淡い湯氣が立つてゐる。板の間を步いて浴槽に近よると、板に臙脂が流れてゐる。

「おゝどなたかお入りになつておゐでゝしたか」

浴槽の中には肉の豐かな、形のあでやかな女が乳から上をあらはして湯につかりながら溶けるやうな眼つきで、こちらをながめてゐた。（つゞく）

La frato donas libron. 弟が本を與へる
ラ フらート ドーナス リーブロン

といつただけでは、まだ誰に（al kiu アル キーウ）と聞きたい、これは動詞にとつて、直接補語と同樣に必要な事であります、「どんな風に」といふことはなくてもすむが、それとちがつて、動詞によつてはこの間接補語はなくてはすまない事が多い、これは前置詞を使つて表はします、誰々「に」といふときは al（アル）といふ前置詞一（前置詞の次に置く名詞は主格）

單語

biro ピーろ	梨（の實）	kajero カエーろ	手帖、帖面
avo アーヴ	祖父	nepo ネーポ	孫
onklo オンクロ	伯（叔）父	kuzo クーゾ	從兄弟
nevo ネーヴ	甥	filo フイーロ	息子
edzo エドゾウ	夫	fianĉo フイアンチョ	許婚者（男）
fraŭlo フらウロ	未婚者	vidvo ヴドウヴ	鰥夫
knabo	男兒	infano インフアーノ	幼子

（註 女性は接尾語男兒 -in をつける；例 edzino 妻. filino 娘）

La frato donas la libron al la kuzino.
ラ フらート ドーナス ラ リーブろン アル ラ クズイーノ

もし今、現に本を與へてゐるところではなく、昨日（hieraŭ ヒエラウ）やつてしまつたのであれば、動詞を過去の形——語尾 is にして

La onklino donis la kajeron al la nevo hieraŭ.
ラ オンクリーノ ドーニス ラ カエーろン アル ラ ネーヴ ヒエラウ

「明日（morgaŭ）やるだらう」と未來の動作には、語尾を os にして

La avino donos pirojn al la nepino morgaŭ.

單語

mi	私. 僕,	vidi	見る
ni	吾々	per	……によつて（前置詞）
audi	聞く	per la okuloj	眼で
ovelo	耳	kanto de la birdoj	鳥の歌
de la patro ヂ ラ パートろ	父から, 父の處から		
ricevi リツエーヴ	受けとる	juna ユーナ	若い
dolĉa	甘い	hela ヘーラ	赫々たる
agrabla	心地よい, 愉快な	en la tago エン ラ ターゴ	日中, 晝間
pala パーラ	蒼白い,	en la nokto エン ラ ノークト	夜間
la luno ラ ルーノ	月	stelo ステーロ	星
lerni レーるニ	學ぶ	diligente デイリゲンテ	熱心に

LECIONO KVARA.

今「私か讀んでゐる」と云つたらば、すぐ「何を」(kion キーオン?) と云つてたづねます、つまり「讀む」といふ動作を示す此の動詞は、それだけでは不充分で、更にこの動作を說明する言葉，動詞の示す動作が働きかける言葉が必要です。「私は本を讀んでゐる」とか「私は手紙を書いてゐる」と云ふ、文章にとつて必要な部分を要求します、普通日本語では「を」をつけることになりますが、エスペラント語では動詞の直接補語（目的語）になる名詞の語尾に n をつけます。この動詞の直接補語になる時目的格或は賓格と申します。

La patro skribas **leteron**. 父が手紙をかく。

La knabo **forpelas** la birdojn. 子供が鳥を追ひやる。

La patrino ne **legas** libron. 母は本を讀んでゐない。

もし「長い手紙」とか「醜くい鳥」といふやうに、目的格を修飾してゐる形容詞は又 n をつけます。

La patro skribas **longan** leteron. 長い手紙を。

La knabo forpelas la malbelajn birdojn. 汚い鳥を。

さうすると人は、一體どんな風に（**kiel** キーエル、kiamaniere キアマニエーれ）書くのだらうかと聞きたくなる、上手にか、美しくか、この動作の樣子は、詞副（adverbo アドヴエーるボ）(又は副詞句、分詞副詞）で表はします。形容詞の語尾を e にすれば、副詞になります。

bela ベーラ	美しい,	**bele** ベーレ	美しく
lerta レーるタ	上手な,	**lerte** レーるテ	上手に

名詞や動詞の語尾を e としても副詞になります。

domo ドーモ	家,	**dome** ドーメ	家に
paroli パろーり	話す,	**parole** パろーレ	話で, 言葉で
patrino パトウりーノ	母.	**patrine** パトウりーネ	母らしく

La **patro** **skribas** **lerte** **longan** **leteron.**
ラ パートゥろ スクりーバス レーるテ ロンガン レテーロン

La knabino **kantas** bele. 少女は美しく歌ふ。

名詞、代名詞以外の品詞の意義を限定するには、形容詞でなく副詞を用ゐます、ところが又、

(16) Ĉu ŝtonoj kuŝas sur la fenestro?
チュー シュトーノイ クーシャス スーる ラ ふエネーストウろ

ときかれたらば、「いゝえ」ne（ネー）と否定して

Ne, ŝtonoj **kuŝas** sur la tero.
ネー シュトーノイ クーシャス スーる ラ テーろ

或は

Ne, ŝtonoj **ne** kuŝas sur la fenestro.
ネー シュトーノイ ネー クーシャス スーる ラ ふエネーストウろ

「いゝえ、窓の上にない」と打ち消すときは、動詞の前に ne を置きます、もし又、「窓の上ではない（外にあるのだ）」と、強く窓といふ言葉が打ち消したい時は、その前に置いて

Ne, ŝtonoj kuŝas ne sur la fenestro.
ネー シュトーノイ クーシャス ネー スーる ラ ふエネーストウる

(17) Ĉu krajono ne kuŝas sur la tero?
チュー クらヨーノ ネー クーシャス スーる ラ テーろ

（鉛筆は地面の上にあるんぢやないのですかと）きかれたとき、日本人は多く

Jes, la krajono ne kuŝas sur la tero.

と、漱石の小説の女主人公（heroino へろイーノ）の外は大概「ハイ」と答へたがりますが、この ne や jes は一寸日本語の「いゝえ」や「はい」とちがふので、質問の如何によらず、事實さうであるときは jes.. さうでないときは ne で答へるのです、もし本當に地面の上に轉つてゐるのならば

Jes, la krajono kuŝas sur la tero

轉がつてゐないのならば

Ne, la krajono **ne** kuûas sur la tero.

(18) **Ĉu** arbo ne staras antaû la domo?

Jes, arbo staras antau la domo.

(19) **Ĉu** blankaj paperoj ne kuŝas en la ĉambro?

(20) **Ĉu** birdoj flugas en la ĝardeno?

〔規則〕 6. 動詞の不定法は i で終る。

7. 動詞の現在は as で終る。

8. 否定文は打ち消す詞の前に ne を置く。

ESPERANTA

エスペラント講座

伊藤徳之助

LECIONO TRIA （承前）

はじめの中は慣れるためと、完全な文章の形にして、面倒でも（1）のやうに答へること。

（7） Kie kuŝas ŝtonoj? 又は Kie estas ŝtonoj?
キーエ クーシャス シュトーノイ

（8） Kie kuŝas la ĉapelo de la patro?
キーエ クーシャス ラ チャペーロ デ ラ パートゥろ

（9） Kie staras arbo? 又は Kie estas arboj?
キーエ スターらス アーるボ

（10） Kie kuŝas blankaj paperoj?
キーエ クーシャス ブランカイ パペーろイ

もし又「何」があるのか尋ねたければ、**Kio**（キーオ）といふ疑問代名詞を用ゐてきく。

（11） Kio kuŝas sur la fenestro? （窓の上にあるのは何）、
キーオ クーシャス スーる ラ ふエネーストゥろ

これの答は、事物ですから

Krajono kaj plumo.

然し、丁寧にすつかり文章にして

Krajono kaj plumo kuŝas sur la fenestro. と答へること。

（12） Kio kuŝas sur la tero? （ŝtonoj）
キーオ クーシャス スーる ラ テーろ

（13） Kio staras antaŭ la domo? （arbo）
キーオ スターらス アンタウ ラ ドーモ

（14） Kio kuŝas sur la tablo? （blankaj paperoj）.
キーオ クーシャス スーる ラ ターブロ

そこで又、ĉu をつかつて疑問文をつくりますと、

（15） Ĉu krajono kuŝas sur la fenestro?
チュー クらヨーノ クーシャス スーる ラ ふエネーストゥろ

この答は

Jes, krajono kuŝas sur la fenestro.
イエース クらヨーノ クーシャス スーる ラ ふエネーストウろ

ところが

校正室から

◆本誌の編輯に關して、かうして欲しいとか、あゝして貰ひたいとかいふ御希望のある方は、編輯部までに御申越し下さい。出來得るだけ皆樣の御希望にそふやうに致す考へですから。そして皆樣と共に力を合はせて、一改造社の雜誌としてゞなく、どこ〳〵までも一般日本の女性のための雜誌として、生長させて行きたいと思ひます。

◆倉田百三氏の「卑しむべきものに就て」は、百枚の長論文の一部で、氏の最近の心境を深く語るもので、また私共の心を強く打つものであります。續稿は次號に掲げます。

◆遠島哲男氏の『赤薔薇の有島武郎』は、有島氏を可成りよく理解して書かれてゐるもので、同氏を知るの手引となり、最近の最も興味深い讀物の一つでありませう。

◆既成宗教は人間生活から光を奪つた、魂に迷ひを與へた寺院も教會も私共には何等の權威がなくなつた。そして今や人々はその落付く所を知らない『私の求める宗教』といふ題下に諸氏の體驗を發表したのも、要するに人間の生活に光と力とを與へ、その迷ひから幾分でも脫し得られて、生生とした生活に進んで貰ひたいといふ意味に外ありません

◆『婦人として議會に要求する第一のもの』に對する諸氏の意見は、現代の婦人全體の意見を代表するもので、婦人を沒却した議會は是等婦人の要求を何と見るか？

◆葛西善藏氏の『踊つた男』は氏として最近の創作中最も會心のもので、恐らく二月の創作中の白眉のものでせう。

◆廣告の外交に興味をもてる婦人を一名募集します。御希望の方は本社宛に至急御申越し下さい。

◆本號に於て二つの懸賞を募集してゐます。どうぞドシドシと出來るだけ多く應募して下さることを希望します。

◆頁の都合で及び三上於莵吉氏の『炎の路』は次號廻しになりました。筆者並に讀者に一寸お斷りして置きます。

女性改造定價表

冊數	定價	郵稅
壹冊	五十錢	四錢五厘
六冊	參圓	郵稅共
十二冊	六圓	郵稅共

註文の注意

◇增大號其他定價變更に依る前金拂込み不足は不足金の拂込みを待つて發送す
◇註文は凡て前金とす
◇前金切れの際は發送を停止す
◇外國發送の註文は壹部郵稅拾六錢を申受く(但し支那を除く)
◇見本は發送せず
◇郵稅切手代用は壹割增のこと
◇拂込みは振替によらるゝが最も便利なり

本誌一頁廣告料 一等 百圓 二等 七拾圓

◉本社廣告取次所 日本電報通信社 博報堂 弘盛舍

大正十二年一月十七日印刷納本
大正十二年二月一日發行
(二月號金五十錢)

編輯兼發行者 東京市芝區伊皿子町四十番地 平田貫一郎
印刷者
印刷所 東京市小石川區久堅町一〇八番地 株式會社博文館印刷所

發行所 東京芝區愛宕下町一ノ一 改造社
電話芝長 一六三八 二八五四
振替東京 四三〇三 八四〇二

中村吉藏作

戯曲 錢屋五兵衛父子

定價壹圓五拾錢
◇送料十五錢
◇四六判上製

第六版

波狂ひ風寒き北越の俠商「錢屋五兵衛」父子は封建末期に於ける事業的天才の一巨人として無産階級の民衆との葛藤から胚まれて來た運命的な、又性格的な一悲壯劇を描いてそこに舊社會解體の一の豫兆としての、ブルジョアジーの崩壞を示さうとしたのが作者の意圖である、現代の思想と生活の潮流の或る方向への指標を、その中から發見する者もゐるであらう、又「白隱和尚」は嘗て幸四郎氏に依て「帝劇」に「小山田庄左衛門」は延若氏に依て「浪花座」に初演せられ、共に成功したものである。

東京芝區
愛宕下町
改造社
振替東京
八四〇二

VIRINA REKONSTRUO
(MONATA REVUO PLEJ ALTAKLASA POR VIRINOJ EN JAPANUJO)
UNU EKZ. 50 SEN; JARABONO 6 JEN.
ELDONEJO: KAIZO-SHA, TOKIO, SHIBA-KU, ATAGOSHITA-MACI 1.

大正十一年九月十三日第三種郵便物認可
大正十二年二月一日發行（每月一日一回）大正十二年一月十七日印刷納本
第貳卷第二號 二月號 定價五拾錢（送料二錢）